して利を占むるを茶権といふ、

【朱鶴齡】字は長孺、清の呉江の人、初め諸生たりしが甲申兵亂の後、棄て去り自ら愚菴と號す、顧炎武と友とし善し、箋疏の學に長ず、撰するところ、毛詩通義・禹貢長箋・讀左日鈔等あり、宋儒集註の未だ及ばざる所ろを發明す、また春秋集説・愚庵小集等あり、杜工部李義山詩註尤も時に盛行せり、

【儒家者流】孔孟の道を祖述する輩をいふ、漢書の藝文志に「儒家者流ハ、蓋シ司徒ノ官ヨリ出ヅ、人君ヲ助ケ、陰陽ヲ順ニシ、敎化ヲ明カニスル者ナリ、文ニ六經ノ中ニ游ビ、意ヲ仁義ノ際ニ留メ、堯舜ヲ祖述シ文武ヲ憲章シ、仲尼ヲ宗師トシテ、以テ其言ヲ重ンズ、道ニ於テ最モ高シト爲ス」

【裋褐完カラズ】(裋褐不完)裋は「ヤブレゴロモ」一解に僮豎の著る所ろの布の長襦なりと、褐は毛布の衣にて、賤民の服する所ろなり、貧くして粗服すら著くるを得ざるなり、漢書貢禹傳に「妻子糠豆不贍、ーー」

【主器】宗廟の烹飪の器を主るは、長子の任なり、故に長子の稱とす、易の序卦傳に「ーー莫若長子」とあるに出づ、柳宗元の文に「ーー繼天、莫承于宗」

【朱熹】宋史道學傳に「ーー字ハ元晦、一ノ字ハ仲晦、謚シテ文トイフ、其ノ學大抵理ヲ窮メテ以テ其ノ知ヲ致シ、躬ニ反シテ以テ其ノ實ヲ踐ミ、而シテ居敬ヲ以テ主トナス、嘗テ謂フ、聖賢道統ノ傳、散ジテ方冊ニ在リ、聖賢ノ旨、明カナラズ、而シテ道始メテ晦シト、是ニ於テ其ノ精力ヲ竭シ、以テ聖賢ノ經訓ヲ研窮ス、黄幹曰ク、孔子ヨリシテ後、曾子・子思其ノ微ヲ繼ギ、孟子ニシテ始メテ著ル、孟子ヨリシテ後、周程張子、其ノ絶ヲ繼ギ、熹ニ至リテ始メテ著ルト、識者以テ知言トナス」著す所ろ諸經傳解四書集註通鑑綱目小學楚辭註等あり、慶元六年卒す 年七十一、徽國公に追封せられ、孔子の廟庭に從祀せらる、

【首丘】(丘ニ首ス)を見よ、

【朱熹ノ穎異】朱文公行狀に「朱文公、八歳ニシテ孝經ノ大義ニ通ジ、八字ヲ其ノ上ニ書シテ曰ク、若不如此、便不成人、ト、一日、群兒ニ從ヒテ遊ブ、獨、沙ヲ以テ八卦ヲ列シ、端坐シテ默視ス、又日ヲ指シテ、其ノ父韋齋先生ニ問ヒテ曰ク、日ハ何レノ所ニカ附クト、曰ク、天ニ附クト、マタ問フ、天ハ何レノ所ニカ附クト、韋齋先生之ヲ奇ナリトス、甫メテ十歳ニシテ、自ラ學ヲカムルコトヲ知リ、長者ノ言ヲ聞ケバ、輒チ忘レズ、

其ノ穎異ナルコト此ノ如シ」

【朱熹ノ童蒙須知】宋の朱元晦、嘗て童蒙須知を作る其の畧に曰く、一、身體端整、衣冠鞋襪、潔淨整齊ならんことを要す、二、聲を低くし、氣を下し、言語詳かにして緩ならんことを要す、高聲鬨鬧、浮言戲笑す可からず、行歩を端正にして、疾走跳躑すべからず、三、居處の地は、常に几案を掃拭して、文字筆硯、常に嚴肅齊整ならんことを要す、

【足恭】論語に「巧言令色ーー」の疏に「足ハ成ナリ、巧言令色以テソノ恭ヲ成シ媚ヲ人ニ取ルナリ」と、朱註には「足ハ過ナリ」

【種玉】よき妻を得たる故事(玉ヲ藍田ニ)を見よ、

【祝允明】字は希哲、別に枝山と號す、明の長洲の人、少きより文辭を攻め、奇氣多し、千言立ろに就る、而かも事類を櫽括して遺すとなし、又書を善くす、筆法遒勁にして風韻蕭散なり、仕へて應天府通判に至り、未だ幾くならずして致仕す、

【淑媛】淑は善なり、ーーは才德のすぐれし美人、王逸の句に「窈窕ーー」また女官の稱、三國志に「ーー位視御史」

【宿怨】宿は留なり、ーーは舊怨なり、孟子に「仁人之於弟也、不藏怒焉、不宿怨焉、親愛之而已矣」

【宿好】ふるくよりのこのみ、陶潛の句に「詩書敦ーー」

【宿學】猶ほ老儒といふが如し、史記莊周傳に「雖當世ーー、不能自解免也」

【諔詭】いつはりて正しからざる義、莊子德充符に「彼且蘄以ーー幻怪之名聞」

【叔魚】晉語に「叔魚生ル、ソノ母之ヲ視テ曰ク、是レ虎目ニシテ豕喙、鳶肩ニシテ牛腹、谿壑ハ盈ツベキモ、是レ饜クベカラズ、必ズ賄ヲ以テ死セント」

【柷敔】樂器、敔は、音樂をとどめ節を爲す者、形は伏せる虎の如く、背上に二十七のぎざぎざあり、長さ一尺の木もて之を擦りて鳴らす、釋名に「敔ハ衙ナリ、衙ハ止ナリ、樂ヲ止ムル所以ナリ」書の益稷に「下管鼗鼓、合止ーー」鼗鼓は「フリツヅミ」拾遺の(ーー)を見よ

【宿構】宿は夜を隔つるなり、構は成就なり、前夜までに作りおく詩文をいふ、書言故事に「預先擬下文曰宿構」とあり、魏志に「王粲字仲宣、善屬文、擧筆便成、無所改定、時人常以爲宿構」とあり、

【夙興夜寐】(夙ニ興キ)を見よ、

【倏忽】倏は犬の疾く走る義、倐に作るは非なり、ー

ーは、疾速にして捕捉すべかざるの意、楚辭に「倏而來兮忽而逝」また電光をいふ、楚辭に「雄虺九首、ーー焉在」

【肅殺】 秋の氣の物をそこなひからすをいふ、歐陽修の秋聲賦に「常以ーー而爲心」鄉飲酒義に「天地ーー此天地之義氣也」とあるに本づく、

【熟紙】 「ダウサガミ」藥紙竊紙に同じ、邵氏聞見錄に「唐人生紙アリ、ーーアリ、ーーハ所謂妍妙輝光ナル者ソノ法一ナラズ、生紙ハ喪故アルニアラザレバ用ヒズ、退之イフ送孟郊序ハ生紙ヲ用フト、自ラ解スルニ急ニシテ擇ブニ暇アラザルノミ、今人知ル者アルコト少シ」

【宿疾】 持病をいふ、北史に「少有ーーニ」また水經の註に「溫水常熱、沐浴治ーーニ」

【宿將】 宿は素なり、久なり、老なり、猶は老將といふが如し、戰國策に「田盼ーー也」史記信陵君の傳にも見ゆ、

【宿儒】 宿は老なり、舊なり、宿學または老儒に同じ、儒とは、孔子の學を祖とするもの、漢書翟方進傳に「是時ーー胡常與方進同レ經」

【蹜蹜】 足を擧ぐること、の促狹なるをいふ、論語に「ーー如レ有レ循」また禮の玉藻に「舉前曳レ踵ーー如也」

【菽水ノ歡】 貧にして善く親に事ふるを菽水の歡をつくすといふ、禮記の檀弓下篇に「子路曰、傷哉貧也、生無以爲レ養、死無以爲レ禮也、孔子曰、啜レ菽飲レ水盡レ其レ歡、斯之謂レ孝」と、菽は大豆なり、その分に應じ、財に隨ひて以て歡を盡すべし、未だ必ずしも財多くして而る後ちに養と爲さざるをいふ、

【叔世】 澆季の世をいふ、漢書刑法志に「三辟之興、皆ーーー也」

【夙昔】 宿昔に同じ、平生なり、古樂府に「ーー夢見レ之」

【宿夕】 宿は夜なり、一夕一夜の義、戰國策に「不レ出ーー一人必危レ之矣」

【蹜蹜如】 恭敬して寧からざる貌、論語鄉黨篇に「君在ーーーー也」

【蹴然】 おそれて安んぜざる貌、孟子に「曾西ーー曰、吾先子之所レ畏也」また敬する貌とも解く、

【叔孫狄ニ勝チテ、以テ其ノ子ニ名ヅク】 蘇軾の喜雨亭記の句なり、左傳文公十一年に叔孫得臣狄ヲ鹹ニ敗リ、三人ヲ獲タリ、一ノ名ハ僑如、一ノ名ハ虺、一ノ名ハ豹、皆以テソノ子ニ名ヅク」

【叔孫通】 漢の薛の人、博士となり、高祖に說きて朝儀を起さしむ、古禮と秦儀とを采り雜へて之を就す、始めて長樂宮に用ふ、諸侯王より以下震肅せざるなし、帝曰く、吾今日乃ち皇帝たるの貴きを知ると、通を拜して奉常となし、金五百斤を賜ひ、太子太傅に遷す、

【宿諾ナシ】 (無宿諾)宿は留むるなり、一旦諾したる言は、之を踐み行ふに急にして、久しく留めおかざるをいふ、論語顏淵篇に「子曰、子路ーーニ」

【祝鮀ノ佞】 論語雍也篇に「子曰、不有祝鮀之佞而有宋朝之美、難乎免於今之世矣」祝は宗廟の官、ハアリ」鮀は衞の大夫、字は子魚、宗祝たり、故に祝鮀といふ、記聞多くして口才あり、宋朝は宋の公子、名は朝、美色あり、衰世、諛を好み、色を悅ぶ、これにあらざれば、世の憎惡を免るることの難きを歎じたまへるなり、

【縮朒】 事に任へざる貌、漢書五行志に「當春秋時、侯王率多ーーー不任事」玉篇には「寬伸ナラザル貌」とあり、

【縮地ノ術】 (地脈ヲ)を見よ、

【淑女】 淑は善なり、善良の女をいふ、詩の周南に「窈窕ーー、君子好逑」

【淑慝】 淑は善なり、慝は惡なり、善惡に同じ、書の畢命に「旌別ーー、表其宅里」

【肅拜】 手を下して地に至るなり、禮記に「不手拜ーー」一解に拜して頭をたるるなり、

【菽麥ヲ辨ズル能ハズ】 (不能辨菽麥)左傳の成十八年に「周子兄アレドモ無慧ナリ、菽麥ヲ辨ズル能ハズ故ニ立ツベカラズ」とあり、菽は豆の總名なり豆と麥とは形を殊にして別ち易し、而るに之を辨ずる能はず、愚の甚しきをいふなり、

【祝髮】 斷髮の義、穀梁傳哀十三年に「ーー文身」とあり、また列子湯問篇に「南國人ーー而裸」の注に「ソノ髮ヲ斷截スルナリ」と、唐順之の詩に「ーー從師記昔曾ニ」

【夙夜】 早く起き、夜半に寐ねて、事を勉むるをいふ、書の舜典に「ーー惟寅直哉」また詩經大雅烝民に「ーー匪解以事一人ニ」

【祝融】 夏の神なり、禮記に「孟夏之月、其神ーー」また火の神となす、左傳に「火正曰ーーニ」

【宿瘤】 蒙求に、古列女傳を引きて「齊閔王之后、頸有大瘤、號曰宿瘤、初閔王出遊至東郭、百姓盡觀、宿瘤採桑如故、王怪問曰、寡人出遊、百姓無少長、皆來觀、汝不一視何也、對曰、妾受父母敎、採桑、不受敎觀、大王、王曰、此奇女、惜哉宿瘤、女曰、婢妾之職、屬之不二、予

之不忘中心謂何、宿瘤何傷、王大悦曰、此賢女也、命後乘載之、女曰、父母在内、使妾不受教而隨王、是奔女也、王安用之、王大慙、遣歸、使者奉禮、加金百鎰、往聘贈之、父母驚惶、欲洗浴加衣裳、女曰、如是見王、變容更服、不見識也、於是如故、隨使者至、閎王以爲后、出令卑宮室、塡池澤、損膳減樂、後宮不得重采、期月之閒、化行鄰國、諸侯朝之、侵三晉、懾秦楚、宿瘤有力焉、及死後、燕遂居齊、閔王逃亡而殺於外」

【縮慄】「チヂカマリオソル」唐書に「馬皆——」

【朱月鑑】明の畫人、蘭溪の人、荷花を畫くを善くするを以て名を得たり、金華志に「居ル所ロノ旁ニ小池アリ半畝許バカリ、荷數品ヲ植エ、亭ヲソノ上ニ作リ終日坐觀シ、以テ荷ノ生長榮悴、苗葉花實容色態度ヲ察シ、之ガ寫眞ヲ爲ス、筆妙神ニ入ル」

【守棄】正官に拜せずして、權りに人をして棄ね守らしむる義、漢書王莽傳に「縣宰缺者數年——」

【守口】言を謹むをいふ（口ヲ守ル）を見よ、

【首肯】「ウナヅク」承知する、制府錄に「張公——久之」

【首功ヲ上ブ】（上首功）上は尚なり「タフトブ」敵首を獲る者をたふとびて、重く賞するをいふ、史記魯仲連傳に「彼秦者、弃禮義而——之國也」

【首座】釋氏要覽に「史云——之名、即上座也、居席之端處僧之上故也、即唐宣宗署僧辨章爲三教——、此爲始也」

【守歲】除夜にねむらずして旦に達するをいふ、東京夢華錄に「除夕夜、士庶之家、圍爐團坐、達旦不寐謂之——」

【壽藏】生存中につくる墳なり、後漢書に「趙岐自爲——圖季札子產晏嬰叔向四像居賓位、又自畫其像居主位、皆爲讚頌、勑其子曰、我死日、墓中聚沙爲牀、布簟白衣散髮、其上覆以單被、即日便下下訖便掩坎」

【主司】試驗、「デギャウ」主文また座主ともいふ、事文類聚に「校文——」とあり、唐書に「狀元以下往謝——」

【狀元】狀元は一番の及第者なり、

【洙泗】相會する二水の名、魯に在り、轉じて孔子の學を斥す、周伯琦の詩「行行望泗洙」易の「九二見龍在田」の疏に「夫子教于——、利益天下」と、陶潛の詩に「——輟微響漂流逮狂秦」史記に「孔子設教洙泗之上、修詩書禮樂、弟子彌至」

【殊死】殊は、絕なり、異なり、其の身と首と離絕して、處を異にするをいふ、前漢書高祖紀に「今天下事畢、其赦

天下——以下ニ一說に死罪に決せしものをいふと、一解に意を必死に決するをいふ、——而戰などの類、

【孺子】幼弱の子なり、書經に「——其朋」朋は比なり、

【朱子語類】一百四十卷、宋の黎靖德編す、朱子の沒後に、門人等が分記しおきたる語を輯めたる者なり、

【殊死シテ戰フ】（殊死戰）必死を決して戰ふなり、史記淮陰侯傳に「軍皆——不可敗（殊死）を見よ、

【豎子ノ名ヲ爲ス】（爲豎子名）豎子は小兒といふが如し輕蔑することば、其の輕蔑せる者をして、功名を爲さしむる義、史記孫子傳に「遂——」

【主臣】惶恐をいふ、一解に群臣に主たる義にて、人主をいふと、史記陳丞相世家に「平謝曰、——、陛下不知其駑下、使待罪宰相」また馮唐傳に「——、陛下雖得廉頗李牧弗能用也」

【孺人】大夫の妻の稱、禮記に「大夫妻曰——」

【守株】（株ヲ守リテ）を見よ、

【侏儒】「タケ」の短小なる人、「イッスンボフシ」國語に「——不可使援」とあるは、重き物を援かしむること能はざるなり、また梁上の短柱をいふ、「ウダチ」禮記の註に「藻棁畫——」また韓愈の進學解に「櫨櫨——侏」一に朱に作る、左傳襄五年に「朱儒是使」

【種種】髮の短く衰へたる貌、左傳昭二年に「余髮如此——」また譴怒の貌、莊子胠篋篇に「舍夫——之機」また增韻には「——ハ猶ホ物物ノ如シ色色の義、

【豎儒】賤しく無智なる、童豎の如き儒生をいふ、史記留侯世家に「——幾敗乃公事」

【朱叔重】元の人、師山集に「——ハ儒者ニシテ畫ニエナリ、一詩ヲ賦シ墓寫ノ妙ヲ得ル毎ニ、輒チ筆ヲ肆チ之ヲ繪ク、嘗テ曰ク、王右丞ノ水田白鷺夏木黃鸝ノ詩ハ即チ畫ナリ、李思訓數月、吳道玄一日、ソノ工夫勞力ノ到ル所ロノ者ハ、畫即チ詩ナリト」

【朱舜水】名は之瑜、字は魯璵、明の浙江餘姚の人、明亡びて我が邦に歸化し、水戸侯の賓師たり、天和二年歿す、年八十三、舜水文集の著あり、

【朱舜水ノ義烈】先哲叢談に「朱舜水安南ニ至ルノ日、館人供張甚ダ盛ンナリ、舜水從容トシテ撓マズ、安南王召シ見テ拜セシメント欲スレドモ、長揖シテ屈セズ、其ノ人或ハ以テ事ヲ解セズト爲ス、此ニ至リテ、砂ニ畫シテ、一ノ拜字ヲ作リテ以テ之ニ見ス、舜水即不ノ字ヲ其ノ上ニ加フ是ニ於テ、怒リテ之ヲ囚ヘ、遂ニ將ニ殺サントスレドモ、死ヲ守リテ自ラ誓フ王終ニ感動シテ死ヲ赦シ、以テ其ノ義烈ヲ嘉ス、此ノ

事ハ舜水自ラ之ヲ錄シテ、安南供役紀事ト名ヅク」

【朱柃】 字は孺年、宋の黎源の人、進士に擧げられ、尤溪ノ尉、知饒州と爲る、松俊才あり、文を爲るに汪洋放肆、涯涘を見ず、後ち六經子史を取りて之を讀み以て天下の興亡理亂の變を求む、又河洛の學、聖賢不傳の意を得たるを聞き、乃ち日に大學中庸を誦し、致知誠意の地に力む、自ら謂へらく、褊急にして道を害すと因つて佩韋の義に取りて韋齋と名づく、

【守成】 (創業ハ)を見よ、

【手抄】 抄は「ヌキガキ」また謄寫なり、——は手づからうつす、唐書に「嘗——六經」

【守拙】 つたなく愚かなるを守り、分に安んずると、陶潛の句に「守拙歸園田」

【酒仙】 杜子美の飲中八仙歌に「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙」とあるによる、

【酒泉】 錦字箋に「漢ノ——郡ノ城下ニ金泉アリ、味酒ノ如シ、班超西域ニ在リ上書シテイフ「不敢望到——郡但願生入玉門關」と、玉門關は、陝西省に在り、

【鬚髯】 「オトガヒ」に在るを鬚といひ、頬にあるを髯といふ、漢書高祖紀に「美——」

【守錢虜】 財を蓄へて散施せざる者を譏りて——といふ、佛家には之を有財餓鬼といふ、後漢書に「馬援、牛馬羊數千頭穀數萬斛アリ、奴ジテ曰ク、凡ソ貨財ヲ殖スハ能ク施シ賑スヲ貴ブ、否レバ則チ——ノミト、盡ク其ノ有スル所ヲ散ジテ、以テ昆弟故舊ニ頒ツ」

【儒宗】 學者の宗師をいふ、晉書賀循傳に「朝廷嘉其能分教育生徒、號爲當世——」また漢書蕭望之傳に「望之堂堂、折而不撓、身爲——有輔佐之能、近古社稷臣也」

【手足ヲ措ク所ロナシ】 (無所措手足)安心して居ることが出來ぬ、猶ほ身を容るゝの地なしといふが如し、論語に「刑罰不中、民——」また史記張釋之傳に「廷尉天下之平也、一傾而天下用法皆爲輕重、民安所錯其手足」とあるも同じ、

【首足處ヲ異ニス】 (首足異處)腰斬せらるゝをいふ、史記仲尼世家に「匹夫而熒惑諸侯、罪當誅、請命有司」有司加法焉、手足異處」また淮陰侯傳に「殺成安君泜水之南、頭足異處」成安君は陳餘なり、

【首鼠兩端】 鼠の性、疑多きを以て穴を出でて觀望し、一前一却、進退決せず、故に兩端を持する者に喩ふ、

漢書の灌夫傳に「田蚡怒ツテ曰ク、長孺ト一禿翁ヲ共ニセン、何ゾ——ヲ爲サン」とあり、長孺は韓安國の字、一禿翁は竇嬰を斥す、

【淹滯】 遲留の義、孟子に「三宿而後出晝、是何——也」

【手澤】 手に持つ所ろの迹の潤澤をいふ「テアカ」禮記に「父沒而不能讀父之書、——存焉爾」

【手談】 圍碁をいふ、書言故事に「對坐シテ言無ク、手ヲ以テ碁ニ著ク、故ニ手談トイフ」世說に「支道林以圍碁爲——」

【塵談】 塵雅に「塵ハ鹿ニ似テ大ニ、其ノ尾ハ塵ヲ辟ク」と、名苑に「鹿ノ大ナル者ヲ塵トイフ、群鹿之ニ隨フ、塵尾轉ズル所ロヲ視テ往ク、古ノ談ズル者コレヲ揮フ」と、晉の王衍老莊を談ずるに、每に玉柄塵を捉りて談ず、手と色を同うす、

【酒中ノ趣】 事文類聚續集卷の十五に、本傳を抄して「孟嘉好酣飲、愈多不亂、桓溫問嘉、酒有何好而卿嗜之、嘉曰公未得酒中趣耳」

【酒池肉林】 酒肉の多きに喩ふ、史記の殷本紀に「紂酒ヲ好ンデ淫樂シ、沙丘ニ戲ル、酒ヲ以テ池トナシ、肉ヲ懸ケテ林トナス、男女ヲシテ裸ニシテ、其ノ閒ニ相逐ハシメ長夜ノ飲ヲナス」百姓怨望ス」——は豪奢を盡すをいふ、

【朱陳村】 白氏文集卷の十に出づ、曰く、

徐州古豐縣、有村曰朱陳、去縣百餘里、桑麻青氛氳、機梭聲札札、牛驢走紜紜、女汲溝中水、男採山上薪、縣遠官事少、山深人俗淳、有財不行商、有丁不入軍、家家守村業、頭白不出門、生爲陳村民、死爲陳村塵、田中老與幼、相見何欣欣、一村唯兩姓、世世爲婚姻、其村唯朱陳二姓而已、親疎居有族、少長游有羣、黃雞與白酒、歡會不隔旬、生者不遠別、嫁娶先近隣、死者不遠葬、墳墓多遶村、既安生與死、不苦形與神、所以多壽考、往往見玄孫、我生禮義鄉、少小孤且貧、徒學辨是非、秖自取辛勤、世法貴名敎、士人重冠婚、以此自桎梏、信爲大謬人、十歲解讀書、十五能屬文、二十舉秀才、三十爲諫臣、下有妻子累、上有君親恩、承家與事國、望此不肖身、憶昨旅游初、迨今十五春、孤舟三適楚、羸馬四經秦、晝行有饑色、夜寢無安魂、東西不暫住、來往若浮雲、離亂失故鄉、骨肉多分散、江南與江北、各有平生親、平生終日別、逝者隔年聞、朝憂臥

至レ暮、夕哭坐達レ晨、悲火焼レ心曲、愁霜侵レ髪根、一生苦如レ此、長羨陳村民、

【朱陳ノ好】 両家婚姻を通ずるをいふ、前條の白居易の朱陳村の詩に「徐州古豐縣、有村曰二朱陳一去レ縣百餘里、桑麻青氛氳、一村惟両姓、世世爲レ婚姻一」と、朱氏と陳氏との両姓にて一村をなせし故事によりていふ、

【主張】 主として張り持する義、宋史徐中行傳に「願安レ時處順、一一世道」また持説をいふ、韓愈の送窮文に「各有二一一一、私立名字一」また莊子に「天其運乎、地其處乎、日月其争レ于所乎、孰二一是、孰維二綱是一、孰居レ無事而推行是一」とあるに一一は、主宰の義なり、

【守冢】 墓の番人なり、漢書に「一一二十家」

【述作】 述は論述なり、作は創造なり、論語述而篇に「述而不レ作」また中庸に「父作レ之子述レ之」禮記に「作者之謂レ聖、述者之謂レ明、明聖者一一之謂也」

【秫酒】 秫は「モチアハ」黏粟なり、北人用ひて酒を醸す、蘇軾の超然臺記に「醸一一ニ

【述職】 諸侯の天子に朝するをいふ、孟子に「一一者、述レ所レ職也」

【術數】 術は策なり、數は計なり、猶ほ計策といふが如し、管子に「人主務レ學一一、務行二正理一、則變化日レ進、又漢書鼂錯傳に「人主所レ以尊二顯功名一揚二於萬世之後一者、以知二一一一一也」の註に「法制治國ノ術ヲイフ」鶡冠子に「臨レ難而後可レ以見レ勇、臨レ事而後可レ以見一一之士」

【出頭地】 人よりぬき出でたるをいふ、書言故事に「嘉祐二年、歐陽公貢舉ニ知タリ、試官梅聖俞、蘇軾ガ刑賞忠厚之至論ヲ得テ、以テ公ニ示ス、公驚喜シテ以テ異人ト爲ス、以テ多士ニ冠タラシメント欲ス、門人ノ曾子固ガ所レ爲ト疑ヒテ、乃チ第二選ニ寘ク、復タ春秋對義ヲ以テ第一ニ居ク、公曰ク、老夫當ニ此ヲ避ケテ一頭地ヲ出サシムベシト」

【慽迫】 慽は誠に通ず、誘なり、利の爲めに誘ひ迫らるる義、漢書賈誼傳に「一一之徒今、或趨二西東一」

【出藍】 弟子の師よりすぐれたるをいふ(青ハ藍ヨリ)を見よ、

【殊廷】 異域の朝廷なり、史記封禪書に「翼至二一一一一焉」

【酒敵】 酒のみあひて、分量の略同じ位なるにいふ、棋敵、詩敵皆同じ、歸田錄に「與二石曼卿一爲一一ニ

【酒徒】 好んで酒を飲み、禮法にかかはらざる「ナカマ」史記酈生傳に「吾高陽一一也非二儒人一也」陸游の詩に「量減愁逢舊一一」

【酒嚢飯袋】 學德なくして、徒に大食するをいふ、荊湖近事にいふ「馬氏奢僭(中暑)文武ノ道未ダ嘗テ意ニ留メズ、時ニ之ヲ一一一トイフ」と、其の書を讀まずして、但だ飲食の多きを務むるを譏り、酒飯の嚢袋と爲すなり、馬氏は唐の末湖南に據り、楚王と稱せし馬殷をいふ、

【首ニ畏レ尾ニ畏ル】 (畏首畏尾) 恐るること甚しきをいふ、左傳の文十七年に「古人言アリ、曰ク首ニ畏レ尾ニ畏ルレバ身其レ餘ストコロ幾クバクゾト」書言故事に「譬ヘバ一身ノ如シ、既ニ其ノ首ニ畏レ又其ノ尾ニ畏ル、則チ其ノ身中畏レザル者、餘ス所ロ、能ク幾何ゾヤ、以テ鄭ノ小國ニシテ、北晉ヲ畏レ、南、楚ヲ畏ル、則チ以テ自立スルコトナキニ喩フ」

【朱ニ近ヅケバ赤シ】 人はその友によるをいふ、諺に「朱ニ交ハレバ赤シ」とあるに同じ、野客叢書に「近レ朱赤、近レ墨黒、見二傅玄太子箴一」

【手拜】 手地に至りて、頭手の上に在るなり、禮記に「不一一肅拜」

【朱買臣】 漢書の列傳に「一一一字翁子、吳人也、家貧好讀書、擔二束薪一行且誦書、其妻亦負戴相隨、數止レ買臣毋一、歌謳道中、買臣愈益疾歌、其妻羞レ之、求レ去、買臣曰、我年五十當二富貴一、妻怒曰、如二公等一終餓二死溝中一耳、遂去、後買臣詣二闕上一書、武帝召見說二春秋一、言二楚詞一、帝甚悦レ之、拜二會稽太守一、買臣入二吳界一、見二其故妻一、妻夫治レ道、呼令後車載二其夫妻一、到二太守舍一、給二食之一、居一月、妻自經死」

【守望】 寇盜を防ぐなり、孟子に「出入相友一一相助、疾病相扶持」

【珠箔】 「タマノスダレ」珠簾に同じ、長恨歌に「一一銀屏邐迤開」

【需ハ事ノ賊】 需は疑なり、遲疑需待の義、疑ふときは事を害ふをいふ、左傳哀十四年に「子行抽レ劒曰、需事之賊也」また史記淮陰侯傳に「疑者事之害也」とあるも同じ、

【主辱カシメラルレバ臣死ス】 駿臺雜話「武田信繁」の條に見ゆ(君辱カシメラル)を見よ、

【手板】 笏の異名(笏)を見よ、

【髀尾】 拂子の類なり、麈は「オホジカ」麋の屬、羣鹿これに從ひその尾の轉ずるを見て往くといふ、よりてその尾を柄にすげて、談話の時などに執り揮ふ、晉書王衍傳に「衍既有二盛才美貌一、明悟若レ神、常自比二子貢一、毎レ清談一、老莊爲レ事、毎提二麈尾一、歌謳道中、買臣愈益疾歌、其妻羞レ之、求レ去、買

玉柄ノ——ト與手同色」

【首尾倶ニ救フ】 同盟の國國が、長蛇の形を爲して、互に救ふをいふ、戰國策に「有蛇於此、擊其尾、其首救、擊其首、其尾救、擊其中身、——」

【手臂ノ頭目ヲ扞グガ若シ】 (若手臂之扞頭目)扞は手を以てふせぐなり、また衞なり、下なる者の上たる者を衞るに喩ふ、漢書刑法志に「仁人在上、爲下所仰、猶子弟之衞父兄、若手足之扞頭目、何可不當也」また荀子に「臣之於君也、下之於上也、若子之事父、弟之事兄、——而覆胸腹」

【首伏】 「ハクジヤウスル」棠陰比事に「今欲——自首」に同じ、

【首服】 首の服飾をいふ、周禮天官に「掌王后之——」また自首して罪に服するをいふ、柳宗元文に「宿蠹藏姦披露——」

【主文】 試驗奉行をいふ、唐書に「——歎賞不已」とあり、主司ともいふ、

【守文】 始祖の君は武を以て國を興し、繼承の君は文を以て國を守る、故に——とは繼承の君をいふ、漢書外戚傳に「——之君」とありて顏師古の注に「守文言遵成法不用武功也」

【朱文公】 (朱熹)を見よ、

【守文ノ君】 守文は、猶ほ守成といふが如し、先君の成法を守るをいふ、史記外戚傳に「帝王及繼體——之君、非獨內德茂、蓋亦有外戚之助焉」(守文)を參看せよ、

【酒保】 酒家の傭夫なり、傭は信を保つべし、故に保といふ、史記鬱布傳に「窮困賃傭於齊、爲酒家保」「サカトウジ」酒をかもすことを掌る、史記刺客傳註に「鶡冠子曰、伊尹——也」と、酒家人、酒家保、酒翁、酒大工、酒匠、醞匠皆同じ、

【首謀】 首として謀を爲す者をいふ、漢書武帝紀に「將軍王恢坐——不進下獄死」

【鷲峯】 天竺の靈鷲山をいふ、山の形鷲に似たり、故に名づく、釋迦ここにて說法す、

【須彌】 梵語、蘇迷盧の約、妙高山と譯す、佛說に、山の極めて高大なるもの、四州の地心にして大海の中に在り、高八萬四千由旬、日月も横に回りて諸天之に依るといふ、維摩經に「以——之高廣、內芥子中而不迫窄」

【須彌八萬由旬】 佛敎に設けていふ所ろの山の名、具には蘇迷盧といふ、好光また妙高と譯す、八萬由旬は、其の高さなり、一由旬は十六里なり、一說に三十里なりと、山上に帝釋天の喜見城ありといふ、

【春鶯囀】 樂曲の名、唐敎坊記に「高宗曉聲律、晨坐聞鶯聲、命樂工白明達寫之、遂有此曲」

【閏位】 正統に非ずして天子の位に即くをいふ、餘分の月を閏月となす、漢書王莽傳に「紫色蝀聲、餘分——、聖王之驅除云爾」紫は閒色、蝀は邪音なり、

【鶉衣】 つぎつぎの弊衣をいふ、鶉の尾、特に禿げて衣の短結の如し、故にいふ、晉書故事に「衣ノ敝レタルヲ言ツテ鶉衣百結トイフ」荀子に「子夏之衣、懸結如鶉」

【春蚓秋蛇】 春の「ミミズ」に秋の「ヘビ」借りて以て文字の力なく且つ拙きに喩ふ、灋確類書に「紫春蚓綰秋蛇云云」

【雋永ノ論】 味ある談なり(雋永)を見よ、

【荀悦】 字は仲豫、淑の孫、家貧にして書なし、每に人家に於て篇牘を見、一覽ち記す、後漢の獻帝に仕へ、官祕書監侍中に至る、時に政は曹氏に移る、悦申鑒五篇を作りて之を奏す、また左傳の體に依りて漢書を刪り、漢紀三十篇を爲る、建安十四年卒す、年六十二、

【俊乂】 賢才の稱、千人に優るを俊といひ、百人に優るを乂といふ、書の皐陶謨に「——在官」

【尊羹鱸膾】 蓴菜の「アツモノ」鱸魚の「ナマス」なり、この二味を思ひて官を辭し鄉にかへりたる故事、晉書に「張翰因秋風起、乃思吳中蓴羹鱸魚膾、遂命駕歸」と、載復古の詩に「功名未必勝鱸魚、これより久客、鄉に歸らんとする情を——を思ふといふ、

【春嬉】 陽氣に浮かれて戲れ遊ぶ義、安井息軒の三計塾記にも見ゆ、

【春宮】 (東宮)を見よ、

【鶉居】 居處の定まらざる義、莊子に「聖人——而叡處」の注に「鳥ノ常處ナキガ如シ」

【荀勗】 字は公曾、爽の曾孫、晉の武帝の朝祕書監を領す、汲郡冢中の古人の竹書を得、撰次して以て中經となす、列して祕書に在り、中書より尙書令に遷る、人之を賀す、曰く、我が鳳凰池を奪はる、諸君何ぞ賀するやと、十子あり、

【荀巨伯ノ友誼】 晉書に「晉ノ荀巨伯遠ク往キテ友人ノ疾ヲ問フトキ、胡賊ノ郡ヲ攻ムルニ遭ヘリ、巨伯去ルニ忍ビズ、賊至ル、巨伯ニ謂ツテ曰ク、大軍至ル、一郡皆空シ、汝ハ何ゾ敢テ獨リ此ニ止レルト、巨伯曰ク、友人病ニ臥ス吾之ヲ棄ツルニ忍ビズ、寧ロ我ガ身ヲ以テ友人ノ命ニ代ラントト、賊其ノ義ヲ重ンジ、害ヲ加ヘ

ズシテ去レリ」

【循環端ナシ】 事の窮るところを知らざるをいふ、孫子の兵勢に「奇正相生、如ニ循環之無レ端、孰能窮レ之」また荀子に「始則終、終則始、若ニ環之無レ端也」

【荀卿】 字は況、周の趙の人年五十にして始めて來りて齊に游學す、齊の襄王の時、卿最も老師たり、楚に適き蘭陵の令となる、書數萬言を著し、六經を羽翼す、荀子といひ、世に傳はる荀或は孫に作る、

【春曉】 はるのあけぼの、杜詩に「春來常早起」また「惜レ花春起早」の句あり、孟浩然の詩に「春眠不レ覺レ曉、處處聞ニ啼鳥一、夜來風雨聲、花落知ニ多少一」袁枚の詩に「千枝紅雨萬重烟、盡出詩人得意天、山上春雲如ニ我懶一、日高猶宿翠微巓」

【俊傑】 淮南子泰族訓に「知過ニ萬人者一謂ニ之英一、千人者謂ニ之俊一、百人者謂ニ之傑一」——は、才德の衆に優る者をいふ、孟子に「尊レ賢使レ能、——在レ位」

【春暄】 暄は溫なり、春のあたたかきこと、詩經の疏に「人遇ニ——一則四體舒泰」

【殉國】 殉は從なり、國難に從つて死する義、漢書李陵傳に「常奮不レ顧レ身、以殉ニ國之急一」殉は徇に通用す、宋史畢士安傳に「寇準方正、慷慨有ニ大節一、忘レ身殉レ國、秉道疾邪」云云また中論に「奉レ君忘レ身殉レ國忘レ家」

【春山笑フガ如シ】 （春山如レ笑）郭熙の畫山水論に「春山ハ淡冶ニシテ笑フ如ク、夏山ハ蒼翠ニシテ滴ル如ク秋山ハ、明淨ニシテ洗フ如ク、冬山ハ慘淡トシテ睡ル如シ」

【荀子】 二十卷、簡明目錄に「周ノ荀況撰ス、唐ノ楊倞ノ註アリ、ソノ書大旨勸學ニ在リ、而シテ其ノ學、德ヲ修ムルヲ主トス、徒ニ以テ人ノ質ヲ恃ミテ學ヲ廢センコトヲ恐ル、故ニ激シテ性惡ノ說ヲナシ、後儒ノ詬厲ヲ受ク、要スルニ其ノ聖人ヲ宗法シ、王道ヲ誦說スルトコロ、終ニ韓愈ノ大醇小疵ノ評ヲ以テ定論ト爲ス」

【春秋】 魯の史記の名にして孔子の筆削にかかるものなり、隱公の元年に起りて哀公の十四年に終る、十二公二百四十二年閒の事迹を擧げて、上下の名分を明かにし、周室を尊ぶの意を寓す、春秋に三傳あり、公羊穀梁左氏なり、三傳共に十三經に列す、公羊傳は周の公羊高の述ぶる所ろ、漢の何休の註、唐の徐彥の疏なり、穀梁傳は、周の穀梁赤の述ぶる所ろ、晉の范甯の註、唐の楊士勛の疏なり、左傳は、周の左氏といふ者の撰にして、晉の杜預の註、唐の孔穎達の正義なり、

【春秋高シ】 年老いたるをいふ、戰國策に「君之春秋

高、而封地未レ定」とあり、また劉向の新序に「楚丘先生行年七十、披ニ裘帶レ索、見ニ孟嘗君一、君曰、先生老矣、春秋高矣云云」

【春秋富ム】 年少をいふ、年少ければ、餘年多し、以て財の竭さざるに比して富といふ、史記の齊悼惠王世家に「今高后崩ズ、皇帝春秋富ム、未レ能レ治ニ天下一」

【春秋鼎盛】 春秋は、年齒なり、鼎は當なり、方なり、鼎盛は、方に壯なるをいふ、漢書賈誼傳に「天子——」

【荀氏ノ八龍】 人の良き兄弟多きを稱していふ、後漢書に「荀爽字ハ慈明、潁川潁陰ノ人ナリ、父淑字ハ季和、賢良方正ニ擧グラレ、對策シテ朗陵侯ノ相ニ補ス、事ニ莅ミテ明理、稱シテ神君ト爲ス、子八人アリ、竝ニ名稱アリ、時人八龍トイフ、爽幼ヨリ學ヲ好ミ、十二ニシテ春秋論語ニ通ズ、潁川之ガ語ヲ爲リテ曰ク、荀氏八龍、慈明無雙ト」

【純臣】 忠純正直の臣なり、左傳隱四年に「石碏——也」

【春社】 春の社日なり、禮記に「仲春ノ月、元吉ヲ擇ビ民ニ命ジ社セシム」註に「社ハ后土ナリ、民ヲシテ之ヲ祀リ、以テ農ヲ祈ラシム、春分ノ前後ニ近キ戊ノ日ヲ謂フ、元ハ吉ナリ」

【巡守】 天子諸國を巡るをいふ、書經の舜典に「五載一——」また孟子に「天子適ニ諸侯一曰ニ——一巡守者、巡ニ所レ守也」

【醇儒】 漢書賈山傳に「涉ニ獵書記一不レ能レ爲ニ——一」この注に「醇ハ雜ナラザルナリ」醇は通じて純に作る、後漢書鄭康成傳に「稱爲ニ純儒一」

【春樹暮雲】 遠方に在る友を憶ふを「誦ニ——之句一」といふ、杜甫の春日憶ニ李白一詩に「渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論レ文」と、渭北は杜の居る地、江東は李の居る地、

【逡巡】 却退なり「アトシサリ」史記魏世家に「翟璜——再拜」また莊子に「子貢——而有ニ愧色一」過秦論に「九國之師、——遁逃」

【逡遁】 逡巡に同じ、却退なり、管子に「桓公蹴然——」また漢書の贊に「——有レ恥」の註に「遁讀ンデ巡ニ同ジ」

【蠢蠢】 蟲などのうごめく貌、また動擾の貌、左傳に「今王室實——焉」

【恂恂】 信實の貌、論語に「於ニ鄉黨一——如レ也」また溫恭の貌とも解く、また恐懼の貌、爾雅に「恂ハ慄ナリ」と、柳文の捕蛇者說に「——而起」

【循循】 次序ある貌、論語子罕篇に「夫子——然善誘

【諄諄】「ネンゴロ」に告げ誨ふる義、詩經の大雅に「誨爾ー人」朱傳に「詳熟ナリ」と、左傳襄三十一年に「趙孟年未盈五十、而ー老、如八九十者」また忠謹の貌、後漢書卓茂傳に「勞心ーー」

【醇醇】厚き貌、老子に「其政悶々、其民ーー」註に「ソノ政敎寛大ナレバ、民ーー富厚ニシテ、自ラ相親睦ス」

【恂恂如】溫恭の貌、論語に「孔子於郷黨ーーー也」

【潤色】文章に手を入れて、文采を加ふるをいふ、論語に「子曰、爲命、裨諶艸創之、世叔討論之、行人子羽脩飾之、東里子產潤色之」とあり、命とは、辭命の文なり、裨諶以下四人は、皆鄭の大夫、艸は畧なり、創は造なり、艸藁を造爲するをいふ、討は尋究なり、論は講議なり、行人は使をつかさどる官、脩飾は之を增損するをいふ、

【純粹】不雜なり、易の乾卦に「剛健中正、純粹精也」また至美を純といひ、齊同を粹といふとも解す、楚辭に「昔三后之ーー分、固衆芳之所在」

【春水滿四澤】陶淵明の四時の詩の起句なり「ーーーー、夏雲多奇峯、秋月揚明輝、冬嶺秀孤松」これなり、春水、夏雲、秋月、冬松以て四時の奇景を盡すに足る、許彥國詩話にいふ「四時詩、此顧長康詩、誤入彭澤集中」とあり、未だ果して然るか否かを知らず、

【純正蒙求】三卷、元の新安胡炳文撰す、炳文、李瀚の蒙求多く對偶を以て工を求め、盡くは法戒に關するあらざるを以て、因つて是の書を作る、上卷は法戒に關する事を明かにすることを敍す、中卷は身を立て己を行ふことを敍す、下卷は人を待ち物に接することを敍す、每卷一百二十句、併せて自らこれが註を作る和版あり、

【浚渫】泥あくたの類をさらへて深くするをいふ、水經の注に「不ーーニ」

【駿足長阪ヲ思フ】俊秀の人、艱難に逢ひて、其の才を試みんことを思ふに喩ふ、文選の陸厥の詩に「駿足思長阪ニ」

【瞬息ノ閒】極めて短き時閒をいふ、瞬は、「メタタキ」息は、一呼吸なり、杜詩に「得失瞬息閒」

【潤澤】うるほす義、孟子に「若夫ーー之則在君與子矣、淮南子に「夫水者大不可極、深不可測、上天爲雨露、下地爲ーー、無公無私、水之德也」

【滔哲】滔は幽深なり、哲は智なり、ーーは、深智に同じ、書の舜典に「ーー文明、溫恭允塞」

【俊德】俊は大なり、大德に同じ、書の堯典の「克明俊ーー以親九族」の註に「俊ハ峻ニ同ジ」

【舜ノ徒】善を爲すにつとむる者は、皆舜の「ナカマ」なりとの義、孟子に「雞鳴而起、孳孳爲善者舜之徒也」

【春葩】春の花、劉勰の新論に「陽氣主生、物所樂也、陰氣主殺、物所憾也、故ーー含日似笑、秋葉泫露如泣」

【俊髦】俊は萬人に秀でたるをいひ、髦はすぐれて長き髮をいふ、また髦士とも用ふ、詩經に「髦士攸宜」とあり、爾雅に「髦ハ俊ナリ」と、郭璞曰く「士中ノ俊ハ、猶ホ毛中ノ髦ノ如シ」

【春坊】太子の宮をいふ、宮僚備要に「太子宮曰ーーー」

【駿馬ノ骨ヲ買フ】（死馬ノ骨を見よ、

【潤筆】揮毫料をいふ、北史の鄭譯傳に見ゆ、歐陽公の歸田錄に「蔡君謨、既爲余書集古目錄序、刻石、其字尤精勁、爲世所珍、余以鼠鬚栗尾筆銅綠筆大小龍茶惠山泉等物、爲潤筆、君謨大笑以爲太清而不俗」

【春氷ヲ渉ル】（渉春氷）春氷は薄くして解け易し、その上を渉るは、陷溺の恐あり、以て危險を感ずるに喩ふ、書經に「心之憂危、若踏虎尾渉于春氷」

【春風酔ヲ勸ム】白樂天の詩に「花下忘歸因美景、樽前勸酔是春風」

【春風ノ中ニ坐ス】（坐春風中）良師に從ひ薫陶せらるるをいふ、書言故事に、侯仲良の語錄を引きて曰く「朱公掞名ハ光庭、明道先生程顥ニ汝州ニ見エ、歸リテ人ニ語ツテ曰ク、光庭在春風中ニ坐了一月ト、春風は能く萬物を發育す、光庭いふ、程明道先生に從學して倍長益する所ろあること春風の中に坐するが如しと、

【醇朴】朴は樸に同じ、心が純粹にして僞なく、すなほにして虛飾なきをいふ、朱熹の句に「風俗願ーー」

【餕餘】餕は食の餘なり「クヒノコシ」禮記に「ーー不祭」

【舜能ク象ヲ化ス】劉氏人譜に「昔舜ノ弟ニ象トイフ者アリ、屢舜ヲ殺サント欲ス、舜之ニ接スルニ友愛ノ道ヲ悉ス、象遂ニ惡ヲ改メ化シテ善人ト爲レリ、明ノ王陽明之ヲ論ジテ曰ク、舜ノ能ク象ヲ化スルハ、其ノ機、只象ノ不是ヲ見ザルニ在リト、至言トイフベシ」

【醇醪】美酒なり、以て才德すぐれたる友に喩ふ、江表傳に「程普以年長、侮周瑜、瑜折節不與較、普後自敬服而親重之、乃告人曰、與周瑜交、若飲ーー不覺自醉」

【春蘭秋菊倶ニ廢スベカラス】各〻特長ありて、共に棄つべからざるに喩ふ、事文類聚に「妻子餘、鄒縣ノ尉前勸酔是春風」

ニ補セラル、時ニ同列ノ李朝隱、程行諶、皆文法ヲ以テ著稱セラル、子餘獨リ文學ヲ以テ名ヲ知ラル、或ヒト長史陳崇業ニ三子ノ優劣ヲ問フ、崇業曰ク、春蘭秋菊、俱不可廢也ト」

【醇醨】 醇は厚酒、醨は薄酒、漓に通じ用ふ、爾雅註疏序に「醇醨既異、步驟不同」酒の厚薄を以て、民俗の厚薄に轉用す、淳漓とも書く、

【蓴鱸ヲ思フ】 久しく異鄉に宦遊せるものが故鄉へ歸らんことを懷ふに用ふ（張翰蓴）（蓴羹）を見よ、

【朱明】 爾雅に「夏ヲ朱明トイフ」夏氣は赤くして光明なるに由る、

【受命ノ君】 天命を受けて王業を爲す所ろの君をいふ、史記周紀に「西伯蓋ーー之ー」

【首陽ノ愁】 太平記卷四に見ゆ（伯夷叔齊）を見よ、

【須臾】 頃刻の閒なり、中庸に「道也者不可ーー離、離ルベキハ道ニアラザルナリ」僧祇律に「二十念ヲ一瞬トナシ、二十瞬ヲ一彈指ト名ヅケ、二十彈指ヲ一羅預ト名ヅケ、二十羅預ヲ一須臾ト名ヅク、一日一夜ニ三十須臾アリ」

【茱萸】 山茱は灌木にして、葉は「ヰノコヅチ」に似て毛なく對生す、春、葉に先だちて枝の節每に四瓣の黃花簇り開く、大さ三分許、實は「アヲキ」の實の如く秋後熟して赤し、吳茱は喬木にして高さ丈餘、枝四方に廣がり、根に「ヒコバエ」叢生す、葉は漆に似て大きく、數少く、厚くして對生す、夏、黃白花、枝の梢に簇り開く略「カヘデ」に似たり、實の大さ二分餘、扁くして五稜あり、紫赤なり、古名「カハハジカミ」又一種に食茱あり喬木、二三丈、木に刺多し、葉は「オニグルミ」に似て狹長鋸齒あり花實共に略「カヘデ」に似たり 支那にては九月九日に高きに登り、ーーの房を頭に插むときは邪惡を避くべしといひ傳ふ、王維の詩に「遙知兄弟登高處、遍插ーー少一人」また杜甫の詩に「明年此會知誰健、醉把ーー仔細看」風土記に「九月九日俗ーー房ヲ折リ以テ頭ニ插ム、イフ惡氣ヲ辟除シテ初寒ヲ禦グ」と、また福建志に「建寧府重陽ノ日、高ニ登リーー酒ヲ飲ムーーヲ名ヅケテ辟邪翁トナス」和名の「グミ」とは異り、

【侏離】 蠻夷の語聲、分明ならざるなり、後漢書南蠻傳に「衣裳斑闌、語言ーー」離一に僸に作る、通ず、

【儒林ノ四傑】 元史に「柳貫、浦陽ノ人、同郡ノ黃溍、及ビ臨川ノ虞集豫章ノ揭傒斯ト名ヲ齊シクス、人號シテ儒林ノ四傑トナス」

【鷲嶺】 五精舍の一、大藏法數に「ーー山名也、以其山形似於鷲鳥、故以名焉、中爲精舍、佛居此而說法也」

【首領ヲ保ツ】 （保首領）領は頸なり、身體を全く保つをいふ、左傳襄十三年に「得ーーーー以沒」史記匈奴傳に「各保其首領而終天命」

【銖錙ノ姦】 銖は二分五厘、錙は二十四銖なり、些細の義、銖錙の姦は些細なる姦惡をいふ、漢の趙廣漢（字ハ子都）京兆尹に遷る、善く鉤距をなしてーーーも皆之を知る、

【輸掠】 物を奪ひ取りて、送り來るをいふ、左傳昭二十年に「斬刈民力、ーー其聚」また杜牧の阿房宮賦に「取掠其人、倚疊如山、一旦有不能輸來其閒」とあるもーーの意なり、

【酒帘】 帘は酒家の「カンバン」の代りにたつる旗、おもに青色を用ふ、故に青帘ともいふ、鄭谷の句に「青帘認酒家」と、李中の句に「閃閃ーー招醉客」と、三才圖會に「ーーハ卽チ酒旗ナリ」

【戍樓】 城上の「ヤグラ」敵を望むために設く、譙樓に同じ、儲光義の送別詩に「寒雲隱ーー」

【儒分レテ八ト爲ル】 韓非子に「孔子之後、儒分爲八」とあり、子張氏・子思氏・顏氏・孟子・漆雕氏・仲良氏・孫氏樂正氏これなり、

【書】 文の一體なり、字書に「書ハ舒ナリ、ソノ言ヲ舒布シテ簡牘ニ陳ブルナリ」とあり、書の用は至つて廣し、下より上に對しては奏といひ、啓といひ、狀といひ、疏といひ、牋といひ、劄と云ふ、皆書の別稱なり、簡牘も書の一體にして、或は手簡とも、小簡とも、尺牘ともいふ、簡畧の義を含めり、秦漢以來、皆親知往來問答の閒に用ふ、かくて牋は專ら之を皇后太子諸王に用ふ、書に辭命議論の二體あるも、共に散文なり、凡て書の體はもと言を盡すにあれば、條暢優柔に、其情意を通するを以て主とすべし、

【序】 文の一體なり、文體明辨に「爾雅ヲ按ズルニ云フ、序ハ緒ナリ、字モ亦敍ニ作ル、言フココロハ、其ノ善ク事理ヲ敍シテ、次第序アルコト、絲ノ緒ノ若キナリ」と、また堂の東西に在る、牆をいふ、爾雅に「東西牆、謂之ーー」と、また學校の名、禮記の學記に「家有塾、黨有庠、術有ーー」

【助】 殷と周との世に於いて、井田の制によりて取り立てたる租稅法をいふ、殷にては公田七十畝の中にて十四畝を廬舍とし、その周圍の田を受け耕す八家のもの餘の五十六畝を平分して七畝づつに分ち耕

し、その收穫をもて租稅とす　周にては、公田百畝のうち二十畝を廬舍とし、その周圍の田を受け耕す八家の者、餘の八十畝を十畝づつに分ち耕し、その收穫をもて租稅とす、つまり十一分の一を租稅として取り立つる法なり、孟子に「殷人七十而助」とあり、詳しくは孟子を見よ、

【書案】「ツクエ」歐陽修の讀書の詩に「初如二雨軍交一乘、勝方酣戰至二夜天下樂一、終日在レ一書几一」同じ、

【書帷】書齋の「トバリ」錢起の詩に「遠岫入レ一」また白居易の詩に「夜雪有二佳趣一、幽人出レ一」

【書幃】前に同じ、幃はひとへの「タレギヌ」周邦彥の句に「螢度二破窓一偷入レ一」

【書淫】讀書に耽るをいふ、事文類聚に「劉孝標見ル所ロノ博カラザルヲ苦ミテ、異書アリト聞カバ、必ズ往イテ祈メ借ル、清河ノ崔慰祖、之ヲ一ト謂フ」また晉書皇甫謐傳に「謐典籍ニ耽玩シ、寢ト食トヲ忘ル、時人之ヲ一ト謂フ」淫は度に過ぐるなり、

【頌】詩の一體なり、文體明辨に「按ズルニ詩ニ六義アリ、其ノ六ヲ頌トイフ、頌ハ容ナリ、盛德ノ形容ヲ美メテ、其ノ成功ヲ以テ、神明ニ告グル者ナリ（中略）ソノ詞、或ハ散文ヲ用ヒ、或ハ韻語ヲ用フ、劉勰イフ、頌ノ體タル、典雅ニシテ辭ハ必ズ清鑠、敷寫、賦ニ似テ、華侈ノ區ニ入ラズ、敬愼銘ノ如クニシテ、規戒ノ域ニ異リト」

【時雍】民をして、和らぎ平かならしむる義、書經の堯典に「黎民於變、時雍」雍は和なり、漢書功臣表に「昔唐以二萬國一致二一之政一」

【鍾愛】至りてめでかはゆがる、南史に「特所二一一」

【鍾繇】皓の曾孫、字は元常、書を善くし謀を好む、魏の文帝に仕へ、武亭侯に封ぜらる、女孫琰善く文を屬し、羣籍を博覽す、王惲に適く、禮儀法度中外の稱するところとなる、

【踵ヲ接ユ】（接踵）踵は足後なり「カカト」をいふ「カカト」を交へ接するは、絕えざるをいふ、戰國策に「韓魏父子兄弟、一而死二於秦一者百世矣」

【升ヲ以テ石ヲ量ル】（以升量石）升は少量、石は多量なれば、量る能はず、よりて不肖者が、賢者を測ること能はざるに喩ふ、淮南子に「使二桀度一堯、是猶二一一也一」

【鍾皓】字は季明、潁川の人、少くして篤行を以て稱せらる、徵辟せらるるも皆就かず、李膺歎じて曰く「鍾君ノ至德師トスベシ」と、陳寔荀淑韓韶と、潁川の四長となす、後漢の桓帝の朝に、林慮の長となる、諸儒頌して曰く「林慮懿德、非レ禮不レ處、悅二此書詩一弦二琴樂一、古五就州招、九膺台輔、逡巡主命、卒歲容與」

【鍾馗】唐の武德中舉に應じて第せず、階に觸れて死す、後ち明皇晝寢して夢みらく、一小鬼玉笛を盜む、上叱す、忽ち大鬼あり、破帽藍袍角帶して小鬼を捉へ、その目を刳き、擘きて之を啖ふ、上問ふ、對へて曰く、臣は終南の進士なり、擧に應じて第せず、階に觸れて死せり、旨を奉じて袍帶を賜ひて之を葬らる、誓つて天下の虛耗の妖孽を除かんと、臭道子に命じて之を圖せしむること、夢中見るところの如くせしむ、これよりその像を畫きて妖魔を驅るの符とす、巨眼多髯、黑き衣冠をつけ拔劍して小鬼を捽するの像是れなり、

【繩糾】繩は直なり「スミナハ」にて正すなり、糾は正なり、過を矯正するをいふ、書の冏命に「匡二其不一及、繩二愆糾一謬一」一解に、糾は擧なり、其の「アヤマチ」を發擧するをいふと、

【憃愚】憃は物慾に蔽はれてくらき義、禮記に「寡人一一冥頑」憃は生來に物事の差別等を知るの才能なき義のときは音「タウ」周禮に「三赦曰二憃愚一」

【鍾欒】字は仲偉、雅の七世の孫、學を好み詩を善くす、南齊に仕へ、官西中郎に至る、詩品三卷を作りて古今の詩人を品藻す、その論多くは公平なり、

【松化石】四川通志に「重慶府永川縣ノ來蘇鎭ニ和近キ處ニ一一アリ、石質ニシテ松理ナリ或ハ二三尺許、大サ合抱ナルベシ俗ニ雷燒石ト呼ブ」

【冗官】無用の官なり、冗は雜なり、剩なり、蘇軾曰く「政ヲ爲スニハ三冗ヲ去ルニアリ、曰ク一一 冗兵冗費

【勝國】左傳に「勝國者、絕二其社稷一有二其土地一也」とあり、亾國の義に用ふ、例へは清朝人の文に一一とあれば、明朝を斥していふが如し、

【證左】左驗に同じ、當時左右に在りて、其の事を見て以て證する者、史記五宗世家に「請逮二勃所一與奸一諧一一勃は常山王劉勃、

【乘槎】槎は査に同じ「イカダ」一一は「イカダ」に乘る、北史に「一一下二釣磯一」

【縱囚】舊唐書太宗紀に「貞觀六年十二月辛未、親錄二囚徒一歸二死罪者三百九十人于家一、令明年秋末就レ刑、其後應二期畢至一、詔原二之一」とあり、新唐書も同じ、白居易の詩に「死囚四百來歸レ獄」とある是れなり、後漢書の獨行

傳に、戴封が中山の相に遷りし時、四百餘人の犯罪を哀み、期日を約して家に遣り歸らしめたるに、皆違ふものなかりければ、天子詔書もて褒美せられし事あり、又虞延傳、鍾離意傳にも見ゆ、太宗のこの擧、蓋し之に倣へるならむか、歐陽修に——論あり、參看せよ、

【鍾子期】 周の楚の人、伯牙善く琴を鼓し、子期善く之を聽く、伯牙の意高山に在れば、曰く、巍巍乎として泰山の若しと、志流水に在れば曰く、蕩蕩乎として流水の若しと、子期死して伯牙絃を絕ちてまた鼓せず、曰く世に音を知る者なしと、

【松實ヲ服ス】 神仙傳に「偓佺好シデ松實ヲ食フ、能ク飛行スルコト走馬ノ如シ、ソノ服スル者ハ、皆三百歳ニ至ル」

【丞相】 宰相に同じ、丞は承なり、相は助なり、君主の意を承け助くる義、史記秦紀武王二年の條に「初置ニ——一」

【勝商】 富商をいふ、管子に「游子ノ——之所」道」

【勝情】 景勝の地を好むの心をいふ、世說に「非ニ徒ニ有ニ——一、有ニ濟勝之具ニ」

【勝者ノ用フル所ロハ敗者ノ棋】 (カツッ者ノ)を見よ、

【稱首】 首として稱する義にて、その「ナカマ」にて、特に傑出せるもの、司馬相如の封禪文に「前聖之所ニ以永保ニ鴻名ニ而常爲ニ——者ニ」また荀悦の文に「扼腕而游談者、以ニ四豪ニ爲ニ——一ト四豪とは孟嘗・平原・信陵・春申の四君なり、晉書樂廣傳に「天下言ニ風流者ニ以ニ王樂ニ爲ニ——一ニ」と王は王獻之なり、

【松樹千年終ニコレ朽チ、槿花一日自ラ榮ヲ爲ス】 (松樹千年終是朽、槿花一日自爲ニ榮ニ)駿臺雜話「朝がほの花一時」の條に引けり、白氏文集卷の十五、放言五首の第五に「泰山不ニ要ニ欺ニ毫末ニ、顏子無ニ心羨ニ老彭ニ、——————、——————レ——何須ニ戀ニ世常憂ニ死、亦莫ニ嫌ニ身漫厭ニ生ニ、生去死來都是幻、幻人哀樂繫ニ何情ニ」とあり、和漢朗詠集の槿の題下にも引けり、莊周の死生を一にし釋氏の世を夢幻視すると同意、

【繩繩】 戒愼なり、詩の周南に「宜爾子孫ニ——分」朱註には「——ハ絕エザル貌」と、また際涯なき貌と解するニ——は、音ビン

【繩樞】 「ナハ」の「トボソ」貧家のさま、過秦論に「陳涉甕牖ニ——之子」とあり(桑樞ニ蓬戶)を參看せよ、

【稱制】 (制ヲ)を見よ、

【蹤跡】 「アトヲツケル」奉洛紀聞に「往ニ青州ニ——之、果有ニ州民麴氏ニ」

【仍孫】 昆孫の子、仍は重なる義(昆孫)を見よ、

【勝地】 形勝の地をいふ、頭陀寺碑文に「楚都之——也」

【承塵】 居處の上に施して塵土を承くる者、長押の類なるべし、三輔決錄に「鳩アリ——ノ上ヨリ飛ンデ几前ニ下ル」と、後漢の雷義傳に「義嘗テ、人ノ死罪ヲ濟フ、罪者金一斛ヲ以テ之ヲ謝ス、義受ケズ、金主、義ノ不在ヲ伺ヒ、默シテ金ヲ——ノ上ニ投ズ、後チ屋宇ヲ葺理シ、金ヲ得タルニ、金主已ニ死セシカバ、乃チ以テ縣曹ニ付ス」

【冗長】 冗は冗官の冗に同じく「ムダ」なり、長は長物の長に同じく、餘剩無用の義なり、文賦に「要辭達而理舉、故無取ニ乎——一ニ」

【頌德】 人の德行をほめたる義、北史に「立碑——」

【勝敗ノ數】 數は計なり、凡そ數といふは、成敗利鈍得失輕重等を計算する義、史記黥布傳に「——之——、未可知也」

【承乏】 官に任ずるといふ謙辭、空乏を承けて、しばらく之を補ふの意、左傳成二年に「敢告不敏攝ニ官——一」と、註に「猶ホ置ニ代ルトイフガ如シ」と、置は乏なり、

【松柏ノ操】 松や「カヤ」の歲寒にも、しぼまざるに喩へて、人の堅き「ミサヲ」を稱していふ、南史に「與ニ——一比操ニ歲寒ニ(歲寒クシテ)を見よ、

【松柏ノ下、其ノ草殖セズ】 (松柏之下、其草不ニ殖)左傳の語、草、松柏の下に處れば必ず生長せず、物雨ながら盛なる能はざるをいふ、

【承平】 天下太平の世を受けつぐ義、漢書食貨志に「累ニ——世一」

【縄墨】 「スミナハ」規律をいふ、また正しき手本の義、禮の經解に「——之於ニ曲直ニ」

【勝母ノ閭ニ過ラズ】 (不ニ過ニ勝母之閭ニ)勝母は里の名、其の名の不順を忌みて、里門に入らざるなり、淮南子に「曾子立ニ孝——一ニ、墨子非ニ樂ニ不ニ入ニ朝歌之邑ニ」また鄒陽書に「里名ニ勝母ト、而曾子不ニ入、邑號ニ朝歌ト而墨子返ニ車」(邑勝母ト)を參看せよ、

【毳毛】 肉に附く細毛なり、鳥獸皆やはらかき細毛を生じて、自ら溫むるなり、書經の堯典に「鳥獸——」

【烝民】 烝は衆なり、衆民の義、書經の益稷に「——乃粒ニ粒とは粒食の義、

【松明】 「タイマツ」無閒錄に、戴石屏の「——夜當ニ燈ニ」の句を引きていふ、「深山ノ老松ノ心油アル者、蠟ノ如ク燭ニ代フ、之ヲ——トイフ」

【從容】 安なり「ユツタリ」として迫らざる義、書經の

君陳篇に「一一以和」また中庸に「一一中道聖人也」

【慫慂】 誘ひ勧む「ススメタツル」品字箋に「一一ハ勧ナリ」揚子方言に「南楚ニテ、凡ソ己レ喜怒スルヲ欲セズシテ旁人說スル者、之ヲ一一トイフ、一ニ従容・縦臾・将養・縦勇・従訹ニ作ル」

【稱量】 料り度るなり、管子に「人有二逆順一、事有二稱量一」

【書ヲ校スル塵ヲ掃フガ如シ】 (校書如掃塵) 事文類聚に「筆談ニイフ、宋宣獻、博學喜ンデ異書ヲ藏ス皆手自ラ仇校ス、常ニイフ、書ヲ校スル塵ヲ掃フガ如シ、一面掃ヘバ一面生ズ、毎ニ三四校猶ホ脫誤アリ」とあり、

【書ヲ曝ス】 (曝書) 四民月令に「七月七日ニ經書及ビ衣裳ヲ曝ス蠹セズ」と、また世說に「郝隆七月七日ニ人皆衣ヲ曝ス 隆庭中ニ於テ日ニ向ヒ仰臥ス、人其ノ故ヲ問フ、答ヘテ曰ク、我ハ腹中ノ書ヲ曝スナリト」

【疽ヲ吮フ】 (吮疽) 疽は一種の危き「ハレモノ」史記の呉起の傳に「卒有二病疽一者、起爲吮二之一」癰ヲ見よ、

【書ヲ以テ御スル者ハ、馬ノ情ヲ盡サズ】 (以書御者、不盡馬之情) 書物上にて、學びたる馭法を以て、馬を馭すとも、馬の情を知らざる故に、意の如く馭する能はず、これ實地に就きて研究するにあらずば、功をなすこと能はざるに喩ふ、戰國策に諺に曰ク、書ヲ以テ御スル者ハ、馬ノ情ヲ盡サズ、古ヲ以テ今ヲ制スル者ハ、事ノ變ニ達セズ、故ニ法ニ循フノ功ハ、以テ世ニ高ブルニ足ラズ、古ニ法トルノ學ハ、以テ今ヲ制スルニ足ラズ」

【諸葛孔明】 孔明は亮の字、琅琊陽都の人、身の長け八尺、昭烈帝に仕へ、丞相と爲り、武郷侯に封ぜらる、年五十四卒す、忠武と諡す、

蜀相

丞相祠堂何處尋、錦官城外柏森森、映階碧草自春色、隔葉黃鸝空好音、三顧頻繁天下計、兩朝開濟老臣心、出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟、

【諸葛孔明出師ノ表】 蜀志に「諸葛亮蜀ニ相ト爲リシトキ、誠心ヲ開キ公道ヲ布キ、衆思ヲ集メ、忠誠ヲ盡シテ以テ政ヲ爲セリ、其ノ師ヲ出シテ魏ヲ伐ツトキ、表ヲ後主ニ上ル、中ニ言アリ、曰ク臣鞠躬シテ力ヲ盡シ、死シテ而シテ後テ已マン、成敗利鈍ニ至リテハ、臣ノ逆メ覩所ロニ非ズト」

【諸葛瞻】 三國の世の人、字は思遠、亮の子、少くして聰慧、累遷して尚書僕射となる、蜀人咸その才敏を喜ぶ、朝廷一善政佳事ある毎に、瞻の建倡せし所ろにあらずと雖も、百姓皆曰く、葛侯の爲す所ろなりと、後魏の鄧艾蜀を伐つや、書を遺りて瞻に降を誘ふ、瞻怒りて艾の使を斬り、遂に戰ひて之に死せり、

【諸葛亮】 前の「諸葛孔明」を見よ、

【徐幹】 字は偉長、三國の魏の人、陳琳・阮瑀・應瑒・劉禎・曹植・王粲と皆文章を好み、建安七子と號す、中論を著す、

【徐乾學】 字は原一、健庵と號す、崑山の人、八歳文を能くす、康熙庚戌第三人に及第す、官刑部尚書に至る、勅して一統志會典・明史・古文淵鑑等の書を修せしむるに、皆その總裁を命ぜらる、好みて人物を奬進し、海内の名士、その門に集る、讀禮通考・澹園集・傳是樓書目等の著あり、乾一音ケン を正とす、

【書櫃】 「ホンバコ」王安石の勧學文に「有即起二書櫃一、無即致一一」

【徐熙】 宋の畫人、圖繪寶鑑に「一一金陵人、世爲二江南望族一、畫二花木禽魚蟬蝶蔬果一、妙奪二造化一」

【杵臼】 身の貴賤に拘らずして交るを一一の交といふ、後漢の公孫穆來りて大學に遊ぶ、資糧なし、乃ち服を縫じて客傭す、吳祐の爲めに賃舂を爲す、(吳祐ニ傳ハレ、賃錢ヲ受ケテ學資ヲ給スルナリ)與に語り、大に驚き遂に共に交を杵舂の閒に定む、

【書箋】 「ホンバコ」類書纂要に「一一ハ書箱ナリ」

【書經】 初學記に「書者按二釋名一、言二書其時事一也、上世帝王之遺書、有二三墳・五典・訓誥・誓命一、孔子刪而序レ之、斷自二唐虞一以下一迄于周一、凡百篇、以二其上古之書一故曰二尚書一、遭二秦滅一學廢、漢興濟南人伏勝、能口誦二二十九篇一、至二漢文帝時一、欲レ立二尚書學一、以勝年且九十餘、老不レ能レ行、乃詔二鼂錯一就二其家一傳レ受之一、其後魯恭王、壞二孔子故宅一、於二壁中一得二古文尚書・論語・悉以書還一二孔子一、武帝乃詔二孔安國一定二其書一、作レ傳義一、爲二五十八篇一」とあり、

【諸行無常】 傳燈錄に「爾時世尊拘尸那城ニ至リテ、諸ノ大衆ニ告グ、吾レ今背痛ム、涅槃ニ入ラント欲スト、即チ熙連河ノ側ノ娑羅雙樹ノ下ニ往イテ、右脅ニシテ足ヲ累ネテ、泊然トシテ寂寂ス、復タ棺ヨリ起ツテ母ノ爲メニ說法シ、弁ニ無常ノ偈ヲ說イテ曰ク、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲レ樂」

【食ヒ味ヲニセズ】 食物は一品にて、二味を重ね用ひざるは、儉なり、左傳に「晉臚食不二二味一、居不二重席一」また史記の管晏傳に「食不レ重レ肉、妾不レ衣レ帛」とあるも同じ、

【蔣醫】 産科醫なり、夢溪筆談に「有一一一一適在二其家一」また乳醫ともいふ、書敍指南に見ゆ、

【臅脼】 臅は足なり、脼は饜に同じ、饜き足るをいふ、左傳昭二十八年に「願以小人之腹爲君子之心、一一而已」

【燭ヲ秉リテ夜遊ブ】 (秉燭而夜遊)李太白の春夜宴桃李園序の語、文選の古詩に「晝短苦夜長、何不秉燭遊」とあるに本づく、

【食客】 寄宿せる浪人「ヰサフラフ」史記孟嘗君傳に「一一嘗數千人」

【食牛ノ氣】 幼にしてすぐれたる志氣あるをいふ(牛ヲ食フ)を見よ、

【屬纊】 (纊ヲ屬ク)を見よ、

【食頃】 須臾なり、食事する閒にて、短き時をいふ、史記封禪書に「一一復入焉」法華經に「六十小劫、喩如一一」

【蓐月】 「ウミヅキ」雖月・臨月に同じ、儒門事親に見ゆ、

【食言】 言を出して、其の言を守らざるをいふ、書經の湯誓に「朕不食言」とあり、漢書の匈奴傳に「朕聞、古之帝王、約分明而不食言」の註に「言ヲ食ヘバ、終ニ不信ヲ爲ス、其ノ前言ヲ棄ツルコト、食ミテ盡スガ如シ」左傳僖十五年に「我食吾言、背天地也」

【蜀犬日ニ吠ユ】 (蜀犬吠日)蜀の犬は、日を見ること少し、故に日を見るときは吠ゆ、以て見識狹き者、他人の卓絕の言行に對して、疑ひて囂囂たるに喩ふ、韓文に「蜀中山高霧重、見日時少、每至日出、則群犬疑而吠之也」

【蜀江】 白氏六帖に「蜀成都有濯錦之江」云云」また山謙の丹陽記に「歷代尙未有錦、而成都獨稱妙、故三國時、魏則市於蜀、吳亦資西蜀、至是始乃有之」と、十訓抄第七に「一一とて錦洗ふと詩歌に作る所あり」とあるは是れなり、

【蜀魂】 「ホトトギス」の異名(蜀魄)を見よ、

【食指】 「クスリユビ」齊書に「方搖一一、半日乃息」

【職事】 藏人の唐名、

【蓐收】 秋の神なり、禮記に「孟秋之月、其帝少昊、其神一一」左傳の註に「秋物摧蓐而可收也」

【食指動ク】 「ゴチソウ」になる前兆なり、左傳の宣四年に「楚人黿ヲ鄭ノ靈公ニ獻ズ、公子宋、子家ト將ニ見エントス、公子ノ食指動ク、以テ子家ニ示シテ曰ク、他日我此ノ如クナレバ、必ズ異味ヲ嘗ムト、入ルニ及ンデ宰夫將ニ黿ヲ解カントス、相視テ笑フ、公之ヲ問フ、子家以テ告グ、大夫ニ黿ヲ食ハシムルニ及ンデ、子公ヲ召シテ、與ヘズ、子公怒ル、指ヲ鼎ニ染メ、之ヲ嘗メテ出ヅ」註に「手ノ五指ヲ巨指、食指、將指、無名指、小指トイフ、食指ハ、第二指ナリ、黿ハ大鼈ナリ、與ヘザリシハ、指ノ動クコヲシテ、効無カラシメント欲シテナリ」

【屬者】 近時の義、漢書李尋傳に「一一頗有變」また從ふ者をいふ、史記の項羽本紀に「一一日餘人耳」

【蜀相】 諸葛亮をいふ(諸葛孔明)を見よ、

【溽暑】 しめりけ多くしてあつし、むしあつきと、蒸暑に同じ、柳宗元の句に「南州一一醉如酒」

【喞喞】 蟲などの多くあつまりて、かなしみなく貌、歐陽修の秋聲賦に「四壁蟲聲、一一如助余之歎息」

【蓐食】 朝早く寢蓐(ネドコ)の中にて食事するをいふ、蓐は褥に同じ、左傳に「訓卒利兵秣馬一一、潛師夜起」

【燭照】 燭龍の照すが如く、分明に視ゆるなり、楚辭に「日安不到、燭龍何照」の王註に「天之西北幽冥無日之國、有龍銜燭而照」

【色然】 公羊傳哀六年に「一一而駭」註に「驚貌」とあり、

【食前方丈】 饌食が前に列なる者、方一丈なり、甚しき「ゼイタク」をいふ、孟子に「一一一一、侍妾數百人、我得志弗爲也」また漢書嚴助傳に「重五味、方丈於前」韓詩外傳に「北郭先生妻曰、結駟列騎、所安不過容膝、一一一一所甘不過一肉之味」

【蜀道難】 (李白)を見よ、

【色聽】 罪人の顏色を觀てその曲直を判するをいふ、(色ヲ以テ)を見よ、

【職田】 職分に應じて官より給する田地、一に職分田といふ、文獻通考に「隋開皇中、始給一一、又給公廨田」

【軾ニ伏ス】 軾は車前の橫木にて人の憑るところ、釋名に「軾ハ式ナリ、伏シテ式敬スル所ロナリ」史記淮陰侯傳に「酈生者一士也伏軾掉三寸舌下齊七十餘城」

【職方】 天下の地圖をつかさどり、その土地に關する事務を執る役、周禮に「一一氏掌天下之圖、以掌天下之地」

【蜀魄】 「ホトトギス」の異名、蜀の望帝の魂魄、化してこの鳥となりしとの傳說に本づく、

【蠋蠲】 (蠲蠋ノ)を見よ、

【植物】 草木の屬をいふ、周禮地官に「原隰、其植物宜叢物」また西京賦に「一一斯生、動物斯止」

【嗇夫ノ利口】 (張釋之コレヲ黜ク) 駿臺雜話「天下の賓に見ゆ、史記張釋之傳に「釋之從行登虎圈、上問上林尉諸禽獸簿、十餘問、尉左右視盡不能對、虎圈嗇夫、從旁代尉對上所問禽獸簿甚悉、欲以觀其能口對

嚮應無窮者、文帝曰、吏不當若是邪、尉無賴、乃詔釋之拜嗇夫爲上林令、釋之久之前曰(中略)夫絳侯・東陽侯稱爲長者、此兩人言事、曾不能出口、豈斅此嗇夫諜諜利口捷給哉、且秦以任刀筆之吏、吏爭以亟疾苛察相高、然其敝徒文具耳、無惻隱之實、以故不聞其過、陵遲而至於二世、天下土崩、今陛下以嗇夫口辯而超遷之、臣恐天下隨風靡靡爭爲口辯而無其實、且下之化上、疾於景響、擧錯不可不審也、文帝曰、善、乃止、不拜嗇夫」とあり、嗇夫とは虎圏を掌る者なり、無賴とは才の恃むべきなきなり、

【職分田】 わが朝の位田に同じ、通典に「ーーー亦職田トイヒ、又職田子トイフ、一品ハ十二頃、二品ハ十頃、已下九品ニ至ルマデ各差アリ」と、わが朝のーーーは大臣四十町、左右大臣三十町以下各自差あり、官職に對して賜はるものなれば唐のーーーとは異なれり、

【矚目】 目を注ぎて視るをいふ、左傳に「師ーー之ー」

【色養】 父母の顏色を見て、その氣に入るやうに孝養するをいふ、晉書潘岳傳に「膝下ーー」

【燭龍】 山海經に「鍾山ノ神ヲ名ヅケテ燭陰トイフ、視ヲ晝ト爲シ、瞑ヲ夜トナス、吹ヲ冬トナシ、呼ヲ夏トナス、身ノ長千里、人面蛇身赤色ナリ、マターートト名ヅク、天ハ西北ニ足ラズ、陰陽消息ナシ、故ニ龍アリ火精ヲ啣ミ以テ天門ヲ照ス」

【徐廣】 字は野民、晉の東莞の人、世〻學を好む、廣に至りて尤も精しく百家の書研覽せざるなし、嘗て車服儀注及び晉紀四十一卷答禮問百餘條を撰す、晉に仕へて驍騎將軍に至りぬ、

【書畫船】 錦字箋に「米元章出遊スル每ニ、船ヲ以テ書畫ヲ載セ、自ラ隨フ、人皆之ヲ識リテ曰ク、此レ米家ノーーーナリト」

【書契】 木を刻み、其の側に書し、事を約する者、易の繫辭に「上古結繩而治、後世聖人易之以ーー」

【舒元輿】 唐の東陽の人、元和中進士に第し、監察御史に擢でらる、按劾して縱す所ろなし、中丞に累遷し、奏辯明審なり、未だ幾くならず同中書門下平章事に拜す、嘗て牡丹賦を作る、時にその工を稱す、

【諸侯ノ選】 材能衆に過ぐること、列國より撰抜せしが如き者をいふ、左傳に「皆ーー之ー也」

【如今】 當今といふに同じ、杜甫の句に「飄泊至ーー」

【書佐】 「カキヤク」「イウヒツ」通鑑の宋紀に「ーー荀宗道」

【書齋】 書を讀むために設けたる「ヘヤ」なり、歐陽公の

東齋記に「或曰、齋謂夫平心以養思慮、若於此而齋戒也、故曰齋」事物紀原に「漢ノ宣帝、齋居シテ事ヲ決ス、此レ齋ノ名ノ起ナリ、晉ノ太和中ニ、陳郡ノ殷府君、水ヲ引イテ城ニ入レ池ヲ穿ツ、殷仲堪此ノ池ノ北ニ於テ、小舍ヲ立テテ書ヲ讀ム、百姓呼ンデ讀書齋ト爲ス、則チ齋ノ始ハ、疑フラクハ此レヨリス」

【初三】 月のはじめの三日をいふ、白樂天の句に「可憐九月ーー夜」

【書肆】 書を賣る店なり、揚子法言に「好書不要諸中尼書肆也」とあり、書を賣る市肆にて義を釋くこと能はざるをいふ、

【處子】 處女に同じ、孟子に「踰東家牆而摟其ーー、則得妻、不摟則不得妻、則將摟之乎」とあり、摟は牽なり、莊子に「肌膚如冰雪、綽約如ーー」また男女にかかはらず、年未だ長ぜざる者の稱とす「ムスコ」「ムスメ」

【處士】 仕へずして家に居る士をいふ、孟子の滕文公下篇に「諸侯放恣ーー橫議」とあり、また史記の滑稽列傳に「今世之ーー、時雖不用、崛然獨立、塊然獨處」

【庶子ノ春華ヲ採リテ、家丞ノ秋實ヲ忘ル】 (採庶子之春華、忘家丞之秋實)駿臺雜話「つれづれ草」の條に引けり、浮華なる文詞を好みて實益あることを棄つるをいふ通鑑六十七に「魏公操、孫權ヲ擊ツ、少子臨菑侯植ヲ留メテ鄴ヲ守ラシム 操諸子ノ爲メニ官屬ヲ高選シ邢顒ヲ以テ、植ノ家丞ト爲ス、顒防閑スルニ禮ヲ以テシ、屈撓スル所ロナシ、是ニ由ッテ合ハズ、庶子劉楨ハ文辭ニ美ナリ、植之ヲ親愛ス、楨書ヲ以テ植ヲ諫メテ曰ク、君侯、庶子ノ春華ヲ採リテ、家丞ノ秋實ヲ忘ル、上ノ爲メニ謗ヲ招ク、其ノ罪小ナラズ、愚竊ニコレヲ懼ルト」胡註に「漢ノ制、列侯ハ家丞庶子各〻一人ヲ置ク、侯ニ侍シ、家事ヲ理ムルヿヲ主ル」

【書紳】 (紳ニ書ス)を見よ、

【書社】 古の制、二十五家を里とす、里に各社を立て、戶口と田數とを書して之を藏む、故に二十五家の地を書社といふ、史記の孔子世家に「楚昭王將以書社地封孔子」

【處守】 居守に同じ、左傳に「高鮑、ーー」

【沮洳】 漸濕なり「ヌカルミ」の地をいふ、詩の魏風に「彼汾ーー」注に「水ノ浸ス處、下濕ノ地ナリ」

【徐庶】 三國の時、長社の人、嘗て諸葛亮を昭烈に薦む、曹操その母を獲るに及びて庶、昭烈に謂って曰く、本將軍と事を圖らんと欲せしも、今は母を失ひ方寸亂れぬ、請ふ此より辭せんと、遂に操に歸せり、

【所生】父母なり、詩の小雅に「夙興夜寐、毋レ忝二爾一ー一」

一解に父祖をいふと、

【諸生】書生をいふ、通俗篇に「諸生猶二諸侯一、雖二一人一亦得レ云レ諸」

【庶績咸熙】庶績は衆功なり、咸は皆、熙は廣なり、衆功皆廣まるをいふ、書經の堯典に「允釐二百工一ー一」

【汝是畜生發菩提心】太平記卷九に見ゆ、鈔に「是ハ梵網經云、若見二牛馬猪羊一切畜生一、應レ心念口言ー一ー一ー一ー一、コレハ菩薩ノ行ヲオコシ、戒法ヲ行スル者ハ畜類ヲ見テモ、菩提ノ心ヲススメテ發セシムル義ナリ、今聖モ少シコノ意ヲ知リテイヒツランナレモ正シク資名卿ニ對シテ汝ハコレ畜生ナリトイヒタルハ、無下ニ可笑シキ事ナリト」

【書癡】讀書に耽りて、他に心を寄せざると癡の如きをいふ、唐書の竇威傳に「竇氏子弟皆喜二武德一、獨威尚レ文、諸兄訕爲ー一」と、黃庚の詩に「耽レ書近二欲レ癡一」

【徐穉】字は孺子、後漢の南昌の人、家貧しく常に自ら耕稼し、その力にあらざれば食はず、恭儉義讓居るところ人その德に服す、太守陳蕃特に榻を設けて以て之を禮す、累擧せらるるも皆就かず、室を築きて隱居す、時に南州高士と稱す、靈帝蒲輪を以て聘せんと欲せしも至らず、

【助長】速に成らんことを欲して却つて事を害するをいふ、孟子公孫丑上に「心勿二忘、勿一ー一也一」とあり、宋の愚人が苗の長ずるを助けんとて一一苗を揠きて伸したるに、その苗忽ちに枯れたりといふ例を引きて說けり、

【處女】未だ嫁せざる女をいふ、處は居なり、家に居る義、處子ともいふ、孫子の九地篇に「始如二處女一、敵人開レ戶、後如二脫兎一、敵不レ及レ拒」とあり、品字箋に「女ノ未ダ嫁セザルヲー一トイヒ、士ノ未ダ仕ヘザルヲ處士トイフ」

【庶徵】書經洪範の八をー一といふ「モロモロノシルシ」なり、曰く雨、曰く暘、曰く燠、曰く寒、曰く風、曰く時と、雨暘燠寒風各レ時を以て至る故に時といふ、

【所天】戴き敬ふ人をいふ、臣は君をー一とす、宋史刁衍傳に「堯舜、篤二善道一、垂レ化而民謂二之ー一一」子は父母をー一とす、呉質の書に「ー一優二游典籍之場一」とあるは父を斥す、妻よりは夫をー一とす、李白の去婦詞に「十五許二嫁君一、二十移ー一」類書纂要にも「婦ハ夫ヲ以テ天ト爲シ、子ハ父ヲ以テ天ト爲シ、臣ハ君ヲ以テ天

トナス、故ニ妻ハ夫ヲ稱シテー一ト爲ス」

【初度ノ辰】書言故事に「自稱二生日一曰二初度之辰一、離騷皇覽二揆余初度一兮、肇錫二余以一嘉名一」と見ゆ、皇とは、皇考なり、古人自ら死せし父を皇考といふ、覽は觀なり、揆は度なり、屈原言ふ、亡父我が初度の時節を觀て、善き名を賜ひ正則といひ、字を靈均といふとの義、度は時節の節の如し、

【書ハ心ノ畫ナリ】揚子法言に「言心聲也、書心畫也、聲畫形、君子小人見矣」

【書判】書は楷法のすぐれたるをいひ、判は文理の優りたるをいふ、韓文の河南少尹李公墓誌銘に「ー一出其倫一ニとあり（身言ー一）を見よ、

【書ハ名姓ヲ記スルニ足ル】（書足レ記二名姓一）堂は深く修むるに足らずとの意、史記項羽紀に「籍曰、書足レ記二名姓一而已、劒一人敵レ不レ足レ學、學二萬人敵一」漢書には名姓を姓名に作る、

【胥靡】刑徒をいふ、胥は相なり靡は繫なり、鐵鎖にて相繫がるるをいふ、史記殷紀に「說爲ー一、築二傅險一」說は傅說なり、莊子庚桑楚に「ー一登高而不レ懼」漢書楚元王傳の註に「靡ハ隨ナリ、古者相隨ツテ坐スル輕刑ノ名ナリ」

【諸父】叔父伯父をすべてー一といふ、詩經の伐木に「既有二肥羜一、以速二ー一一」羜は羊の子なり、速は召請なり、

【如夫人】人の寵妾をいふ、左傳の僖十七年に「齊侯好レ內、多二內寵一、內嬖如二夫人一者六人」とあり、齊侯は桓公なり、內を好むとは、女色を好むなり、夫人の如き者とは、妾媵の寵を得て、夫人の如く遇せらるる者をいふ、

【徐勉】字は修仁、東海郯の人、幼にして孤貧にして清節を勵ます、徐孝嗣之を見て曰く、これ人中の騏驥、必ず能く千里を致さんと、南北朝の時、梁に仕へて吏部尚書となる、嘗て客と夜坐す、時に官を求むる者あり、勉色を正して曰く「今日止可レ談二風月一、不宜レ及二公事一ニと累官して左僕射中書令に至る、

【書圃】書物の多きを稱す、司馬長卿の、上林賦に「修二容乎禮園一、翱二翔乎書圃一」園といひ圃といふは、その物の多きをいふ、

【胥命】諸侯相會合し、ただ約言を申ねて相命ずるのみにして、血を歃りて盟ふことをせざるをいふ、春秋桓三年に「夏齊侯衛侯ー一于蒲」公羊傳に「相命也、何言二乎相命一、近レ正也、古者不レ盟、結言而退」とあり、また荀子に「春秋善二ー一一而詩非二屢盟一」と屢盟とは、詩の小雅に「君子屢盟、亂是用長」とあるを斥す

【初夜】 戌の時なり、初更或は甲夜ともいふ、今の午後八時、遺教經に「初夜後夜亦勿レ有レ廢」

【助理】 理は治なり、天子を助けて天下を治むるをいふ、漢書百官志に「一一萬機」

【黍離ノ嘆】 故都を過ぎて、その廢墟となれるを嘆息するをいふ(彼ノ黍離離)を見よ、

【黍糞】 極めて少量をいふ、十黍を糞となす、漢書律曆志に「權レ輕重一者、不レ失一一」

【黍粟ヲ失ハズ】 (不レ失黍粟)黍も粟も「ハカリ」の稱にて、極めて少量なり、十黍を粟とし、十粟を銖とす、少しの「チガヒ」もなき義なり、漢書律曆志に「度レ長短一者、不レ失二毫釐一、量二多少一者、不レ失二圭撮一、權レ輕重一者、一レ一一」一一に粟は黍に作る、同じ、

【書籠】 書を藏むる篋なり、また下の故事に由りて、徒らに書を讀みて、其の義に通ぜざる者に喩ふ、晉書劉柳傳に「劉柳爲二僕射一時、右丞傅迪廣讀レ書而不レ解二其義一、柳讀二老子一而已、迪每輕レ柳、柳曰、卿讀レ書而無所レ解、可レ謂二一一一矣、又因機活法に「李邕語二貫古今一、然不レ能レ屬レ文、故時號曰二一一一」

【子來】 子の父の事に趨く、召さずして自ら來る如きをいふ、詩經大雅靈臺篇に「經始勿レ亟、庶民一一」と

あるに本づく、

【蝨ヲ貫クノ技】 (貫蝨技)弓の巧手をいふ、列子湯問に「甘蝿古之善レ射者、彎レ弓而獸伏鳥下(中略)以二燕角之弧一、朔蓬之箭一射之、貫二蝨之心一」とあり、蝨は「シラミ」

【蝨ヲ捫ル】 (捫蝨)を見よ、

【虱褌中ニ處ル】 (虱處二褌中一)虱は蝨に同じ「シラミ」なり、褌は、釋名に「褌ハ貫ナリ、兩脚ニ貫キテ、上、腰中ニ繫グナリ」とあり「サルマタ」の類即ち犢鼻褌なり、晉書阮籍傳に「羣虱之處二褌中一、逃二乎深縫一、匿二乎壞絮一、自以爲二吉兆一也」とあり、以て苟安の徒に比す、

【虱ノ生ズル所ロヲ爭フ】 劉氏鴻書に「長公外紀ニイフ、東坡閑居ノ口ニ、秦少遊ト夜酒宴ス、東坡虱ヲ捫リ得テ曰ク、コレコノ蝨ハ垢ノ生ズル所ロナリト、少遊イフ、然ラズ綿絮ヨリ成リタルモノナリト、互ニ相辯ズルコト久シクシテ決セズ、明日佛印和尚ニ問ヒテ疑ヲ質シ、負ケタル者ハ一席ヲ設ケテ勝チタル者ヲ饗スベシト約シテ歸ル卄、少游佛印ノ門ヲ叩キテイフ、今日東坡ト虱ノ生ズル始ヲ辯ゼシニ、東坡ハ垢ヨリ生ズトイヒ、愚ハ綿絮ヨリ生ズト、爭ヒテ決セズ、明日師ニ問ヒテ決セント約ス、幸ニ綿絮ヨリ生ズト答ヘヨ、後日當ニ餽飩ノ會ヲ設クベシト、スデニ去ル

シバラクアリテ東坡至リ、マタ前事ヲイヒ、願クハ虱ハモト垢ヨリ生ズト答ヘヨ、勝ツトキハ冷淘ヲ作ラント、明日三人相會シテコノ事ニ及ブ、佛印曰ク、コレ曉リ易キ事ナリ、虱ハ垢ヲ身トシ、絮ヲ脚トス、先ヅ冷淘ヲタベテ後チニ餽飩ヲタベント皆手ヲウツテ大ニ笑ヒ、宴ヲ設ケテ相樂ムト」と、冷淘は水花ともいふ、切麥の類なり、餽飩は不托ともいふ「ウンドン」なり、

【虱ハ頭ニ處リテ黑シ】 (虱處二頭而黑一)人は交る所ろによりて化せらるるに喩ふ、朱に交れば赤くなると同じ、文選に「一一一一一一麝食柏而香一柏は「カヤ」

【芝蘭】 書言故事に「朋友ノ作成ヲ謝シテ、仰拜二芝蘭之化一トイフ」家語の六本篇に「與二善人一居、如レ入二芝蘭之室一、久而不レ聞二其香一、即與レ之化矣、與二不善人一居、如レ入二鮑魚之肆一、久而不レ聞二其臭一、亦與レ之化矣、是以君子謹二其所一與レ處」

【芝蘭玉樹ヲ生ズ】 (芝蘭玉樹生二庭堦一)人才の多く一門より出づるに喩ふ、晉書謝安傳に「安嘗戒二約子姪一、因曰、子弟亦何預二人事一、而正欲レ使二其佳一、諸人莫レ有二言者一、玄答曰、譬如二芝蘭玉樹一、欲レ使二其生一於庭堦一耳」玄は謝玄、

【尸利】 寵を固くして、祿を利することを主とするのみをいふ、禮記に「近而不レ諫、則一一也」

【支離】 はなればなれに分散するをいふ、莊子の人間世篇に「夫一一其形一者、猶足レ以養二其身一、終二其天年一、又況一一其德一者乎」

【梓里】 郷里をいふ、詩經の小雅小弁に「維桑與梓、必恭敬止」桑梓は父母の植ゑしところ故に恭敬す、これより郷里の義とす(桑梓)を參看せよ、

【緇流】 僧侶をいふ、緇は黑色なり、僧は黑衣を被る、故にいふ、釋氏要覽に「此レ衣ノ色ニ從ヒテ之ヲ名ツクルナリ」とあり、緇徒に同じ、

【而立】 三十歲なり、論語爲政篇に「三十而立」とあり、孔子の語、立とは志に從つて進み、わが求むる所ろを得て、堅く之を守り、如何なる事物も、これを動すこと能はざるをいふ、

【絲綸】 天子の詔命をいふ、禮記緇衣篇に「王言如レ絲、其出如レ綸、王言如レ綸、其出如レ綍」とあるに本づく(綸言)を見よ、

【四輪ノ國】 輪は猶ほ通の如し、國人四方に適くに、通ぜざる所ろなきをいふ、戰國策に「趙僅存哉、然而一一之一也」

【師旅】 詩の小雅の「我師我旅」の箋に「五百人ヲ旅トナ

ス」とあり、師は五旅即ち二千五百人をいふ、周禮にも「五旅爲師」とあり、また必ずしも人員にかかはらずして、軍隊の義にも用ふ、論語に「加之以一一」と

【紫稜】（シリヨウ）紫石稜なり、晉書に、劉惔か桓溫を評して「眼如紫石、鬚作蝟毛磔」といへり、また宋濂の秦士錄にも「雙目有一一」とあり、稜一音ロウ

【汁ヲ啜ラント欲ス】（シルスス）利を得んことを希ふに喩ふ、史記の魏世家に「彼勸太子戰攻欲啜汁者衆」

【四靈】（シレイ）麟鳳龜龍の四をいふ、禮記の禮運に「何謂一一麟鳳龜龍謂之一一」とあり、靈とは神靈の義、此の四獸皆神靈ありて、他物に異なるを以て故にいふ、

【砥礪】（シレイ）皆「トイシ」なり、砥は礪よりも細かなり、轉じて研ぎ磨く義に用ふ、禮記の儒行に「一一廉隅」

【辭令】（ジレイ）猶ほ詞章の如し「コトバツカヒ」史記屈原傳に「博聞彊志、明於治亂、嫺於一一」また禮記に「禮義之始、在于正容體、齊顏色、順一一」

【素キ絲ノ染マンコトヲ悲ム】（シロキ）淮南子に「楊子見逵路而哭之、爲其可以南可以北、墨子見練絲而泣之、爲其可以黃可以黑也」とあり、高誘の註に「憫其本同而末異」とあり、

【白キ骨鋤カレテ云云】（シロホネス）井上文雄の古戰場を弔ふ文に見ゆ、文選の古詩に「古墓犁爲田、松柏摧爲薪、白楊多悲風、蕭蕭愁殺人」また白氏文集に「古墓何代人、不知姓與名、化爲路傍土、年年春草生」などある句によりてかけり、

【尸祿】（シロク）尸は主なり、職務を憂へず、ただ祿を食ぶことを主とするをいふ、漢書鮑宣傳に「以一一爲智」

【四六排偶】（シロクハイグウ）六朝駢儷體の文をいふ、四字若くは六字の對句に綴る文なり、字數は八字十字等種種あれども發端は多く四字六字に作る（文章ノ四體）を參看せよ、

【城、隍ニ復ル】（シロクワウ）城復于隍に治極りて亂を生ずるの譬、易の泰卦に「一一一一」とあり、隍は城下の池なり、隍土を掘り、之を積みて城と爲すは、治道を積みて泰を爲すが如し、故に城土の頽れて隍に復へるは、泰の終りて、又否に反るが如きなり、楚辭に「悲太山之爲一」とあるも亦同じ、

【子路米ヲ負フ】（シロコメ）孔子家語致思篇に「仲由字子路、孔子ニ見エテ曰ク、負重涉遠不擇地而休、家貧親老不擇祿而仕、昔、由ノ二親ニ事ヘシ時、常ニ藜藿ノ實ヲ食ヒ、親ノ爲メニ米ヲ百里ノ外ニ負ヒタリキ、親沒セシ後、南ノカタ楚ニ遊ブ、從車百乘積粟萬

鍾茵ヲ累ネテ坐シ、鼎ヲ列ネテ食ス、藜藿ヲ食ヒ、親ノ爲メニ米ヲ負ハント願欲スレドモ、得ベカラザルナリト、子曰ク、由ヤ親ニ事フル、生事ニハ力ヲ盡シ、死事ニハ思ヲ盡ス者ト謂フベシト」

【雌黃】（シワウ）黃色の繪の具なり、古は書物の誤字を正すに用ふ、故に轉じて文章を可否する義にも用ふ（口中ノ雌黃を見よ、

格言八則

人臣盡ニ民力ヲ一以美ニ宮室ヲ一、重ニ賦斂ヲ一以飾ニ子女狗馬ヲ一、此謂ニ養ヒ一レ殃ヲ（韓非子）

人君之憎ニ一於民ヲ一也、國有ニ飢者ヲ一、食不レ重レ味、民有ニ寒者ヲ一、冬不レ被レ裘ヲ（淮南子）

人體欲レ得ニ勞動ヲ一、動搖則穀氣得レ消、血脈流通、病不レ得レ生、譬猶ニ戶樞ヲ一不レ蠹也（三國志華佗傳）

仁者何以樂レ山、山者萬人之所ニ瞻仰ヲ一、草木生焉、萬物殖焉、飛鳥集焉、走獸伏焉、生ニ萬物ヲ一而不レ私、育ニ群物ヲ一而不レ倦、出レ雲導レ風、天地以成、國家以寧、有レ似ニ夫仁人志士ニ一（韓詩外傳）

仁者不下以ニ盛衰ヲ一改ニ其節ヲ一、義者不下以ニ存亡ヲ一易ニ其心ヲ一（列女傳）

志意修則ニ富貴ヲ一道義重、輕ニ王侯ヲ一（文中子）

思索生レ知、慢易生レ愚、暴傲生レ怨、憂鬱生レ疾（管子）

樹木盛則飛鳥歸レ之、芻草美則禽獸歸レ之、人主賢則豪傑歸レ之（呂氏春秋）

ス

【瑞雲】めでたき雲、慶雲に同じ、西京雜記に「祥瑞之雲曰慶雲、亦曰景雲、亦曰卿雲、外赤内靑曰矞雲」

【推演】推しひろむる義、敷衍に同じ、漢書外戚傳に「不知一一聖德、述先帝之志」

【隨園三十種】二百四十一卷、淸の袁枚撰す、隨園の藏版本なる、小倉山房文集三十五卷、同詩集三十七卷附續篇二卷以下三十種の書を合せ收む、

【隨園詩話】十六卷補遺十卷あり、淸の袁枚撰す、詩に關する論說記事を筆に隨ひて記せしものにて、詩學の參考とすべし、

【醉翁】歐陽修六一居士と號し、又別に一一と號す、その一一亭記に「太守與客來飮于此、飮少輙醉而年又最高故自號曰一一也」

【誰何】誰ぞと問ふこと、史記の始皇本紀に「良將勁弩、要害ノ處ヲ守リ 信臣精卒利兵ヲ陳ネテ誰何ス」の註に「何ハ猶ホ問ノ如シ」とあり、淮南子に「不知爲之者誰何」とあるは、ただ「誰ゾ」の義なり、

【隨何】漢に仕へ謁者たり、高祖のために、九江王黥布に說きて楚に背き、漢に歸せしむ、

【推敲】(推敲)を見よ、

【水行蛟龍ヲ避ケザルハ漁父ノ勇ナリ】(水行不避蛟龍者、漁父之勇也)莊子の語、下に「陸行不避兕虎者、獵夫之勇也、白刃交于前、視死若生者、烈士之勇也、知窮之有命、通之有時、臨大難而不懼者、君子之勇也」漁父獵夫の勇より烈士の勇に及び、君子の大事に至る淺より深に說き及ぶ、

【隋高祖ノ玄文ヲ崇ブ】太平說卷十七に見ゆ、煬帝天台大師を師とし、法華玄文の講を受けしをいふ、

【水旱】洪水と「ヒデリ」と、漢書に「堯有九年之水、湯有七年之旱」澇旱に同じ、淮南子に「時有澇旱災害之患」

【水嬉】水に舟をうかべてたのしみ遊ぶをいふ、述異記に「日與西施爲一一」

【炊臼ノ夢】妻を喪ふをいふ、酉陽雜爼に「江淮ノ王生、善クトス、賈客張瞻トイフアリ、將ニ歸ラントシ、臼中ニ炊グト夢ミ、王生ニ問フ、生曰ク、君歸ラバ、妻ヲ見ザラン、臼中ニ炊グハ釜ナキナリト、瞻歸レバ、妻已ニ卒ス」釜は婦と音同じ、故にいふ、

【炊金饌玉】盛饌をいふ(金ヲ炊ギ)を見よ、

【醉吟先生】唐の白居易東都に居り、意を詩酒に放にし、池沼を疏し石樓を香山に創し、自ら號して一一一一といふ、又香山居士ともいふ、

【醉郷記】王績の作るところの文、績字は無功、隋末の王通の弟なり、一一一を著し、以て劉伶の酒德頌に次ぐ、

【水鏡私ナシ】(水鏡無私)蜀志の李嚴傳の注に「夫水ハ至平ニシテ邪ナル者法ヲ取ル 鏡ハ至明ニシテ醜ナル者、怒ルナシ、水鏡ノ能ク物ヲ窮メテ怨ナキ所以ノ者ハ其ノ私ナキヲ以テナリ」

【吹噓】人に薦め擧げられんことを求むるを一一の力を借るといふ、杜甫の句に「顧惜一一迸上天」一一は「イキ」を吹きかくるなり、

【垂拱】衣をながく垂れ、手をこまぬくをいふ、無爲にして治まるを一一の治といふ、書經の武成に「信ヲ惇クシ、義ヲ明カニシ、德ヲ崇ビ功ニ報ユ 一一シテ天下治マル」又單に敬禮の義とす、禮記に「侍於君一一」拱とは左右の手の拇指を相拄へ他の四指を組み合すをいふ、

【水魚ノ親】親密なること、魚の水に於けるが如きをいふ、蜀志の諸葛亮傳に「先主遂ニ亮ニ詣ル、凡ソ三タビ往イテ乃チ見ユ、因ツテ人ヲ屛ケ、與ニ事ヲ計リ之ヲ善トス、是ニ於テ情好日ニ密ナリ、關羽張飛悅バズ、先生曰ク、孤ノ孔明アルハ、猶ホ魚ノ水アルガ如シ、願クハ復タ言フコトナカレト」杜甫の詩に「稍令社稷安、自契魚水親」

【翠華】天子の旗をいふ、上林賦に「建翠華之旗」の註に「翠旗ハ翠羽ヲ以テ旗ヲ飾ル」

【水火ヲ通ゼズ】近鄰の組合の者と雖も、亦交際往來せざるをいふ、漢書孫寶傳に「杜門不通水火」

【炊火ナシ】祭祀の絕えたる義、漢書燕王傳に「趙氏無炊火焉」

【隋和ノ材】隋は隋侯の珠、和は和氏の璧、材の美なるに喩ふ、司馬遷の書に「雖材懷隋和、行若由夷、終不可以爲榮」由夷は、許由伯夷をいふ、

【水經】支那の水道を記す、記するところ、黃河楊子江以下四十餘川なり、唐書藝文志に「桑欽ノ一一三卷」とあり、北史の酈道元傳に「道元學ヲ好ミ、奇書ヲ歷覽シテ 一一注四十卷ヲ選ス」とあり、この書は武英殿聚珍版全書中に收めたるを善本とす、

【邃古】邃は往なり、往古に同じ、楚辭天問に「一一之初」

誰傳道之(カスチ)遂古は上古に同じ、遂は遠なり

【諺語(スキゴ)】「セメノシル」卓氏藻林に「諺ハ責讓(セム)ナリ猶ホ詬罵ノ如シ」

【垂拱(スキコウ)】(——(スキヨウ))を見よ、

【綏寇紀略(スキコウリヤク)】十二卷、補遺三卷、清の吳偉業撰す、明末崇禎の時の流賊の事より明の亡ぶるまでの事を紀せり

【隋侯ノ珠(ズキコウノタマ)】珍らしき大珠なり、淮南子に「兕虎在於後(ニ)隋侯之珠、在於前(ニ)、弗及(ニ)掇者、先遊(ニ)患而後就(ニ)刑」說苑に「隋侯之珠、國之寶也、然用之彈(ズルニ)、曾不如泥丸(ニ)」とあり(隋珠)を見よ、

【隋侯傷レタル蛇ヲ見テ藥ヲ付ケテ之ヲイヤス云云(ズキコウノヤウヲミテヤクヲツケテコレヲイヤスウンヌン)】十訓抄第一に見ゆ、搜神記に「隋侯大蛇ノ傷ヲ被レルヲ見テ、藥ヲ以テ之ヲ活ス、後チ蛇還リテ報ズルニ珠ヲ以テス、其ノ大サ徑寸、純白ニシテ夜光明アリ、月ノ照スガ如シ 一名隋侯珠一名ハ明月珠」とあり、なほ(隋珠(ズキシユ))を見よ

【推轂(スキコク)】人を推擧するをいふ、史記の魏其武安列傳に「魏其武安俱好(ム)儒術、推轂趙綰(チ)爲(ス)御史大夫」の註に「一ニハ自ラ卑下シテ之ガ爲メニ車轂ヲ推スガ如キヲイフ」とあり、また荊燕世家に「推(ス)轂高帝(ノ)就(セリ)天下(ヲ)」とあるは、轂を推して前進せしむるが如く。其業を助成するをいふ、

【水梭花(スキサクワ)】僧家にて、魚肉の戒を破る者、實の名をいふを恥づ、故に魚の異名に用ふ、東坡志林に「僧、酒ヲ謂ツテ般若湯トナシ、魚ヲ水梭花ト爲シ、鷄ヲ鑽離菜トナス、人不義ヲナスアリテ、之ヲ文ルニ美名ヲ以テスルハ、此レト何ゾ異ナラン」

【出師ノ表(スキシノヒヨウ)】(諸葛孔明)を見よ、

【水心鏡(スキシンキヤウ)】異聞集に「天寶中、揚州進(ム)一一背有(ニ)盤龍、言鑄(ル)鏡時、有老人自稱、姓龍名護、以(テ)五月五日(ニ)於(ノ)楊子江心鑄(ル)之、後大旱祠(ニ)龍乃雨云云」

【水心集(スキシンシフ)】二十九卷、宋の葉適撰す、劄狀奏議序記詩賦等を輯む、適字は正則、淳熙五年の進士、司業となる、韓侂胄に忤ひて貶せられ門を杜ぢて書を著し、卓然として一家を成す 學者之を仰ぐこと泰山の如く、水心先生と稱す、嘉定十六年卒す、年七十四、

【垂迹和光(スキシヤクワクワウ)】太平記卷二に見ゆ、佛は本地、神は垂迹といふは、佛家の說、神は本地、佛は垂迹とは神道よりいふ義なり、和光とは老子に見ゆ、こゝは佛の光を和らげて神とあらはれ衆生を利益する姿をいふ、

【隋珠ヲ以テ雀ヲ彈ズ(ズキシユヲモツテジヤクヲタンズ)】(以(テ)隋珠(ヲ)彈(ズ)雀(ヲ))少を得て、多を失ふに喩ふ、莊子の讓王篇に「以(テ)隋侯之珠(ヲ)彈(ズルニ)千仞之雀(ヲ)世必笑(フ)之(ヲ)是何也、則其所(ノ)用者重(シテ)而所(ノ)要者輕也」とあり、日記故事に「隋侯齊國ニ往イテ、一蛇ノ沙中ニアリ、頭上ニ血アルヲ見ル、隋侯杖ヲ以テ挑テ、水中ニ放チテ去ル、後回リテ蛇ノ所ニ至ル、乃チ蛇一珠ヲ啣ンデ來ルヲ見ル、隋侯敢テ取ラズ、夜夢ニ、脚ニ一蛇ヲ踏ム、驚キ覺ムレバ、乃チ珠ヲ得タリ、光明月ノ照スガ如シ、世號シテ隋侯ノ珠トナス」とあり、註に「隋侯、姓ハ祝、字ハ元暢」

【遂初(スキショ)】初の思ひ通りになる義、晉書に「孫綽居(リ)會稽(ニ)遊(ル)放山水、十餘年作(リ)——賦以致(ス)其意(チ)」これによりて官を辭し野に處ることに借り用ふ、

【隋書(ズキショ)】八十五卷、唐の魏徵等勅を奉じて撰す、帝紀列傳の外に、禮儀・音樂・律曆・天文・五行・食貨・刑法・百官地理・經籍の十志あり、之を五代史志といふ、もと別行の書なりしが、後人之を隋書に附入せしにより竟に隋志と稱するに至れり、和版あり、十志中、經籍志は、後漢以後に於ける藝文の源流を考へ、眞僞を別つに便なり、清の章宗源の隋經籍志考證十三卷あり、

【惴惴(スキズキ)】憂ひおそるる貌、詩の秦風に「臨(ミ)其穴(ニ)、——其慄(トシテ・レル)」

【彗星(スキヤウイ)】「ハハキ」星、星の尾に光氣ありて形「ハハキ」に似たるによりていふ、楚辭の九歌に「登(リ)九天(ニ)撫(スレバ)——(チ)彗(ハ)星(ヲ)」古は——出る時は、災禍の前兆なりとて、一名を「ワザハヒボシ」ともいひ、また妖彗とも連用す、

【醉石(スイセキ)】廬山記に「陶淵明居ル所ロノ栗里、大石アリ、淵明常ニソノ上ニ醉眠ス、名ツケテ——ト曰フ」

【誰昔(スキセキ)】誰は發語の辭、嚆昔に同じ、詩の國風に「——然(リ)矣」

【垂涎(スキセン)】(涎ヲ垂(ル))を見よ、張元幹の詩に「扁舟莫(レ)浪發(スル)蛟鰐正(ニ)——」

【睟然(スキセンタル)】和らぎうるほふ義、潤澤の貌、孟子に「君子所(ノ)性仁義禮智根(ス)於(ニ)心(ニ)、其生(スル)色也(シテ)——見(ハレ)於面(ニ)盎(レス)於背(ニ)施(ス)於四體(ニ)」

【水族(スキゾク)】河海にすむ魚類、杜甫の句に「逶迤羅(ル)——(ニ)水碓(スキダイ)」水の力をかりて舂く「カラウス」正字通に「桓譚新論——曰(フ)輜車(ヲ)註今俗依(リテ)水涯(ニ)壅(ツテ)上流(ヲ)設(ケ)水車(ヲ)轉輪與(ニ)碓身(ニ)交激使(ム)自舂(カシム)即其遺制也」とあり、水碓・水磨皆同じ、

【錐刀ヲ以テ泰山ヲ墮ス(スキタウヲモツテタイザンヲオトス)】(以(テ)錐刀(ヲ)墮(ス)泰山(ヲ))至微の力を以て、至大の敵を犯すも、毫も害ふ所ろなきをいふ、荀子に「以(テ)詐遇(フ)齊(ヲ)譬(フル)之猶(ホ)——(ノ)——(ヲ)——(ノ)——(ヲ)也」

【錐刀ノ末(スキタウノマツ)】細事に喩ふ、轉じて小利をいふ、左傳の昭

六年に「錐刀之末、將盡爭之」また淮南子に「背道德之本、爭於錐刀之末」

【垂橐】 橐は底なき「フクロ」橐中物を容れずして空しく垂るるをいふ、國語に「諸侯之使、垂橐而入、稇載而歸」

【水竹院】 咸淳臨安志に「――落ハ、孤山ノ西泠橋ノ南ニ在リ、賈似道ノ別墅ナリ、理宗帝御書奎文之閣アリ、閣ノ下ヲ堂ト爲シ、秋水トイフ、堂前ハ湖瀦ニ枕ム、左ハ孤山ヲ挾ミ、右ハ蘇隄ヲ帶ブ、波光萬頃、闌檻ト相直リ、少シノ障礙モナシ、マタ道院舫亭等アリ、傑然トシテ登覽ノ最タリ」

【垂釣】 (釣ヲ垂ル)を見よ、

【垂髫】 髫は小兒の頂後に垂るる髮「タレガミ」「ウナヰ」說文に「小兒垂結也」とあり、後漢伏湛傳の「髫髮厲志」の註に「髫髮謂童子垂髮」とあり、

【隋ノ煬帝】 隋の第二世、名は廣、文帝の第二子、位に即きて首として洛陽の顯仁宮を營む、丁を役すること二百萬人、江嶺の奇材異石を發し、又海內の嘉木異草珍禽奇獸を求めて以て苑囿に滿つ、又通濟渠を開き、長安の西苑より穀洛水を引き河に達し、河を引き汴に入れ、汴を引き泗に入れ以て淮に達す、又民を發し刊溝を開き江に入る、旁に御道を築き、樹るに柳を以てす、長安より江都に至るまで離宮を置くこと四十餘所、人を遣し、江南に往き、龍舟及び雜船數萬艘を造り、以て遊幸の用に備ふ、西苑は周二百里その內に海を爲る周十餘里、蓬萊・方丈・瀛州の諸山を爲る、高百餘尺、臺觀宮殿山上に羅絡し、華麗を窮極す、宮樹凋落すれば綵を剪つて花葉と爲し之を枝條に綴る、好んで月夜を以て宮女數千を從へ、騎して西苑に遊ぶ、淸夜遊の曲を作り、馬上に之を奏す、かく驕奢を極めたるのみならず大業七年帝自ら將として高麗を擊ち、大に民力を竭盡せしかば、天下騷動し、盜賊蜂起す、大業十三年帝南遊して江都に在り、唐公李淵兵を太原に起し、遂に帝を尊びて太上皇となし、代王を立つ是を恭皇帝となす、煬帝は後ち宇文化及に縊殺せらる、

【翠ハ羽ヲ以テ自ラ殘フ】 翠は翡翠とて「カハセビ」といふ鳥なり、うつくしき羽ある故にころさる、以て人の才智あるが故にかへりて災にあふに喩ふ、劉子新論に「翠以羽自殘、龜以智自害、丹以含色磨肌、石以抱能碎質」とあり、莊子にも「山木自寇也、膏火自煎也、桂可食、故伐之、漆可用故割之」とあるに同じ、困學紀聞にも「蘇子云、蘭以芳自燒、膏以明自焚、翠以羽殃

身、蚌以珠自破」とあり、

【推輓】 前より牽くを輓といひ、後より送るを推といふ、――は人を推薦するをいふ、左傳襄十四年に「衞君必入、夫二子者、或輓之或推之、欲無入得乎」輓一に挽に作る、

【翠微】 山の八合目の邊をいふ、爾雅に「未及上曰――」この疏に「未ダ頂上ニ及バズ、旁ニ在リテ陂陀タル處、山氣青縹色ナリ、故ニ――トイフ」と、許渾の詩に「十二闌干倚――」

【綏撫】 安んじて、なでいつくしむ、吳志に「虛心――、得其歡心」

【水母】 海中に生ずる動物「クラゲ」郭璞の說に「――目蝦」

【水步】 水軍と步兵との義、吳志に「――八十萬」

【吹毛】 禪語、劍の名、

【吹毛ノ咎】 太平記卷二十六に見ゆ、すこしの過をもさがし咎むる義、韓非子に「人君大躰者、不吹毛而求小疵」とあり(毛ヲ吹キ疵ヲ求ム)を見よ、

【垂楊】 「シダレヤナギ」梁元帝の句に「垂柳復――」

【騅逝カズ】 騅は「アシゲ」の馬、また項羽の乘りたる馬の名(拔山ノ力)を見よ、

【悴容】 やせ衰へたる容、謝靈運の詩に「朽貌改鮮色、――變柔顏」

【隨陸武ナシ】 (絳灌)を見よ、

【水栗】 菱芰なり「ヒシ」武陵記に「兩角曰菱、三角四角曰芰、通謂之――」

【鄒衍ガ六月ノ霜ヲ感ジ】 駿臺雜話「妖は人より起る」に見ゆ、鄒衍は齊人、陰陽の理に通じ、荒唐の說をなす、詳しくは史記孟荀列傳に見ゆ、淮南子に「衍事燕王、盡忠、左右譖之、王繫之獄、仰天而哭、五月天爲之下霜」と、燕王は惠王、

【鄒忌】 周の人、琴を鼓するを以て齊王に見ゆ、王之を喜ぶ、後ち齊の相となる、齊に三鄒子あり、前は――、次は鄒衍、後は鄒奭、

【樞機】 樞は戶樞なり、戶の由りて開閉する所、機は弩牙なり、弩の由りて張弛する所、故に事の要を――といふ、易の繫辭に「言行君子之――」また國語に「耳目心――也」

【數奇】 不仕合をいふ、書言故事に「命乖クヲ――トイフ」註に「命ハ數ナリ、奇ハ虧ナリ」と、史記の李廣傳に「廣自ラ請ヒテ曰ク、願クハ前ニ居テ先ヅ單于ニ死セント、大將軍靑、亦陰ニ上ノ誡ヲ受ク、以爲ラク、李

廣老イテーナリ、單于ニ當ラシムルナカレ、恐クハ欲スル所ヲ得ザラント」註に「奇ハ不偶ナリ」奇は奇數故に不遇の意とす

【芻豢】草食するを芻といふ、牛羊の類、穀食するを豢といふ、犬豕の類孟子に「理義之悅ニ我心ニ猶ホ――之悅ニ我口ニ」また荀子に「人之情、食欲有ル――トニ」

【嵩呼】天子の萬歲を祝する義、漢書に「武帝、登リテ嵩ニ禪ス、吏卒咸萬歲ト呼ブ者三スルヲ聞ク」とある故事に本づく、一に山呼ともいふ(萬歲)を見よ、

【嵩山】次の(嵩山)を見よ、

【嵩山】河南省の開封府の西に在り、初學記に「嵩高山ハ五岳ノ中岳ナリ」とあり、釋名に「嵩字或ハ崧ニ作ル、山大ニシテ高キヲ崧トイフ」と、白虎通に「中央ノ岳獨リ高字ヲ加フル者ハ、何ゾヤ、中央ハ四方ノ中ニ居リテ高シ、故ニ嵩高山トイフ」と、王元之西征記に「其ノ山三十六峯、東ヲ太室トイヒ、西ヲ少室トイフ、相去ル十七里、嵩ハソノ總名ナリ、之ヲ室トイフ者ハ、ソノ下ニ各石室アルヲ以テナリ」と、詩經に「嵩高維岳、峻極于天、維岳降神生甫及申、維周之翰」

【趨舍】向背といふに同じ、史記伯夷傳に「巖穴之士、――有ル時」

【鮠生】鮠は小魚なり、故に其の身を卑下して、――といふ、猶ほ小生といふがごとし、漢書の張良傳に「鮠生我ニ說ク」の註に「鮠生ハ小人ナリ」

【芻蕘ニ詢フ】(詢芻蕘)芻は、草を取る者、蕘は薪を取る者「キコリ」博く下問を爲して、徵者と雖も措かざる義なり、詩經の大雅に「先民有リ言、詢于芻蕘ニ」善言は、往くとして在らざるなきをいふ、朱子曰く「先民ハ古ノ賢人ナリ、古人詢フコトヲタフトビテ芻蕘者ニ及ブ、況ヤソノ僚友ヲヤ」と、猶は芻の俗字なり、十訓抄第三に「聖人は芻蕘にはかるともいへり」とあるは、この詩の句によれり、元稹の詩に「――分棄捐ニ」

【樞密使】唐の制、――は内臣を以て之に任ず。後唐の莊宗、郭崇韜を用ひて、宰相と分ちて朝政を秉らしむ、文事は中書より出で、武事は樞密より出づ、此れより後、その權漸く盛んなり、宋朝に至り號して西府となす、使は樞密院の長官なり、容齋隨筆に「唐ノ世ノ――ハ專ラ內侍ヲ以テ之ニ爲ス、五代以來始メテ士大夫ヲ參用シ、遂ニ執政ニ同ウス」

【鄒陽】漢の時の齊の人吳に仕へ文辨を以て名を著す、吳王陰に邪謀あり、陽上書して諫むれども納れられず、去て梁に之き、孝王に從ひて遊ぶ、讒せられて吏に下さる 獄中より上書し、出さるるを得て卒に上客となる、

【芻靈】草を束ね人の形と爲し、以て死者の從衞とする者、「ワラニンギャウ」禮記に、「孔子謂爲――者善」

【鄒魯ノ學】(鄒魯之學)孔孟の學なり、鄒魯は、孔孟の生地なればなり、莊子の天下篇に「鄒魯之士縉紳先生」とあり、

【末大必折】樹木の枝葉大なれば、本根を折るの義、支族大なれば、本宗を蹈すに喩ふ、左傳に「――――、尾大不ル掉ヘ」

【過ギタルハ猶ホ及バザルガ如シ】(過猶不及)論語先進篇に見ゆ、孔子の語、道は中庸を以て至極と爲す、賢智の過ぎたるは、愚不肖の及ばざるに勝れるが如しと雖も、其の中道を失ふことは、則ち一なるをいふ、

【進ミテハ忠ヲ盡サンコトヲ思フ】孝經に「進思盡忠、退思補過、將順其美、匡救其惡」また此の中の前二句は、左傳に林父の君に事ふるを稱す、

【筋信ビ骨強シ】(筋信骨強)管子に「人能ク正靜ナレバ皮膚裕寬ニ、耳目聰明ニ、筋信ビ而シテ骨強シ、乃チ能ク大圓ヲ戴キ而シテ大方ヲ履ム」

【沙ヲ含ミ人ヲ射ル】(含沙射人)(沙蟲)を見よ、

【墨ヲ磨ルハ病夫ノ如ク、筆ヲ把ルハ壯士ノ如クス】(磨墨如病夫、把筆如壯士)墨をするは手やはらかにせざれば墨汁あらくして筆のはこび自由ならず、筆を把るに力なければ、文字勁からず故に喩ふ、岩栖幽事に見ゆ、陳繼儒の語、

【速ナランコヲ欲スレバ則チ達セズ】(欲速則不達)論語に「子曰ク 速ナランコヲ欲スル無レ 小利ヲ見ルコト無レ 速ナランコヲ欲スレバ則チ達セズ、小利ヲ見レバ則チ大事成ラズ」の註に「事ノ速カニ成ランコトヲ欲スルトキハ、則チ急遽ニシテ序無ク、反テ達セズ」

【寸陰】少しの時閒をいふ、淮南子に「聖人不貴尺之璧而重寸之陰」また魏の文帝の典論に「古人賤尺璧而重――」

【寸ヲ得レバ王ノ寸】(得寸則王之寸、駿臺雜話「祕事は牖」の條に見ゆ(遠交近攻)を見よ、

【寸ヲ詘シテ尺ヲ信ブ】詘は屈なり、信は伸なり、文心雕龍に「詘寸以信尺、枉尺以直尋、棄偏善之巧、學具美之績」また淮南子に「詘寸而伸尺、聖人爲之、小枉而大直、君子行之」

【寸進尺退】得る所ろ少くして、失ふ所ろ多きをいふ、老子に「用兵有言、吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而

退尺」また韓愈の上二李侍郎一書に「進」寸退」尺、卒無」所」成」

【寸鐵人ヲ殺ス】 鶴林玉露巻七の殺人手段の條に「宋景論」禪云、譬如二人載一車兵器一、弄了一件、又取出一件來弄、便不是殺人手段、我則只有二寸鐵一、便可レ殺レ人、朱文公亦喜二其說一、(中畧)曾子之守レ約、寸鐵殺二人者一也」

【寸馬豆人】 荊浩の畫山水賦に「凡畫二山水一、意在二筆先一、寸山尺樹、一一一一遠人無レ目、遠樹無レ枝、遠山無レ皴、隱隱似レ眉、遠水無レ波、高與二雲齊一、此其訣也」

【寸裂ノ錦繖ハ未ダ堅完ノ常布ニ若カズ】 (寸裂之錦繖、未若二堅完之常布一)錦の「ズタズタ」に裂けたるは手織木綿の丈夫なるには及ばずとの義、抱朴子に見ゆ、

格言八則

寸鰡游二牛迹之水一、不レ貴二橫レ海之巨鱗一 (抱朴子)
務レ進者、趨前而不レ顧、後榮貴者、於レ己而不レ待レ人、智不レ接レ愚、當不レ賑レ貧 (後漢書朱穆傳)
須臾無レ忘二其爲一賢者一、必困二其性一、百步之中、無レ忘二其爲一已容者一、必累二其形一 (文子)
隨時快樂隨時禍、一日清閑一日僊 (傳家寶)
醉裏乾坤大、壺中日月長 (金聖歎水滸傳評)
敷閉茆屋閒臨レ水、一逕秋燈夜讀レ書 劉禹錫)
試レ墨書二新竹一、張レ琴和二古松一 (李義山)
欲レ窮二千里目一、更上一層樓、有二一分工夫一、便有二一分境界一 (岫吟語)

セ

【井蛙】(井底ノ)を見よ、

【性相近シ、習相遠シ】 論語陽貨篇に「子曰、性相近也、習相遠也」とありて、朱註に「氣質ノ性ハ、固ヨリ美惡ノ同ジカラザルアリ、然レドモソノ初ヲ以テ言ヘバ、則チ皆相遠キコト甚シカラザルナリ、但善ニ習ヘバ善、惡ニ習ヘバ惡トナリ、是ニ於テ始メテ相遠キノミ」

【西安府】 陝西省に在り、禹貢雍州の域、周の王畿の地、秦に關中と曰ひ、唐に長安と曰ひ、明に至り改めて西安府と名づく、

【征衣】 征は行なり「タビゴロモ」をいふ、戴復古の詩に「簑笠相隨走二路岐一、一春不レ換舊一一」

【正位】 「タダシキ位置、禮をいふ、孟子滕文公に「立二天下之一一一」

【霽威】 怒の解くるなり(威ヲ霽ス)を見よ、

【聖域】 聖人の地位をいふ、韓愈進學解に「絕二類離一レ倫、優二入一一一」

【西域記】 (大唐一一一)を見よ、

【西域ノ妖僧傳毅ヲ刃ノリ殺ストテ自ラ暴死ス】 駿臺離話「妖は人より起る」に見ゆ、毅は奕の誤なるべし、通鑑巻百九十五に「太史令傅奕精二究術數之書一、而終不二之信一、遇レ疾、不二呼二醫餌藥一、有二僧自二西域一來、善二咒術一、能令二人立死一、復咒レ之使レ蘇、上擇二飛騎中壯者一試レ之、皆如二其言一、以告奕、奕曰、此邪術也、臣聞、邪不二干正一、請使レ咒レ臣、必不レ能レ行、上命レ僧咒奕、奕初無二所覺一、須臾僧忽僵仆、若レ爲二物所一レ擊、遂不二復蘇一」と、奕は唐の高祖につかへ太史丞となる 太宗の貞觀十三年壽八十五にして卒す、

【誠意正心】 意は心の發する所ろにして、心は身の主とする所ろなり、意を誠實にし、心を修正するをいふ、大學に「欲レ正二其心一者、先誠二其意一」

【誠意伯文集】 二十巻、書誥頌表等共一巻、郁離子二巻、序記雜著等共五巻、詩十巻、春秋明經二巻)明の劉基撰す、基の學術經濟は耶律楚材、劉秉忠に似、而して文章は則ち二人の上に在り、その詩は沉著頓宕自ら一家を成し、高啓に亞ぐべし、その文亦宋濂の亞なり、二人に突過する能はざる者は、神鋒の豁露せるのみ(劉基)を參看せよ、

【清異錄】 二巻、宋の陶穀撰す、穀字は秀實、戶部尚書に進む、この書は唐及び五代の新異の語を采り、天文地

理君道以下三十七門に分ち凡て六百四十八事を錄せり、

【齊雲】（セイウン）古の名高き高樓の名、五代史に「韓建昭宗幸其鎭、登齊雲樓、西北望京師、思歸」と、白居易の——樓晩望の詩に「——樓北面半日凭欄干」と自註に「樓ハ蘇州ニ在リ」と、王元之の黃州竹樓記に「——落星高則高矣」

【青雲紫陌ノ譏】（セイウンシハクノソシリ）氣の合はざるそしりをいふ、范石湖の、姑蘇同年會詩序に「此ノ時ニ當ツテ、榜ヲ通ズルノ士、意氣相與ニ甚ダ厚ク、否レバ則チ青雲紫陌ノ譏アリ」とあり、青雲は天に在り、紫陌は地に在り、意氣合はざること、天地の懸隔するが若しとなり、

【青雲ノ士】（セイウンノシ）史記の伯夷傳に「太史公曰、閭巷之人、欲砥行立名者、非レ附ニ青雲之士一、惡能施ニ于後世一哉」の註に「青雲之士トハ、聖賢ノ言ヲ立テテ、世ニ傳フル者ヲイフ、孔子是レナリ、青雲ニ附クトハ、則チ伯夷顏淵是ナリ」とあり、また高位に登るをいふことあり、史記の范雎傳に「范雎帷帳ヲ盛ニシ、侍スル者甚ダ衆クシテ之ニ見エシム、須賈頓首シテ死罪ヲ言ツテ曰ク、賈意ハ——」

【青雲ノ交】（セイウンノマジハリ）書言故事に「仕宦相與ニスルヲ青雲ノ交アリトイフ、江淹曰ク、袁叔明ハ、余ト青雲交アリ、直ニ杯酒ヲ銜ムノミニアラズト」

【正營】（セイエイ）正一に怔に作る、惶恐して安んぜざるをいふ、漢書王莽傳に「人民——無レ所レ錯ニ手足一」

【精衛海ヲ塡ム】（セイエイノミヲウヅム）（精衛塡レ海、精衛は、小鳥の名なり、海を塡めんと欲して、木石を啄み來りて海に投ずるも、其の効なし、以て無望の事を企て、徒勞するに喩ふ、山海經に「發鳩之山有レ鳥曰ニ精衛一、是炎帝之女、往遊ニ于東海一、溺而不レ反、是故精衛常取ニ西山之木石一以塡ニ東海一」

【世翼時網ニ牽カル】（セイエイジマウニヒカル）（牽ニ世翼時網一）文選に見ゆ、世の中の俗累に纏はれ牽制せらるる義、

【聲援】（セイエン）援くるに、唯聲のみを用ひて、手を下さざるをいふ、任昉の書に「若使ニ鄧部救兵援一——一則單于之首懸ニ北闕一」

【說苑】（ゼイエン）二十卷、漢の劉向の撰なり 君道・臣術・建本・立節・貴德・復恩・政理・尊賢・正諫・敬愼・善說・奉使・權謀・至公・指武・說叢・雜言・辨物・修文・反質の二十篇に分ち、一篇を以て一卷とす、每篇初に序說あり、次に逸事を載す、關嘉の說苑纂註桃井源藏の 說苑考等 參考の資とすべし、

【精ヲ得テ麤ヲ忘ル】（セイヲエテソヲワスル）（得レ精忘レ麤）列子に「秦、九方皐ヲシテ馬ヲ求メシム、報ジテ曰ク、牝ニシテ黃ナリト、往イテ之ヲ視レバ、牡ニシテ驪ナリ、伯樂曰ク、其ノ精ヲ得テ其ノ麤ヲ忘ル、其ノ內ニ在リテ其ノ外ヲ忘ルト」馬の駿を相するは毛色や牝牡等の外に於て觀るべし、その內の神を知れば、其の外の毛色等は忘るるとも可なりとなり、

【姓ヲ冒ス】（セイヲオカス）（冒レ姓）他姓を假稱するをいふ、漢書衞青傳に「青——衞氏ニ」

【性ヲ伐ルノ斧】（セイヲキルノオノ）女色をいふ（伐レ性）を見よ、

【制ヲ稱ス】（セイヲショウス）（稱レ制）天子の詔を制書といふ、天子に代りて制度の命を行ふをいふ、史記呂后紀に「今太后——、王ニ昆弟諸呂一、無レ所レ不レ可ニ」

【生ヲ視ルコト死ノ如シ】（セイヲミルコトシノゴトシ）（視レ生如レ死）心を勞し、意を苦むる所ろなきをいふ、列子に「——視レ富如レ貧、視レ人如レ豕、視レ我如レ人」

【生ヲ養ヒ死ヲ送ル】（セイヲヤシナヒシヲオクル）（養レ生送レ死）生者を養ひ、死者を送るをいふ、禮記の禮運に「禮儀也者、所レ以養ニ生送一レ死事ニ鬼神一之大端也」

【生ヲ聊ンゼズ】（セイヲイヤンゼズ）（不レ聊レ生）聊は賴なり、心に賴み安んじて生活する能はざる義、史記主父偃傳に「丁男被レ甲、丁女轉輸、苦——」

【箏ヲ擁ス】（セイヲヨウス）箏ハ「ハハキ」箏をかかへ道を淸めて人を迎ふるは之を敬ふ所以なり、史記に「魏ノ文侯箏ヲ擁シテ以テ朋友ヲ迎フ、手ヲ握リテ歡半生ノ如シ」と、杜詩に「歸遲望ニ三益一」とあるも同じ、三益とは論語に「友直レ友諒友多聞ニ益矣一」とあるをいふ、箏は一音「スキ」

【世家】（セイカ）世世祿秩ある家なり、王安石の讀ニ孔子世家一の文に「太史公帝王ヲ叙スレバ、則チ本紀トイヒ、公侯、國ヲ傳フレバ、則チ世家トイヒ、公卿特起スレバ、則チ列傳トイフ、此レ其ノ例ナリ」蘇軾の詩に「——不レ可レ特、如レ倚ニ折足一ニ」

【聲價】（セイカ）猶ほ名譽といふが如し、風俗通に「張伯坐ニ——一ニ也一」

【稅駕】（ゼイガ）稅は脫なり、猶ほ駕を解くといふが如し、休息するをいふ、史記李斯傳に「物極則衰、吾未レ知レ所レ——」

【齊諧】（セイカイ）古書の名、莊子逍遙遊篇に「——者志怪者也」と、一說に「齊國ニ行ハルル諧謔ノ書ナリ」と、諧とは「オドケ」

【生涯】（セイガイ）人の一生の閒をいふ、終生といふが如し、莊子に「吾生也有レ涯、而知也無レ涯、以ニ有涯隨一レ無レ涯殆已」

【靜好】（セイカウ）「シヅカニシテヨシ」琴瑟——は夫婦の和合せるをいふ、詩經に「琴瑟在レ御、莫レ不ニ——一ニ」

【晴好雨奇】 山水の景色の晴雨共によきおもむきあるをいふ、蘇軾の飲湖上初晴復雨の詩に、

水光瀲灩晴方好、山色空濛雨亦奇、欲把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜、

とあり、芭蕉の「象潟の雨や西施がねむの花」の句はこの詩を翻案せしなり、

【生客】 はじめての客、熟客の反、志林に「子由作樓賢堂記「僕爲書之且欲與廬山結緣、它日入山不爲一一」也」

【西岳】 華山の別稱、書經舜典に「至于一一」

【精核】 核は覈に同じ、精細に究め明らかにする義、漢書馬融傳に「博覽典雅、一一數術」

【誠懇】 懇もまた誠實なること、一一は、まことの心、禮記に「忠信一一之心」

【說客】 人を說きすすめにゆく辯者をいふ、史記に「鄧生常爲一一」

【噬嗑】 噬は齧なり、嗑は合なり、齧み合す義、易經に「一一而亨」とあり、頤中に物あるときは、害を爲す、齧み合すときは、其の害亡びて亨通するをいふ、

【西河文集】 一百七十九卷、清の毛奇齡撰す、奇齡字は大可、學者西河先生と稱す、康熙十七年博鴻に舉げられ、檢討となり、康熙五十二年卒す年六十七、著書數十種あり、西河の文縱橫辨博卓然として一家を成せり、

【井幹】 井の上にかまへたる欄、キゲタ、集韻に「幹井垣也」と、莊子の秋水に「吾跳梁乎一一之上」また樓閣の名、漢書の郊祀志に「武帝立一一樓、高五十丈」註に「木ヲ積ミテ高ク樓ヲツクル、井幹ノ形ノ若クス」と、班固の西京賦に「攀一一而未半、目眴轉而意迷」

【征雁】 「ユクカリ」歲華紀麗の注に「哀蟬無留響、一一鳴南霄」

【精悍】 鋭くしてつよくかいがいしきなり、史記游俠傳に「解爲人短小一一、解は郭解、

【青眼】 親愛する目つきをいふ、晉書阮籍傳の字面（白眼）を見よ、

【西漢會要】 七十卷、宋の徐天麟撰す、唐會要の體にならひ、漢書に載するところの制度典章及び紀志表傳に見ゆるものを取り、帝系・禮・樂・輿服・學校・運曆・祥異・職官・選擧・民政・食貨・兵・刑法・方域・蕃夷の十五門に分ち類記せり、

【凄其】 寒くすさまじき義、詩經に「緡兮綸兮、一一以風」と、また張養浩長安孝子の詩に「退省百無有、滿屋颯一一」と、其は語辭なり、

【清暉】 清らかなる「ヒカリ」謝靈運の詩に「昏日變氣候、山水含一一」能娛人、遊子暗忘歸」

【青宮】 太子をいふ、東宮に同じ、初學記に「一一ハ一ニ東宮トイフ、太子ノ宮ナリ」神異經に「東明山有宮、青石爲墻、高三仞、門有銀榜、以青石碧鏤、題曰天地長男之宮」

【正誼堂全書】 清の張伯行が宋儒及び宋儒の說を羽翼するに足るところの諸家が著書を節錄合輯せしものなり、同治七年閩浙總督左宗棠等之を校刻し、合せて唐宋八大家文選・范文正公文集等の五種をも續刻せり、

【齊魏賓ヲ論ズ】 通鑑擧要、周顯王十四年に、魏惠王、問ヒ齊威王曰、齊亦有寶乎、威王曰、無有、惠王曰、寡人國雖小、而有徑寸之珠、照車前後各十二乘者十枚、豈以齊大國而無寶乎、威王曰、寡人之寶、與王異、吾臣檀子守南城、則楚人不敢爲寇泗上、盼子守高唐、則趙人不敢漁于河、黔夫守徐州、則燕人祭北門、趙人祭西門、徙而從者七十餘家、有種首者、使備盜賊、則道不拾遺、此四臣者、將照千里、豈特十二乘哉、惠王慚」とあり、檀子は齊の公族、采を檀城に食む、因りて以て氏となす、南城は齊の南境に在り、故に名づく、泗は水の名、魯國卞縣陪尾山に出で、西南して彭城を過ぎ、又東南して下邳を過ぎ、淮水に入る、泗上は泗水の上なり、盼子の盼は一に盼に作る、即ち田盼なり、高唐は東昌に在り、徐州は司馬彪曰く、魯國薛縣は六國の時徐州と謂ふと、祭西門とは燕趙齊の侵伐を畏る、故に祭りて以て福を求むるなり、

【正氣ノ歌】 正氣は天地人閒に通じて自ら存ずる正大の氣をいふ、正氣の歌は、宋の文天祥の獄中の作なり、竝に序あり左に錄す、

正氣歌幷序

予囚北庭一一、一土室、廣八尺、深可四尋、單扉低小、白閉短窄、汗下而幽暗、當日夏日、諸氣萃然、雨潦四集、浮動床几、時則爲水氣、塗泥半朝、蒸濕歷澗、時則爲土氣、乍晴暴熱、風道四塞、時則爲日氣、簷陰薪爨、助長炎虐、時則爲火氣、倉腐寄頓、陳陳逼人、時則爲米氣、駢肩雜遝、腥臊汙垢、時則爲人氣、或圄溷、或死屍、或腐鼠、惡氣雜出、時則爲穢氣、嘗是數氣當之者、鮮不爲厲、而予以孱弱俯仰其閒、于茲二年矣、嗟呼是殆有養致然爾、亦安知所養何哉、孟子曰、吾善養吾浩然之氣、彼氣有七、吾氣有一、以一敵七、吾何患焉、況浩然者、乃天地之正氣也、作正氣歌一首、

曰、

天地有正氣、雜然賦流形、下則爲河嶽、上則爲日星、於人曰浩然、沛乎塞蒼溟、皇路當清夷、含和吐明庭、時窮節乃見、一一垂丹青、在齊太史簡、在晉董狐筆、在秦張良椎、在漢蘇武節、爲嚴將軍頭、爲嵇侍中血、爲張睢陽齒、爲顏常山舌、或爲遼東帽、清操厲氷雪、或爲出師表、鬼神泣壯烈、或爲渡江楫、慷慨吞胡羯、或爲擊賊笏、逆豎頭破裂、是氣所磅礴、凜冽萬古存、當其貫日月、生死安足論、地維賴以立、天柱賴以尊、三綱實繫命、道義爲之根、嗟予遘陽九、隷也實不力、楚囚纓其冠、傳車送窮北、鼎鑊甘如飴、求之不可得、陰房闃鬼火、春院閟天黑、牛驥同一皁、鷄栖鳳凰食、一朝蒙霧露、分作溝中瘠、如此再寒暑、百沴自辟易、哀哉沮洳場、爲我安樂國、豈有他繆巧、陰陽不能賊、顧此耿耿在、仰觀浮雲白、悠悠我心憂、蒼天曷有極、哲人日已遠、典刑在夙昔、風簷展書讀、古道照顏色、

【世及】猶ほ世襲といふが如し、父子相承ぐをいふ、後漢書二十八將傳の贊に「朝有――之私」

【青金】「ナマリ」說文に「鉛ハ――ナリ」

【青衿】若き學生を――といふ、詩の鄭風に「青青子衿、悠悠我心」の註に「青青ハ純綠ノ色、衿ハ領ナリ」少年の書生は青色の衿の衣を服するに由る、

【精金良玉】人品の純良にして溫和なるに喩へていふ、程伊川が撰びし明道先生行狀に「充養有道、純粹似精金、溫潤如良玉」

【清狂】心清潔にして狂者に似たるをいふ、陸游の句に「詩酒――二十年」

【井魚ハ與ニ大ヲ語ルベカラズ】（井魚不可與語大）見識のせまき人とは、共に大事を談るに足らざるに喩ふ、淮南子に「――――――――拘於隘也夏蟲不可與語寒、篤於時也」また荀子に「坎井之鼃、不可與語東海之樂」とあるも義同じ、坎井は壞井なり（井底ノ）を參看せよ、

【聖皇】天子を尊稱していふ、班固の東都賦に「――握乾符」大にして之を化するを聖といふ、春の至りて萬物自ら化生するが如きなり、握乾符とは天命を秉握して天下を掌中に運らすをいふ

【生活】生命を保つをいふ「イキナガラフ」孟子に「民非水火不――、昏暮叩人之門戶、求水火、無弗與者、至足矣」

【税關】支那の――は新舊二種あり、舊海關は、周末よりすでにこれあり、水陸四通の要地に設け、そこを通

過する貨物に對して、原價百分の五の税を課し、中央政府の直轄に係る、新海關は、江海各港に開設せる、所謂洋海關にして、海外輸出入品に課税する所とす、千八百八十三年の擬定に依れば、江海全部を分ちて、左の十九税關區と爲し、每區に税務司を置き、總税務司に隷屬せしむ、

北海税關、東京大街より、涠州海島まで、
瓊州税關、涠洲海島より、海陵山まで、
粵海税關、海陵島より泉州府の泉州江まで、
潮海税關 大鵬角より、東澎島まで、
廈門税關、東澎島より泉州府の泉州江まで、
閩海税關、泉州江より、福寧府霞浦縣の南鎭澳まで、
溫州税關、南鎭澳より、臺州府臨海縣河口地方まで、
甯波税關、臨海縣より、杭州錢塘州口の杭州灣まで、
上海税關、杭州灣より、北向して黃河の舊口地方まで、〇江面は太倉州鎭洋縣狼山の水道まで、
芝罘税關、黃河の舊口より、同新口まで、
天津税關 黃河の新口（即ち大清河）より、山海關まで、
牛莊税關、山海關より、北向して沿岸牛莊まで、
又牛莊より、南向して沿岸大速灣まで、
鎭江税關、長江狼山水道より、江甯省城まで、
蕪湖税關、江甯省城より、安慶省城まで、
九江税關、安慶省城より、宜昌省城の上流官峽まで、
淡水税關、臺灣島北岸及び、西岸の北方一般の地、
臺灣島税關、同島南岸及び、南方一半の地、

その後ち右十九税關の外、重慶（四川省重慶府）九龍（廣東省廣州府安東縣）等の税關を加へ、淡水臺灣を減じたり、關吏は概ね英人にして經費極めて夥しといふ、

【齊桓晉文】齊の桓公と晉の文公となり、五霸の中にても最も勢の強かりし人なり、孟子の梁惠王篇に「――――之事、可得聞乎」

【精華錄】十二卷、清の王士禎（阮亭又漁洋ト號ス）撰す、順治十三年より康熙三十九年に至る古今體詩を編次す、その詩神韻を以て宗とす、辭を措く清新、清朝詩家の正宗と稱せらる、清の惠棟の漁洋山人精華錄訓纂十卷目二卷自撰年譜二卷あり參考すべし、

【成蹊】（桃李言ハザレドモ）を見よ、

【聲敎】聲は風聲、敎は敎化をいふ、猶ほ風敎といふが如し、書の禹貢に「――訖于四海」

【清言】風流高雅にして絕えて俗氣なき言をいふ、北史崔伯謙傳に「少讀經史、晚好老莊、容止儼然無慍色、」

親賓至則酒相娛ー一、不レ及レ俗事、二士大夫以爲レ儀表一」

【靖獻】（先王ニ）を見よ、

【贅言】贅は附肉をいふ、ーーはむだな言なり、揚子法言に「書不レ經非レ書也、言書不レ經非レ言也、言書不レ經、多多贅矣」とあり、言ふこころは、言書、經に合はずば、之を知ること愈〻多くして、愈〻害をなして、用無きこと、身の「コブ」あるが如しとなり、

【清獻公】（趙抃）を見よ、

【西湖遊覽志】二十四卷、志餘二十六卷、明の田汝成撰す、汝成字は叔禾錢塘の人、嘉靖五年の進士、この書名勝に附するに事蹟を以てし細大漏さず、その體地志雜史の閒に在り、卷首に宋朝京城圖湖山一覽圖浙江省城圖あり、志餘は南宋の逸聞を採錄せり、

【成功】てがらの成就せし義、論語に「巍巍乎其有レ成功一也」

【成功ノ下ニハ久シク處ルベカラズ】（成功之下、不レ可レ久處ニ）功成りて後ち、退隱せざれば、怨を受け禍を招くに至る義、史記裴澤傳に見ゆ、

【正鵠ヲ失ハズ】正も鵠も皆射の的の名なり、目的にたがふことなきをいふ、禮記の射義に「孔子曰、射者何以射、何以聽循レ聲而發、發而不レ失二正鵠一者、其唯賢者乎、若夫不肖之人、則彼將安能以中」の註に「布ニ畫クヲ正トイヒ、皮ニ棲マシムルヲ鵠トイフ、賢者ハ、弓矢ヲ持スルコト審固ナリ、故ニ能ク的ニ中ツ、不肖者ハ能ハザルナリ」中庸に「射有レ似乎君子、失二諸正鵠一、反求二諸其身一」

【青瑣】戸に刻して連瑣の文をつくり、青漆もて塗るは、天子の門の制なり、事文類聚に「漢ノ舊儀ニ曰ク、黃門ハ、黃門令ニ屬ス、日暮レテ入リテ青瑣門ニ對シテ拜ス、名ヅケテ夕郎トイフ」と、成語考に「朝廷曰二紫宸一、禁門曰二青瑣一」

【星槎】槎は槎なり、筏なり「イカダ」ーーは世界を周遊する舟又公使などの乘る舟などをいふ、拾遺記に「堯、位ニ登リテ三十年ニ、巨査アリ、西海ニ浮ブ、査上ニ光アリ、夜ハ明カニ、晝ハ滅ス、常ニ浮ビテ四海ヲ繞ル、十二年ニシテ天ヲ一周シ、周リテ復始マル、名ツケテ貫月查ト曰ヒ、マタ挂星查トイフ」と宋之問の詩に「賓至星槎落、仙來月宇空」と、查は槎に通ず

【眚災】眚は過誤をいひ、災は不幸をいふ、書の舜典に「ーー肆赦、怙終賊刑」怙は恃むことあるをいひ、終は再犯をいふ、

【誠齋集】一百三十二卷、附錄一卷、宋の楊萬里撰し、その子長孺編す、一官一集齋王儉の例に仿ふ、その詩

江西詩派の末流に沿ひ、或は粗厲頽唐を免れずと雖も而かも才思健拔包孕宏富、以て羣材を籠罩するに足る、

【誠齋詩話】宋の楊萬里撰す、主として宋人の詩を論じ、時に唐詩に及び、論文の語も亦少からず、誠齋詩を以て一家を成す、故にその論、往往理に中れりと雖も、閒〻奇僻の見を雜るものあり、享和二年の和版あり、

【星霜】星は一年に天を一周し、霜は毎年降る、故に一年を一星霜と爲す、杜牧集に「經二幾年一、曰二幾換一ーー」とあり、

【精爽】精は神なり、爽は明なり、精靈に同じ、左傳に「心之ーー、是謂二魂魄一、魂魄去レ之何以能久一」

【悽愴】いたみかなしむ、禮記に「霜露既降、君子履レ之、必有レ所ーー之心一非二其寒之謂一也」

【腥臊】「ナマグサキ」臭なり、史記の晉世家に「犯肉ーー何足レ食」と犯は咎犯、

【靚粧】鮮かに粉黛を施すをいふ、上林賦に「ーー刻飾」

【星霜ヲ經】年を經るをいふ（星霜）を見よ、

【枘鑿相容レズ】物の相齟齬して合はざるをいふ（圓鑿）を見よ、

【征驂】驂は車に駕する三頭の馬、ーーは遠方に行く車に駕せる馬をいふ、王勃の文に「高林靜而霜鳥飛、長路曉而ーー動」劉秉忠の句に「五更殘月照ーーニ

【青山只青ヲ磨ス】書言故事に「常ヲ改メザルヲ青山只青ヲ磨ストイフ、朱晦庵ノ詩ニ浮雲一任閑舒卷、萬古青山只磨青ト、前句ハ雲移リ山動カザルヲイヒ、後句ハ山ノ形色萬古改マラザルヲイフナリ」

【西山文集】五十五卷、宋の眞德秀撰す、德秀、朱子の鄉に生れ、力めて朱子の學を崇奉す、故にその文、大抵儒者の言たるを失はず、駢體はその最も長とするところなり、

【青山骨ヲ埋ムベシ】青き山には、到る處に我が骨を埋むべしとの義必ずしも故鄉の山にのみ、葬らるべきにあらずとの意、東坡の弟子由に別るゝ詩に「是處青山可レ埋レ骨」とあり、わが僧月性の題壁の詩にも、

男兒立レ志出二鄉關一、學若不レ成死不レ還、埋レ骨豈唯墳墓地、人間到處有二青山一、

とあり、

【世子】諸侯の嫡子をいふ、猶ほ天子に太子といふが如し、

【生祠】現存者のために立つる祠をいふ、劉氏人譜に、「宋ノ眞山先生泉州ニ知タリ、民ノ舒慘ヲ視ルコト猶

ホ己ノ休戚ノゴトシ、苟モ毫髪モ以テ人ニ及ボスベキコトアレバ、敢テ其ノ力ヲ盡サズンバアラズ、其ノ去ルヤ、邦人、公ノ爲メニ生祠ヲ立ツ、詩アリ云フ、西方又出一活佛、南極今添南壽星ト」事物紀原ニ「漢ノ於公縣吏ノ曹タリシ時、獄ヲ決スルコト平カナリシカバ、郡ノ人於公ノ爲メニ一一ヲ立ツ、一一ヲ立ツルコトハ、漢ノ世ヨリ始マル」

【生紙】（セイシ）「スキタルママノカミ」（熟紙）（ジュクシ）を見よ、

【生歯】（セイシ）ことし生れたる子、當歳子をいふ、周禮の司民に「掌レ登二萬民之數一、自レ生レ以上、皆書二于版一、司寇獻二于王一」の註に「歯ヲ生ジテ體備ル、故ニ歯ヲ以テ、ソノ年ニ名ツク」

【西施】（セイシ）孟子の疏に「一一ハ、越ノ美女、呉王夫差大ニ之ヲ幸ス、市ニ入ル毎ニ、人見ンコトヲ願フ者ハ、先ヅ金錢一文ヲ輸ル」と、また拾遺記にも「西施越ノ女所謂西子也、有二絶世之美一、越王勾踐、獻二之呉王夫差一、夫差嬖二之一、卒至レ傾レ國」とあり、淮南子に「夫容貌歯形姣骨佳、不レ待二傅粉一、芳澤而美者、西施陽文也」と、孟子に「西子蒙不潔一則人皆掩レ鼻而過レ之」

【青紫】（セイシ）漢の制にて、印綬に、公侯は紫、九卿は青を用ふ、故に公卿の義とす、漢書夏侯勝傳に「士病不レ明二經術一、經術苟明、取二一一一如一俛拾二地芥一耳」

【制使】（セイシ）勅使をいふ、唐律釋文に「天子所レ使謂二一一一」

【誓詞】（セイシ）「チカヒコトバ」正字通に「宋ノ元豐以後、神前ノ一一ヲ誓狀トイフ、今ノ俗、一一モ亦牒トイフ」

【筮仕】（ゼイシ）左傳に「畢萬筮二仕于晉一、遇二屯之比一」とあり、仕宦の吉凶を占ひ、然る後ちに仕ふる義、轉して必ずしも筮占を用ひざるも、初めて仕宦する義、品字箋には「初任之ヲ一一トイフ、筮ハ猶ホトノ如キナリ、言フココロハ、新進ノ人未ダソノ能否何若ヲトセズ、試ニ官ニ當ラバ優劣見ハル」とあり、一説とすべし、

【贅子】（ゼイシ）類書纂要に「一一ハ、子ヲシテ他人ノ家ニ出デテ贅壻タラシムルナリ」と、俗に所謂養子なり「イリムコー」

【成就】（セイシウ）就もまた成るなり「デキアガル」「ジャウジユ」とも讀む、史記呂后紀に「三年方築二長安城一、四年就レ半、五年六年一一」

【靜修】（セイシウ）靜かにおちつきて身を修むる義、諸葛亮の子を戒むる書中に「靜以修レ身儉以養レ德」

【青州從事】（セイシウジュウジ）好き酒の異名、事類全書に「晉桓溫有二主簿一、善別レ酒、好者、謂二青州從事一、惡者、謂二平原督郵一、蓋青州有二齊郡一、平原有二鬲縣一、從事謂レ到二臍下一、督郵謂レ在二臍上一」

とあり青州と平原とは地名、從事と督郵とは官名、此を以て、好き酒を青州從事といひ、惡しき酒を平原督郵といふ、さては青州に齊縣あり、齊と臍と同音なるを以て義を借り、好酒は直ちに腹臍に至るを謂ふ、從事の官は高く、青州は國大なり、好酒を貴ぶ意なり、平原は郡にて小く、督郵は官卑し、惡酒を卑めて云ふ、又平原郡に鬲縣あり、鬲と臍と同音なるを以て、惡酒は、胸臍の上に住まり、飲んで下らざるをいふなり

【青紫ヲ取ルコト芥ヲ拾フ如シ】（セイシ）公卿の位を取ること至りて易きに喩ふ「青紫」を見よ、

【正室】（セイシツ）嫡子なり、禮記文王世子の註に見ゆ、また本妻、

【凄日】（セイジツ）秋の日をいふ、纂要に「春ヲ遲日トイヒ、夏ヲ畏日トイヒ、秋ヲ一一トイヒ、冬ヲ愛日トイフ」

【正字通】（セイジツウ）十二卷、明の張自烈撰す、この書或は清の廖文英の撰となすも、實は自烈の撰、文英衡州に在りて金を以て之を購ひ、掩て己が有となして版行せしなり、首に呉源起の序あり、次に文英の自序あり、曰く梅誕生の字彙世に行はる、然れども、正韻韻會二編を墨守して折衷するところ罕なり、又未だ嘗て經史と字學とに淹通し、相發明すること無く或は眞を亂し、或は略して未だ備らず學者以て從ふところを定むる

なし、因て六書の善本歷代の字學を蒐集し、校正釐定し以て南康の白鹿洞に版行し、名づけて正字通といふと、四庫全書提要に「此書梅膺祚ノ字彙ニ視ブルニ、考證稍博シ、然レドモ徵引繁蕪頗、舛誤多シ、又喜デ許愼ノ說文ヲ排斥ス、尤モ穿鑿附會ヲ免カレズ、善本ニアラザルナリ」とあれども、亦全く捨つべきにあらず、

【生死肉骨】（セイシニクコツ）（死ヲ生シ）を見よ、

【西施ニ唐突ス】（セイシ）（唐ニ突西施ニ）書言故事に「好人ニ觸犯スルヲ一一一一トイフ、晉ノ周顗字ハ伯仁、少クシテ重名アリ、庾亮嘗テ謂ツテ曰ク、諸君咸君ヲ以テ樂廣ニ方フト（樂廣の質に比する義）顗曰ク、何ゾ乃チ無鹽ヲ刻畫シテ西施ニ唐突セシムルヤト、刻畫ハ雕琢ナリ、無鹽ハ齊ノ醜婦、西施ハ越ノ美女、周顗自ラ謙シテ我ヲ以テ樂廣ニ比スルハ、無鹽ヲ雕刻シテ西施ニ對セシムルガ如キナリト」

【成人】（セイジン）猶ほ全人といふが如し、論語に「子路問二一一一子曰若二臧武仲之知、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求之藝、文之以二禮樂一亦可レ以爲二成人矣一」また丁年に達する者の稱、嵇康の絕交書に「男歳八歳未ダ一一ニ及バズ」

【清晨】（セイシン）晨は夜のひきあけ「シノノメ」一一は、空氣の清らかなる朝をいふ、張九齡の句に「山川歷歷在二一一一」

【聖人】 その徳神明にして測られざるの號、論語に「——吾不ㇾ得ㇾ而見ㇾ之矣、得ㇾ見ㇾ君子ㇾ者斯可矣」と、管子に「——畏ㇾ微愚人畏ㇾ明」老子に「——無ㇾ常心以百姓ㇾ爲ㇾ心」淮南子に「——見ㇾ是非」若ㇾ黒白之于ㇾ目辨ㇾ」關尹子に「——師ㇾ蜂立ㇾ君臣、師ㇾ蜘蛛立ㇾ網罟」雲笈七籤に「——求ㇾ福于未ㇾ兆、絶ㇾ禍于未ㇾ有」また天子の稱とす、唐書に見ゆ、

また清酒の異名、事類全書に「徐邈字景山、仕ㇾ魏爲ㇾ尚書郎、時禁ㇾ酒而邈私飲沉醉、趙達問以ㇾ曹事、邈曰、中ㇾ聖人、達白之、太祖怒、鮮于輔進曰、醉客謂ㇾ酒清者ㇾ爲ㇾ聖人、濁者爲ㇾ賢人、邈偶醉言耳、後文帝幸ㇾ許昌、問ㇾ邈曰、頗復中ㇾ聖人否、邈曰、昔子反斃ㇾ於穀陽、御叔罰ㇾ於飲酒、臣嗜同ㇾ二子、不ㇾ能ㇾ自懲、時復中ㇾ之、帝大笑曰、名不ㇾ虚立」

【精神】 心なり、莊子に「——四達、並無ㇾ流所ㇾ不ㇾ極、上際ㇾ于天、下蟠ㇾ于地」

【精神一到何事カ成ラザラン】 志次第で、何事も成就するをいふ、朱子曰く「陽氣發處金石亦透、精神一到何事不ㇾ成」

【省心雜言】 一卷、宋の李邦獻撰す、修身處世に資する格言多し、されば、四庫全書提要にも「其書切近簡要、質而能該、於範世勵俗之道、頗有ㇾ發明」といへり、大旨學の本は正心に在り、然れども物欲の來りて之を蔽障するが故に、時時省して之を正さざるべからず、故に省心を名となすなり、

【聖人尺ノ璧ヲ貴バズシテ寸ノ陰ヲ重ンズ】（聖人不ㇾ貴ㇾ尺之璧、而重ㇾ寸之陰）文子の語、下に「時難ㇾ得易ㇾ失也」とあり、この語淮南子にも出づ、魏の文帝の典論にも「古人賤ㇾ尺璧ㇾ而重ㇾ寸陰」とあり、

【聖人ニ中テラル】（中ㇾ聖人）酒に中てられたるをいふ（聖人）を見よ、

【棲神ノ域】 父祖の墓所をいふ、書言故事に「陳堯佐自らその墓に誌して曰く、有宋潁川生堯佐字ㇾ希元、年八十二、不ㇾ爲ㇾ天、官一品、不ㇾ爲ㇾ賤、卿相納祿、不ㇾ爲ㇾ辱、祖、可歸見ㇾ父母棲神之域ㇾ矣」と、納祿とは致仕して祿を受けざるなり

【聖人ハ物ニ凝滯セズ】（聖人者不ㇾ凝ㇾ滯於ㇾ物）楚辭の漁父辭に「夫レ聖人ハ、物ニ凝滯セズ、而シテ能ク世ト推シ移ル」の註に「凝滯トハ、其ノ身ヲ困辱セザルナリ」

【西施モ醜キ所ロアリ】 賢者と雖も、亦時に過失あるを免れざるに喩ふ、淮南子に「嫫母有ㇾ所ㇾ美、西施有ㇾ所ㇾ醜」とあり、嫫母は、古の醜き女なれども、行の貞正なるは是れ美き所ろあるなり、西施は古の美女なれど

も行、必ずしも貞正ならず、是れ醜き所ろあるなり、

【精舍】（精舍）を見よ、

【櫬車相望ム】 櫬は小棺なり、軍に從ひて死する者は、櫬を以て其の喪を送る、櫬を載する車、道に相望むは、戰死者の多きをいふ、漢書韓安傳に「士卒傷死、中國——」

【青簟笠】 あをだけの笠（簟笠）を見よ、

【青蛇ノ劍】 太平記卷四に見ゆ、萬花谷三十三に「龜文龍藻白虹——屢鏤步光皆劍名云云」とあり、ただ屢字は、他の書に多く屬に作る、

【星宿海】 黄河の源なり、宋史河渠志に「至元二十七年、世祖皇帝命ㇾ學士蒲察篤實、西窮ㇾ河源、今西番朶甘思南鄙、曰——者、其源也」

【醒酒石】 唐餘錄に「李德裕於ㇾ平泉別墅ㇾ採ㇾ天下珍木惟石爲ㇾ園池之玩ㇾ有——」、德裕尤所ㇾ寶惜、醉即踞之」

【青春】 春をいふ、春は東方、その色は青し故にいふ、楚辭の大招に出づ、

【制書】 「ミコトノリ」なり、蘇氏の演義に「制ハ禁ナリ、斷ナリ、君上、人ヲ用フル、或ハ制斷シテ之ヲ行ヒ、或ハ禁制シテ之ヲ止ム」とあり、文體明辨に「按ズルニ顏師古曰ク、天子ノ言、一ヲ制書トイフ、制度ヲ爲スノ命ヲ

【齊書】 五十九卷、梁の蕭子顯撰す、子顯は齊の高帝の孫なり、本紀八卷、志十一卷、列傳四十卷に分つ、

【世繩】 世の中の「キヅナ」世網・世累に同し、魏書の註に「羈ㇾ絆於——」

【徂徠】 おそれあわてる、王褒の句に「百姓——無ㇾ所ㇾ措ㇾ其手足」怔忪に通ず、

【怔忪】 驚きおそるゝ貌、四子講德論に「秦時百姓——」

【正色】 禮記の玉藻に「衣正色、裳閒色」註に「正色トハ、青・赤・黄・白・黒、五方ノ正色ナリ」

【聲色】 音聲容色の義、轉じて淫聲女色の義に用ふ、書經に「惟王不ㇾ邇ㇾ——」「不ㇾ殖ㇾ貨利」

【生芻】 刈りて未だ枯れざる「マコモ」詩經に「——一束其人如ㇾ玉」

【井井】 經畫端整の貌、荀子儒效に「——分其有ㇾ條理也」また往來連屬の貌、易の井卦に「往來——」

【栖栖】 いそがしき貌、論語に「丘何爲是——者與」丘は孔子の名、

【清世】 清く平かに治る世、呂覽に「古之——」

【清靜】 清くして靜かなるなり、また清淨に通じ用ふ、

即ち道家者流の無爲恬淡なる心をいふ、

【凄凄】（セイセイ）秋風などのさびしく吹く貌、詩經の四月に「秋日ー ー」すべてすさまじき貌に用ふ、

【菁菁】（セイセイ）青青と盛んに茂る貌、詩經に「ー ー者莪」また淇奥に「綠竹ー ー」

【萋萋】（セイセイ）草の盛んなる貌、詩經の周南に「維葉ー ー」また蒹葭に「蒹葭ー ー」

【濟濟】（セイセイ）衆盛の貌、一解に威儀多きなりと、詩の大雅文王篇に「ー ー多士、文王以寧」

【整齊】（セイセイ）軍隊などの行列をそろへる義、呂覽の簡選に「行陣ー ー」

【噴臍】（セイセイ）後悔するも及ばざるをいふ、臍ヲ噬ムを見よ、

【贅壻】（セイセイ）贅は「コブ」なり、貧くして妻を娶る能はず、婦家に就きて壻となる者をいふ、人の「コブ」の如く、餘剩物の義なり、史記滑稽傳に「淳于髡者、齊之ー ー也」また贅子ともいふ「イリムコ」

【西清古鑑】（セイセイ）四十卷、附錄錢錄十六卷、清の乾隆十四年梁詩正等勅を奉じて撰す、詩正字は養仲、蕉林と號す、錢塘の人、雍正八年の進士、この書三代以上古器の圖式、宣和博古圖呂氏の考古圖より外、その記載極めて少し、乾隆帝内府儲藏の古器を表章せんと欲し、梁詩正等に命じ博古圖に倣ひ、三代より唐に至る古器の形模を精繪し款識を備摹し以て此の書を成す、錢錄は上伏羲より下元代に及ぶまでの貨幣の輪郭肉好廣狹長短の制を摹せり、

【清聖濁賢】（セイセイ）清聖は清酒をいひ、濁賢は濁酒をいふ、魏志徐邈傳に「醉客謂ヒ酒清者ヲ爲シ聖人ト、濁者ヲ爲シ賢人ト」

【正正ノ旗、堂堂ノ陣】（セイセイ）孫子の軍爭篇に「無ク邀正正之旗、無ク擊堂堂之陣ヲ」の直解に「正正トハ旌旗ノ整治スルナリ、旌旗ノ整治セル豈ニ之ヲ邀フルベケンヤ、之ヲ邀フレバ反テ彼レノ爲メニ乘ゼラル、堂堂トハ、行陣ノ盛大ナリ、行陣ノ盛大ナル、豈之ヲ擊ツベケンヤ之ヲ擊タバ反テ彼レノ爲メニ勝タル」とあり、

【制詔】（セイセイ）制とは帝王制度の命なり、詔とは告令なり、天子の命令を稱す、史記秦紀に「命爲ル制、令爲ル詔」

【聖節】（セイセツ）天子の「ゴタンジャウビ」大學衍義補に「玄宗、帝生ルルノ日ヲ以テ千秋節トナス、此レ後世ノ人君始メテ生ルルノ日ヲ以テ節トナシテ表賀スルノ始ナリ、前代ニ在ツテハ、一君毎ニ一節トナス、宋ノ太祖ハ長春節トナシ、太宗ハ乾明節トナスノ類ナリ、我ガ朝ハ列聖一ニ萬壽節ヲ以テ名トナス、未ダ易フルコトアラザルナリ」と、聖旦ともいふ、

【精切】（セイセツ）くはしくして確かなる義、元史に「布置謹嚴、援據ー ー」

【征繕】（セイゼン）征は賦、繕は補なり、賦稅を富まして、甲兵を補ひ治むる義なり、國語に「不ル憚ー ー以テ立ツ孺子ヲ」

【盛饌】（セイセン）人を饗することの盛なるなり、論語に「有ー ー必變ジ色而作」

【青氈】（セイセン）家の舊物といふ義に用ふ、晉書王獻之傳に「獻之夜臥ス齋中ニ、而有ル偸人、入ル其室ニ、盜ム物都盡、獻之徐ニ曰ク、偸兒ヘ、ー ー我家舊物可シ特置ケ之ヲ、群偸驚走ル」とあるに本づく、

【牲牷】（セイゼン）「イケニヘ」牲は牛羊豕なり、牷は牛の純色にして體全く具るをいふ、左傳桓六年に「吾ー ー肥腯」

【聖善】（セイゼン）母を稱していふ、詩の邶風に「凱風自ル南ー吹ク彼棘薪ヲ、母氏聖善ナリ、我無シ令人ニ」の註に「聖ハ叡、令ハ善ナリ、棘以テ薪ト爲ス可キトキハ、則チ材ノ成レルナリ、然レドモ美材ニ非ズ、故ニ以テ子ノ壯大ニシテ善無キヲ興ズルナリ、復タ聖善ヲ以テ其ノ母ヲ稱シ、而シテ自ラ令人ナシトイフ、其ノ自ラ責ムルヤ深シ」と、北夢瑣言に「相國ー ー遇ル疾苦ニ」

【清楚】（セイソ）清くサッパリしたる義、楚は鮮なり、納還ー ーは借財を「キレイ」に「ハラヒカヘス」義なり、

【凄楚】（セイソ）心にかなしみて苦痛を感ずること、李子卿聽ル蟲ー ー賦に「志苦者易ニ ー ー」

【盛唐】（セイタウ）唐の玄宗の開元元年より代宗の大曆の初までの稱、開元天寶の際は、唐代文學の極盛の時にして、李白、杜甫の二家を始め、王維、岑參等輩出し詩學最盛の時代とす、

【青綸甲】（セイダウカフ）崩黄威の鎧なり、北轅錄に「甲士皆ー ー ー居ル左ニ、紅綸甲居ル右ニ」とあり、綸は「クミヒモ」條に同じ、

【制吒迦】（セイタカ）不動明王の夾侍なり、頭に天衣をまとひ、左に三鈷を執り、右に金剛棒を杖く、

【聖澤】（セイタク）ひじりの「メグミ」天子の恩をいふ、曹植の句に「沐浴ー ーニ」

【聖旦】（セイタン）天子の「ゴタンジャウビ」明律に見ゆ（聖節）を見よ、

【聖斷】（セイダン）天子の御決斷（キリモリ）をいふ、貴耳集に「大臣ノ去留出レ自ヒー ーニ宸斷、聖擇に同じ、

【清談ノ露ヤウヤウ繁キ程ニ云云】（セイダンツユ）駿臺雜話「月は世世の形見」に見ゆ、秋夜のやうやうふけゆきて草葉におく露のしげくなれるを、清雅なる談話の次第に濃かになるにかけていふ、杜甫の詩に「清談玉露繁」とあるなどによるか、

【井地】（セイチ）井田に同じ、孟子に「使畢戦問（チンデ）ヘ——（チ）ニ」

【生知】（セイチ）生れながらにして知る者なり、論語に「生（レナガラ）而知（ニシテ）之者上也」

【棲遅】（セイチ）詩經衡門に「衡門之下可（シダ）以棲遅（ス）」の註に「棲遅ハ遊息ナリ」「ユッタリトアソブ」衡門は「カブキモン」をいふ淺陋なりと雖も、しかも亦以て遊息すべしと、遅は「タダズム」の義、

【掣肘】（セイチウ）類書纂要に「肘動カサント欲シテ、乏ヲ掣ク、言フココロハ、人事ヲ作サント欲シテ、行フコト能ハザルナリ」と、成語考に「人ノ牽制ヲ受クルヲイフ」と、家語に「宓子賤、字ハ不齊、魯ニ仕ヘテ單父ノ令トナル、君ノ、讒人ヲ聽用シテ、己ヲシテ其ノ政ヲ行フコトヲ得ザラシムルヲ恐レテ、故ラニ君ノ近吏二人ヲ請ヒテ、與ニ俱ニ官ニ至ル、二吏ヲシテ書セシム、輒チ其ノ肘ヲ掣ク、書善カラザレバ、則チ從ツテ之ヲ怒ル、吏患ヘテ辭シテ魯ニ歸ル、子賤曰ク、子ガ書甚ダ善カラズ、子勉メテ歸ラバ、君ニ報ジティヘ、宓子臣ヲシテ書セシメテ、而シテ臣ガ肘ヲ掣ク、書惡シケレバ、又臣ヲ怒ルト、邑ノ吏皆之ヲ笑フ、君以テ孔子ニ問フ、孔子曰ク、不齊ハ君子ナリ、其ノ材任覇王ノ佐ナリ、節ヲ屈シテ單父ヲ治メテ、以テ自ラ試ム、意フニ其レ此ヲ以テ諫ムルカト、公悟ツテ大息ス」と、說文に「肘ハ臂節（ヒヂブシ）ナリ」

【井中星】（セイチウ）ヲ視ル】尸子に「自井中視星、所見不過數星、自丘上以望、則見始多也、私心井中也、公心丘上也」人私心に蔽はるるときは見るところ狹きに喩ふ、

【成竹】（セイチク）豫め考案を定むる義、蘇軾の畫竹記に「畫竹必先得成竹於胸中」と、成算の義に轉用す、晁補之の詩に「與可畫竹時、胸中有一一」と、與可は文與可とて宋の有名なる畫人、竹を畫くに妙なり

【青女】（セイヂョ）霜の神をいふ、淮南子の天文訓に「青女乃出以降霜雪」の註に「青女ハ天神、青蛾玉女霜雪ヲ主ル」

【靜女】（セイヂョ）詩經の一一篇に「一一其姝」靜は閑雅の意、また「ミサヲ」正しき義、姝は美色なり、

【齊女】（セイヂョ）蟬の異名（蟬）を見よ、

【青塚】（セイチョウ）大明一統志に「大同府王昭君墓、在古豐州西六十里、地多白草、此塚獨青、故名一一」

【青帝】（セイテイ）春の神をいふ、尚書緯に「春爲東帝、又爲一一」

【井底ノ蛙】（セイテイ）見る所ろ小なるに喩ふ、莊子の秋水篇に「井蛙ニハ以テ海ヲ語ルベカラザルハ、虛ニ拘スレバナリ、夏蟲ニハ以テ氷ヲ語ルベカラザルハ、時ニ篤ケレバナリ、曲士ニハ以テ道ヲ語ルベカラザルハ、敎ニ束ネラルレバナリ」とあり、虛は、井中の空なり、曲士は、鄉曲の士なり、後漢書馬援傳に「馬援隗囂ニ謂ッテ曰ク、子陽ハ井底ノ蛙ノミ、而シテ妄リニ自ラ尊大ニス」とあり、子陽は、公孫述の字、

【青鳥ヲ投ズ】（セイテウ）太平記卷二十に見ゆ、漢武故事に「七月七日、忽有青鳥飛集殿前、東方朔曰、此西王母欲來、有頃王母至、二青鳥夾侍王母傍」と、これによりて使者の事にも、書簡の義にも用ふ、

【井田】（セイデン）周の世の田制なり、孟子に「方里而井、井九百畝、其中爲公田、八家皆私百畝、同養公田」

【星傳】（セイデン）火急を要する宿驛の乘馬なり、權德輿の句に「一一指湘江」飛傳といふに同じ、

【生徒】（セイト）弟子なり「ヲシヘゴ」後漢書寇恂傳に「恂素好學、乃修鄉校、敎生徒、聘能爲左氏春秋者、親受學焉」また晉書賀循傳に「朝廷嘉其能、令敎育一一」

【性度】（セイド）性質に同じ「ウマレツキ」吳志に「一一恢廓」

【成童】（セイドウ）「コドモ」の十五歲になりしものの稱、後漢書李固傳の注に「一一年十五也」

【齊東野語】（セイトウヤゴ）二十卷、宋の周密撰す、密字は公謹、湖州の人、淳祐中、義烏令に官し、宋の亡後仕を求めず、家に終る、この書錄するところ、宋史の闕を補ふに足るもの少からず、和版あり、

【齊東野人ノ語】（セイトウヤジン）妄誕の說なり、孟子に「此非君子之言、齊東野人之語也」齊國の東部に居る野人の妄說にして信ずるに足らざるをいふ、支那の書、妄說には多く齊人を引き、愚人には多く宋人を引けり、

【盛德ノ士ハ亂世ノ疏ンズルトコロナリ】說苑に「美女者、醜婦之仇也、盛德之士、亂世所疏也、正直之行、邪枉所憎（ニクム）也」

【齊ニ在リテハ太史ノ簡】（セイ）（在）齊太史簡）文天祥正氣の歌の中の一句、春秋左氏傳に「齊侯ノ弑セラレシトキ其ノ大夫崔杼賊ヲ討ゼズ、太史自ラ崔杼君ヲ弑スト書ス、崔杼怒リテ之ヲ殺ス、其ノ弟嗣ギテ書シ、而シテ殺サルル者二人、其ノ弟又書ス、乃之ヲ舍ス、南史氏、太史盡ク死スト聞キ、自ラ之ヲ書セント欲シ、簡ヲ執リテ以テ往ク、途ニシテ既ニ書セシト聞キテ乃チ還リ

【靜、熱ニ勝ツ】（セイネツ）心を淸靜にすれば熱にうちかつをいふ、老子に「躁勝寒、靜勝熱、淸靜爲天下正」

【靑年】（セイネン）わが國にて少年の義に用ふれども、典據を知らず、蓋し詩經に「靑靑子衿」とありて少年を靑衿といふより來りたるものなるべし、靑は春の色なり、故に少年は靑色の衿をつくるなり、（靑衿）を參看せよ、

【盛年重ネテ來ラズ】（盛年不重來）吾の陶淵明の雜詩十二首の第一にある句なり、曰く「人生無根蔕、飄如陌上塵、分散逐風轉、此已非常身、落地爲兄弟、何必骨肉親、得歡當作樂、斗酒聚比鄰、——、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人」

【生年百ニ滿タズ、常ニ千歲ノ憂ヲ懷ク】（生年不滿百、常懷千歲憂）文選の古詩の句なり、人生百年に滿たずして、千歲の計を營み常に以て憂とするをいふ、

【生ノ樂シキヲ知リテ、未ダ生ノ苦シキヲ知ラズ】列子に「人胥知生之樂、未知生之苦、知老之憊、未知老之佚、知死之惡、未知死之息」也」

【性ハ相近シ】（性相近シ）を見よ、

【青ハ藍ヨリ出ヅ】學問して師より勝るをいふ（青ハ藍）を見よ、

【生ハ寄ナリ死ハ歸ナリ】人の世に在るは、百年に過ぎず、故に寄といふ、死滅は、猶ほ故土に歸るが如し、故に歸といふ淮南子に「生寄也、死歸也、何足以滑和」滑は亂なり、

【西伯羑里ニ囚ハル】（西伯囚羑里）史記の周本紀に「崇侯虎、西伯ヲ殷紂ニ譖シテ曰ク、西伯善ヲ積ミ德ヲ累ネ、諸侯皆之ニ嚮フ、將ニ帝ニ利ナラザラントスト、帝紂乃チ西伯ヲ羑里ニ囚フ、閎夭ノ徒之ヲ患ヘ、乃チ有莘氏ノ美女、驪戎ノ文馬、有熊ノ九駟他ノ奇怪ノ物ヲ求メ、殷ノ嬖臣費仲ニ因リテ之ヲ紂ニ獻ズ、紂大ニ說ビテ曰ク、コノ一物以テ西伯ヲ釋スニ足ル、況ヤ其ノ多キヲヤト、乃チ西伯ヲ赦ス」とあり、漢書地理志に「羑里ハ地名亳州ニ在リ」と、一說に殷獄に名つけて羑里といふと、

【清白宰相】 淵鑑類函卷の六十四に「宋慶曆中杜衍爲相、苞苴貨殖、不敢到門、時號——」

【清白吏子孫】 事文類聚後集に「楊震性廉ナリ、子孫常ニ蔬食歩行ス、或人產業ヲ開カシメント欲ス震曰ク、後世ヲシテ稱シテ清白吏ノ子孫タラシム 此ヲ以テ之ニ遺ス、亦厚カラズヤト」また「靈帝楊震ノ孫奇ニ謂ツテ曰ク、卿ハ強項、眞ニ楊震ノ子孫ナリト」

【靜ハ熱ニ勝ツ】 心を靜に持つときは、熱氣にうち勝つことを得るをいふ、老子に「躁勝寒、靜勝熱」

【聖ハ益、聖ニシテ愚ハ益、愚ナリ】（聖益聖愚益愚）韓愈の師說に「古ノ聖人、ソノ人ニ出ルヤ遠シ、猶ホ且ツ師ニ從ツテ問フ、今ノ衆人ハ、其ノ聖人ニ下ルヤ亦遠シ、而シテ師ニ學ブコトヲ恥ヅ、是故ニ、聖ハ益、聖ニシテ愚ハ益、愚ナリ」聖人ノ聖タル所以、愚人ノ愚タル所以ハ、ソレ皆此ニ出ヅルカ」

【世祿】 三卷、宋の袁采著す、采字は君載、宋の信安の人、進士の第に登り、邑宰となり、廉明剛直を以て稱せらる、四庫全書提要に「其ノ書、睦親、處己、治家ノ三門ニ分ツ、立身處世ノ道ニ於テ、反覆詳盡ス、文字ハ俚ニ近シト雖モ、末俗ヲ砥礪スル所以ノ者、極メテ篤摯ト爲ス」といへ

【青ハ藍ヨリ出デテ藍ヨリモ青シ】（青ハ藍ヨリ）を見よ、

【成美】 誘掖奬勵して人の美を成さしむるなり（君子ハ人ノ）を見よ、

【濟美】（世其ノ美）を見よ、

【齊眉ノ禮】 夫に敬ひ事ふる禮をいふ（案ヲ擧ゲテ）を見よ、

【蓑裴貝錦】 詩經の小雅に「蓑兮裴兮、成是貝錦、彼譖人者、亦已太甚」とあり、蓑裴は、小文の貌、また文章相錯るをいふ貝は、介蟲、文彩あり、錦に似たり、蓑裴の形に因り、之を文りて貝錦を成すとの意にして、讒人、人の小過に因り、飾りて大罪を成すに比す、一說に、貝錦は錦なり、其の文貝の如し、故にいふと、李白の詩に、「蓑裴暗成貝錦粲然」

【世父】 伯父をいふ、爾雅に「父之昆弟、先生爲——、後生爲叔父」世とは嫡長にして統を繼ぐ者、漢書王莽傳に「——大將軍鳳病」釋名に「父ノ兄ヲ——トイヒ、又伯父トイフ、伯父ノ弟ヲ仲父トイヒ、仲父ノ弟ヲ叔父トイヒ、叔父ノ弟ヲ季父トイフ」

【征夫】 道を行く人なり、行人に同じ、國語の晉語に「幸莘——」

【青蚨】 錢の異名、搜神記に「青蚨ハ蟬ニ似テ稍大ナリ、子ヲ草閒ニ生ムコト蠶ノ如シ、其ノ子ヲ取レバ母即チ飛ビ來ル、母ノ血ヲ以テ錢八十一文ニ塗リ、子ノ血ヲ以テ錢八十一文ニ塗リ、物ヲ市フ毎ニ、或ハ先ヅ母錢ヲ用ヒ、或ハ先ヅ子錢ヲ用フレバ、皆マタ飛ビ歸リ、輪環止ムコトナシ」

【凄風】 寒くしてすさまじき風、左傳昭四年に「春無——」

【秋無苦雨】 また西南の風をいふ、呂覽有始に見ゆ、

【成風ノ功】 太平記卷二十四に見ゆ、莊子の「運斤成風」の語に取りて斧斤の功の意に用ひしならん、

【清風朗月一錢ノ買フヲ用ヒズ】 風月を賞する快樂は、一錢をも費さずして之を受け得るをいふ、李白の襄陽曲に「清風朗月不用一錢買、玉山自倒非人推」また赤壁賦に「且夫天地之間、物各有主、苟非吾之所有、

雖一毫而莫取、惟江上之清風與山閒之明月、耳得之而爲聲、目遇之而成色、取之無禁、用之不竭、是造物者之無盡藏也、而吾與子之所共適」とあるも、意は同じ、

【聖武記】 十四卷、清の魏源撰す、源字は默深、湖南邵陽縣の人、道光二十四年の進士、この書清の開國より道光に至るまでの清主の武功を記す、

【聲聞情ニ過グ】 聲聞は名譽なり、情は實なり、名譽の實に過ぐるをいふ、孟子に「聲聞過情、君子恥之」

【清廟】 左傳の桓公二年に「清廟茅屋」とありて、註に「廟ハ宗廟ナリ、清トハ肅然トシテ清淨ノ意」とあり、李商隱の韓碑の詩に「點竄堯典舜典字、塗改一一生民詩」一一は周の文王の德をほめたたへたる詩の名、

【聖謨】 謨は汎く議して定むる「ハカリゴト」一一は極めてすぐれたる謀策にて多く帝王の「ハカリゴト」に用ふ、書經に「大禹謨」皐陶謨あり、また書經に「一一洋洋、嘉言孔彰」とあり、

【青盲】 「アキメクラ」窪苑雜記に「托一一不仕」と云ふの義、矇は眸子あるも見ることなきをいふ、

【世網】 世事の係累に喩へていふ、卓氏藻林に「世網ハ、事ノ罥纏スルニ喩フ」文選に「世網罥我身」世網に同じ、

【世味】 世の中に處する「アヂ」また人情、境遇などにいふ、語、陸游の句に「一一年來薄似紗」

【齊民】 平民に同じ、民は齊等貴賤なし、故にいふ、史記平準書に「一一無藏蓋」蓋藏は蓋ひ藏むべき物、

【正名】 論語子路篇に「子路曰、衞君待子而爲政、子將奚先、子曰必也正名乎」とあり、名は實の賓、實は名の主たり、その名あれば必ずその實なかるべからず、故に名實を相稱はしむるを一一といふ、

【性命】 易の說卦に「窮理盡性至於命」とあるに原づく、宋儒學問の大綱たり、程子曰く「天ノ付與スル之ヲ命トイフ、之ヲ稟ケテ我ニ在ル之ヲ性トイフ、事物ニ見ハルル之ヲ理トイフ、理ヤ性ヤ命ヤ、三者未ダ嘗テ異ルコアラズ」と、易の乾卦に「乾道變化、各正一一」疏に「命ハ人ノ稟受スルトコロ」とあり、また一一は生命に通じて「イノチ」の義にも用ふ、

【俗名】 さかんなる名譽をいふ、後漢書黃瓊傳に「一一之下、其實輔副名之盛んなる程に、その實のそはざるをいふ、

【清明】 寒食の節の後、雨日を清明の節といふ、鄴中記に「幷州俗、冬至後百五日爲介子推斷火冷食、謂之寒食」とありて、この日は終日火を用ひざるなり、詩經豳風朝事に「清明前兩日、謂之寒食」とあり、孝經緯に「春分後十五日、斗乙ヲ指スヲ清明ト爲ス」とあり、六帖に「清明ハ三月ノ節桐始メテ華サク」

【聲名稍減ズ】 名譽が前よりはややへりたるをいふ、

【册府元龜】 「蘇瓌牧人時、稍「良吏、及居「相位、一一」

【聖門人物志】 十二卷、明の郭子章撰す、子章字は相奎、隆慶五年の進士、官兵部尚書に至る、この書は孔子の門に遊ぶ者と、之に私淑して孔廟に從祀せらるる者とを輯めて之が小傳を作り、論贊を附せり、卷末に明代の會典祀儀釋菜等の事を附記せり、

【西門豹】 萬姓統譜に「戰國魏鄴令、鄴俗素信巫覡、歲爲河伯娶婦、選良民處女、投河中、豹問知其害曰、今歲娶婦幸來告、吾亦送之、至見其女、豹曰醜、煩大巫入報、即投之河中、又繼投二人、群巫驚懼乞命、從此遂止、因開其河、爲十二渠以溉田」とあり、詳しくは史記の循吏傳、漢書溝洫志を見よ、

【青陽】 春をいふ、爾雅に「春爲青陽」の註に「氣青クシテ溫陽ナリ」「夏爲朱明」の註に「氣赤クシテ光明ナリ」「秋爲白藏」の註に「氣白クシテ收藏ス」「冬爲玄英」の註に「氣黑クシテ清英ナリ」

【清揚】 眉上廣くして、眼清きなり、詩經に「一一婉兮」また揚は眉の上下をもすべていふ、

【聖陽花】 茶の異名、酒確類書に「雙林大士、自往蒙頂、結庵種茶、凡三年、得絕佳者號一一、持歸供獻」

【青蠅】 群小に喩ふ、詩の小雅に「營營一一止于樊、豈弟君子無信讒言」とあり 營營は往來して飛ぶ貌、樊は藩なり「マガキ」青蠅藩籬に群がり飛び、其の聲囂くして、人聽を亂る、以て群小の讒言を進め 主聽を蔽ふに喩ふ、箋に「蠅ノ蟲タル白ヲ汚シ黑カラシメ、黑ヲ汚シ白カラシム、佞人ノ善惡ヲ變亂スルニ喩フ」とあり、陳子昂の詩に「一一一相點、白璧遂成冤」蒼蠅を見よ、

【星繖】 星の如く多く列るをいふ、西都賦に「列卒周匝、一一雲布」

【晴嵐】 嵐は山の氣の蒸してうるほへるもの、一一は晴天の日、山に起る一種の氣をいふ、鄭谷の句に「一一染ム近畿」

【性理】 宋儒の性命理氣の學をいふ、

【性理大全】 七十卷、明の永樂十三年に、胡廣等勅を奉じて撰す、廣字は光大、吉水の人、建文二年の進士、成祖の朝、侍講より文淵閣大學士に進む、この書二十五卷まては周子太極圖說一卷通書一卷、張子西銘一卷、正

蒙二卷、邵子皇極經世書七卷、朱子易學啓蒙四卷、家禮四卷、蔡元定律呂新書二卷、蔡沉洪範皇極內篇二卷を收む二十六卷以下は、理氣、鬼神性理等の十三目に分ちて群書を採錄すれども、統紀なきを以て、康熙帝その要を提げて性理精義を撰せり、

【聲律】 耆舊續聞に「四聲分韻ハ沉約ニ始マル 唐ニ至リテ、乃チ一一ヲ以テ士ヲ取ル、則チ今ノ律賦コレナリ、凡ソ表啓ノ類、近代(宋)ニ至リテ一一尤モ嚴ナリ、或ハ平仄ニ乖ケバ 則チ之ヲ失黏トイフ、然レドモ文人奇ヲ出ス、時ニコノ格ニ拘セザル者アリ」

【勢利ノ交】 權勢財利の爲めに交るをいふ、文中子に「勢ヲ以テ交ハル者ハ、勢傾クトキハ則チ絕ユ、利ヲ以テ交ハル者ハ 利窮スレバ則チ敗ル、君子ハ與セザルナリ」と君子は勢利の人と相交はらずして、但だ道義の人と相交ほるをいふ、

【青龍白虎湯】 既北 詩鈔に「儒餐自有窮奢處、白虎青龍一口呑」の註に「俗ニ豆腐青菜ヲ以テ、一一ヲ爲ス」

【生靈】 生民に同じ、晉書慕容盛傳に「一一仰キ其德ヲ、四海歸ス其仁ニ」

【清泠】 きよらかなる義、王褒の句に「朝露一一而隕其側」分」又水の名、張衡の西京賦に「耕父揚光於一一之淵」また風の聲、宋玉の風賦に「清清泠泠愈ス病析醒」

【青藜杖】 青き「アカザ」の杖藜杖を見よ、

【青帘】 「サカヤ」にたつる、めじるしの旗(酒帘)を見よ、

【清漣】 きよらかなる「サザナミ」謝靈運の句に「綠篠媚一一ニ」

【青樓】 遊女屋をいふ、梁の劉邈の詩に「倡女不勝愁、結束下青樓」また曹子建の樂府美女篇に「借問女安居、乃在城南端、青樓臨大路、高門結重關、容華耀朝日」また翠雨軒詩話に曰く「齊武帝于興光樓上施青漆、謂之青樓、是青樓乃帝王之居、故ニ曹植ノ詩ニ、青樓臨大路、駱賓王ノ詩ニ大道青樓十二重トアルハ言其華也、今以妓居爲青樓誤矣、云云」また同書に梁劉邈詩に倡女不勝愁、結束下青樓を以て殆ど妓居を稱して青樓となすの始めとし青樓の事に就きての一義となせり、按ずるに青翠紅等の文字皆物の奇麗なる事に用ふるを常とせり、故に婦人の居所を稱するより、轉じ來て終に妓樓を一一といふこと出來しと見ゆ、唐詩に「閨中少婦不知愁、春日凝粧上翠樓」の翠の字も同じ、

【成王桐ノ葉ヲ玉トイヒテ叔虞ニ賜ハス】 (天子ニ戲れを言ふを見よ、

【西王母】 列仙傳一に「一一、即龜臺金母也、姓緱、諱回、字婉妗、一字太虛、漢元封元年、降武帝殿、進蟠桃七枚於帝、自食其二、帝欲留核母曰、此桃非世間所有、三千年一實耳云云」

【篤】 初學記に「風俗通ニ曰ク、舜一ヲ作ル、ソノ形參差トシテ以テ鳳翼ニ象ドル、白虎通ニ曰ク、一ハ中呂ノ氣ナリ、易通卦驗ニ曰ク、一ハ夏至ノ樂ナリ、五經通義ニ曰ク、竹ヲ編シ之ヲ爲ル、長尺有五寸、博雅ニ曰ク、一ノ大ナル者ハ二十三管、底ナシ、小ナル者ハ十管、底アリ、三禮圖ニ曰ク、底ナキ者之ヲ洞簫トイフ(中略)古ノ善ク一ヲ吹ク者秦女 弄玉 仙人一史、漢ノ元帝靈帝アリ」

【小遣】 小便なり、漢書東方朔傳に「醉入殿中、一一殿上ニ」

【招隱ノ詩】 左太沖の作るところ二首、文選卷の二十二に出づ、劉良曰く「天下ノ溷濁ヲ思苦ス、故ニ隱者ヲ招尋シ、退イテ仕ヘザランコトヲ欲ス」と、その詩の首に曰く「杖策招隱士、荒塗橫古今、躡穴無結構、丘中有鳴琴、白雪停陰岡、丹葩曜陽林、石泉漱瓊瑤、纖鱗或浮沈、非必絲與竹、山水有清音云云」世說王子猷戴安道を訪ふの條にも「詠左思招隱詩「忽憶戴安道」とあり、

【招搖】 星の「ヲサヌス」をいふ、淮南子時則に「一一指寅」また「サマヨフ」貌、文選甘泉賦に「徘徊一一」

【消搖】 逍遙に同じ、寬縱自適の貌、禮の檀弓に「一一於門ニ」

【逍遙】 あちらこちらとさまよひ歩くさま、說文に「一一ハ猶ホ翱翔ノ如シ」と、詩の鄭風に「河上乎一一」離騷に「一一以相羊」また消搖に作り、また徜徉に作る、同じ、

【蕭何】 沛の豐の人、初め沛の主吏椽たり、高祖亭長たり、何常に之を左右す、從つて關に入るに及び、獨り先づ秦の律令及び圖書を收めて之を藏す、漢楚の雄を爭ふや、何常に關中を守り、饋餉を轉給し、軍中乏しきことなからしむ、天下既に定り功第一を以て鄭侯に封ぜらる、開國の名相たり、卒して文終と諡せらる、

【紹介】 「ナカダチ」となりて、ひき合せするをいふ、史記の鄒魯列傳に「平原君曰、勝請爲紹介、而見之於先生」の註に「一一ハ猶ホ媒介ノゴトシ、且ツ禮ニ賓至ルトキハ、必ズ介ニ因リテ以テ、辭ヲ傳フ、紹ハ繼グナリ」

【少艾】 艾は美好なり、容色美好の少年少女をいふ、孟子に「知好色則慕一一ニ

【邵康節】（邵雍）を見よ、

【小學】六卷、宋朱熹編す、その實は門人劉子澄の編、古來の嘉言善行を類輯して、內外二篇となし、童蒙の讀本とす、貝原篤信監定の小學集疏參考とすべし、

【小學紺珠】十卷、宋の王應麟撰す、天道律曆地理人倫性理人事藝文歷代聖賢名臣氏族職官治道制度器用徵戒動植の十七類に分ち、名數によりて編次し小學に便せり、和版あり、

【宵旰】宵衣旰食の略、あさはやく起きて衣服をつけ、日くれて後に食膳に向ふ、天子の政に勤勉したまふに用ふ、旰は晩なり、漢書張湯傳に「日旰天子忘レ食」とあり、また唐書に「無二一之憂一」

【小韓子】明史に「方孝孺少クシテ聰穎絕倫ナリ、雙眸烱烱トシテ電ノ如シ、書ヲ讀ムニ、一目十行竝ビ下ル、髫齔ノ時ニ方リテ、既ニ善ク文ヲ屬ス、鄉人稱シテ小韓子トス、學士宋濂其ノ文ヲ見テ、之ヲ薦メテ京ニ至ラシム、太祖召シテ親シク文ヲ試ミ、太子ニ謂ヒテ曰ク、此レ異人ナリ留メテ以テ汝ヲ輔ケシムト、燕王ノ簒立スルニ及ビテ、屈セズシテ遂ニ節ニ死ス（方孝孺）を參看せよ、

【招魂】指麾に同じ、サシマネク荀子の成相篇に「呂尙——般民懷」

【銷金帳下】黃金を銷費し盡して、惜まざる場所の義、遊女屋等に用ふ、書言故事に「宋ノ陶學士穀、妾アリ、本黨大尉進ノ家姬ナリ、一日雪フル、穀雪水ヲ取リテ團茶ヲ烹ル、妾ヲ顧ミテ曰ク、黨ノ家ニ此ノ景アリヤ否ヤト、曰ク、彼レ粗人安ゾ此ノ景ヲ識ラン、但ダ能ク銷金帳下ニ於テ、淺ク斟ミ、低ク唱ヘ、羊羔美酒ヲ飮ムノミト、穀大ニ慚ヅ」

【少君】（鮑宣ノ）を見よ、

【昭回】昭は光、回は轉なり、其の光天に隨つて轉ずるをいふ、詩の大雅に「倬彼雲漢、——于天」倬は著なり、大なり、また蘇軾の韓文公廟碑に「草木衣被——光」

【焦竑】字は弱侯、明の南京江寧の人、萬曆十七年、殿試第一を以て、翰林修撰に官す、萬曆四十八年卒す、年八十、著すところ、國史經籍志・老莊翼等あり

【小過ヲユルシテ賢才ヲ見ルベシ】十訓抄第一に見ゆ、論語子路篇に「仲弓爲二季氏宰一、問レ政、子曰、先二有司一赦二小過一、舉二賢才一」と、有司は衆職なり、宰は衆職を兼ぬれども、事必ず先づ衆職に爲さしめ、而して後ちその成功を考ふるときは己勞せずして事皆擧るなり「見ル」とは察して知り用ふる意、

【韶濩】（——）を見よ、

【蕭關】秦の北關なり、平凉府鎭原縣に在り、史記に「漢文帝ノ時、匈奴蕭關ニ入ル」とあるは即ち是れなり、長安を距ること千里餘、

【小奚】奚は「シモベ」——は年わかき「シモベ」唐書に「小奚奴背二古錦囊一」

【小經】易・書・春秋公羊・穀梁傳をいふ（大經）を見よ、

【僬僥】短人なり、史記仲尼世家に「——氏三尺、短之至也」また列子に「從二中州一以東四十萬里、得二——國一人長一尺五寸」

【小姑】「子ジウトメ」夫の妹をいふ、王建の新嫁娘の詩に「未二諳姑食性一、先遣二——嘗一」

【韶濩】韶は虞舜の樂、濩は殷湯の樂、周禮春官の大司樂の疏に「漢ハ即チ救護ナリ、救護シテ天下ヲシテ所ヲ得シムルナリ」と、韓文の上二襄陽于相公一書に「正聲諧二——一濩一音「クワク」

【小功】三ケ月の喪服なり（大功）を見よ、

【招魂】「タマシヒヲマネキカヘス」卓氏藻林に「古者人死スレバ、人ヲシテ屋ニ升ラシメ以テ之ヲ招ク、荊襄ノ俗、或ハ以テ之ヲ生人ニ施ス、宋玉、屈原ノ魂魄離散セルヲ閔ム、故ニ——ヲ作リテ以テ其ノ精神ヲ復シ其ノ年壽ヲ延バシメント欲スルナリ」後漢書趙岐傳の注に「——復魄」

【鎖魂橋】天寶遺事に「長安ノ灞陵ニ橋アリ、來ヲ迎ヘ去ヲ送ル皆此ニ至ル、呼ビテ——ト爲ス」

【小歲】冬至をいふ、明歲に同じ、魏書孝文帝紀に「太和十五年十有一月初詔二——一賀」

【照歲燈】歲時記に「除夕燈ヲ點スルヲ——トイフ」

【噍殺ノ音】噍は急にしてかなしむなり、殺は減りて隆ならざるなり、禮記の樂記に「——之一作、而民思憂」また、其哀心感者、其聲噍以殺」

【小姑山房外集】六卷、補遺一卷、清の袁枚撰す、この書は枚の四六文を收錄す、枚詩文を以て一家を成す、而して四六文はその尤も長ずるところ、跌宕瞻麗にして六朝の體格を得たり、

【小倉山房詩集】三十七卷、附續二卷、清の袁枚撰す、枚の詩性靈を主として古を師とせず、務めて新奇を求むるの弊、輕薄淺俗に流るるに至る、

【笑殺】笑ふことの甚しきなり、恨殺・惱殺・愁殺等の殺皆同じ、南史桓崇祖傳に「自可二拍手一一」

【舶散】しづかにしてひまなること、唐書に「野服——」

【抄紙】紙をすくこと、天工開物に見ゆ、

【梢子】 梢は「コズエ」轉じて船の柁尾をもいひ、また「柁」をもいふ、字彙に「船柁尾曰梢、今人謂篙師爲ー一、或作稍」と、訓蒙字會にも「俗ニ船上ノ篙師ヲ謂ッテーートナス」「サヲサシ」

【簫史】 列仙傳二に「ー一得道、好吹簫、秦穆公、以女弄玉妻之、遂教弄玉吹簫作鳳鳴、有鳳來止其屋、公爲作鳳臺、後弄玉乘鳳、ー一乘龍、共昇天去、故秦人作鳳女祠、時有遺音云云」

【蕭寺】 寺をーーといふ、梁の武帝姓は蕭、諱は衍、佛を好み、佛寺一萬三千餘を創建す、故にー:といふ、

【小事ヲ輕シ】 ズル勿レ小隙舟ヲ沈ム」(勿輕小事、小隙沈舟)列子の語、下に「勿輕小物、小蟲毒身」とあり、

【小醜】 醜は類なり、小人の類をいふ、國語に「王猶不堪ー況爾ーー」

【少室】 達磨尊者の九年面壁せし處なり、河南の嵩山の三尖峰中の東なるを大室といひ、西なるをーーといふ、その峰中に少林寺あり、故に少林少室といふ、祖庭事苑に「嵩山少林、初祖面壁之處、西域記云、其山東爲太室、西謂ーー、高八百六十丈、上方十里、少室與太室相望、但小耳」

【蕭瑟】 「モノサビシ」蕭蕭に同じ、また風の吹きすさぶ聲をいふ、楚辭九辯に「悲哉秋之爲氣也ーー分草木搖落而變衰」

【小忍バザレバ則チ大謀ヲ亂ル】 (小不忍則亂大謀)婦人の仁、匹夫の勇の如きは、忍ぶこと能はず、故に大事を謀り之を成すこと能はざるの謂なり、論語衞靈公篇に「巧言亂德、ーーレーーーー」

【小人】 身分の賤しき者をいふには、孟子に「有ーー之事」とあるーーの如し、心のまがりて度量せまき者をいふには論語に「ーー窮斯濫矣」とあるーーの如し、即ち君子の反對なり、王充論衡に「ーー恥其面不如子都、古の美貌を以て名高き人、君子恥其行不如堯舜」荀子に「ーー之學也、入乎耳、出乎口、口耳之間、則四寸耳、曷足以美七尺之軀哉」また同書に「ーー能則倨傲僻遠、以驕溢人、不能則妬嫉怨誹、以傾覆人」

【小盡】 陰暦の小の月の終をいふ、歲華紀麗の注に「三十日ヲ大盡ト爲シ、二十九日ヲ一ートス」

【蕭森】 木立の高く生ひ茂りて「モノスゴキ」をいふ、張九齡の詩に「江城何寂歷、秋樹亦ーー」

【小人窮スレバ斯ニ濫ス】 論語衞靈公篇に「子曰君子固窮、小人窮斯濫矣と濫とは溢るるなり、法度の外に放出するをいふ、小人は困窮の場に臨みて、兎角に安んずること能はず、法を越えて非をするものなりとの義、

【小人ニシテ高位ヲ踏ムコトヲ嫌フ】 十訓抄第六に見ゆ、これは賈島が王鳳凰賦中の語に「嫌小人而踏高位、鶴有乘軒、惡利口之覆邦家、雀能穿屋」とあるを斥す(衞ノ懿公ガ鶴を參考せよ、

【小人ノ過ハ必ズ文ル】 (過ヲ文ル)を見よ、

【小人ノ交ハ甘クシテ醴ノ若シ】 (醴水)を見よ、

【小人ノ勇】 匹夫の勇に同じ、荀子に「輕死而暴、是小人之勇也」

【小人革面ヲ革ム】 (小人革面)易の革卦上六に「君子豹變、ーーレーー」とあり、象辭に「ーーレー、順以從君也」と、小人はその心盡く變化して善に遷ることは得ざるも、その外貌を改革して上の風化に從順せしむるを得べしとなり、

【小心翼翼】 翼翼とは、恭愼の貌、詩の大雅文王篇に「維此文王、ーーーー」

【抄寫】 「ヌキガキ」抄錄に同じ、事文類聚に「梁袁峻ーー日課五十紙」

【瀟洒】 洒一音「サイ」ーーは「サッパリ」としたる義、清淨なり、北山移文に「ーー出塵之想」

【小祥】 一周忌をいふ、眞俗佛事編に「禮記ニ據ルニ、親亡シテ十三ケ月ノ祭ヲーートイフ、二十五ケ月ノ祭ヲ大祥トイフ(中畧)祥ハ「サイハイ」ト訓ス凶服ヲ去ツテ吉服ニ從フ義ナリ」

【霄壤】 大差あるに喩ふ、類書纂要に「霄壤ハ天地ナリ霄は天に近き雲氣をいふ、

【瀟湘】 水の名、湖南省なる洞庭湖の南に在り、湘水は永州府の北を流れ、湘江に至りて瀟水と合す、河水清澄十尋の底を見るべし、この邊、風光佳絶なるを以てーー八景の名あり、

【蕭牆ノ憂】 (蕭牆之憂)「ウチワ」の騷動をいふ、蕭牆は門屏なり、禍患は、近く門屏の中に在るの義にして、內變あるをいふ、蕭は肅なり、牆は屏をいふ、君子相見るの禮、屏に至りて肅敬を加ふ、論語の季氏篇に「吾恐季孫之憂、不在顓臾而在蕭牆之內也」顓臾は小國、魯國の附庸なり、韓非子に「不謹蕭牆之患而固金城於遠境」

【椒酒】 「サンセウ」その他の藥を調合してひたせる酒、屠蘇(トソ)の類なり、荊楚歲時記に「正月一日長幼以次拜賀進ーーと、錦字箋に「元日ーーヲ進ム、次第少ヨリ老ニ至ル、今ノ屠蘇ハソノ遺意ナリ、又元日酒ヲ

飲ムヲ長命盃トイフ」

【小春】（セウシュン）陰暦十月をいふ、「コハル」荊楚歳時記に「十月天氣和暖春ニ似タリ、故ニ——トイフ」竹を參看せよ、

【抄書】（セウショ）讀書の際、心に感じたる事をぬきがきする義、抄は鈔に同じ、南史王筠自序に「余少好ミ——チ、老而彌篤、雖ド過見瞥觀ト皆即疏記ス、後重省覽、歡興彌深シ」と、蘇軾の詩に「白首尚——」

【宵燭】（セウショク）螢の異名（螢）を見よ、

【銷暑招涼之珠】（セウショショウリャウノタマ）暑氣を消し、涼氣を招く寶玉、王嘉の拾遺記に「黒蚌千歳、一生ニ珠チ、昭王常懐ニ此珠ヲ、當ニ隆暑之月ニ體自涼、號シテ曰ニ——ト」

【焦遂】（セウスヰ）唐人、口吃にして客に對して一言を出さず、醉後應答響の如し、飲中八仙歌にいふ「——五斗方ニ卓然、高談雄辯驚ニ四筵ニ」

【憔悴】（セウスヰ）憂ふる貌、詩經に「或ハ燕燕居息、或ハ——事ニ國ニ」孟子に「民之ニ——於虐政ニ未有ト甚ニ於此時ニ者ト也」また痩せ衰ふる義、屈原の漁父辭にも「顔色——形容枯槁」

【小成】（セウセイ）小事を成し遂げたる義、禮記の學記に「七年視ニ論學取ル友ニ謂ニ之ニ——ニ」

【小星】（セウセイ）妾の異稱なり、詩の召南の小星篇に「嘒彼小星、三五在レ東ニ、肅肅宵征、夙夜在レ公ニ、寔命不レ同カラ」の註に「嘒ハ微ナル貌、三五ハ其ノ稀ナルヲイフ、蓋シ初昏、或ハ將ニ明ケントスル時ナリ、南國ノ夫人、后妃ノ化ヲ承ケテ、能ク妬忌セズシテ、其ノ下ヲ惠ム、故ニ衆妾ノ之ヲ美ムルコト此ノ如シ、蓋シ衆妾君ニ進御スル、敢テタニ當ラズ、星ヲ見テ往キ、星ヲ見テ還ル、故ニ見ル所ニ因リテ興ヲ起シシナリ」

【宵征】（セウセイ）「ヨル行ク」こと、前條を見よ、

【少成天性ノ若シ】（セウセイテンセイノゴトシ）孔子家語に「少成若ニ天性ノ一、習慣成ニ自然ニ」とあり、漢書賈誼傳にも出づ、

【招召】（セウセウ）人をまねくをいふ、楚辭招魂の序に「招者召也、以テ手曰レ招、以テ口曰レ召」

【招招】（セウセウ）說文に「手ニテ呼ブナリ」詩經の邶風に「——舟子」傳に「——ハ號召ノ貌、聲をあげて呼ぶにもいふ、

【悄悄】（セウセウ）憂ふる貌、詩の邶風に「憂心——」悄然・悄乎・悄切と同じ、

【蕭蕭】（セウセウ）さびしき義、凄凉なり、史記刺客傳に「風——兮易水寒」雨の「サビシク」ふる貌にもいふ、

【瀟瀟】（セウセウ）風雨の暴疾なる貌、はやくしてはげし、詩經の鄭風に「風雨——」

【蟭蟟】（セウセウ）「アシタカグモ」詩の豳風東山に「——在レ戸」朱註に「——ハ小蜘蛛也、戸無キ人出入、則結ニ網當レ之ニ」と、爾

雅に「——長踦」郭注に「小蜘蛛長脚者、俗呼ニ爲ス喜子ト」、陸璣云、此蟲來著ニ人衣當ニ有ニ親客ニ至ル有ニ喜也、幽州人謂ニ之親客ニ」と、人家の簷外に多く網を結ぶ身小にして脚甚ダ長シ、

【擾擾】（ゼウゼウ）猶ほ紛紛といふが如し、亂るる貌、國語に「唯有ニ諸侯、故——焉」

【簫韶九奏】（セウセウキウソウ）スレバ、鳳舞ヒ魚跳ル】太平記卷十七に見ゆ、いぶせき住居をいふ、蕭然はものさびしき貌、晉書陶潛傳に「環堵蕭然、不レ蔽ニ風日ヲ」短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也」（環堵ノ室」を見よ、

【昭蘇】（セウソ）回生なり、暗にして明を得るが如く、死して更に生くるが如きをいふ、禮記の樂記に「蟄蟲——」註に「昭ハ曉ナリ、蟄蟲以テ發生スルヲ曉トナシ、更息スルヲ蘇トイフ」

【蕭疎】（セウソ）「マバラ」にして、さびしき義、范成大の詩に「瘦草——已似レ秋」

【樵蘇】（セウソ）樵は薪を取り、蘇は草を取るをいふ、史記淮陰侯傳ニ「——後爨師不レ宿飽」また文選に「——往而無レ忌」

【少壯不レ努力、老大徒傷悲】（セウサウフドリョクラウダイトショウヒ）文選二十七、長歌行に「青青園中葵、朝露待レ日晞、陽春布ニ德澤ヲ、萬物生ニ光輝ヲ、常恐ル秋節至、煜黄華葉衰、百川東到レ海、何時復西歸、——」

【消息】（セウソク）「時の「ウツリカハル」をいふ、易の豐卦に「日中則レ昃、月盈則レ食、天地盈虚、與レ時消息ス」の註には「陽生ズルヲ消息トナシ、陰死スルヲ消ト爲ス」とあり、また文選の註

には「消ハ往ナリ、息ハ來ナリ」とあり、書札を消息といふも、亦往來の意なり、晉書に「陸機語ㇾ犬曰、我家絶無ㇾ書信、汝能齎ㇾ書取ㇾ消息ㇾ不、犬遂至ㇾ家、得ㇾ報還ㇾ洛」とあり「タヨリ」「オトヅレ」杜甫の詩に「因ㇾ君問ㇾ——ニ、又——ハ動止の如し、蜀志諸葛亮傳に「承ㇾ知ㇾ——ㇾ、慨然永歎」

【昭代叢書】 清朝人の雜著を編す、甲乙丙三集は、張潮の編、丁集以下は後人の續輯に係る、

【少男風】 將に雨ふらんとして急に至る風をいふ（少女ノ風）を見よ、

【笑中ニ刀アリ】 （笑中有刀）表面に溫和を裝ひて、內に害心を蓄ふるをいふ、事類全書に「李義甫、容貌溫恭、人ト語ルトキハ、必ズ嬉怡微笑ス、而シテ狡險忌克ナリ故ニ時ノ人義甫ヲ笑中ニ刀アリト謂フ」

【消長】 消は盡なり、滅なり、——は、猶ほ榮枯の如し、易の泰卦に「君子道長、小人道消」

【邵長蘅】 字は子湘、青門と號す、清の江蘇武進の人、少くして奇童と稱せらる、十歲諸生と爲り、試必ず高等、後ち擧子の業を棄て、益〻心を六經三史に潛め久へにして融釋貫串し、大いにその辭を放にす、論者以爲らく、清初文を以て鳴る者、侯方域と魏禧とより外は、惟青門鼎足して立つべしと、著す所ろ正誼堂集古今韻略等あり、卒する年六十八、

【昭著】 明かにいちじるし、明著に同じ、南史に「若斯——顯著、彰著など略同じ、

【小重陽】 陰曆九月十日をいふ（重陽）を見よ、

【陼直】 正字通に、陼は通じて峭に作ると、次の（峭直）を見よ、

【峭直】 峭は山のけはしきをいふ、——は急なり、嚴厲なり、人と爲りのきびしくおごそかなるをいふ、漢書龜錯傳に「錯爲ㇾ人——刻深」

【詔勅】 文心雕龍に「詔ハ誥ナリ、敕ナリ、百姓ニ告ゲ敕フル所以ナリ」と、文體明辨に「秦天下ヲ幷セ、命ヲ改メテ制トイヒ、令ヲ詔トイフ、是ニ於テ詔興ル、漢ノ初メ命四品ヲ定ム、其ノ三ヲ詔トイフ、後世之ニ因ル」とあり、勅は戒勅なり、戒勅して文を爲る、實に詔の切なる者なり、漢の制に、天子の命令に四あり、其の四を戒書といふ、卽ち戒勅なり、わが國にては、大寶令の義解に「謂ㇾ詔書勅書、同是綸言也、但臨時大事爲ㇾ詔、尋常小事爲ㇾ勅」とあり、

【少女ノ風】 微風をいふ、魏志管輅傳の註に「清河旱、倪太守問ㇾ輅雨期、輅言樹上已有ㇾ少女微風、樹閒陰鳥和鳴、又少男風起、飛鳥和翔、其應至矣、須臾果大雨」

【椒庭】 後宮をいふ、椒房に同じ、卓氏藻林に「椒房殿名、皇后所ㇾ居」とあり（椒房）を見よ、

【霄壤】 高峻の貌、淮南子原道訓に「上游於——之野、下出於無垠之門」

【蕭條】 極めてさびしき義、蕭蕭に同じ、班固の燕然山銘に「——萬里、野無遺寇」淮南子齊俗訓の注に「——ハ深靜ナリ」

【小篆】 （大篆）を見よ、

【焦土】 燒けつち、杜牧の阿房宮賦に「楚人一炬、可ㇾ憐——」

【蕭統】 字は德施、小字は維摩、梁武帝の太子、性仁孝にして寬和よく衆を容る、書を讀むに五行俱に下る、嘗て周秦以來の詩文を編次し文選といひ、大に世に行はる、中大通三年四月薨ず、年三十一、朝野之を痛み、昭明と謚す、

【焦頭爛額上客トナル】 （焦頭爛額爲ㇾ上客）晉、人あり、火災のあらんことを憂へて、豫防の策を立て、煙突を曲げ薪を他に徙せと勸めたれども、用ひられず、その後果して火を失ふに至り、頭を焦がし、額を爛らして、之を鎭めし者は、尊ばれて上客となり、豫防策を進めしものは、恩澤を蒙らざりき、以て禍亂を未萌に察し、之を妨ぐの策を講ぜしものは捨てられ、鎭定の功を立てたる者のみ、重賞を受くるに喩ふ、漢書霍光傳に「曲突徙ㇾ薪亡ㇾ恩澤、——ㇾ——ㇾ——」

【小頓】 「ナカヤスミ」「コヤスミ」客越志ニ「過ㇾ浮橋——」

【燋熱大燋熱】 太平記卷二に見ゆ、八大地獄の中の第六第七の名なり、俱舍論には「炎熱極炎熱」とあり、罪人の身よりも又外の器物などよりも皆猛火を出して互に相燒害する所ろの地獄なり、燋は焦なり、

【招牌】 「カンバン」莊子駢拇篇に「自ㇾ虞氏招ㇾ仁義ㇾ以撓天下ㇾ也、天下莫ㇾ不ㇾ奔ㇾ命於仁義ㇾ」の林希逸の註に「招ハ猶ホ今人ノ——ト言フガ如シ」と招子に同じ、

【椒房】 漢官儀に「皇后ヲ椒房ト稱ス、其ノ實蔓延シテ升ニ盈ツルニ取ル（子孫の椒子の如く多からんことを欲するなり）椒ヲ以テ室ヲ塗ルハ、溫暖ニシテ惡氣ヲ除クニ取ルナリ、猶ホ天子ノ殿上ヲ朱泥ニシテ、丹墀トイフガ如シ」

【瞻望之】 字は長倩、漢の東海蘭陵の人、杜陵に徙る、素より重望あり、仕へて太子太傅に至る、宣帝疾篤し、遺詔を受けて政を輔け、尙書の事を領す、元帝位に卽く、

望之師傅を以て重んぜられ、匡正するところ多し、後ち弘恭・石顯のために害せらる、

【召伯ガ政ノヤハラカナリシニ州民甘棠ノ詠ヲナシ】十訓抄第一に見ゆ、民が召公の徳を思慕する餘り、公が嘗てやどりし甘棠の樹までを愛せしとなり（甘棠ノ條を見よ、

【燒尾荒鎭】三代實錄貞觀八年正月二十一日の條下に「是日敕禁二諸司諸院諸家諸所之人一——一幷責二人求一飲及臨時群飲一」と見えたり、さて燒尾は唐書にいふ、大臣始めて官を拜すれば、食を天子に獻ず、名づけて燒尾といふ、蘇環相と爲る、食貴く百姓の不足せるを以て、獨り進めずと、然れども唐人の小說に載する所ろは此れと同じからず、乃ち云ふ士の初めて登科し、及び官に在る者、遷除せらるれば朋僚慰賀す、皆盛に酒饌を置き、音樂して之を宴するを燒尾となすとあり、されば燒尾は置酒宴樂するをいへり、荒鎭とは三代實錄私記に云ふ「酒無レ度謂二荒鎭一鎭者沈湎之意ナリ」とあり、封演聞見錄に「士子初登二桑進一及遷除、朋僚慰賀、必盛置二酒饌音樂一、以展二歡宴一謂二之燒尾一說者、有二虎變爲一レ人、唯尾不一レ變須レ爲二燒除乃得一レ成レ人、故以初蒙二拜授一、如二虎得一レ爲レ人、本尾猶在二脫體既合一方爲レ焚レ之」と、また聞見錄に「初メテ登第シテ宴ヲ設クルヲ燒尾燕トイフ、說ク者イハク、新羊羣ニ入リテ、抵觸ス、須ラク尾ヲ燒キテ乃チ定ルベシ」

【韶武】韶は舜の樂、武は武王の樂なり、論語八佾に「子謂二韶盡レ美矣、又盡レ善也一、謂二武盡一美矣、未レ盡レ善也」

【笑柄】「ワラヒグサ」玉堂叢話に「陳太常嘗テ誤リテ戶部ニ入リ、稅銀ヲ入ルル者ヲ見テ驚キテ曰ク賄賂公行此ニ至リテ極マルト、人以テ——ト爲ス」

【昭穆之序】宗廟の制は、中央に太祖の廟ありて、左に二代目、右に三代目、また左に四代目、右に五代目と、此の如くいりちがへて、左を昭といひ、右を穆といふ、又祭る人の坐位にも、昭穆の序ありて、其の次序に從ひて坐するを禮とするなり、禮記の王制に「天子ハ七廟ナリ、三昭三穆、大祖ノ廟ト與ニ七ツ、諸侯ハ五廟ナリ、二昭二穆、大祖ノ廟ト與ニ五ツ、大夫ハ三廟ナリ、一昭一穆、大祖ノ廟ト與ニ三ツ、士ハ一廟ナリ、庶人ハ寢ニ祭ル」とあり、又祭統に「夫レ祭ニ、昭穆アリ、昭穆アルハ、父子遠近長幼親疏ノ序ヲ別チテ亂ルナキ所以ナリ、是ノ故ニ、大廟ニ事アレバ、則チ群昭群穆咸ク在リテ、其ノ倫ヲ失ハズ」

【抄本書】「ヌキガキボン」叢棲幽事に「——如二古帖一、不レ必全帙皆是斷壁殘珪」

【照冥】「ボンノオクリビ」照朝盛事に「七月十五日俗ニ傳ヘテ中元ノ節トナス、僧家盂蘭盆會ヲ建テ、燈ヲ西湖及ビ塔上河中ニ放ツ之ヲ——トイフ」

【昭明太子】（蕭統）を見よ、

【焦螟蚊睫ニ集ル】（焦螟集二於蚊睫一）焦螟は蟲の至微なる者なり、人の世に在りて互に相爭ふを達觀するときは、猶ほ焦螟が蚊睫の中に集まりて、相觸るるが如しとなり、列子に「江浦之間生二麼蟲一、其名曰二焦螟一、群飛而集二於蚊睫一、而相觸也」晏子にも見ゆ、張華の賦に「焦螟巢二於蚊睫一、大鵬翮二乎天隅一」

【邵雍】字は堯夫、宋の河南の人、學を爲す堅苦刻厲、寒けれども爐せず、暑けれども扇せず、夜、席に就かざる者數年なりき、北海の李之才初めて雍を百源に見、授くるに物理性命の學を以てす、是に於て妙悟自得する所ろあり、德氣粹然人に遇ひて貴賤賢愚となく、一に接するに誠を以てす、羣居燕飲笑語終日、甚だ異ることを人に取らず、人の善を言ふを樂みて、未だ嘗てその惡に及ばず、神宗の熙寧十年卒す、年六十七、元祐中康節と諡す、著す所ろ、皇極經世書・觀物篇・伊川擊壤集等あり、雍の學を世に百源學派と稱す、程明道行狀に「明道兄弟初メ其ノ父ニ侍シテ、邵堯夫ヲ識ル、後堯夫ヲ天津ノ廬ニ訪フ、堯夫酒ヲ携ヘテ、月ニ陂上ニ飲ミ歡ブコト甚シク、論議終夕、明日、二程周純明ニ謂ヒテ曰ク、昨堯夫先生ニ從ヒテ游ビ、其ノ議論ヲ聽クニ、振古ノ豪傑ナリト、周曰ク、言フ所ロハ如何、曰ク、內聖外王ノ道ナリト、又曰ク、堯夫ハ襟懷ノ放曠ナルコト、空中ノ樓閣ノ如ク、四通八達スト」

【招來】人を招きすすめて己の方へ至らしむる義、史記に「大夏之屬皆可二——一而爲二外臣一」

【小流】ちさきながれ、荀子に「不レ積二——一無二以成一江海一」

【小利ハ大利ノ殘】小き利をはかるは、大なる利を得る上に、害となるをいふ、韓非子に「十過、一ニ曰ク小忠ヲ行フハ、則チ大忠ノ賊ナリ、二ニ曰ク小利ヲ顧ルハ則チ大利ノ殘ナリ云云」また、說苑の敬愼篇に「小忠ハ大忠ノ賊ナリ、小利ハ大利ノ殘ナリ、戰ヲ好ムノ臣、察セザルベカラズ」論語の子路篇に「見二小利一則大事不レ成」とあると同じ、

【少林】（少室）を見よ、

【照臨】貴人の過ぎり訪はれしにいふ、左傳文十二年に「襄仲辭二玉一曰、君不レ忘二先君之好一、——魯國、鎭二撫其

社稷ヲ重ンズルニ之ヲ以テス大器ヲ寡君敢テ辭ス玉云云」また天子の位に即きて下萬民に臨まるる義にも用ふ

【噍類ナシ】　遺類なきをいふ、噍は嚼（カミコナス）なり、また生活して噍食する者なき義、漢書高帝紀に「襄城無噍類」

【鷦鷯深林ニ巢クフモ一枝ニ過ギズ】　（鷦鷯巢於深林、不過一枝）人各〻其の分に安んずべきに喩ふ、莊子逍遙遊の語、鷦鷯は一に巧婦鳥ともいふ、ミソサザイ巢を深山の崖の樹枝に營む　人の髮、馬の尾等を以て蘆花を綴りその形襪の如く極めて巧緻なり（偃鼠）を見よ、

【譙樓】　譙は遠を望み、敵をうかがふために、城門の上にたてたる高樓、康熙字典に「一城樓也」と、漢書陳勝傳には「戰譙門中」とあり、一は一に戍樓ともいふ、

【蕉鹿】　鄭人野に薪する者あり、駿鹿に遇ひ、之を擊つて斃す、人の之を見んことを恐るるや、遽に之を隍中に藏し之を覆ふに蕉を以てす、俄にしてその藏するところの處を遺る、遂に以て夢となすと列子に見ゆ、

【世界】　楞嚴經卷四に「世爲遷流界爲方位」とあり、世とは遷流とて時の遷り變り行く義、過去現在未來と時の流行するをいふ、界とは境界の義にて上下四方の界限をいふ、即ち世は時閉にて竪に就きていひ界は方面にて幅に就きていふ、この時閉と方面とを具ふるものを一一といふ、

【施餓鬼】　餓鬼に施す義、無緣の亡者の靈を弔ひて讀經供養するをいふ、眞俗佛事編に「吾ガ門ノ徒ハ日日必ズ此法ヲ可修、儀軌ニモ所獲福利果報不可校量」トイヘリ云云」

【是耶非耶】　（天道ハ是カ）を見よ、

【斥鷃】　鷃は鷽に同じ「フナシウヅラ」斥は澤なり、小澤にすむ小鳥なり、己の分を知らずして妄に人を笑ふを「一一笑」といふ、莊子逍遙游に「有鳥焉其名爲鵬背如泰山翼若垂天之雲搏扶搖羊角而上者九萬里絶雲氣負青天然後圖南且適南冥斥鷃笑之曰彼且奚適也云云」とあるに本づく、

【席暖ナルニ暇アラズ】　（席不暇暖）韓愈の爭臣論に「孔席不暇暖」とあり、孔子四方に周流して、其の教を行はんとす、座席未だ暖まらずして、則ちまた他に往くをいふ、

【石尤風】　江湖紀聞に「石氏ノ女嫁シテ、尤郎ノ婦トナル、尤出デテ歸ラズ妻之ヲ憶ヒ病ミテ亡スルニ臨ミ、歎ジテ曰ク、吾レ其ノ行ヲ阻ムル能ハザリシヲ恨ム、今ヨリ凡ソ商賈ノ遠行スル者ハ、吾レ當ニ大風ヲ作シ、天下ノ婦人ノ爲メニ之ヲ阻ムベシト、自後商旅打頭ノ風ニ値ヘバ、則チ曰ク此レ一一ナリト」宋武帝丁督護歌に「願作一一、四面斷行旅」

【赤衣使者】　赤蜻蜓なり、古今注に「一名一一、亦名赤弁丈」大崔詩佛の詩に「一一一向風飛」

【尺一】　天子の詔をいふ、東坡いふ「尺一束呼我歸」と、品字箋に「漢ノ制、一尺一寸ノ簡牌ヲ以テ天子ノ詔ヲ寫シニヨリテイフ」と、後漢書陳蕃傳に「一一選擧」

【積羽舟ヲ沈ム】　（積羽沈舟）至つて輕き物も、多く積み重ぬるときは、遂には舟を沈むるに至る、以てつまらぬ事にても、說く者多きときは、つひに惑はさるるに至るに喩ふ、戰國策に「張儀魏王ニ說キテ曰ク、天下ノ游士、日夜腕ヲ捥シ、目ヲ瞋シ、切齒シテ以テ從ノ便ヲ言ヒ、以テ人主ニ說カザルハナシ、人主ソノ辭ヲ覽テ、ソノ說ニ牽カル、惡ンゾ眩セラルルナキコヲ得ンヤ、臣聞ク、一一群輕折軸衆口鑠金積毀銷骨ト、故ニ願クハ大王ノ之ヲ熟計センコヲト」史記張儀傳にも見ゆ、

【石堰】　堰は字書に「壅水也」とあり、一は石をたたみて水をせき留むるなり「キセキ」

【石燕翔ル】　雨の降る前兆、錦字箋に「零陵山中ニ、石燕アリ、將ニ雨フラントスレバ、則チ飛翔シテ生クルガ如シ」この事、五雜組に見ゆ、石燕は飛ぶ理なし、よりて其の實なくして名のみあるを石燕飛ぶといふ、

【績ヲ考フ】　（考績）人の賢否、事の得失を考へ察する義、書經に「三歲一一、三考黜陟幽明」

【席ヲ前ム】　書言故事に「重ク人ヲ待ツヲ之ガ爲メニ席ヲ前ムトイフ、漢書ニ、賈誼長沙王ノ大傅タリ、文帝之ヲ徵ス、至リテ入リ見ユ、上因テ鬼神ノ本ヲ問フ、誼ツブサニ然ル所以ヲイフ、夜半ニ至リ文帝席ヲ前ムト」前席は坐する所ろの席を促近するをいふ、

【席ヲ以テ門トナス】　（席門）を見よ、

【石介】　字は守道、徂徠と號す、宋の兗州奉符の人、天聖八年の進士太子中允に遷る、慶歷五年卒す、年四十一、著すところ、徂徠集、唐書糾繆あり、

【石交】　交りの堅きをいふ、戰國策に「此所謂棄仇讎得一一者也」

【釋褐】　仕官することを褐ヲ釋クを見よ、

【石敢當】　徐氏筆精に「今人家正門、適當ノ巷路ニ、小石碑ヲ立テ、鐫シテ一一トイフ、按ズルニ、西漢ノ史游ガ急就章ニ、一一トイフ、顏師古ノ注ニ、衝ニ石蟨石

買右惡アリ云云、ソノ後、以テ族ニ命ズ、敢當ハ、向フ所ロ敵ナキナリト、姓源珠璣ニ曰ク五代ノ劉智遠、——ヲシテ鐵鎚ヲ袖ニシテ晉祖ニ侍セシム、——格鬪シテ死ス、後人故ニ凡ソ橋路衝要ノ處、必ズ石ヲ以テソノ形ヲ刻シ、ソノ姓字ヲ書シ、以テ民居ヲ捍グト、二說大イニ相倂シカラズ、亦日ニ用ヒテ察セザル者ナリ」

【積氣】（セキキ）　天をいふ、列子に「——成（シテ）天、積形成（スルヲ）地」

【石牛道】（セキギウダウ）　（金牛ヲ）を見よ、

【積毀骨ヲ銷ス】（セキキボネヲ）　（積毀銷骨）讒毀の言多きときは、堅き骨も遂に銷え盡くるをいふ、一說骨は骨肉の骨なりと、亦通ず、衆口（シウコウ）を見よ、

【石季倫】（セキキリン）　（晉ノ——）を見よ、

【夕暾】（セキクン）　「ユフヒ」暾はいり日の餘光なり、杜甫の句に「蠻夕暾（ヲ）——」

【弧照】　——

【碩果】（セキクワ）　碩は大なり、——は大いなるくだもの、易に「——（ハ）不レ食」

【席卷】（セキクワン）　天下を收め取ること、席を卷くが如く易きをいふ、賈誼の過秦論に「秦ノ孝公殽函ノ固ニ據リ、雍州ノ地ヲ擁シ、君臣固ク守ッテ以テ周室ヲ窺フ、天下ヲ席卷シ、宇內ヲ包擧シ、四海ヲ囊括スルノ意、八荒ヲ幷呑スルノ心アリ」と、括は囊の口を結ぶなり、能く天下を包含するをいふ、八荒は八方の邊（ハテ）をいふ、史記に「明天子在（リ）上、兼（ネ）文武（チ）——四海（スヘチ）」

【石經】（セキケイ）　後漢の靈帝諸儒に詔して五經を定め石に刋す、古篆隸書を爲す、さて——には、漢・唐・淸等の別あり、漢石經は、殘字六百七十五字、唐石經は、開成二年、西安府學石本にて、十三經の中、孟子なかりしを、明人補刻す、淸石經は、乾隆五十八年敕刋、嘉慶八年敕して改定す、國子監石本にて、十三經備る、石經の事は、顧炎武の、石經考、翁方綱の漢石經殘字考等に就きて知るべし、

【赤縣神州】（セキケンシンシウ）　漢土の異稱、史記孟軻傳に「中國名曰（ニ）——、赤縣神州內、自有（ヲ）九州、禹之序（スル）九州是也、不（レ）得（テ）爲（ス）州數、中國外如（キ）赤縣神州者九、乃所（ト）謂九州也」また晉書孝武紀に「神州赤縣翻成（ル）被髮之鄉（ト）」また畿內の縣の稱、

【石竅】（セキコ）　錦字箋に異苑を引きて「晉武ノ時、吳郡ノ臨平ノ岸崩レ、一——ヲ出ス、之ヲ扣クニ聲ナシ、張華ニ問フ、華曰ク、蜀中ノ桐材ヲ取リ、魚形ニ作シテ之ヲ扣クベシ、則チ鳴ラント、ソノ言ノ如クスルニ、聲十里ニ聞ユト、歐陽修云フ、——ハ岐陽ニ在リ、韋應物ハ以テ文王ノ竅ニシテ宣王ニ至リテ詩ヲ刻スルノミト爲ス、

韓退之ハ、直チニ以テ宣王ノ鼓ト爲ス、今ノ鳳翔孔子廟中ニ在リ、鼓ハ十アリ先時數、野ニ弃ツ、鄭餘慶廟ニ置ク（中略）ソノ文見ルベキ者、四百六十五、磨滅シテ識リ難キ者過半ナリ」と、韓退之に——歌、蘇東坡に、後——歌あり、共に古文眞寶前集に收めたり、

【斥候】（セキコウ）　「モノミ」の兵、斥は「ハカル」度なり、候は「ウカガフ」視なり、望なり、敵を視望して、その動靜を度る義、左傳襄十一年に「納（レ）——（ヲ）禁（ズ）侵掠（ヲ）」また漢書趙充國傳に「常以（テ）遠（チ）——爲（ス）務（メト）」唐律に「——ニ遣ハサレ、賊ノ來ルヲ覺ラザル者ハ徒三年」の疏議に「指斥候望ノ義」とあり隋書の本紀に「帝——ニ勅シテ、輒チ驅迫スルヿ有ルヲ得ザラシム」とあり、六韜の龍韜の必出篇に「——常ニ戒ム」の解に「——ハ烽燧ヲ望ミ、險阻ヲ檢行シ、盜賊ヲ伺候スル所以ノ者ナリ」

【石洪】（セキコウ）　（石處士）を見よ、

【尺吳寸楚】（セキゴスンソ）　高山の上より諸國を望みて、その狹小に見ゆる形容詞、豆人寸馬といふと同じ、袁中郎の文に出づ、

【赤根菜】（セキコンサイ）　「ホウレンサウ」なり泉州府志に「菠薐ハ、西域頗稜國ニ出ヅ、頗、訛リテ菠ト爲ス、俗ニ——ト呼ブ」と、格致鏡原に「菠薐一名ハ波菜、一名ハ波斯菜、一名ハ——、淸異錄ニ雨花菜ト爲ス」

【釋菜】（セキサイ）　釋は舍なり、菜は蘋蘩の屬、祭るに蘋蘩の屬を供へ舍くのみにして、牲牢幣帛を薦むることなし、祭禮の輕き者、孔子の祭の名、禮記に「始立（メテツルヂ）學者、既興（シテ）器用（ヒヂシテ）幣（ヲ）、然（クテ）後——（レ）」明史本紀に「明ノ太祖洪武十五年、國學成ル、帝將ニ釋菜セントス、議者曰ク、孔子聖人ト雖モ臣ナリ、禮宜シク一奠再拜スベシト、帝曰ク、聖孔子ノ如キ、豈職位ヲ以テ論ズベケンヤ、昔周ノ太祖、孔子ノ廟ニ入リテ、將ニ拜セントス、左右曰ク、陪臣ナリ、拜スベカラズト、太祖曰ク、百世帝王ノ師ナリ、敢テ拜セザランヤト、遂ニ再拜ス、睽深ク其ノ左右ノ言ニ惑ハザリシヲ嘉ス、今睽宜シク特ニ尊崇ヲ加フベシト」

【射策】（セキサク）　疑義を難問する爲めに、之を策に書し、其の大小を量り、署して甲乙の科と爲し、之を列ね置きて、彰はさず、射る者をして其の得る所ろに隨ひて、之を解釋せしめ、以て優劣を判つをいふ、漢書蕭望之傳に「以——甲科（テ）爲（ス）郎（ト）」

【赤痣】（セキシ）　「ホクロ」南史の梁丁貴嬪傳に「生而有（リ）——（ノ）在（リ）左臂（ニ）、療（スレドモ）之不（レ）滅（セ）、又體多（ク）（ニ）（シテ）（イボ）疣子（ノ）ごと」

【戚施】（セキシ）　爾雅に「——面柔也」の注に「——ノ疾ハ仰グ能ハズ、面柔ノ人常ニ俯ス、之ニ似タルニヨリテ名ヅク」

と、國語に「胥臣曰、——不可使仰」の註に「——ハ僕人ナリ」と、詩の邶風に「得此——」に「セムシ」

【石絞】 元史に「——織以爲布、火不能燒」と、和名「イシワタ」にて織りたるを火浣布といふ、

【積聚】 (——)を見よ、

【隻日】 奇數の日をいふ、一三五七九の如し、偶數の日を雙日といふ、釋文瑩の玉壺清話に「唐ノ高宗ノトキ、寰宇寧靜ナリ、長孫無忌隔日ニ事ヲ視ンコヲ請フ、自後雙日ハ坐セズ、隻日御視ス」

【赤子ノ心】 純一にして、僞りなき生れまゝの心、孟子に「大人者、不失其赤子之心者也」

【石人】 徒に人の形あるのみにて、好惡を知らざる者、一解に、常に存じて死せざるをいふ、漢書田蚡傳に「太后曰、帝寧能爲——耶」帝は武帝を斥す、

【析薪ヲ負フ】 (負析薪)父祖の業を失墜せざる義、左傳に「古人有言、其父析薪、其子弗克負荷」とあるに本づく、陳琳の書に「聞魏周榮虞仲翔各紹能——」

【頎儒】 頎學に同じ、頎は大なり、後漢書荀淑傳に「荀爽遭黨錮隱于海上、又南遯漢濱、十餘年以著述爲事、遂稱爲——」後漢書儒林傳に「夫書理無二義歸有宗而頎學之徒、莫或徒或通、人鄙其固焉」

【尺書】 書簡をいふ、漢書韓信傳に「李左車曰、發一乘之使、奉咫尺之書」咫は八寸なり(尺牘)を見よ、

【赤繩足ヲ繫グ】 (赤繩繫足)書言故事に「婚姻ノ前定セルヲ——ト」トイフ、唐ノ韋固、月下ノ老ニ問フ、嚢中何物カアルト、曰ク赤繩子、以テ夫婦ノ足ヲ繫グ、讐敵ノ家、吳楚ノ異鄉、富貴懸隔スト雖モ、コノ繩一タビ繫ゲバ、終ニ遁ルベカラズト」幽怪錄にも「韋固旅次宋城、遇老人向月檢書、因問嚢中赤繩云繫夫婦之足、雖仇家異域、此繩一繫不可易」

【赤松子】 圓機活法に「——ハ神農ノ時ノ雨師ナリ(中略)崑崙山ノ西王母ガ石室ニ至リ、風雨ニ隨ヒテ上下ス、炎帝ノ少女之ヲ追ヒテ亦仙ヲ得テ俱ニ去リ、高辛ノ時、雨師トナル」神仙傳に「黃初平、自號——」

【石鍾乳】 鍾乳石ともいふ「ツラライシ」「イシノチ」山中の洞穴に、礦物の液の滴りながら凝りて氷柱の如く垂るるもの、大なるは柱の如く、小なるは筆の如く、その中皆實す、黃又は赤みあるあり、透明なると瑪瑙の如きを上品とす、本草に「——ハ味甘溫ニシテ毒ナシ、目ヲ明ラカニシ、精ヲ益シ、五臟ヲ安ンジ、百節ヲ通ジ、九竅ヲ利ス、久シク服スレバ年ヲ延ブ」柳文に、零陵郡復乳穴記あり、

【籍湜】 唐の張籍と皇甫湜と、共に韓愈の門人、

【石處士】 石洪字は濬川、唐の人、明經に擧げられ、黃州錄事參軍と爲り、罷めて東都に歸り、十餘年隱居して出でず、烏重胤河陽を鎭し、賢者を求め、以て自ら輔くせんとす、或人洪を薦む、重胤曰く、彼人に求むる無し、それ肯て我が爲めに來らむやと、乃ち書幣を具し、遜へ辟す、洪亦重胤を以て知己と爲し、欣然として行を戒む、重胤その至るを喜び、之を禮遇しぬ、處士とは、漢書異姓諸侯王表の注に「謂不官於朝而居家者也」とあり、韓愈に、送——序あり、參看せよ、

【積水ヲ千仞ノ溪ニ決ス】 迅急猛烈にして當るべからざる勢をいふ、孫子に「勝者之戰、若決積水於千仞之溪者、形也」また「如轉圓石於千仞之山者、勢也」淮南子に「善用兵者、勢如決積水於千仞之隄、若轉圓石於萬丈之谿」

【尺寸】 僅少の義とす、後漢書に「禹得効其——」

【刺刺】 多言の貌、韓文の送——序に「——不能休」

【籍籍】 かまびすしき意、漢書江都易王傳に「國中口語——」

【戚戚焉】 心動く貌、孟子に「於我心有——焉」

【釋然】 悅ぶ貌、莊子に「南面而不——」

【積善ノ家ニハ必ズ餘慶アリ】 易の文言に「積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃」とあり、積善とは、永久に善事を行ふをいひ、餘慶とは、己れ一身のみならず、其の慶餘りて子孫に及ぶをいふ、

【尺素】 「テガミ」杜甫の詩に「來陽馳——」註に「——ハ書ナリ」雙魚)を見よ、

【積素】 雲烟をいふ、謝靈運の詩に「浮氛晦——崖巘——惑原曙」

【赤族】 漢書揚雄傳の「將赤吾之族」の註に「誅殺セラルル者、必ズ血ヲ流ス、故ニイフ」と、一解に、赤は空なり、一族を空盡するをいふと、この說從ふべし、

【尺澤ノ鯢】 見識の狹き者に喩ふ、猶ほ井底の蛙といふが如し、宋玉の對楚王問に「鯤魚朝發昆崙之墟、暴鬐於碣石、暮宿於孟諸、夫尺澤之鯢、豈能與之量江海之大哉」鯢は「サンセウウヲ」

【赤地】 地に物の生ぜざるをいふ、赤は物盡きて空しきなり、漢書の五行志に「——千里赤貧、赤手などの赤は義同じ、

【赤墀】 墀は階上の地なり、天子の殿階の地には、丹を塗る故に——、また丹墀といふ、漢書元后傳に「曲陽侯

根、騸奢僭上、——青瑣」根は王根、

【石竹花】 通志略に「石竹ハソノ葉細嫩花錢ノ如ク、愛スベシ、唐人此ニ象ドリ衣服ノ飾ト爲ス、陳眉公云フ、千瓣ノ者石竹ト名ヅケ、單葉ノモノ洛陽ト名ヅク」

【石丈】 （奇石ヲ）を見よ、

【石女】 婦女の懷胎せざる者、齊己の詩に「——能生是聖胎」

【射鵰ノ手】 弓を射る名人、北齊の斛律光嘗て文襄に從つて校獵す、雲表に一大鳥を見、之を射て頸に中て旋轉して下る、乃ち鵰なり、丞相嘆じて曰く、此れ射鵰手なりと、鵰は「クマタカ」この語、漢書李廣傳に「射鵰者也」とあるに本づく、

【尺鐵】 すこしの「キレモノ」文選李陵答蘇武書に「兵非矛矢窮、人無尺——」ニ注に「——ハ兵器」

【釋奠】 奠は定なり、薦なり、爵を神前におきてすすめ祭るなり、丁祭ともいふ、孔子の祭の名、禮記の文王世子に「凡學春夏——於先師、秋冬亦如之」と、我國にても天皇の行はせたまふ祭の稱、陰暦二月・八月の上の丁の日に大學寮にて行はれ、十哲を配祀し、牲を供せらる、諸藩にて畧して唯蘋藻のみを供して祭るを釋菜といふ、

【夕殿ニ螢飛ビテ、トウチナガム】 白居易が長恨歌に「夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠云云」とあるを斥す、

【赤土】 赤地に同じ、荒地のとなり、白氏文集に「雨飛鑿食千里閒、不見青苗空——」

【尺牘】 類書纂要に「古ノ制、書簡ハ長サ一尺、故ニ尺牘トイヒ、又尺書トイフ」とあり、史記の匈奴傳に「漢遺單于書牘以尺一寸、匈奴遺漢書以尺二寸牘」牘はもと文字を書きつくる木簡（キフダ）轉じて手紙の義とす、漢書に「與人——」主皆藏弃以爲榮」

【石土五穀ヲ生ゼズ】 淮南子に「石土不生五穀、禿山不游麋鹿、無所蔭蔽也」

【積土山ヲ成ス】 學問道德も小を積みて大となるに喩ふ、荀子の勸學篇に「積土成山風雨興焉、積水成淵蛟龍生焉、積善成德而神明自得聖心循焉」

【責任】 事に任じて、自ら其の責に當るをいふ、莊子の天道篇に「帝王聖人休焉、休則虛、虛則實、實者倫矣、虛則靜、靜則動、動則得矣、靜則無爲、無爲也則任事者責矣」

【跖ノ狗堯ニ吠ユ】 （跖之狗吠堯）（桀ノ狗ヲ見よ、

【跖ノ徒】 （跖之徒）利にのみ走る者は跖といふ大賊の

「ナカマ」である、孟子に「雞鳴而起、孳孳爲善者——也」莊子に「——ノ問於跖曰、盜亦有道乎」

【石馬】 石にて刻みたる馬なり、唐會要に「上、先帝（太宗）ノ徽烈ヲ闡揚セント欲シ、乃チ石ニ刻シ、常ニ乘リテ敵ヲ破リシ六匹ヲ昭陵闕下ニ爲ル」わが國の社頭に設くる高麗犬の類なるべし、

【惜抱軒文集】 十六卷後集十卷詩十卷、清の姚鼐撰す、鼐字は姬傳桐城の人、乾隆二十八年の進士、その文簡古にして餘韻多し、劉大櫆に出づと雖も、工力之に軼ぐ、詩も亦清雋誦すべし

【寂寞】 人なくして「サビシキ」をいふ、楚辭に「山蕭條而無獸兮、野——乎無人」

【赤貧】 一文なしの貧者をいふ、書言故事に「常ニ人ノ貧ナルヲイツテ赤窮赤貧ト曰フ、空盡物無キヲ赤トイフ、赤地千里ノ如シト」赤地とは草木なきなり、

【射覆】 諸物を覆器の下に置き、闇に射て中つるをいふ、漢書東方朔傳に「上嘗使諸數家——、置守宮盂下、射之皆不能中」守宮は蟲の名、ヤモリ」覆は「オホヒ、カブセル」

【尺布斗粟ノ譏】 兄弟の「ナカアシキソシリ」漢の文帝の時、淮南王長は高帝の第四子にして文帝の弟なり、不軌を謀る、文帝戮するに忍びず、蜀に謫す、長食はずして死せり、時人謠ひて曰く、一尺の布尚ほ縫ふべし、一斗の粟尚ほ舂つくべし、兄弟二人相容れずと、帝之れを聞き、追悔するも及ばず、後ちその四子を封じて侯となす、

【赤鬚若】 丑の歳をいふ、淮南子 天文訓に「太陰在丑歲、名——」十二支を見よ、

【石癖】 石を愛する「クセ」雲林石譜に「臨江士人、魯子明有——」

【赤壁】 方輿紀要に「湖北 省武昌府嘉魚縣ノ西七十里ニ、——山アリ、ソノ北岸相對スル者ヲ烏林トナス、即チ周瑜ガ曹操ノ船ヲ焚キタル處ナリ」と、荊州記に曰く「蒲圻縣、沿江一百里、南岸名赤壁、昔周瑜破曹操處」と、東坡志林に曰く「黃州守居之數百步、爲赤壁、或言即周瑜破曹公處、不知果是否、斷崖壁立、江水深碧、二鶴巢其上、有二蛟或見之、遇風浪靜、聊乘小舟、至其下、捨舟登岸、入徐公洞、非有洞穴也、但山崦深邃耳」と、徐氏筆精に「東坡赤壁賦、誤以黃州赤鼻山、認爲周瑜破曹操處、後人不甚指摘之、寔爲盛名所怵耳」と清の袁枚の詩に曰く、

一面東風百萬軍、當年此處定三分、漢家火德終燒

賊ノ池上ニ蛟龍竟ニ得レ雲、江水自ラ流レテ秋渺渺、漁燈猶照シテ荻
紛紛、我來不レ共ニ吹レ簫客、鳥鵲寒聲靜夜聞ク

この詩題たる赤壁は、曹劉が勝敗を決したる處にして、諸葛孔明當初の目的即ち天下三分の計は、此の一戰にて成就したるなり、されば、重きを劉氏に歸したり、是れ一箇命意の在るところなり、一二の句は、諸葛が東風の便に乘じ、其の機を失はずして、三分の業を定めたることを云ふ、三四の二句は、漢家の火德と云へることを運用して、火攻の策に用ひ、また周瑜が劉備を以て蛟龍に比せし言を運用して、劉備の志を得たりしことを云ふ、五六の句は、其の實況を寫し七八の句に至りては、東坡の賦中の事を用ひ、當夜蕭騷の趣を寫し、今古映帶して、局を收めたり、之れを要するに每句中に、赤壁の故事を引き用ひたるは、作者の苦心を知るべし、

【尺壁ヲ貴バズシテ寸陰ヲ重ンズ】 淮南子の原道訓に「聖人不レ重二尺之壁一而重二寸之陰一、時難レ得而易レ失也」とあり 魏文帝の典論にも「古人尺壁ヲ賤ンデ、寸陰ヲ重ンズ、時ノ過グルヲ懼ルルノミ」

【赤壁ノ戰】 曹操劉表を擊つ、表卒す、子の琮荊州を擧げて操に降り、劉備江陵に奔る、曹操これを追ふ、備、夏口に走る、操軍を江陵に進め、遂に東に下る、操權に書を遣りて曰く、今水軍八十萬衆を治めて、將軍と呉に會獵せんと、權の群下みな色を失はざるはなし、張昭之を迎へんと請ふ、魯肅以て不可となし、權に說きて周瑜を召して、これを議せしむ、瑜至り曰く、操は名を漢相に託すと雖も、其の實は漢の賊なり、請ふ精兵數萬を得て、夏口に往き、誓つて將軍のためにこれを破らんと、權刀を拔き案を斫りて曰く、諸の將吏敢て操を迎へんと言ふものは、この案と同じうせんと、遂に瑜を以て三萬人を督せしめ、備と力を幷せ操を逆へ、進みて赤壁に遇ふ、瑜の部將に黃蓋といふものあり、操の船艦首尾相接するを見て、これを火攻すべきの策を建て、船十艘を取り、枯柴燥荻を載せ、油を灌ぎ帷幔を繞らし、且走舸を備へ、其の尾に繫ぎ、先づ書を操に遣り降らんことを告げ、中流に帆を揚げ、操の軍に向ふ、操の軍みな曰く、これ呉將の來り降るなりと、時に東南の風急なり、同時に火發す、火烈しく風猛くして船の往くこと箭の如く、敵船を燒盡し、人馬溺燒して死するもの算なし、周瑜等鼓噪してこれに乘ずしかば、北軍大に壞れ、操纔に身を以て免れ還る、後ちしばしば兵を權に加ふれども、志を得ず、操嘆じて曰く、

子を生まば當に孫仲謀の如くなるべし、劉表の如きは豚犬のみと、仲謀は孫權の字、景升は、劉表の字なり、

【石本】 「イシズリ」来芾の寶章待訪錄に「世多二一一一打本・石板・刻石帖皆同ジ、

【席門】 「ムシロ」を以て門とする、貧家のさまをいふ、漢書に「陳平少時家貧シク、好ンデ書ヲ讀ム、長ジテ婦ヲ取ルベキニ及ビ、富人與フル者ナシ、貧者ヲバ平之ヲ魏ヅ、久之ニシテ富人張負ニ女アリ、五タビ嫁シテ夫輒チ死セリ、人敢テ取ルナシ、平之ヲ得ントス、負平ニ隨ツテソノ家ニ至ル、家ハ負郭ノ窮巷ニ在リ、席ヲ以テ門トナス、然レドモ門外ニハ長者ノ車轍多カリキ」

【石門關】 五代史四夷附錄に「西北入二居庸關一、明日又西北入二一一關路崖狹、一夫可レ以當レ百、此中國控扼契丹之險也」

【戚揚】 戚は斧、揚は鉞なり、詩の大雅に「干戈一一、爰方啓行」

【石榴】 「ザクロ」花の八重なるは實なし、李白の詩に「大火五月中、景風從二南來一、數枝一一發、十丈藕花開」

【積流】 海をいふ、海賦に「茫茫一一、含二形內虛一」

【鵪鴒原ニ在リ】 兄弟互に難を救ふをいふ、詩の小雅常棣篇に「鵪鴒在レ原、兄弟急難」の註に「鵪鴒ハ水鳥ナリ、鵪鴒飛ベバ則チ鳴キ、行ケバ則チ搖ク、急難ノ意有リ、故ニ以テ興ジテイフ」成語考に「兄弟ハ鵪鴒ノ相親ムニ似タリ、マタ患難相顧ルハ、鵪鴒ノ原ニ在ルニ似タリ」

【寂寥】 さびしき義、寂寞に同じ、楚辭に「聲嘵嘵以一一兮」

【淅瀝】 雨雪の聲なり、ばらばらと音するをいふ、謝惠連の雪賦に「霰一一而先集」

【舄鹵】 一に潟滷に作る、斥鹵に同じ、鹹くして荒蕪せる地をいふ、字彙に「東方謂二之斥一西方謂二之鹵一」とあり 漢書溝洫志に「終古一一兮生二稻粱一」

【尺蠖ノ屈スルハ信ビンコトヲ求ムルナリ】 尺蠖は「シャクトリムシ」易の繫辭に「尺蠖之屈スルハ以求レ信也、龍蛇之蟄以存身也」とあり、尺蠖の屈めるは、伸びんことを求むる爲めなり、龍蛇の蟄めるは、身を保存せん爲めなり、以て人の艱難に耐ふるは、他日立身出世の基たるに喩ふ、信は伸に通ず、

【施恩山】 (施閏章)を見よ、

【世間ノ好物ハ堅牢ナラズ】 世の中の「ヨキモノ」はながくもたぬ、白居易の簡簡吟に「世間好物不二堅牢一、彩雲

易散琉璃碎」

【世人甚ダ牡丹ヲ愛ス】（世人甚愛牡丹）周茂叔の愛蓮説の句なり、舒元輿牡丹賦の序に「天后之郷西河也、精舎下有牡丹種、其華特異、天后欽上苑之有闕因命移植焉、由此京國牡丹、日日寖盛、今自禁闥泊官署、外延士庶之家、溯漫如四瀆之流、每暮春之月、遨遊之士、亦上國繁花之一事也」

【施主】檳那に同じ、釋氏要覽に「梵語ノ陀那鉢底唐ニハ云フ」

【世說新語】三卷、宋の臨川王劉義慶撰す 後漢より東晉までの軼事佳話を三十六門に分ちて 採録す、梁の劉孝標之に注す、天保二年の翻刻本あり、新語とは劉向の舊書に對していふ、

【世尊】佛の十號の一、法數に「謂以智慧等法、破彼貪瞋癡等不善之法、滅生死苦、得無上覺、天人凡聖世間出世間咸皆尊重、故號ニハ云フ」

【刹那】倶舍論に「時ノ極メテ少キヲハ名ツケ、時ノ極メテ長キヲ劫トナス」またいふ「有力ノ丈夫一彈指ノ頃ニ六十五ハアリ」

【說】文の一體なり、文體明辨に「字書ヲ按ズルニ、說ハ解ナリ、述ナリ、義理ヲ解釋シテ、己ガ意ヲ以テ之ヲ述ブルナリ、說ノ名、說卦ヨリ起ル、漢ノ許愼、說文ヲ作ルニモ、亦其ノ名ヲ祖トシテ、以テ篇ニ名ツク」

【雪案】雪をあつめて燈に代へて書を讀む「ツクエ」「ハ螢窓」と對用す、晉の孫康の故事（孫康）を見よ、

【襲衣】「フダンギ」私服なり、論語に「紅紫不以爲褻服」また肌つきの「キモノ」司馬相如の句に「表其ハレ」

【竊位】論語に「臧文仲其竊位者與」疏に「賢ヲ知リテ舉ゲズ、位ニ偸安ス、故ニハ竊位ト云フ」

【攝位】假に君位を攝するなり、左傳隱元年に「不書」即位攝也」註に「君ノ政ヲ假攝シテ、卽位ノ禮ヲ修セズ云云」

【絕域】遠き外國をいふ、漢書武帝紀に「詔州郡ニ察吏民有可爲將相使ハ者」文選の遊天台山賦に「邈彼ハ」

【雪衣娘】鸚鵡の異名、明皇雜錄に「開元中、嶺南獻白鸚鵡、養之宮中、頗聰慧、洞曉人言、上及貴妃皆呼ハ」

【雪隱】廁（カハヤ）の異名、雪峯禪師常に此に在りて掃除の事を執られしにより稱す、烏臼沙摩經註に「福州雪峯義存禪師常住掃除、於是大悟、故名矣」一說に、雪竇禪師「靈隱寺の司廁の職たりしによりていふと、

【絕纓】夜宴の席にて忽ち燭の滅するをハといふ、楚の莊王群臣と夜飲せし次に、燭忽ち滅せり、一人あり、美人の衣を牽けり、美人王に告げて曰く、人あり妾の衣を牽けり、已に其の纓を絕ち得たりと、王曰く、人に飲ましむるに酒を以てして、人を責むるに禮を以てするは、吾爲さざるなりと、遂に左右をして盡く其の纓を絕たしめ、然る後に燭を繼げり、

【折腰】人の下に屈するをいふ、晉書隱逸傳に「陶潛彭澤令トナル、郡ノ督郵至ル、曰ク應ニ束帶シテ見ユベシト、潛歎ジテ曰ク、吾不能爲五斗米折腰事鄉里小兒ニト、卽日印ヲ解キ去ル」とあるに本づく、

【折閱】荀子修身篇に「良賈不爲折閱而不市」の註に「折損也、謂損所閱賣之物價也」

【節ヲ折ル】（折節）己の主持する所ろの意をまぐる義、戰國策に「以秦之強ヲ以テ而下與國ニ臣恐其害於東周ニ」

【拙ヲ守ル】（守拙）を見よ、

【舌耕】辯舌講說を以て、生計を爲すをいふ、事文類聚に「賈逵、口ニ經文ヲ誦シテ以テ人ニ敎フ、贍遺者盈積ス、或ヒト曰ク、逵ハ力耕ニアラズ、乃チ舌耕ナリト」從容錄に「才士筆耕、辯士舌耕」

【絕交】人とつきあひをやむる義、戰國策に「西生秦惠北絕齊交、則兩國之兵必至矣」

【雪客】「サギ」の異名、楊文公談苑に「鷺曰ハ云ゝ」

【折檻】漢書朱雲傳に「成帝ノ元延元年、朱雲、佞臣安昌侯張禹ヲ斬ラントテ極諫ス、上大ニ怒リテ曰ク、小臣下ニ居リテ上ヲ訕リ、師傅ヲ廷辱ス、罪死ストモ赦サズト、御史雲ヲ將キテ下ラントス、雲檻檻ヲ攀ヅ檻折ル、雲呼ンデ曰ク、臣下龍逢比干ニ從ヒテ 地下ニ遊ブヲ得バ足レリ云云」これより人を強く責め諫むるを、わが國にてハといふ、

【切玉】古の名劒の名、列子に「周穆王征西戎、西戎獻昆吾之劒、錬銅赤刃用之ハレ如切泥」と、博物志にも「昆吾獻ハ刀ハレ如臘糓」

【薛居正】字は子平、宋の開封浚儀の人、太祖に仕へ、參知政事より門下侍郎平章事に至り、晩に司空に進み、太平興國六年卒す、年七十、太尉中書令を贈り、文惠と諡せらる、勅を奉じて舊五代史百五十卷目錄二卷を撰す、

【絕句】詩の一體、起句承句轉句結句の四句より成る、五言ハ、七言ハ等の別あり、また四言、六言のものもあり、朱飲山の千金譜錄要に「五言ハ眞質ヲ尚ブ、質

多クシテ文ニ勝ツヲ要ス、七言ハ高華ヲ尚ブ、文多クシテ質ニ勝ツヲ要ス、五言ハ樂府ニ近ク、七言ハ歌行ニ近シ、五言ハ七言ヨリモ難シ、要スルニ、皆微旨遠意アリ、語淺ク情深ク、開合反正一氣呵成シテ、宮商諧叶スルヲ正宗トナス」と、五言——、七言——の例を示せば、

竹里館　五言　王維

獨坐幽篁裏、彈琴又長嘯、深林人不知、明月來相照、

楓橋夜泊　七言　張繼

月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、

【折桂】科第に登るをいふ、避暑錄話に「世以登科爲——「此謂郤詵對策東堂、自云桂林一枝也、自唐以來用之、溫庭筠詩云、猶喜故人先——、自憐羈客尚飄蓬」と、桂林ノ一枝を見よ、

【折戟】「ヲレタルホコ」杜牧の赤壁の詩に「——沈沙鐵半銷」

【雪月花時最モ君ヲ憶フ】（琴酒詩ノ）を見よ、

【節俠】氣節ありて弱き者を助け、強き者を挫くをいふ、史記刺客傳に「爲行而使人疑之非——也」

【節儉】用度を節減するをいふ、儉約に同じ、長楊賦に「垂意於至寧、躬服——」

【絕紘】（知音）を見よ

【折肱】（三タビ肱ヲ）を見よ、

【絕國】遠く離れたる國、淮南子修務訓に「——殊俗」絕域に同じ、

【切磋琢磨】詩の衞風淇奧篇に「瞻彼淇奧、綠竹猗猗、有斐君子、如切如磋、如琢如磨」とあるに本づく、骨角を治むる者は、すでに切るに、刀斧を以てし、而して又磋ぐに鑢を以てす、玉石を治むるものは、すでに琢くに、槌鑿を以てし、また磨くに沙石を以てす、君子の德すでに修まり、更に進みて已むことなき、亦此の如くすべしとなり、

【雪兒】北夢瑣言に「——者、唐李密之愛姬、能歌舞、每見賓朋有文章奇麗入意者、即付——叶音律以歌之故號——歌」と、この事は世說にも出づ、

【舌人】「ツウベン」周語の注に「——能達異方志、象胥之官也」

【絕唱】詩歌の格調のすぐれて佳なるをいふ、宋書謝靈運傳に「——高嶷、久無嗣音」東觀餘論に「杜子美詩古今——也」

【切齒捥腕】切齒は、齒相摩切するなり、捥腕は、左手を以て右腕を扼するなり、皆奮怒の意なり、史記張儀傳に「天下之遊談士、莫不日夜切齒以言從之便以說人主」また刺客傳に「樊於期偏袒搤腕而進曰、此臣日夜切齒腐心也」

【攝受折伏】苦修練行してその心を修攝するを攝受といひ、順逆二緣に對してたとひ杖木の難に逢ひても佛法の實義を說きさかするを折伏といふ、天台曰、法華折伏破權門理、涅槃攝受更許權門、

【絕緒】「アトツギ」の絕えたること、後漢書張衡傳の注に「——言無後也」絕嗣に同じ、

【折衝】敵人の衝突し來るを折き止むる義、晏子春秋に「孔子曰、不出樽俎之閒而——千里之外、晏子之謂也」淮南子に「——萬里」

【設色】「サイシキ」揮塵錄に「李思訓——山水」名物方言に「畫工ヲ畫史マター——工トイフ」

【攝政】君の位に即かずして、假りに君の事を兼ね行ふをいふ、史記五帝紀に「舜得舉用事二十年、而堯遂使——」歐陽修の春秋論に「所謂攝トハ、臣、君ノ事ヲ行フノ名ナリ」

【攝生】猶ほ生を養ふといふが如し、韓非子に「動無死地、而謂之善——矣」

【攝生四養】四つの養生法なり、張南軒の語、曰く「少ク思以養神、少ク慾以養精、少ク勞以養力、少ク言以養氣」

【設帨今旦】女子の生日をいふ、禮記の內則に「子生、男子設弧於門左、女子設帨於門右」と、弧は弓、帨は佩巾なり、この二物を以て男女の表とす、

【折節】（節ヲ折ル）を見よ、

【屑屑】安からざる貌、廣雅釋訓に見ゆ、また「ツトメハタラク」貌、漢書董仲舒傳の注に「——ハ動作ノ貌」また「ツマラヌ」ことに「アクセク」する貌、後漢書崔駰傳の注に「——ハ猶ホ區區ノ如シ」

【切切偲偲】切切は懇到なり、偲偲は詳勉なり、朋友は互に懇到にして互に忠告して勉め勵ますべき義、論語子路篇に「孔子曰、朋友——、兄弟怡怡」

【楔ノ材】楔は櫼櫨、所謂枅なり、「マスガタ」枅は梁上の短柱「ウダチ」以て小才に喩ふ、班彪の王命論に「——之——不荷棟梁之任」

【薛瑄】（薛文清）を見よ、

【節攩】抑へて制限をすること、管子に「節飲食攩衣服」とあり、（攩節）を見よ、

【雪堂】蘇長公年譜に「公年四十七、黃州ニ在リ、臨皐亭ニ寓居ス、東坡ニ就キテ雪堂ヲ築キ、自ラ東坡ト號ス」

とあり、堂は雪中に之を爲る、因て雪を四壁に繪くといふ、

【絶倒】 驚歎の義、轉じて極めて笑ふ義にも用ふ、晉書の衛玠傳に「好ンデ玄理ヲ言フ、王濟字ハ平子、高名アリ、推服スル所ロ少シ、玠ガ言ヲ聞ク毎ニ、輒チ歎息絶倒ス、時ノ人之カ語ヲ爲シテ曰ク、衛玠談ジ道平子絶倒ト」一說に——は感服の義とす、賓退錄にも、右の故事を引きて、今流俗、大笑を謂つて——となすは非なりといへり、駒陰冗語に「願成章以俚語爲詩、極有思致、令人——然亦以此薄德」

【折中】 折は斷なり、中は衷に同じ、輕からず、重からず、その中正を得るなり、史記の孔子世家の贊に「孔子布衣、傳十餘世、學者宗之、自天子王侯、中國言六藝者、——於夫子、可謂至聖矣」孔子の言を取りて事の中を斷ちて、疑ふ所ろを定むるなり

【雪中ノ四友】 玉梅、臘梅、水仙、山茶をいふ、月令廣義に見ゆ、

【攝提格】 寅の歲の異名、漢書張純傳の注「太歲在寅曰——十二支を見よ、

【雪泥鴻爪】 「アトカタ」の、遺らざるに喩ふ、東坡の詩に「人生到處知何似、應似飛鴻踏雪泥、泥上偶然留指爪、鴻飛那復計東西」とあり、賴山陽の鴻雪處記に「鴻之歸、不於雪以記其所過、其來雪滅而痕不可知也、古人以喩人之游歷無跡」とあり、

【刹帝利】 田主と譯す、天竺の四姓の一、四姓とは、一に婆羅門(淨行ト譯ス、出家シテ清淨ノ行ヲ修スルヲ以テ四姓ノ首トス)二に——(田主又ハ王種ト譯ス)三に毘舍(商賈ト譯ス)四に首陀(農人ト譯ス)

【蝶鬢】 蝶は、狎なり、慢なり、鬢は汚濁なり、漢書枚乘傳に「——貴幸多ク男女閒ノ「ナレゲガルル」に用ふ、

【刹那】 最も短き時をいふ、(一刹那を見よ、

【稅ニ藻ガク】 稅は「ウツバリ」の上の短き柱「ウダチ」それに水草をゑがきて飾とするなり、論語に「子曰、臧文仲居蔡山節藻稅、何如其知也」注に「居ハ猶ホ藏ノ如シ、蔡ハ大龜ナリ、節ハ柱頭ノ斗拱ナリ、藻ハ水草ナリ、稅ハ梁上ノ短柱ナリ、蓋シ藏龜ノ室タリ、而シテ山ヲ節ニ刻シ、藻ヲ稅ニ畫ケルナリ、當時文仲ヲ以テ知ト爲ス、孔子言フ、民ノ義ヲ務メズシテ鬼神ニ諂瀆スルコト此ノ如シ、安ゾ知タルヲ得ンヤ云々」

【切ニ問ヒテ近ク思フ】 切問而近思、切に道を問ひて、近く己の身に在る者を思ふなり、論語子張篇に見ゆ、

【薛包】 漢書に「薛包學ヲ好ミ行ニ篤シ、父後妻ノ言ヲ信ジ、包ヲ憎ミテ他ニ家居セシメントス、包日夜號泣シテ去ルコト能ハズ、毆打セラルヽニ至リテ、已ムコトヲ得ズ、出デテ舍外ニ廬シ、旦ニハ必ズ入リテ洒掃ス、父母又之ヲ逐フ、包猶ホ去ルコト能ハズ、乃チ里門ニ廬シ、晨昏ニハ、必ズ安否ヲ問フ、此ノ如キコト歲餘、終始一日ノ如シ、父母遂ニ感悟シ、命ジテ家ニ還ラシム、父母亡スルニ及ビテ、哀痛シテ疾ヲ成セリ、後チ諸弟、居ヲ異ニセンコトヲ求ム、包止ムルコト能ハズ、諸弟ノ欲スル所ロニ從フ、而シテ奴婢ハ、其ノ老イタル者ヲ引キテ曰ク、我ト事ヲ共ニスルコト久シ、若使フコト能ハジト、器物ハ其ノ朽敗スル者ヲ取リテ曰ク、吾素ヨリ服習シテ、身體ノ安ズル所ロナリト、田廬ハ其ノ荒頓セル者ヲ取リテ曰ク、吾少キ時治ムル所ロニシテ、意ノ戀フ所ロナリト、後チ弟ノ產ヲ破リテ、自立スルコト能ハザルモノアルトキハ、包復之ヲ賑給セリ」

【絶筆】 筆を止むる義、杜預、左氏傳序に「絶筆於獲麟之一句ニ」

【說郛】 百二十卷、明の陶宗儀の原本に、郁文博・陶珽二人の增補せしものなり、この書は全書を節錄して編輯せしものなり、說郛續四十六卷、明の陶珽編す、說郛

は元代にとどまるを以て、この書は主として明人の雜著を鈔錄せり、

【襲服】 私居の服なり「フダンギ」論語に「紅紫不以爲——」

【折伏攝】 折は即ち挫折なり、伏は即ち摧伏なり、六道の衆生、三界の中に於て、五欲に貪著し、生死に流轉して、卒に度脫し難し、故に如來、諸の善惡の果報及び地獄等の種種の苦切の言を說きて、その心を折伏して、之を攝受せしむ、是を——と名づく、

【接物】 人に接する義、物は人物なり、漢書司馬遷傳に「敕以愼于接物」

【竊鉄ノ疑】 疑ふまじき者を疑ふこと、疑心暗鬼を生ずといふに同じ、列子に「人鉄ヲ亡フ者アリ、其ノ隣人ノ子ヲウタガフ、其ノ行步ヲ視ルニ、鉄ヲ竊メルナリ、ソノ顏色モ鉄ヲ竊メルナリ、言語モ鉄ヲ竊メルガ如キナリ、動作態度、爲ルトシテ鉄ヲ竊ムニアラサルハナシ、俄ニシテ其谷ヲ掘リテ而シテ其ノ鉄ヲ得タリ他日復タ其ノ隣人ノ子ヲ見ルニ、動作態度鉄ヲ竊ムニ似タル者ナシ」とありて、張註に「語ニ之レアリ、曰ク萬事紛錯皆意ヨリ生ズ」

【節文】 品節して、文章あらしむる義、史記叔孫通傳に

「禮者因」時世人情」爲」之ー」者也」

【薛文清】（セツブンセイ）名は瑄、字は德溫、敬軒と號す明の山西河津の人、永樂十九年の進士、禮部左侍郎兼翰林院學士に至りて致仕す、天順閒卒す、謚して文清といふ、學躬行を貴び、明朝理學の宗たり、讀書錄、從政名言、從政錄等の著あり、

【薛文清集】（セツブンセイシフ）二十四卷、明の薛瑄撰す、この書は門人張鼎の編せしところなり、文章雅正にして具に典刑あり、詩も亦沖淡遒すべし、

【舌本強ナリ】（ゼツポンキヤウ）書言故事に「俗語ニ、三日談ゼサレバ舌本強ナリトイフ、殷仲堪自ラ言フ、三日道德經ヲ讀マザレバ便チ舌本ノ閒強ナルヲ覺ユト」

【切磨】（セツマ）研磨して益をはかる、唐書に「ー」之益不」盡矣」

【切夢刀】（セツムダウ）夜なかの風をいふ、藝林伐山に「施肩吾ノ閨情ノ詩ニ、三更風作」切夢刀」萬種愁成」係」腸線」とあり、

【絕目】（ゼツモク）日のとどく限りをいふ、文選鮑明遠の詩に「ー」盡平原」

【訣文解字】（セツモンカイジ）三十卷、漢の許愼撰す、愼字は叔重、汝南の人、性淳篤にして博く經籍に通ず、時人語を爲りて曰く「五經無雙許叔重」と、この書は指事・象形・形聲・會意・轉注・假借の六書によりて文字の起源意義を解說せるものなり、自序に「蒼頡ノ初メテ書ヲ作ルヤ、蓋類ニ依リテ形ヲ象ル故ニ之ヲ文トイフ、ソノ後形聲相益シ、即チ之ヲ字ト謂フ、文ハ物象ノ本、字ハ孳乳シテ寖ク多キヲ言フナリ云々」

【切問近思】（セツモンキンシ）（切ニ問ヒテ）を見よ

【節用】（セツヨウ）用ふることを節して、妄に費さざるをいふ、論語に「節」用而愛」人」また荀子に「上以」法取焉、而下以」禮ー」之、餘若」丘山」

【絕倫】（ゼツリン）倫は等なり、類なり、人に超えてすぐるるなり、漢書揚雄傳に「桓譚以爲ー」また甘延壽傳に「投石超距、絕」於等倫」

【設醴】（セツレイ）（醴ヲ）を見よ、

【錢】（ゼニ）國語に「周ノ景王二十一年、將ニ大錢ヲ鑄テ以テ人ヲ振救セントス云々」財貨源流に「錢ノ幣タル、銅ヲ以テ之ヲ爲ル、體圓ニ孔方ニ、背而兩好、皆周郭アリ、四方ニ周流スルノ象ナリ、爰ニ禹湯ヨリ始メテ金ヲ用ヒテ幣ヲ鑄ル、周ハ九府圜法ヲ立テ、輕重鉄ヲ以テス從來スル處遠シ」と、史記天官書の注に「錢ハ古泉字ニ作ル」（泉布）また（錢神論）を參看せよ、

【瞼ヲ交フ】（マブタ）（交瞼）寐ること、瞼は目旁の毛なり「マツ

【浹洽】（セフカフ）漢書袁盎傳に「太后嘗病、三年、陛下不ー」ー」解」帶」

【捷徑】（セフケイ）「チカミチ」をいふ、離騷に「夫唯捷徑以窘」步」の註に「捷ハ疾ナリ、徑ハ邪道ナリ」徑は道の小にして直なるをいふ、

【浹日】（セフジツ）浹は「アマネク」めぐる義、ーーは、甲より癸に至る十日をいふ、國語の楚語に「遠不」過」三日、近不」過ーー」

【浹辰】（セフシン）子より亥に至るをいふ周匝十二日なり、左傳宣九年に「莒恃」其陋」而不」修」城郭、ーー之閒、而楚克」其三都、無」備也夫」

【囁嚅】（セフジユ）言はんと欲してまた口を縮むるをいふ、韓愈の送」李愿歸」盤谷」序に「口將」言而ーー」

【攝提格】（セツテイカク）（ーーー）を見よ、

【慴伏】（セフフク）慴は讋と同じ、氣を失ひておそれ伏すなり、史記項羽紀に「一府中皆ーー莫」敢起」」

【讋服】（セフフク）漢書項籍傳に「諸將讋服」の注に「讋失」氣也」と、服は一に伏に作る、

【摺本】（セフホン）「ヲリデホン」王氏書苑に「智永ノ千文、唐粉蠟紙ノーー、內一幅麻紙ナルハ是レ眞迹」

【嬉好】（セフヨ）女官の名、顏師古曰く「嬉ノ言ハ接ナリ、上ニ幸セラルルヲイフ、好ハ美稱ナリ」と、愷悌に作る、同じ、女の「ウックシキ」貌、史記外戚世家に「李夫人卒、則有」尹ーー之屬」更有」寵」また史記に「褚先生曰、ーー秩比」列侯」

【涉獵】（セフレフ）涉とは、水を涉るが如く、獵とは獸を獵るが如く、之を歷覽して、專精ならざるをいふ、漢書賈山傳に「所」言ーー書記」不」能」爲」醇儒」また、書言故事に「博覽ヲーートイフ」

【浹和】（セフワ）「トトノヒヤハラグ」彼も此もあまねくやはらぐ、韓文の新修滕王閣記に「人吏ーー」

【燮和之任】（セフワノニン）宰相の任をいふ、韓文の爲」裴相公」讓」官表の句、燮は和調なり、周官に「燮理陰陽」とあるに本づく、

【蟬】（セミ）董仲舒答問書に「齊王之女、怨」王而死、化爲」蟬登レ樹而鳴、故蟬名」齊女化」」と、また蟬に五美あり、陸士龍の寒蟬賦に云ふ「頭上ニ緌アルハ文ナリ、氣ヲ含ミ露ヲ飮ムハ淸ナリ、黍稷享ケザルハ廉ナリ、處ルニ、巢居セザルハ儉ナリ、候ニ應ジテ常ヲ守ルハ信ナリ」詩經に「五月鳴蜩」蜩は蟬なり、

【饌】（セン）立派に備はれる食物をいふ、說文に「具食也」盛ーと熟す、

【膳】説文に「具食也」とあり、徐鍇曰く「言具備此食也、庖人和味必加善故从善」具食とは種種の味をそなへたる料理なり、

【禪】具には禪那といふ、靜慮と譯す、世間の戲樂俗緣を離れて心に一切の係累を斷つをいふ、定の義、思惟修・明心達理などと義譯す、

【善惡之應殃慶 立 至】日本外史重盛諫父の條に見ゆ、善をなせば慶あり、惡をなせば殃あり その應報速に至るをいふ、殃は、凶咎なり、慶は福なり、立は速の義、易に「積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃」とあるに本づく、

【妄夷】刈りて平ぐるをいふ、左傳隱六年に「見惡如農夫之務去草焉、芟夷薀崇之」と、薀崇とは、薀積崇聚するをいふ、

【瞻依】瞻は尊み仰ぐなり、依は親み依るなり、詩經に「靡瞻匪父 靡依匪母」と、轉じて父母の義とす、

【禪位】御讓位なり、禪はゆづりかはらしむる義、文獻通考に「玄宗一一于太子亨」また位をゆづり受けるをば受禪といふ、

【闇幽】（幽ヲ闇ク）を見よ、

【先憂後樂】范文正公神道碑に「公少クシテ大節アリ、其ノ富貴貧賤、毀譽歡戚ニ於ケル、一モ其ノ心ヲ動カサズ、慨然トシテ天下ニ志アリ、嘗テ自ラ誦シテ曰ク、士ハ當ニ天下ノ憂ニ先チテ憂ヘ、天下ノ樂ニ後レテ樂ムベキナリト」抱朴子にも「先憂爲後樂之本、暫勞爲永逸之始」とあり、

【先引】先導に同じ、漢書蕭望之傳に「少史冠法冠、爲妻一一」

【單于】匈奴の君長の稱、廣大の義、天の單于、即ち廣大に象りて名づく、史記匈奴傳に「匈奴一一曰頭曼」

【先塋】塋は「ハカバ」一一は祖先の墓、過庭錄に「吾恐愚民致疑害爾一一」

【僞永ノ論】書言故事に「談論深長ニシテ味アルヲ僞永ノ論トイフ」とあり漢書の劉通傳に「通戰國ノ時、說士ノ權變ヲ論ジ、亦自ラ其ノ說ヲ序ス、凡ベテ八十一首、號シテ僞永トイフ」註に「僞ハ肥肉ナリ、永ハ長ナリ其ノ論ズル所ロ甘美ニシテ義深長ナルヲイフ」一說、僞音「シュン」僞また俊に同じと、

【僭越】分に過ぐるをいふ漢書の五行志に「庶位節ヲ踰ユ、コレヲ僭トイフ」また賈誼傳に「諸侯王一一シテ地古制ニ過グ」北史に「宜杜漸防萌無和一一」韓愈の上于襄陽書に「不爲一一也」

【嬋媛】連るなり、揚雄の反騷に「有周氏之一一」（センクヮン）を見よ、

【潺湲】（一一）を見よ、

【善ヲ行フハ以テ名ノ爲メニセズ、而シテ名之ニ從フ】（行善不以爲名、而名從之）列子に出づ、楊朱の語なり、

【善ヲ責ムルハ朋友ノ道ナリ】（責善朋友之道也）孟子の語、

【膳ヲ損ス】（損膳）食膳の費を減ずるをいふ、史記平準書に「天子乃一一解乘輿駟出御府禁藏以贍之」

【善ヲ盡シ、美ヲ盡ス】（盡善盡美）完全無缺の義、論語に「子謂韶、盡美矣、又盡善也、謂武盡美矣、未盡善也」韶は舜の樂、武は武王の樂、

【善ヲ留ムルナシ】（無留善）善あれば直ちに行ひ、留滯することなきをいふ荀子に「一一一一、無宿問」

【善ヲ作ス之ニ百祥ヲ降ス】（作善降之百祥）商書に見ゆ、下に「作惡降之百殃」とあり、

【善ヲ爲ス最モ樂シ】（爲善最樂）後漢の明帝永平十一年に、東平王蒼（光武ノ第三子）來朝す、蒼は上の即位の初より驃騎將軍となり、五年にして國に歸る、是に至りて入朝す、上問ふ、家に處て何を以て樂と爲すと、蒼曰く一一一一と、後漢書に見ゆ、また鶴林玉露に「余ガ家山谷ノ八大字ヲ藏ス、云フ、作德日休一一一一、經史ノ語ヲ摘ミ、混然天成、座右ニ置クベシ」

【善ヲ爲スモ名ニ近ヅクナカレ、惡ヲナスモ刑ニ近ヅクナカレ】莊子の養生主篇に「爲善無近名、爲惡無近刑」とあり、生を輕んじ義に趨くも、名を要するに至らず、生を貪り利を逐ふも、罪に陷るに至らざれとの意、

【善ヲ陳ベ邪ヲ閑ゾ】（陳善閉邪）孟子離婁上に「故曰、責難於君、謂之恭、一一一一、謂之敬」

【善賈】「ヨキネダン」賈は價に同じ、論語子罕に「求一一而沽諸」（待賈）を見よ、

【纖介】纖は「コマカキスデ」介は芥なり「アクタ」微細の義なり、戰國策に「無一一之禍」者、馮煖之計也」また後漢書に「臣之與卓、未無纖芥之嫌」

【跳行】「ハダシアルキ」瀛涯勝覽に「占城男女俱一一」

【銓衡】銓も亦衡なり、量なり、人物を銓量するをいふ、晉書、吳隱之傳に「汝若居一一、當舉如此輩人」とあり、吏部の官を銓官、或は銓衡の職といふは、人材を量りて任用するが故なり、抱朴子に「一一不平則輕重錯經」斗斛不正則少多混亂」

【纖巧】こまかきたくみ、俗にいふ小刀細工の上手なるをいふ、古樂府類編序に「其末一一而不振」

【善行轍迹ナシ】（善行無轍迹）轍は、車輪のあと、迹は足あとなり、眞の善行は、人に目立つことなきに喩ふ、老子の語、

【仙客】（センカク）鶴の異名、楊文公談苑に「鶴曰『一一』（ト）」また仙人をいふ、唐の明皇の句に「一一厭『人閒』」

【先覺】（センカク）人に先だちて道理を悟る者の稱、孟子に「予天民之一一者也予將『以斯道』覺『斯民』」

【遷客】（センカク）「ルニン」通鑑の後晉紀に「池州多『一一』」胡三省の註に「罪ヲ以テ外州ニ遷降セラルル者、ソノ州人之ヲ謂ツテ一一トナス」

【禪學】（ゼンガク）漢事始に「賓林ニイフ、佛涅槃ノ時、迦葉ニ告テ曰ク、吾清淨ノ法眼ヲ以テ汝ニ付スト、迦葉ヨリ阿難ニ傳フ」二十八代ニシテ達磨ニ至ル、梁ノ普通年中（武帝の年號）ニ南天竺ヨリ、海ニ泛ビテ廣州ニ至ル、後ニ嵩山ニ止リテ少林寺ニ住シ、惠可ニ傳フ、中國禪ヲ談ズルコレヨリ始マレリ」

【屏顏】（センガン）山の清くそば立つをいふ、屏一音「サン」曉に通ず、歐陽修の句に「空碧更『一一』」蘇軾の句に「攝衣步『一一』」

【千巖萬壑】（センガンバンガク）晉の顧愷之、會稽に遊ぶ、人山水の美を問ふ、答へて曰く「千巖競秀、萬壑爭流」

【錢起】（センキ）字は仲文、吳郡の人、詩に工なり、唐の天寶中、進士に擧げらる、詩は郎子元と名を齊しくす、士林語して曰く、前に沈宋あり、後に錢郎ありと、大曆十才子の第一人なり、著すところ錢仲文集十卷あり（湘靈鼓瑟を見よ、

【川芎】（センキュウ）漢藥の名、本草に出づ、古名「ヲンナカヅラ」

【氈裘】（センキュウ）獸毛の衣にて、夷狄の服する所ろ、轉じて夷狄の義とす、司馬遷の書に「一一之君長、咸震怖」

【潛邱劄記】（センキュウサツキ）六卷、清の閻若璩撰す、この書は經籍を考證し、雜說・釋地餘論・潛邱劄記・古文尚書冤詞・尚書古文疏證・孟子生卒年月考・四書釋地・四書釋地又續・四書釋地三續・毛朱詩說・古文尚書冤詞補正・古文尚書考・尚書古文疏證補・尚書古文疏證辨・尚書古文疏證辨補・尚書古文疏證辨補正・尚書古文疏證辨補正續・尚書古文疏證辨補正三續・尚書古文疏證辨補正四續・尚書古文疏證辨補正五續・尚書古文疏證辨補正六續・尚書古文疏證辨補正七續・尚書古文疏證辨補正八續・尚書古文疏證辨補正九續・尚書古文疏證辨補正十續・尚書古文疏證辨補正十一續・尚書古文疏證辨補正十二續・尚書古文疏證辨補正十三續・尚書古文疏證辨補正十四續・尚書古文疏證辨補正十五續・尚書古文疏證辨補正十六續・尚書古文疏證辨補正十七續・尚書古文疏證辨補正十八續・尚書古文疏證辨補正十九續・尚書古文疏證辨補正二十續・尚書古文疏證辨補正二十一續・尚書古文疏證辨補正二十二續・尚書古文疏證辨補正二十三續・尚書古文疏證辨補正二十四續・尚書古文疏證辨補正二十五續・尚書古文疏證辨補正二十六續・尚書古文疏證辨補正二十七續・尚書古文疏證辨補正二十八續・尚書古文疏證辨補正二十九續・尚書古文疏證辨補正三十續・尚書古文疏證辨補正三十一續・尚書古文疏證辨補正三十二續・尚書古文疏證辨補正三十三續・尚書古文疏證辨補正三十四續・尚書古文疏證辨補正三十五續・尚書古文疏證辨補正三十六續・尚書古文疏證辨補正三十七續・尚書古文疏證辨補正三十八續・尚書古文疏證辨補正三十九續・尚書古文疏證辨補正四十續・尚書古文疏證辨補正四十一續・尚書古文疏證辨補正四十二續・尚書古文疏證辨補正四十三續・尚書古文疏證辨補正四十四續・尚書古文疏證辨補正四十五續・尚書古文疏證辨補正四十六續・尚書古文疏證辨補正四十七續・尚書古文疏證辨補正四十八續・尚書古文疏證辨補正四十九續・尚書古文疏證辨補正五十續・尚書古文疏證辨補正五十一續・尚書古文疏證辨補正五十二續・尚書古文疏證辨補正五十三續・尚書古文疏證辨補正五十四續・尚書古文疏證辨補正五十五續・尚書古文疏證辨補正五十六續・尚書古文疏證辨補正五十七續・尚書古文疏證辨補正五十八續・尚書古文疏證辨補正五十九續・尚書古文疏證辨補正六十續・尚書古文疏證辨補正六十一續・尚書古文疏證辨補正六十二續・尚書古文疏證辨補正六十三續・尚書古文疏證辨補正六十四續・尚書古文疏證辨補正六十五續・尚書古文疏證辨補正六十六續・尚書古文疏證辨補正六十七續・尚書古文疏證辨補正六十八續・尚書古文疏證辨補正六十九續・尚書古文疏證辨補正七十續・尚書古文疏證辨補正七十一續・尚書古文疏證辨補正七十二續・尚書古文疏證辨補正七十三續・尚書古文疏證辨補正七十四續・尚書古文疏證辨補正七十五續・尚書古文疏證辨補正七十六續・尚書古文疏證辨補正七十七續・尚書古文疏證辨補正七十八續・尚書古文疏證辨補正七十九續・尚書古文疏證辨補正八十續・尚書古文疏證辨補正八十一續・尚書古文疏證辨補正八十二續・尚書古文疏證辨補正八十三續・尚書古文疏證辨補正八十四續・尚書古文疏證辨補正八十五續・尚書古文疏證辨補正八十六續・尚書古文疏證辨補正八十七續・尚書古文疏證辨補正八十八續・尚書古文疏證辨補正八十九續・尚書古文疏證辨補正九十續・尚書古文疏證辨補正九十一續・尚書古文疏證辨補正九十二續・尚書古文疏證辨補正九十三續・尚書古文疏證辨補正九十四續・尚書古文疏證辨補正九十五續・尚書古文疏證辨補正九十六續・尚書古文疏證辨補正九十七續・尚書古文疏證辨補正九十八續・尚書古文疏證辨補正九十九續・尚書古文疏證辨補正百續・尚書古文疏證辨補正百一續・尚書古文疏證辨補正百二續・尚書古文疏證辨補正百三續・尚書古文疏證辨補正百四續・尚書古文疏證辨補正百五續・尚書古文疏證辨補正百六續・尚書古文疏證辨補正百七續・尚書古文疏證辨補正百八續・尚書古文疏證辨補正百九續・尚書古文疏證辨補正百十續・尚書古文疏證辨補正百十一續・尚書古文疏證辨補正百十二續・尚書古文疏證辨補正百十三續・尚書古文疏證辨補正百十四續・尚書古文疏證辨補正百十五續・尚書古文疏證辨補正百十六續・尚書古文疏證辨補正百十七續・尚書古文疏證辨補正百十八續・尚書古文疏證辨補正百十九續・尚書古文疏證辨補正百二十續・尚書古文疏證辨補正百二十一續・尚書古文疏證辨補正百二十二續・尚書古文疏證辨補正百二十三續・尚書古文疏證辨補正百二十四續・尚書古文疏證辨補正百二十五續・尚書古文疏證辨補正百二十六續・尚書古文疏證辨補正百二十七續・尚書古文疏證辨補正百二十八續・尚書古文疏證辨補正百二十九續・尚書古文疏證辨補正百三十續・尚書古文疏證辨補正百三十一續・尚書古文疏證辨補正百三十二續・尚書古文疏證辨補正百三十三續・尚書古文疏證辨補正百三十四續・尚書古文疏證辨補正百三十五續・尚書古文疏證辨補正百三十六續・尚書古文疏證辨補正百三十七續・尚書古文疏證辨補正百三十八續・尚書古文疏證辨補正百三十九續・尚書古文疏證辨補正百四十續・尚書古文疏證辨補正百四十一續・尚書古文疏證辨補正百四十二續・尚書古文疏證辨補正百四十三續・尚書古文疏證辨補正百四十四續・尚書古文疏證辨補正百四十五續・尚書古文疏證辨補正百四十六續・尚書古文疏證辨補正百四十七續・尚書古文疏證辨補正百四十八續・尚書古文疏證辨補正百四十九續・尚書古文疏證辨補正百五十續・尚書古文疏證辨補正百五十一續・尚書古文疏證辨補正百五十二續・尚書古文疏證辨補正百五十三續・尚書古文疏證辨補正百五十四續・尚書古文疏證辨補正百五十五續・尚書古文疏證辨補正百五十六續・尚書古文疏證辨補正百五十七續・尚書古文疏證辨補正百五十八續・尚書古文疏證辨補正百五十九續・尚書古文疏證辨補正百六十續・尚書古文疏證辨補正百六十一續・尚書古文疏證辨補正百六十二續・尚書古文疏證辨補正百六十三續・尚書古文疏證辨補正百六十四續・尚書古文疏證辨補正百六十五續・尚書古文疏證辨補正百六十六續・尚書古文疏證辨補正百六十七續・尚書古文疏證辨補正百六十八續・尚書古文疏證辨補正百六十九續・尚書古文疏證辨補正百七十續・尚書古文疏證辨補正百七十一續・尚書古文疏證辨補正百七十二續・尚書古文疏證辨補正百七十三續・尚書古文疏證辨補正百七十四續・尚書古文疏證辨補正百七十五續・尚書古文疏證辨補正百七十六續・尚書古文疏證辨補正百七十七續・尚書古文疏證辨補正百七十八續・尚書古文疏證辨補正百七十九續・尚書古文疏證辨補正百八十續・尚書古文疏證辨補正百八十一續・尚書古文疏證辨補正百八十二續・尚書古文疏證辨補正百八十三續・尚書古文疏證辨補正百八十四續・尚書古文疏證辨補正百八十五續・尚書古文疏證辨補正百八十六續・尚書古文疏證辨補正百八十七續・尚書古文疏證辨補正百八十八續・尚書古文疏證辨補正百八十九續・尚書古文疏證辨補正百九十續・尚書古文疏證辨補正百九十一續・尚書古文疏證辨補正百九十二續・尚書古文疏證辨補正百九十三續・尚書古文疏證辨補正百九十四續・尚書古文疏證辨補正百九十五續・尚書古文疏證辨補正百九十六續・尚書古文疏證辨補正百九十七續・尚書古文疏證辨補正百九十八續・尚書古文疏證辨補正百九十九續・尚書古文疏證辨補正二百續・尚書古文疏證辨補正二百一續・尚書古文疏證辨補正二百二續・尚書古文疏證辨補正二百三續・尚書古文疏證辨補正二百四續・尚書古文疏證辨補正二百五續・尚書古文疏證辨補正二百六續・尚書古文疏證辨補正二百七續・尚書古文疏證辨補正二百八續・尚書古文疏證辨補正二百九續・尚書古文疏證辨補正二百十續・尚書古文疏證辨補正二百十一續・尚書古文疏證辨補正二百十二續・尚書古文疏證辨補正二百十三續・尚書古文疏證辨補正二百十四續・尚書古文疏證辨補正二百十五續・尚書古文疏證辨補正二百十六續・尚書古文疏證辨補正二百十七續・尚書古文疏證辨補正二百十八續・尚書古文疏證辨補正二百十九續・尚書古文疏證辨補正二百二十續・尚書古文疏證辨補正二百二十一續・尚書古文疏證辨補正二百二十二續・尚書古文疏證辨補正二百二十三續・尚書古文疏證辨補正二百二十四續・尚書古文疏證辨補正二百二十五續・尚書古文疏證辨補正二百二十六續・尚書古文疏證辨補正二百二十七續・尚書古文疏證辨補正二百二十八續・尚書古文疏證辨補正二百二十九續・尚書古文疏證辨補正二百三十續・尚書古文疏證辨補正二百三十一續・尚書古文疏證辨補正二百三十二續・尚書古文疏證辨補正二百三十三續・尚書古文疏證辨補正二百三十四續・尚書古文疏證辨補正二百三十五續・尚書古文疏證辨補正二百三十六續・尚書古文疏證辨補正二百三十七續・尚書古文疏證辨補正二百三十八續・尚書古文疏證辨補正二百三十九續・尚書古文疏證辨補正二百四十續・尚書古文疏證辨補正二百四十一續・尚書古文疏證辨補正二百四十二續・尚書古文疏證辨補正二百四十三續・尚書古文疏證辨補正二百四十四續・尚書古文疏證辨補正二百四十五續・尚書古文疏證辨補正二百四十六續・尚書古文疏證辨補正二百四十七續・尚書古文疏證辨補正二百四十八續・尚書古文疏證辨補正二百四十九續・尚書古文疏證辨補正二百五十續・尚書古文疏證辨補正二百五十一續・尚書古文疏證辨補正二百五十二續・尚書古文疏證辨補正二百五十三續・尚書古文疏證辨補正二百五十四續・尚書古文疏證辨補正二百五十五續・尚書古文疏證辨補正二百五十六續・尚書古文疏證辨補正二百五十七續・尚書古文疏證辨補正二百五十八續・尚書古文疏證辨補正二百五十九續・尚書古文疏證辨補正二百六十續・尚書古文疏證辨補正二百六十一續・尚書古文疏證辨補正二百六十二續・尚書古文疏證辨補正二百六十三續・尚書古文疏證辨補正二百六十四續・尚書古文疏證辨補正二百六十五續・尚書古文疏證辨補正二百六十六續・尚書古文疏證辨補正二百六十七續・尚書古文疏證辨補正二百六十八續・尚書古文疏證辨補正二百六十九續・尚書古文疏證辨補正二百七十續・尚書古文疏證辨補正二百七十一續・尚書古文疏證辨補正二百七十二續・尚書古文疏證辨補正二百七十三續・尚書古文疏證辨補正二百七十四續・尚書古文疏證辨補正二百七十五續・尚書古文疏證辨補正二百七十六續・尚書古文疏證辨補正二百七十七續・尚書古文疏證辨補正二百七十八續・尚書古文疏證辨補正二百七十九續・尚書古文疏證辨補正二百八十續・尚書古文疏證辨補正二百八十一續・尚書古文疏證辨補正二百八十二續・尚書古文疏證辨補正二百八十三續・尚書古文疏證辨補正二百八十四續・尚書古文疏證辨補正二百八十五續・尚書古文疏證辨補正二百八十六續・尚書古文疏證辨補正二百八十七續・尚書古文疏證辨補正二百八十八續・尚書古文疏證辨補正二百八十九續・尚書古文疏證辨補正二百九十續・尚書古文疏證辨補正二百九十一續・尚書古文疏證辨補正二百九十二續・尚書古文疏證辨補正二百九十三續・尚書古文疏證辨補正二百九十四續・尚書古文疏證辨補正二百九十五續・尚書古文疏證辨補正二百九十六續・尚書古文疏證辨補正二百九十七續・尚書古文疏證辨補正二百九十八續・尚書古文疏證辨補正二百九十九續・尚書古文疏證辨補正三百續・尚書古文疏證辨補正三百一續・尚書古文疏證辨補正三百二續・尚書古文疏證辨補正三百三續・尚書古文疏證辨補正三百四續・尚書古文疏證辨補正三百五續・尚書古文疏證辨補正三百六續・尚書古文疏證辨補正三百七續・尚書古文疏證辨補正三百八續・尚書古文疏證辨補正三百九續・尚書古文疏證辨補正三百十續・尚書古文疏證辨補正三百十一續・尚書古文疏證辨補正三百十二續・尚書古文疏證辨補正三百十三續・尚書古文疏證辨補正三百十四續・尚書古文疏證辨補正三百十五續・尚書古文疏證辨補正三百十六續・尚書古文疏證辨補正三百十七續・尚書古文疏證辨補正三百十八續・尚書古文疏證辨補正三百十九續・尚書古文疏證辨補正三百二十續・尚書古文疏證辨補正三百二十一續・尚書古文疏證辨補正三百二十二續・尚書古文疏證辨補正三百二十三續・尚書古文疏證辨補正三百二十四續・尚書古文疏證辨補正三百二十五續・尚書古文疏證辨補正三百二十六續・尚書古文疏證辨補正三百二十七續・尚書古文疏證辨補正三百二十八續・尚書古文疏證辨補正三百二十九續・尚書古文疏證辨補正三百三十續・尚書古文疏證辨補正三百三十一續・尚書古文疏證辨補正三百三十二續・尚書古文疏證辨補正三百三十三續・尚書古文疏證辨補正三百三十四續・尚書古文疏證辨補正三百三十五續・尚書古文疏證辨補正三百三十六續・尚書古文疏證辨補正三百三十七續・尚書古文疏證辨補正三百三十八續・尚書古文疏證辨補正三百三十九續・尚書古文疏證辨補正三百四十續・尚書古文疏證辨補正三百四十一續・尚書古文疏證辨補正三百四十二續・尚書古文疏證辨補正三百四十三續・尚書古文疏證辨補正三百四十四續・尚書古文疏證辨補正三百四十五續・尚書古文疏證辨補正三百四十六續・尚書古文疏證辨補正三百四十七續・尚書古文疏證辨補正三百四十八續・尚書古文疏證辨補正三百四十九續・尚書古文疏證辨補正三百五十續・尚書古文疏證辨補正三百五十一續・尚書古文疏證辨補正三百五十二續・尚書古文疏證辨補正三百五十三續・尚書古文疏證辨補正三百五十四續・尚書古文疏證辨補正三百五十五續・尚書古文疏證辨補正三百五十六續・尚書古文疏證辨補正三百五十七續・尚書古文疏證辨補正三百五十八續・尚書古文疏證辨補正三百五十九續・尚書古文疏證辨補正三百六十續・尚書古文疏證辨補正三百六十一續・尚書古文疏證辨補正三百六十二續・尚書古文疏證辨補正三百六十三續・尚書古文疏證辨補正三百六十四續・尚書古文疏證辨補正三百六十五續・尚書古文疏證辨補正三百六十六續・尚書古文疏證辨補正三百六十七續・尚書古文疏證辨補正三百六十八續・尚書古文疏證辨補正三百六十九續・尚書古文疏證辨補正三百七十續・尚書古文疏證辨補正三百七十一續・尚書古文疏證辨補正三百七十二續・尚書古文疏證辨補正三百七十三續・尚書古文疏證辨補正三百七十四續・尚書古文疏證辨補正三百七十五續・尚書古文疏證辨補正三百七十六續・尚書古文疏證辨補正三百七十七續・尚書古文疏證辨補正三百七十八續・尚書古文疏證辨補正三百七十九續・尚書古文疏證辨補正三百八十續・尚書古文疏證辨補正三百八十一續・尚書古文疏證辨補正三百八十二續・尚書古文疏證辨補正三百八十三續・尚書古文疏證辨補正三百八十四續・尚書古文疏證辨補正三百八十五續・尚書古文疏證辨補正三百八十六續・尚書古文疏證辨補正三百八十七續・尚書古文疏證辨補正三百八十八續・尚書古文疏證辨補正三百八十九續・尚書古文疏證辨補正三百九十續・尚書古文疏證辨補正三百九十一續・尚書古文疏證辨補正三百九十二續・尚書古文疏證辨補正三百九十三續・尚書古文疏證辨補正三百九十四續・尚書古文疏證辨補正三百九十五續・尚書古文疏證辨補正三百九十六續・尚書古文疏證辨補正三百九十七續・尚書古文疏證辨補正三百九十八續・尚書古文疏證辨補正三百九十九續・尚書古文疏證辨補正四百續・尚書古文疏證辨補正四百一續・尚書古文疏證辨補正四百二續・尚書古文疏證辨補正四百三續・尚書古文疏證辨補正四百四續・尚書古文疏證辨補正四百五續・尚書古文疏證辨補正四百六續・尚書古文疏證辨補正四百七續・尚書古文疏證辨補正四百八續・尚書古文疏證辨補正四百九續・尚書古文疏證辨補正四百十續・尚書古文疏證辨補正四百十一續・尚書古文疏證辨補正四百十二續・尚書古文疏證辨補正四百十三續・尚書古文疏證辨補正四百十四續・尚書古文疏證辨補正四百十五續・尚書古文疏證辨補正四百十六續・尚書古文疏證辨補正四百十七續・尚書古文疏證辨補正四百十八續・尚書古文疏證辨補正四百十九續・尚書古文疏證辨補正四百二十續・尚書古文疏證辨補正四百二十一續・尚書古文疏證辨補正四百二十二續・尚書古文疏證辨補正四百二十三續・尚書古文疏證辨補正四百二十四續・尚書古文疏證辨補正四百二十五續・尚書古文疏證辨補正四百二十六續・尚書古文疏證辨補正四百二十七續・尚書古文疏證辨補正四百二十八續・尚書古文疏證辨補正四百二十九續・尚書古文疏證辨補正四百三十續・尚書古文疏證辨補正四百三十一續・尚書古文疏證辨補正四百三十二續・尚書古文疏證辨補正四百三十三續・尚書古文疏證辨補正四百三十四續・尚書古文疏證辨補正四百三十五續・尚書古文疏證辨補正四百三十六續・尚書古文疏證辨補正四百三十七續・尚書古文疏證辨補正四百三十八續・尚書古文疏證辨補正四百三十九續・尚書古文疏證辨補正四百四十續・尚書古文疏證辨補正四百四十一續・尚書古文疏證辨補正四百四十二續・尚書古文疏證辨補正四百四十三續・尚書古文疏證辨補正四百四十四續・尚書古文疏證辨補正四百四十五續・尚書古文疏證辨補正四百四十六續・尚書古文疏證辨補正四百四十七續・尚書古文疏證辨補正四百四十八續・尚書古文疏證辨補正四百四十九續・尚書古文疏證辨補正四百五十續・尚書古文疏證辨補正四百五十一續・尚書古文疏證辨補正四百五十二續・尚書古文疏證辨補正四百五十三續・尚書古文疏證辨補正四百五十四續・尚書古文疏證辨補正四百五十五續・尚書古文疏證辨補正四百五十六續・尚書古文疏證辨補正四百五十七續・尚書古文疏證辨補正四百五十八續・尚書古文疏證辨補正四百五十九續・尚書古文疏證辨補正四百六十續・尚書古文疏證辨補正四百六十一續・尚書古文疏證辨補正四百六十二續・尚書古文疏證辨補正四百六十三續・尚書古文疏證辨補正四百六十四續・尚書古文疏證辨補正四百六十五續・尚書古文疏證辨補正四百六十六續・尚書古文疏證辨補正四百六十七續・尚書古文疏證辨補正四百六十八續・尚書古文疏證辨補正四百六十九續・尚書古文疏證辨補正四百七十續・尚書古文疏證辨補正四百七十一續・尚書古文疏證辨補正四百七十二續・尚書古文疏證辨補正四百七十三續・尚書古文疏證辨補正四百七十四續・尚書古文疏證辨補正四百七十五續・尚書古文疏證辨補正四百七十六續・尚書古文疏證辨補正四百七十七續・尚書古文疏證辨補正四百七十八續・尚書古文疏證辨補正四百七十九續・尚書古文疏證辨補正四百八十續・尚書古文疏證辨補正四百八十一續・尚書古文疏證辨補正四百八十二續・尚書古文疏證辨補正四百八十三續・尚書古文疏證辨補正四百八十四續・尚書古文疏證辨補正四百八十五續・尚書古文疏證辨補正四百八十六續・尚書古文疏證辨補正四百八十七續・尚書古文疏證辨補正四百八十八續・尚書古文疏證辨補正四百八十九續・尚書古文疏證辨補正四百九十續・尚書古文疏證辨補正四百九十一續・尚書古文疏證辨補正四百九十二續・尚書古文疏證辨補正四百九十三續・尚書古文疏證辨補正四百九十四續・尚書古文疏證辨補正四百九十五續・尚書古文疏證辨補正四百九十六續・尚書古文疏證辨補正四百九十七續・尚書古文疏證辨補正四百九十八續・尚書古文疏證辨補正四百九十九續・尚書古文疏證辨補正五百續・尚書古文疏證辨補正五百一續・尚書古文疏證辨補正五百二續・尚書古文疏證辨補正五百三續・尚書古文疏證辨補正五百四續・尚書古文疏證辨補正五百五續・尚書古文疏證辨補正五百六續・尚書古文疏證辨補正五百七續・尚書古文疏證辨補正五百八續・尚書古文疏證辨補正五百九續・尚書古文疏證辨補正五百十續・尚書古文疏證辨補正五百十一續・尚書古文疏證辨補正五百十二續・尚書古文疏證辨補正五百十三續・尚書古文疏證辨補正五百十四續・尚書古文疏證辨補正五百十五續・尚書古文疏證辨補正五百十六續・尚書古文疏證辨補正五百十七續・尚書古文疏證辨補正五百十八續・尚書古文疏證辨補正五百十九續・尚書古文疏證辨補正五百二十續・尚書古文疏證辨補正五百二十一續・尚書古文疏證辨補正五百二十二續・尚書古文疏證辨補正五百二十三續・尚書古文疏證辨補正五百二十四續・尚書古文疏證辨補正五百二十五續・尚書古文疏證辨補正五百二十六續・尚書古文疏證辨補正五百二十七續・尚書古文疏證辨補正五百二十八續・尚書古文疏證辨補正五百二十九續・尚書古文疏證辨補正五百三十續・尚書古文疏證辨補正五百三十一續・尚書古文疏證辨補正五百三十二續・尚書古文疏證辨補正五百三十三續・尚書古文疏證辨補正五百三十四續・尚書古文疏證辨補正五百三十五續・尚書古文疏證辨補正五百三十六續・尚書古文疏證辨補正五百三十七續・尚書古文疏證辨補正五百三十八續・尚書古文疏證辨補正五百三十九續・尚書古文疏證辨補正五百四十續・尚書古文疏證辨補正五百四十一續・尚書古文疏證辨補正五百四十二續・尚書古文疏證辨補正五百四十三續・尚書古文疏證辨補正五百四十四續・尚書古文疏證辨補正五百四十五續・尚書古文疏證辨補正五百四十六續・尚書古文疏證辨補正五百四十七續・尚書古文疏證辨補正五百四十八續・尚書古文疏證辨補正五百四十九續・尚書古文疏證辨補正五百五十續・尚書古文疏證辨補正五百五十一續・尚書古文疏證辨補正五百五十二續・尚書古文疏證辨補正五百五十三續・尚書古文疏證辨補正五百五十四續・尚書古文疏證辨補正五百五十五續・尚書古文疏證辨補正五百五十六續・尚書古文疏證辨補正五百五十七續・尚書古文疏證辨補正五百五十八續・尚書古文疏證辨補正五百五十九續・尚書古文疏證辨補正五百六十續・尚書古文疏證辨補正五百六十一續・尚書古文疏證辨補正五百六十二續・尚書古文疏證辨補正五百六十三續・尚書古文疏證辨補正五百六十四續・尚書古文疏證辨補正五百六十五續・尚書古文疏證辨補正五百六十六續・尚書古文疏證辨補正五百六十七續・尚書古文疏證辨補正五百六十八續・尚書古文疏證辨補正五百六十九續・尚書古文疏證辨補正五百七十續・尚書古文疏證辨補正五百七十一續・尚書古文疏證辨補正五百七十二續・尚書古文疏證辨補正五百七十三續・尚書古文疏證辨補正五百七十四續・尚書古文疏證辨補正五百七十五續・尚書古文疏證辨補正五百七十六續・尚書古文疏證辨補正五百七十七續・尚書古文疏證辨補正五百七十八續・尚書古文疏證辨補正五百七十九續・尚書古文疏證辨補正五百八十續・尚書古文疏證辨補正五百八十一續・尚書古文疏證辨補正五百八十二續・尚書古文疏證辨補正五百八十三續・尚書古文疏證辨補正五百八十四續・尚書古文疏證辨補正五百八十五續・尚書古文疏證辨補正五百八十六續・尚書古文疏證辨補正五百八十七續・尚書古文疏證辨補正五百八十八續・尚書古文疏證辨補正五百八十九續・尚書古文疏證辨補正五百九十續・尚書古文疏證辨補正五百九十一續・尚書古文疏證辨補正五百九十二續・尚書古文疏證辨補正五百九十三續・尚書古文疏證辨補正五百九十四續・尚書古文疏證辨補正五百九十五續・尚書古文疏證辨補正五百九十六續・尚書古文疏證辨補正五百九十七續・尚書古文疏證辨補正五百九十八續・尚書古文疏證辨補正五百九十九續・尚書古文疏證辨補正六百續・尚書古文疏證辨補正六百一續・尚書古文疏證辨補正六百二續・尚書古文疏證辨補正六百三續・尚書古文疏證辨補正六百四續・尚書古文疏證辨補正六百五續・尚書古文疏證辨補正六百六續・尚書古文疏證辨補正六百七續・尚書古文疏證辨補正六百八續・尚書古文疏證辨補正六百九續・尚書古文疏證辨補正六百十續・尚書古文疏證辨補正六百十一續・尚書古文疏證辨補正六百十二續・尚書古文疏證辨補正六百十三續・尚書古文疏證辨補正六百十四續・尚書古文疏證辨補正六百十五續・尚書古文疏證辨補正六百十六續・尚書古文疏證辨補正六百十七續・尚書古文疏證辨補正六百十八續・尚書古文疏證辨補正六百十九續・尚書古文疏證辨補正六百二十續・尚書古文疏證辨補正六百二十一續・尚書古文疏證辨補正六百二十二續・尚書古文疏證辨補正六百二十三續・尚書古文疏證辨補正六百二十四續・尚書古文疏證辨補正六百二十五續・尚書古文疏證辨補正六百二十六續・尚書古文疏證辨補正六百二十七續・尚書古文疏證辨補正六百二十八續・尚書古文疏證辨補正六百二十九續・尚書古文疏證辨補正六百三十續・尚書古文疏證辨補正六百三十一續・尚書古文疏證辨補正六百三十二續・尚書古文疏證辨補正六百三十三續・尚書古文疏證辨補正六百三十四續・尚書古文疏證辨補正六百三十五續・尚書古文疏證辨補正六百三十六續・尚書古文疏證辨補正六百三十七續・尚書古文疏證辨補正六百三十八續・尚書古文疏證辨補正六百三十九續・尚書古文疏證辨補正六百四十續・尚書古文疏證辨補正六百四十一續・尚書古文疏證辨補正六百四十二續・尚書古文疏證辨補正六百四十三續・尚書古文疏證辨補正六百四十四續・尚書古文疏證辨補正六百四十五續・尚書古文疏證辨補正六百四十六續・尚書古文疏證辨補正六百四十七續・尚書古文疏證辨補正六百四十八續・尚書古文疏證辨補正六百四十九續・尚書古文疏證辨補正六百五十續・尚書古文疏證辨補正六百五十一續・尚書古文疏證辨補正六百五十二續・尚書古文疏證辨補正六百五十三續・尚書古文疏證辨補正六百五十四續・尚書古文疏證辨補正六百五十五續・尚書古文疏證辨補正六百五十六續・尚書古文疏證辨補正六百五十七續・尚書古文疏證辨補正六百五十八續・尚書古文疏證辨補正六百五十九續・尚書古文疏證辨補正六百六十續・尚書古文疏證辨補正六百六十一續・尚書古文疏證辨補正六百六十二續・尚書古文疏證辨補正六百六十三續・尚書古文疏證辨補正六百六十四續・尚書古文疏證辨補正六百六十五續・尚書古文疏證辨補正六百六十六續・尚書古文疏證辨補正六百六十七續・尚書古文疏證辨補正六百六十八續・尚書古文疏證辨補正六百六十九續・尚書古文疏證辨補正六百七十續・尚書古文疏證辨補正六百七十一續・尚書古文疏證辨補正六百七十二續・尚書古文疏證辨補正六百七十三續・尚書古文疏證辨補正六百七十四續・尚書古文疏證辨補正六百七十五續・尚書古文疏證辨補正六百七十六續・尚書古文疏證辨補正六百七十七續・尚書古文疏證辨補正六百七十八續・尚書古文疏證辨補正六百七十九續・尚書古文疏證辨補正六百八十續・尚書古文疏證辨補正六百八十一續・尚書古文疏證辨補正六百八十二續・尚書古文疏證辨補正六百八十三續・尚書古文疏證辨補正六百八十四續・尚書古文疏證辨補正六百八十五續・尚書古文疏證辨補正六百八十六續・尚書古文疏證辨補正六百八十七續・尚書古文疏證辨補正六百八十八續・尚書古文疏證辨補正六百八十九續・尚書古文疏證辨補正六百九十續・尚書古文疏證辨補正六百九十一續・尚書古文疏證辨補正六百九十二續・尚書古文疏證辨補正六百九十三續・尚書古文疏證辨補正六百九十四續・尚書古文疏證辨補正六百九十五續・尚書古文疏證辨補正六百九十六續・尚書古文疏證辨補正六百九十七續・尚書古文疏證辨補正六百九十八續・尚書古文疏證辨補正六百九十九續・尚書古文疏證辨補正七百續・尚書古文疏證辨補正七百一續・尚書古文疏證辨補正七百二續・尚書古文疏證辨補正七百三續・尚書古文疏證辨補正七百四續・尚書古文疏證辨補正七百五續・尚書古文疏證辨補正七百六續・尚書古文疏證辨補正七百七續・尚書古文疏證辨補正七百八續・尚書古文疏證辨補正七百九續・尚書古文疏證辨補正七百十續・尚書古文疏證辨補正七百十一續・尚書古文疏證辨補正七百十二續・尚書古文疏證辨補正七百十三續・尚書古文疏證辨補正七百十四續・尚書古文疏證辨補正七百十五續・尚書古文疏證辨補正七百十六續・尚書古文疏證辨補正七百十七續・尚書古文疏證辨補正七百十八續・尚書古文疏證辨補正七百十九續・尚書古文疏證辨補正七百二十續・尚書古文疏證辨補正七百二十一續・尚書古文疏證辨補正七百二十二續・尚書古文疏證辨補正七百二十三續・尚書古文疏證辨補正七百二十四續・尚書古文疏證辨補正七百二十五續・尚書古文疏證辨補正七百二十六續・尚書古文疏證辨補正七百二十七續・尚書古文疏證辨補正七百二十八續・尚書古文疏證辨補正七百二十九續・尚書古文疏證辨補正七百三十續・尚書古文疏證辨補正七百三十一續・尚書古文疏證辨補正七百三十二續・尚書古文疏證辨補正七百三十三續・尚書古文疏證辨補正七百三十四續・尚書古文疏證辨補正七百三十五續・尚書古文疏證辨補正七百三十六續・尚書古文疏證辨補正七百三十七續・尚書古文疏證辨補正七百三十八續・尚書古文疏證辨補正七百三十九續・尚書古文疏證辨補正七百四十續・尚書古文疏證辨補正七百四十一續・尚書古文疏證辨補正七百四十二續・尚書古文疏證辨補正七百四十三續・尚書古文疏證辨補正七百四十四續・尚書古文疏證辨補正七百四十五續・尚書古文疏證辨補正七百四十六續・尚書古文疏證辨補正七百四十七續・尚書古文疏證辨補正七百四十八續・尚書古文疏證辨補正七百四十九續・尚書古文疏證辨補正七百五十續・尚書古文疏證辨補正七百五十一續・尚書古文疏證辨補正七百五十二續・尚書古文疏證辨補正七百五十三續・尚書古文疏證辨補正七百五十四續・尚書古文疏證辨補正七百五十五續・尚書古文疏證辨補正七百五十六續・尚書古文疏證辨補正七百五十七續・尚書古文疏證辨補正七百五十八續・尚書古文疏證辨補正七百五十九續・尚書古文疏證辨補正七百六十續・尚書古文疏證辨補正七百六十一續・尚書古文疏證辨補正七百六十二續・尚書古文疏證辨補正七百六十三續・尚書古文疏證辨補正七百六十四續・尚書古文疏證辨補正七百六十五續・尚書古文疏證辨補正七百六十六續・尚書古文疏證辨補正七百六十七續・尚書古文疏證辨補正七百六十八續・尚書古文疏證辨補正七百六十九續・尚書古文疏證辨補正七百七十續・尚書古文疏證辨補正七百七十一續・尚書古文疏證辨補正七百七十二續・尚書古文疏證辨補正七百七十三續・尚書古文疏證辨補正七百七十四續・尚書古文疏證辨補正七百七十五續・尚書古文疏證辨補正七百七十六續・尚書古文疏證辨補正七百七十七續・尚書古文疏證辨補正七百七十八續・尚書古文疏證辨補正七百七十九續・尚書古文疏證辨補正七百八十續・尚書古文疏證辨補正七百八十一續・尚書古文疏證辨補正七百八十二續・尚書古文疏證辨補正七百八十三續・尚書古文疏證辨補正七百八十四續・尚書古文疏證辨補正七百八十五續・尚書古文疏證辨補正七百八十六續・尚書古文疏證辨補正七百八十七續・尚書古文疏證辨補正七百八十八續・尚書古文疏證辨補正七百八十九續・尚書古文疏證辨補正七百九十續・尚書古文疏證辨補正七百九十一續・尚書古文疏證辨補正七百九十二續・尚書古文疏證辨補正七百九十三續・尚書古文疏證辨補正七百九十四續・尚書古文疏證辨補正七百九十五續・尚書古文疏證辨補正七百九十六續・尚書古文疏證辨補正七百九十七續・尚書古文疏證辨補正七百九十八續・尚書古文疏證辨補正七百九十九續・尚書古文疏證辨補正八百續・尚書古文疏證辨補正八百一續・尚書古文疏證辨補正八百二續・尚書古文疏證辨補正八百三續・尚書古文疏證辨補正八百四續・尚書古文疏證辨補正八百五續・尚書古文疏證辨補正八百六續・尚書古文疏證辨補正八百七續・尚書古文疏證辨補正八百八續・尚書古文疏證辨補正八百九續・尚書古文疏證辨補正八百十續・尚書古文疏證辨補正八百十一續・尚書古文疏證辨補正八百十二續・尚書古文疏證辨補正八百十三續・尚書古文疏證辨補正八百十四續・尚書古文疏證辨補正八百十五續・尚書古文疏證辨補正八百十六續・尚書古文疏證辨補正八百十七續・尚

【仙境】 仙人の住むところ、また極めて清く静かなる場所をいふ、宋之問の句に「菩閣茅軒髣髴入二神仙之境一」仙寰に同じ、

【萓居】 「アチラ」「コチラ」と徙り住むをいふ、左傳襄四年に「我狄ーー」の註に「萓ハ草ナリ、古、狄人水草ヲ逐ヒテ居徙シ、常處ナキナリ」と、一解に、萓は聚なり、あつまり居るなりと、

【先驅】 前導に同じ、史記孟軻傳に「鄒子如レ燕、昭王擁レ彗ーー」

【前驅】 「サキノリ」周禮に「王出入則自二馭而ーー一」註に「ーーハ、今ノ道引ノ如シ」と、漢書周勃傳に「天子ーー至不レ得レ入」の註に「ーーハ駕ヲ導ク者ナリ」

【先君】 亡父をいふ、また廣く先祖をも稱す(先子)を見よ、

【仙寰】 寰は「クギリ」ある場所、ーーは仙境に同じ、仙人のすむところ、

【潺湲】 水の流るる貌、またその聲にもいふ、楚辭九歌に「嗟忽兮遠望、觀二流水兮ーー一」釋冷然の詩に「松月影寒生二碧落一、石泉聲亂噴ーー一」謝靈運の詩に「乘レ月弄ーー一」湲一音エン、

【遷化】 僧の死をいふ、泊宅編に「癩僧ーー一(涅槃)を見よ、

【遷喬ノ望】 榮轉を望む義、孟子に「吾聞レ出二於幽谷一遷二于喬木一者、未レ聞下下二喬木一而入二於幽谷一者上」とあるに本づく、桓溫の表に「幽谷無ーー之望」

【宣言】 あまねく衆に布き示すをいふ、左傳に「先ーー曰、司馬則然」

【嬋娟】 かたちの美しき貌、「アテヤカ」文選西京賦に出づ、また孟郊の句に「菱荇咸ーー」娟一音エン、

【纖妍】 こづくりにてうるはし、魏書に「浩ーー潔白、如二美婦人一、纖は纖に通ず、

【善卷】 堯の時の高士、武陵の人、枉山に居る、莊子いふ、舜天下を以てーーに讓る、ーー曰く、余宇宙の中に立ち、冬日は皮毛を衣、夏日は葛絺を衣、春は耕種し形以て勞動するに足る、秋は收斂し、身以て體息するに足る、日出でて作し、日入つて息す、天地の閒に逍遙して、心意自得す、吾何ぞ天下を以て爲さんやと、遂に受けずして去りぬ、宋の政和閒、號を賜ひて遁世高蹈先生といふ、

【錢謙益】 字は受之、牧齋と號す、江南の人なり、明の萬曆三十八年進士に第し、編修を授けらる、清の兵頻りに諸州を陷れ、京城守らざるに及び、南京に赴き、潞王

を立てんとせしが、鳳督馬士英等、福王を立て、阮大鋮等事を用ふるに至り、恐れて二人に附隨し、禮部尚書となる、清江南を平定するに及び、遂に出でて降り、禮部右侍郎となり後家居して康熙三年卒す、年八十三、牧齋詩名一時に高かりしが、その節操なきを以て、その著書は乾隆の朝に悉く焚滅せられぬ、

【潛研堂文集】 五十卷、詩集十卷、續詩集十卷、清の錢大昕撰す、大昕の學、極めて該博通ぜざるところなし、故にその文自ら深厚にして、風格踈有光に似たり、詩も亦清醇にして法度あり、

【旋乾轉坤】 乾は天、坤は地なり、天地を回轉する義にて、威を張り武を振ひ國家を一洗し、面目を革むるをいふ、韓愈の潮州謝上表に「陛下即位以來、躬聽斷一レ日一レ日、天戈所レ麾、莫不二寧順一」

【善言ハ布帛ヨリモ煖カナリ】 (善言煖二於布帛一)善き言葉の人を益することは布帛の體を煖むるに勝る養荀子に「與二人善言一、煖二於布帛一」また同書に「贈二人以言一、重二於金石珠玉一、觀二人以言一、美二於黼黻文章一」とあるも同義、

【舛午】 午は忤なり、差ひ忤ふ義、漢書劉向傳に「朝臣ーー繆戾乖剌」

【染戸】 「ソメモノヤ」北夢瑣言に「有二ーー許踝一一旦暴卒染工、染家・染人・染匠皆同じ、

【專攻】 攻は專ら治むるなりーーは專ら一事を治むる義、韓愈の師說に「術業有二ーーニ

【全功】 十分なる「テガラ」列子天瑞に「天地無二ーーニ

【宣告】 あまねく告ぐるなり、宣言に同じ、左傳に「ーーニ後人、無二怠二於德一ニ

【戰國策】 三十三卷、撰者詳かならず、春秋以後戰國に記るまでの事を紀す、載する所ろ縱橫捭闔の說多きに居る、その書篇簡脫落多し、漢の劉向校定して今の卷數と爲す、舊本漢の高誘註と題すれども、實は宋の姚宏が高誘註の殘本に因りて、之を補ひしにて、そのうち二卷より四卷に至り、六卷より十卷に至るは、誘の原註にして、餘は皆宏の補註せし所ろとなす、

【仙才】 韻府に「李大白ーー、李長吉鬼才」

【剪綵】 「ソクリバナ」事物紀原に「花朶ハ漢ニ起リ、ーーハ晉ニ起ル」又曰く「唐ノ中宗立春ノ日、ーー花ヲ出ス」と、剪勝・花勝・綵勝・假花皆同じ、

【千歲ヲ觀ント欲スレバ今日ヲ審ニス】 (欲レ觀二千歲一則審二今日一)荀子の語、下に「欲知二億萬一則審二一二一」とあり、一種の推理法なり、

【錢財積マザレバ貧者ハ憂フ】（錢財不積則貧者憂）貧者はただ貨利をのみ是れ好む、故に錢財の多く積まざるを以て憂と爲すなり、莊子に「——權勢不尤則夸者悲」尤は甚なり、

【千載ノ一遇】永久の間に、一度遇ふ所ろの幸機をいふ、文選の三國名臣序贊に「千載一遇賢聖之嘉會、遇之不能無欣、喪之何能無慨」とあり、また韓文の潮州刺史謝上表に「所謂千載一時、不可逢之嘉會」

【剪綵花ト爲ス】色どれるうつくしき絹をきりて花をつくること、隋書に「煬帝西苑ヲ築キ、周圍二百里アリ、宮樹秋冬ニ凋零スレバ綵ヲ剪リテ花葉トナシ、以テ枝條ニ綴リ、色淡クナレバ易フルニ新ラシキモノヲ以テシ、名ヅケテ長春苑ト云ヘリ」

【穿鑿】穿は委曲して入るなり、鑿は孔を穿つなり、事理を解くこと度に過ぐるの意、漢書禮樂志に「以意——各取一切」蘇軾の文に「王荊公之學——至此」

【渲刷】畫家に——の法あり、うす墨を再三そそぐをいふ、郭熙の林泉高致に「擦以水墨、再三而淋之謂之渲」

【鼾參軍】晉書に「郗超少クシテ卓犖義ヲ好ム、晉ノ末ニ臨海ノ大守ト爲ル、父愔、錢數千萬ヲ積ム、超盡ク親舊ニ散與ス、桓溫以テ參軍トナス、超ガ鼾多キニ因リテ、府中語シテ鼾參軍ト曰フ」

【先子】亡父をいふ、また廣く先祖をもいふ、宜齋野乘に「今人、——先君先人ト稱シテ父ト爲ス、然レドモ獨リ父ノミナラズ、祖宗皆可ナリ」

【染指】（指ヲ染ムルヲ見よ、

【染髭】（鬚ヲ染ムルヲ見よ、

【擅恣】ほしいままにすること、淮南子に「無——之志」無矜伐之色」專恣、放恣など皆同じ、

【禪師】禪家耆德の稱號、我が國にては、或は官賜の號とす、弓削道鏡を大臣——とせられしこと正史に見ゆ、建長五年蘭溪和尚に大覺——の諡號を賜ふ、守護國界主經に「向國王大臣門說我法是律師也、禪師也、能悟三藏、兼衆藝」

【前修】前代の德を修めし人をいふ、楚辭に「謇吾法夫——」今非世俗之所服」

【善柔】論語に「友便辟、友——、友便佞、損矣」の朱註に「——ハ媚說ニ工ニシテ諛マコトヲラザルナリ」

【禪宗】禪那を宗とするによりて名づく、禪那は靜慮また正思惟と譯す、靜慮正思惟を以て悟道の要術とす、また禪は佛心を究め明すを宗とすれば、佛心宗と

もいふ、中峯錄五下に「禪何物、乃吾心之名也、心何物即我禪之體也云云」梁の武帝の時、天竺の達磨大師來りてこの宗を弘む、達磨は之を二祖慧可に傳へ、慧可は之を僧璨に傳へ、僧璨は之を道信に傳へ、道信は之を五祖弘忍に傳ふ、弘忍の弟子に至りて禪宗は南北二宗に別る、南宗の祖は六祖の慧能にして、北宗の祖は神秀禪師なり、この中後世に至りて隆盛を極めしは南宗なりとす、わが國にては、臨濟、曹洞、黃檗の三宗の總稱とす、

【千秋節】天皇の聖壽を賀する節の名、わが國の天長節に同じ、唐會要に「開元十七年八月五日源乾曜張說等請ウテ是ノ日ヲ以テ——ト爲ス、休假セシムルコト三日、長慶七年十月十日穆宗ノ誕日ニ至リテ、天下ノ州府ヲシテ宴ヲ置カシム、文宗ノ開成二年誕日ニ始メテ屠宰ヲ禁ズ、コレ聖節ニ屠ヲ禁ジ宴ヲ置クノ始ナリ、宋朝倶ニ循ツテ之ヲ用フ」詩經に「萬壽無疆、萬壽無期」楊萬里の揮麈錄に「天寶七載八月巳亥詔シテ——ヲ改メテ天長節トナス」

【仙姿玉質】美人を形容していふ、古今詩話に「元載ガ寵姬薛瑤英、詩書ヲ能シ、歌舞ヲ善ス、——、肌香バシク體輕シ、旋波移光、飛燕綠珠ト雖モ、之ニ過グル能ハズ」

【前事ノ忘レザルハ後事ノ師ナリ】（前事之不忘、後事之師也）意を前事に留むるは後事をあやまらざるための資たるをいふ、史記の始皇本紀に「野詩ニ曰ク、前事ノ忘レザルハ、後事ノ師ナリ、是ヲ以テ君子ノ國ヲ爲ムル、之ヲ上古ニ觀テ、之ヲ當世ニ驗シ、參フルニ、人事ヲ以テシ、盛衰ノ理ヲ察カニシ、權勢ノ宜ヲ審カニス」

【先人】亡父をいふ、また廣く先祖をも稱すべし（先子）を見よ、

【先進】先輩に同じ、論語に「——於禮樂野人也」

【淺斟】「コサカモリ」事文類聚に「——低唱」

【薦紳】縉紳に同じ、五帝本紀の贊に「薦紳難言之」とある註に「徐廣曰ク、薦紳ハ即チ縉紳ナリ、古字假借スト、薦は縉と通ず、縉は挿むなり、士大夫笏を革帶の間に挿む、故に朝臣を縉紳といふ、

【險人】險は詖なり「ネヂケビト」險利の小人なり、書の立政に「國則罔有立政用——」また冏命に「爾無惟佞于——」

【善人】（惟善人）を見よ、

【錢神論】晉書列傳六十四に「魯褒字ハ元道南陽ノ人、

學ヲ好ミテ多聞ナリ、貧素ヲ以テ自立ス、元康ノ後、綱紀大ニ壞ル、褒、時ノ貪鄙ヲ傷ミ、乃チ姓名ヲ隱シテ——ヲ著シ以テ之ヲ刺ル、ソノ略ニ曰ク、親之如ル兄、字曰ル孔方、失之則貧弱、得之則富昌、無翼而飛、無足而走、解嚴毅之顏、開難發之口、錢多者處ル前ニ、少者居ル後、錢之所ル祐、吉無不ル利、何必讀ル書、然後富貴云云」時を疾む者、その文を傳ふ、後終る所ろを知らず、この無足而走の句により、俗に錢を「オアシ」といふ、

【千字文】 一卷、梁の周興嗣撰す、興嗣字は思纂、姑孰の人、梁に仕へて給事中に累遷し、國史を撰するに與る、四言古詩二百五十句より成る故に名づく、蓋し興嗣が魏の鍾繇の千字文を韻をふみて次第せしものなりといふ、

【千章】 大木を數ふるに章といふ、千本なり、史記貨殖傳に「——之材」

【先唱】 人より先だちてとなへ說く義、首唱に同じ、抱朴子に「——者窮之路也、後動者達之原也」

【甎匠】 甎は瓦なり、また「シキガハラ」壁なり、——は「カハラシ」瓦匠に同じ、會典に見ゆ、

【擅場】 「トビキリ」たる妙手にて、場中敵なき者の稱、東京賦に「秦政利器長距、終得ル——ヲ」政は始皇の名、杜甫の詩に「畫手看ル前輩、吳生遠——」

【僭賞濫刑】 賞罰をみだりにして、當を得ざるをいふ、詩の商頌に「天命降監、下民有ル嚴、不ル僭不ル濫、不ル敢怠ル遑」註に「僭賞之差也、濫刑之過也」とあり、また左傳に「善爲ル國者賞不ル僭而刑不ル濫」

【輭弱】 柔弱に同じ(軟弱)を見よ、

【千雀萬鳩、鷇ト仇ヲ爲ス】 (千雀萬鳩與ル鷇爲ル仇)微力の者多くとも一の強大なるものに敵すべからざるに喩ふ、易林に出づ、下に「威勢不ル敵、雖衆無ル益」とあり(千羊ハ)を參看せよ、

【前車ノ覆ルハ後車ノ戒】 前車の傾覆するを見て、後車は之を警戒して、覆へさざるやうにすべしとの義、說苑の善說篇に「公乘不仁曰ク周書曰ク、前車覆ル後車戒、蓋言ル其危ニ」この語、漢書賈誼傳には鄙諺として引けり、

【染髮】 (髯ヲ染ム)を見よ、

【饘粥】 「カユ」厚きを饘といひ、薄きを粥といふ、後漢書に「朝暮送ル——ヲ」

【錢樹子】 かねのなる木の義にて、藝妓をいふ、書言故事に「明皇雜錄ニ、許子和ハ、吉州ノ永新ノ倡家ノ女、宮ニ入ル、因テ永新ト名ヅク、能ク新聲ヲ變ズ、卒スルニ臨ンデ、其ノ母ニ謂ッテ曰ク、阿母ノ錢樹子倒矣ト」

【千手陀羅尼ノ持者】 千手陀羅尼を常に念持する行者なり、千手陀羅尼とは、千手觀音の陀羅尼にて、一に大悲咒ともいふ、陀羅尼は佛菩薩の咒語にして、漢に神咒と譯す、

【前緒】 猶ほ先業といふが如し、先人の遺しおきたる事業のいとぐちをいふ、楚辭に「纂ル就ル——ヲ、遂ル成ル考ル功ヲ」考は父なり、

【蟾蜍】 月の異名、後漢書天文志の注に「羿、不死ノ藥ヲ西王母ニ請フ、姮娥之ヲ竊ンデ以テ月ニ奔ル、是ヲ——ト爲ス」と、五經通義に「月中有ル兎與ル——ヲ」姮娥は羿の妾、淮南子精神訓にも「月中有ル——ヲ」

【千乘】 周代に於ける大國の兵賦をいふ方十里に革車一乘を出す、甲士三人、左は弓を持し、右は矛を持し、中人は御す、步卒七十二人、重車を將ゐる者二十五人、惣數百人、千乘は則ち十萬人を出す、詩經に「公車——」

【戰悚】 ふるへおそる、晉書に「夙夜——、以ル榮爲ル憂ヲ」

【戰色】 おののきて色惧るるなり、論語に「勃如ル——ヲ」

【纖嗇】 慳悋の義ニ、史記貨殖傳に「其贏得過當ル僉於ル——ヲ」

【善書ハ紙筆ヲ擇バズ】 (善書不ル擇ル紙筆)後山談叢に「善書ハ不ル擇ル紙筆ヲ、妙在ル心手ニ」また歐陽詢の傳に「褚遂良、精筆佳墨ニアラザレハ、未ダ嘗テ輒ク書セズ、嘗テ虞世南ニ問ヒテ曰ク、吾ガ書詢ニ孰レゾト、答ヘテ曰ク、吾レ聞ク詢ハ紙筆ヲ擇バズシテ、皆志ノ如キヲ得、君豈ニ比スルヲ得ンヤト」

【先生】 我より先に生れて道をわきまへ知れる人の稱、孟子に「——將ル何ル之ニ」と、韋昭辨名に「古者稱ル師ヲ、曰ル先生ニ」と、禮記に「道ニ先生ニ遭ヘバ、趨リテ進ミ、正立シテ手ヲ拱ス」

【宣政】 唐の「ゴテン」の名、四夷の入つて朝貢する者、皆——殿に引見す、韓文の論佛骨表に「——一見」

【專制】 獨斷にて、ほしいままに事を爲すをいふ、漢書の文帝紀に「夫以ル呂太后之嚴、立ル諸呂ヲ爲ル三王ヲ、擅ル權專制ヲ」とあるに本づく、

【蟬蛻】 蛻は「モヌケル」——は蟬の皮のぬけたる如く、超然として世外に脫し去るをいふ、史記屈原傳に「——於濁穢ニ、以浮ル游於塵埃之外ニ」

【善逝】 佛の十號の一なり、瑜伽論に「上昇最極永不ル退還、故名ル——ト」また成實論に「佛有ル正道行施等行故名ル——ト」

【前席】 (席ヲ前ム)を見よ、

【泉石ノ膏肓】 深く山水を愛するをいふ(烟霞ノ)を見

よ、

【仙仙】(センセン) 仙、僊同じ、舞をまふ貌、詩經の賓之初筵に見ゆ、

【芊芊】(センセン) 茂り盛なる貌、列子に「美哉國乎、鬱鬱ーー」

【淺淺】(センセン) 淺は濺に同じ、疾く流るる貌、楚辭に「石瀨兮ーー」

【洒然】(センゼン) 肅恭の貌、史記范睢傳に「群臣莫不ーー變色易容者」また洒如に作る、義同じ、禮の玉藻に「色洒如也」

【潺潺】(センセン) 水流るる貌、潺湲に同じ、李後主の句に「簾外雨ーー」

【冉冉】(ゼンゼン) 速にうつり行く貌、楚辭に「老ーー其將至兮」吳質の書に「日月ーー歲不與我」一說にーーは、漸なりと、

【漸漸】(ゼンゼン) 涙の流るる貌、楚辭に「涕ーー兮」

【戰戰兢兢】(センセンキヨウキヨウ) 恐れ戒むる貌、戰戰は、恐懼なり、兢兢は戒謹なり、詩經の小雅小旻に「ーーーー、如臨深淵、如履薄氷」楚辭に「其誰不ーーーー以事百神」

【戰戰慄慄】(センセンリツリツ) 恐れつつしむ貌、淮南子に「ーーーー日愼一日、人莫蹪於山、而蹪於垤」蹪は「ツマヅク」垤は蟻封「アリヅカ」

【仙鼠】(センソ) 蝙蝠の異名、方言に「蝙蝠自關而東、或謂之ー

ーニ」

【先祖】(センソ) 程子遺書に「ーーハ初祖以下高祖以上ノ祖ナリ、立春ハ生物ノ始メナリ、故ニソノ類ニ象ツテ之ヲ祭ル」と、註に「ーーハ始祖ヨリシテ下、高祖ヨリシテ上ヲイフ一人ニ非ルナリ」

【踐阼】(センソ) 踐は履(フム)なり、阼は主階なり、主階とは、祭祀の主人たる者が、その場に臨むに、升る所ろの階にて堂の東方に設く、主階を履みて事を行ふ、故にーーといふ、禮記に「ーー臨祭祀」とあり、轉じて天子の位に即きたまふをいふ、阼一に祚に作る、祚は位なり、義同じ、

【賤息】(センソク) 「セガレ」類書纂要に「自稱子曰ーー」又曰小兒・蠢頑・頑兒・小頑」

【跣足ニテ棘ヲ履ム】(センソク) (王鐵槍)を見よ、

【顓孫師】(センソンシ) 陳の人、即ち子張なり、孔門の弟子、才高く意廣し、晚年德に進む、後世陳伯に封じ、宛丘侯に進む、

【蚺蛇】(ゼンダ) 蚺は大蛇なり、尾は圓くして鱗なし、身に斑文あり、南越志に「蚺蛇ハ牙五六寸ノ者アリ、土人之ヲ重ンズ」

【賤內】(センダイ) 己の妻を謙していふ、奇効醫述に「ーー患一病、已經兩月餘」

【錢大昕】(センダイキン) 字は及之、辛楣と號し、また竹汀と號す、江蘇嘉定の人、乾隆十九年の進士、官少詹事に至り嘉慶九年卒す、年七十七、六經百家通ぜざるところなし、凡そ經義の聚訟決し難きものは、皆能くこれを剖析す、推して當代の通儒となす、尤も算術に精しく、中西兩法に通ず、著すところ潛研堂詩文集・十駕齋養新錄・唐書史臣表・竹汀日記鈔等數十種あり、

【剪刀】(センダウ) 「タウバサミ」行厨集に「ーー曰繡剪、又曰燕尾以形似故」

【錢塘】(センダウ) 浙江省杭州府に在り、秦に錢唐といふ、唐以後唐を改めて塘とす、

【全唐詩】(ゼンダウシ) 九百卷目錄十二卷、淸の康熙四十二年彭定求等勅を奉じて編す、故に御定の二字を冠す、作者二千二百餘人詩數四萬八千九百餘首の多きに至る、先づ帝王后妃の作を錄し、次に樂章樂府を收め、次に諸臣の詩を錄し、次に聯句逸句名媛僧道外國神仙鬼怪諧謔及び諸雜體を收む、體例謹嚴にして校訂極めて周密なり、

【全唐詩錄】(ゼンダウシロク) 一百卷、淸の徐倬撰す、倬字は方虎、蘋村と號す、德淸の人、康熙十二年の進士、この書は御定全唐詩に就きてその菁華を採りて一書とせしものなり、卷首に康熙帝の御製の序あり、次に總目錄全唐詩人年表各一卷あり、先づ帝王后妃を列し、次に諸臣次に方外神仙の詩を錄し、人每に小傳を附せり、

【全唐文】(ゼンダウブン) 一千卷、淸の嘉慶十九年董誥等勅を奉じて撰す、誥字は蔗林浙江富陽の人、乾隆二十八年の進士、この書唐人の文集を彙輯し、幷せて五代の文をも收む、體例は全唐詩と同じく、首に諸帝次に后妃次に宗室諸王、次に公主次に百官次に釋道次に閨秀次に宦官四裔の作を採錄せり、

【選擇】(センタク) えらびとる、孟子に「ーー而使子」

【選擢】(センタク) 衆人の中よりえらびてぬく、後漢書に「古者ーー諸侯以爲公卿」

【然諾】(ゼンダク) うけゆるす義、然は許なり、一言も人に許せば必ず之を信にするをいふ、史記張耳陳餘傳に「此固趙國立名義不侵、爲ーー者也」また江淹雜體詩に「延陵輕寶劍、季布重ーー」

【川澤汙ヲ納ル】(センタクヲ) すべて物は完美を得ること難し、以て小惡は大德を損ぜざるに喩ふ、左傳宣十五年に「諺曰川澤納汙、山藪藏疾、瑾瑜匿瑕(匿は藏なり、美玉の質と雖も、亦或は瑕穢を居藏す)國君含垢、天之道也」とあり、

【擅斷】（センダン）ほしいままに、事をさだめ行ふ、陳琳の句に「一一萬機」と、また專斷は他にはからず、己ひとりにてきまりきめる、順宗實錄に「專斷外事」

【先達】（センダツ）先進の人をいふ、文選庾亮（元規）の讓中書監表に「十餘年閒位超一一」

【礦礫】（センダク）「イナビカリ」をいふ、宋の葉廷珪が、海錄碎事に「一一ハ、電光ナリ」と、太平廣記に「月支、猛獸ヲ獻ズ、兩目、天ノ一一ノ炎光ノ如シ」

【栴檀ハ二葉ヨリ香シ】（センダンハフタバヨリカンバシ）觀佛三昧經に「栴檀根芽漸漸生長纔欲成樹、香氣昌盛」とあり、栴檀は一に檀香ともいふ、赤檀白檀紫檀等の種類あり、祖庭事苑に「此云二與樂一以白檀能治二熱病一赤檀能去二風腫一皆除二病身安之樂一故名二華嚴經に「摩羅耶山栴檀香ヲ出ス、名ツケテ牛頭トイフ」正法念經に「此山ノ峯狀牛頭ノ如シ、此峯中ニ於テ生ズ、故ニ牛頭ト名ヅク」

【洗竹】（センチク）竹をすかす、杜甫に一一歌あり、

【禪定】（ゼンヂャウ）禪とは、梵語の禪那の略にて、定とは三昧の譯なり、禪那は舊譯に、思惟修、新譯に靜慮と譯す、思惟修とは、眞理を思惟して心を修治する義、靜慮とは、念慮を安靜にする義なり、定とは、心の散れるを一處に定むる義にて、詳しくは調直定といふ、心の曲れるを直し、心の散れるを定むる義なり 智度論二十八に「一切一一亦名二定一亦名二三昧一」

【千丈ノ城之ヲ脅狙ノ閒ニ拔ク】 戰國策に見ゆ、蘇秦の言、談論の閒に千里を折衝するをいふ、下に「百尺之衝、折二之維席之上一」の句あり、

【千丈ノ堤モ螻蟻ノ穴ヲ以テ潰ユ】 大事は細より起り、難事は易より起る、故に事を爲すには、細を愼み、易を戒むべしとの喩なり、韓非子に「千丈之堤、以二螻蟻之穴一潰、百尺之室、以二突隙之烟一焚」とあり、突は竈突（ケムリダシ）なり、

【先帝】 前代の天子、獨斷に「已ニ故スル（オカクレニナリタ）前帝ヲイフ 先朝ノ諸帝ヲ歷擧スルニハ列聖トイヒ祖宗トイフ」

【筌蹄】（センテイ）物を捕へ得るまでの具なり、筌（ウ）は以て魚を捕り、蹄は兎の脚を繫けて取る、莊子の外物論に「筌ハ魚ニ在ル所以、魚ヲ得テ而シテ筌ヲ忘ル、蹄ハ、兎ニ在ル所以、兎ヲ得テ而シテ蹄ヲ忘ル、言ハ意ニ在ル所以、意ヲ得テ而シテ言ヲ忘ル、吾レ安ンゾ夫ノ言ヲ忘ルルノ人ヲ得テ、之ト共ニ言ハンヤ」とあり、また王陽明の文章軌範の序に「徒ニ以テ其ノ寵祿ヲ希フノ筌蹄ニ資ス」とあり、

【前程】（ゼンテイ）「ユクサキ」樂善錄に「每以二一一一新轍一」前途に同じ、但好事」を見よ、

【洗滌】（センデキ）洗ひ清むる義、滌もあらひそそぐ、後漢書に「復見二一一一浣滌一作レ義同じ、

【先哲】（センテツ）前の世に出たる智德のすぐれたる人をいふ、曹植の句に「德配二姜嫄一不レ忝二一一一前哲一往哲皆同じ、

【前哲】（ゼンテツ）前に同じ、左傳に「賴二一一一以免也」

【先天】（センテン）人の生れきたる以前をいふ、また人のうまれつきにもいふ、易に「先レ天而天弗レ違」

【洗腆】（センテン）洗は清潔を致すなり、腆は厚を致すなり、饗儀を鄭重にするをいふ、書の酒誥に「厥父母慶、自二一一一致用レ酒」

【鮮腆】（センテン）鮮は善、腆は厚なり、自ら善厚にする義、自ら尊大にするなり、蘇軾の留侯論に「倨傲二一一而深折レ之」

【蟾兎】（センド）月の異稱、古詩に「三五明月滿、四五一一缺」劉孝綽の句に「一一屢盈虛」

【前途】（ゼントガ）「ユクサキ」夢溪筆記に「吳僧持二一寶鑑一來云、齋戒照レ之當レ見二一一一吉凶」前程に同じ、

【先登】（センドウ）衆に先だちて城に登るをいふ、左傳隱十一年に「潁考叔取二鄭伯之旗一蝥弧以二一一一鑿弧は旗の名、

【扇動】（センアウ）扇にて風を起し、物を動かす如く、敎唆して事を起さしむるをいふ、魏志梁習傳に「更相二一一一峙レ往往基

【賤ニシテ貴服ヲ服スル之ヲ僭上トイフ云云】 太平記巻十二に見ゆ、孝經卿大夫章の孔安國の註の語なり、

【千日紅】 俗に千日草といふ、高一二三尺、莖は秋海棠に似て淡紫色なり、秋深紫の花を開く、重瓣にして圓くして楊梅に似たり、天和年中、漢種長崎に來る、

【先入主ト爲ル】 (先入爲主)一番先に耳に入りたる言を以て宗とする義、漢書息夫躬傳に「觀覽古戒、反覆參考、無以先入之語爲主」

【仙人】 仙は釋名に「老而不死曰仙、仙遷也、遷入山也」と、道家の方士等が唱へ出して、つひに世の俗説となるに至れり、南史隱逸傳に「龔祈風姿端雅、容止可觀、范述見之歎曰、此荊楚之一也」と、また古詩に「一騎白鹿、髮短耳何長」

【仙人掌】 「サボテン」なり、花鏡に「一一一ハ草ニアラズ、木ニアラズ果蔬ニアラズ枝無ク葉無クマタ幷セテ花ナシ、土中ニ一片ヲ突出シ手掌ト異ルナシ、其ノ膚色青綠光潤觀ルベシ」と、泉州府志に「一一一一名ハ龜脚」一名は覇王樹、

【善人ト居レバ、芝蘭ノ室ニ入ルガ如シ】 孔子家語に「與善人居如入芝蘭之室久而不聞其香、即與之化矣、與不善人居如入鮑魚之肆久而不聞其臭、亦與之化矣、是以君子愼其所與處焉」

【千人ノ諾諾ハ一士ノ諤諤ニ如カズ】 衆愚は一賢に如かざるをいふ、諤諤は直言の貌、史記の商鞅傳に「商君秦ニ相タル十年、趙良商君ニ見ユ、商君曰ク、子我ガ秦ヲ治ムルヲ觀ルニ、五羖大夫ノ賢ナルニ孰レゾト、趙良曰ク千羊ノ皮ハ、一狐ノ腋(わきのした)ニ如カズ、千人之諾諾不如一士之諤諤ト、僕請フ終日正言セン、可ナランカト、商君曰ク、語ニ之アリ、貌言ハ華ナリ、至言ハ實ナリ、苦言ハ藥ナリ、甘言ハ疾ナリ、子果シテ終日正言スルヲ肯ンゼバ、鞅ガ藥ナリト」

【善人ハ不善人ノ師】 (善人者不善人之師)老子の語、下に「不善人者善人之資」とあり、

【洗馬】 漢百官表の「庶子一一」の注に「一一ハ前驅ナリ、國語ニ曰ク、勾踐親ラ夫差ノ一一ト爲ル、洗ハ先ナリ、或ハ洗ニ作ル」後漢百官志に「一一ハ太子出ヅレバ、則チ當直ノ者前ニ在リテ威儀ヲ導ク」晉職官志に「一一ハ國籍ヲ掌リ釋奠講經ニハ則チ其ノ事ヲ掌ル」唐百官志の注に「龍朔二年一一ヲ以テ司經大夫ト爲シ三年司經大夫ヲ改メテ桂坊大夫ト曰フ」

【善敗由己】 (善敗由己)善敗は、猶ほ成敗といふが如し、事の成敗は、我が行の善惡に由りて分るるをいふ、左傳に「一一一而由人乎」

【訕謗】 訕は一音サン 他人の德聲をそこなひそしる、謗は他人の短所をそしる、北史に「坐一一繫獄」誹謗・譏謗・讒謗など略同じ、

【專房ノ寵】 獨り君の寵幸を專らにする義、晉書胡貴嬪傳に「胡貴嬪名芳、最蒙愛幸、殆有專房之寵焉」

【仟佰】 仟は千錢、佰は百錢をいふ、漢書食貨志に「一一之得」また次の阡陌の義にも通用す、

【阡陌】 田閒の道なり、史記の秦本紀に「爲田開阡陌」の註に、風俗通を引きて「南北ヲ阡ト爲シ、東西ヲ陌ト爲ス」

【前踬後壺】 踬は躓なり、壺は跲なり、狼が前に進まんとすれば、其の胡を躡み、後に退かんとすれば、其の尾に跲く如く、進退の難きに喩ふ、前ヲ踬ミ後ヲ見よ、

【先妣】 亡母をいふ、爾雅に「父曰考妣曰妣」禮記に「生ニ父母トイヒ、死ニ考妣トイフ」

【泉布】 泉は錢なり、一一は、貨幣をいふ、管子に「謹守一一之謝」と、周禮天官の註に「ソノ藏スルヲ泉トイヒ、行フヲ布トイフ、名ヲ水泉ノ流行シテ徧カラザルナキニ取ル」とあり、

【仙風道骨】 仙人道士の風骨ありて、凡人に異るをいふ、李白の大鵬賦の序に「余昔於江陵見天台司馬子微謂余有一一一一可與神遊八極之表」

【鷹福碑】 江西省饒州府鷹福寺碑は、唐の歐陽詢の筆、范仲淹、饒州に知たりし時、一日書生あり、詩を獻ず、仲淹その貧を憐み、一一一千本を摹し之に贈らんと欲す、紙墨已に具して一夕雷その碑を擊碎せりと、錦字箋に見ゆ、

【先府君】 亡父をたふとびて稱す、蘇老泉の送石昌言爲北使引に見ゆ、朱子語類に「無爵曰府君夫人、漢人碑已有、只是尊神之辭、府君如官府之君」

【潛夫論】 十卷、後漢の王符撰す、符字は節信、安定臨涇の人、耿介俗に合はず、隱居して書を著し以て當時の得失を議す、その名を顯すことを欲せず故に題して一一一といふ、すべて三十五篇、別に敘錄一篇あり 各篇の主旨を總括せり、

【洗兵】 兵器を洗ひ收むる義、戰をやむるをいふ 杜甫の洗兵馬に「安得壯士挽天河淨洗甲兵長不用」

【錢癖】 晉書に「和嶠ノ家至富ナレドモ、性吝ニシテ一錢ト雖モ敢テ人ニ與ヘズ時人之ヲ一一トイフ」(馬癖)を參看せよ、

【先鞭ヲ著ク】 人に先だちて事を爲すをいふ、晉書劉

現傳に「劉琨、祖逖ト友タリ、親故ニ與フル書ニ曰ク、吾レ枕戈待旦、志梟逆虜、常恐祖生先吾著鞭」祖逖」を參看せよ、

【千變萬化】 變化多くして極りなきをいふ、列子に「一一一、不可窮極」漢書賈誼傳に「一一一一未始有」

【漸摩】 しだいしだいに研ぎ磨く義、摩は相切磋する義、禮の學記にも「相觀而善之謂摩」とあり、宋史に「設學校者、要以仁義一一」

【先民】 古の賢者をいふ、詩經大雅板に「一一有言、詢于芻蕘」(芻蕘)を見よ、

【善以爲寶】 (善以爲寶)大學に「楚書曰、楚國無以爲寶、惟善以爲寶」の註に「楚書ハ楚語ナリ、言フコトロハ、金玉ヲ寶トセズシテ、善人ヲ寶トスルナリ」

【善モ積マザレバ以テ名ヲ成スニ足ラズ】 易の繫辭に「善不積不足以成名、惡不積不足以滅身、小人以小善爲無益而不爲也、以小惡爲無傷而弗去也、故惡積而不可掩、罪大而不可解」

【專門】 專ら一經を究むるをいふ、漢書儒林傳に「各一ー敎授」張九齡の詩に「家受專門學」

【前門ニ虎ヲ拒ギテ後門ニ狼ヲ進ム】 わづかに禍をのがれて、又禍に逢ふを云ふ、陳惇脩の史斷に「前門拒虎後門進狼」

【千門萬戶】 家屋の宏大なるさま、史記孝武記に「作建章宮、度爲一一一一」また人家の稠密なるにもいふ、清の盧道悅の迎春の詩に「律轉鴻鈞佳氣同、肩摩轂擊樂融融、不須更向東郊去、春在一一一一中」

【穿楊】 古の射に巧なる人をいふ(百步楊)を見よ、

【千羊ノ皮ハ一狐ノ腋ニ如カズ】 衆愚は一賢に若かざるをいふ、史記の趙世家に「趙簡子、臣アリ周舍トイフ、直諫ヲ好ム、周舍死ス、簡子朝ヲ聽ク每ニ、常ニ悅ビズ、大夫皐ヲ請フ、簡子曰ク、大夫非ナシ吾レ聞ク千羊之皮不如一狐之腋ト、諸大夫ノ朝スル、徒ニ唯唯ヲ聞ク、周舍ノ鄂鄂ヲ聞カズ、是ヲ以テ憂フルナリト」鄂鄂は諤諤に同じ、やかましく爭ふをいふ、

【千羊ハ獨虎ヲ捍グ能ハズ】 弱小なるもの多くとも、一の強大なるものをふせぐこと能はざるに喩ふ、抱朴子の語、下に「萬雀不能抵一鷹」易林に「千雀萬鳩、與鵠爲仇、威勢不敵雖衆無益」とあるも意は同じ、

【穿窬ノ盜】 壁を穿ち、牆を踰ゆる小盜なり、論語の陽貨に「其猶穿窬之盜也歟」孟子に「人能充無穿踰之心而義不可勝用也」禮記にも「情疏而貌親、在小人則一一之一也」

【先容】 前もつて、ほめ薦むる義、漢書鄒陽傳に「蟠木根柢、輪囷離奇而爲萬乘器者以左右先爲之容也」注に「一一ハ雕刻シテ飾ヲ加フルヲイフ」と、駱賓王の詩に「徒懷萬乘器、誰爲一一」(左右先ヅ)を見よ、

【錢朗】 南昌の人、書を西山に讀み、五經を以て登科し、累官して光祿卿に至る、唐の文宗の朝、廬山に歸隱し、補腦還元の術を得たり、錢鏐延いて杭に致し、之を禮すること師の如し、玄孫數人皆明經を以て縣宰となる已に皓首なり、而るに朗は猶ほ童子の如し、一日家人に告げて曰く、我適上清の召す所ろとなる、今去らんと、俄にして氣絕す、數日顏色生けるが如し、棺を舉ぐるに尸已に解去せり、時に年一百七十歲(尸解)を參看せよ、

【專利】 利益を一人して專らに占むる義、國語の周語に「榮公好一一」

【千里行ヲ留メズ】 (千里不留行)千里の遠きに行く開、誰も之を遮り止むる者なきは、天下に敵なきなり、莊子の說劍篇に「莊子趙ノ文王ニ謂ッテ曰ク、臣聞ク大王劍ヲ喜ムト、故ニ劍ヲ以テ王ニ見ユト、王曰ク、子ノ劍何ヲカ能ク禁制スルト、曰ク、臣ノ劍十步ニ一人、千里行ヲ留メズ、王大ニ之ヲ說ンデ曰ク、天下ニ敵ナシ」とあり、十步に一人とは、十步を行く開に、一人を殺すをいふ、

【千里糧ヲ齎ラサズ】 (千里不齎糧)世の中太平にして且つ豐年なるをいふ、圓機活法に「唐ノ貞觀四年米斗四五錢、人數千里ニ行クニ糧ヲ齎ラサズ、民物蕃息ス、青齊ノ閒斗米三錢ナリ」

【戰慄】 をののき惧るる貌、論語に「使民一一」

【千里猶ホ對面ノ如シ】 (千里猶對面)唐書房玄齡傳に「高祖曰ク、房玄齡機識實ニ宜シク委任スベシ、每ニ吾ガ見ノ爲メニ事ヲ千里ノ外ニ陳ス、猶ホ對面シテ語ルガ如シ」

【千里ニ適ク者ハ、三月糧ヲ聚ム】 (適千里者、三月聚糧)遠方へ行く者はそれに應じて糧を多く持ち行くをいふ、莊子の逍遙遊に出づ、

【千里ノ馬ヲ却ク】 通鑑綱目孝文紀に「時ニ千里ノ馬ヲ獻ズル者アリ、帝曰ク、鸞旗前ニ在リ、屬車後ニ在リ、吉行ニハ、日ニ五十里、師行ニハ三十里、朕千里ノ馬ニ乘ジテ獨リ安ンゾ之ニ先ンゼンヤト、是ニ於テソノ馬ヲ還シ、道里ノ費ヲ與ヘ、詔ヲ下シテ曰ク、朕ハ獻

ヲ受ケザルナリ」とあり、また光武紀にいふ「時ニ異國ヨリ名馬ヲ獻ズルモノアリ、日ニ行クコト千里、マタ寶劒ヲ進ム、價百金ニ値ス、詔シテ劒ヲ以テ騎士ニ賜ヒ、馬ハ鼓車ニ駕セシム」と、集覽にいふ、天子の車駕出るときは、後に黃門の鼓車ありと、鼓車とは、鼓を載するの車をいふ、皇朝史略に「孝文光武却千里馬」とあるは、右の二事を斥すなり（死馬ノ）を參看せよ、

【千里ノ馬ハ常ニアレドモ伯樂ハ常ニアラズ】 すぐれたる人才はあれども之を用ふる賢相なきに喩ふ、韓愈の雜說に「世有伯樂、然後有千里馬、千里馬常有、而伯樂不常有、故雖有名馬、祇辱於奴隸人之手、駢死於槽櫪之閒、不以千里稱也、伯樂は孫陽といふ人、善く馬を相す、天上に一星あり、伯樂と名づく、天熙星の旁に在り、人孫陽の馬を識るを見、因つて號して伯樂といふ、この文借りて以て賢宰相に比す、千里馬は英雄豪傑の異材に比す、

【千里ノ行モ一步ヨリ始マル】 千里の旅行も、其の始は足下の一步より始まる如く、勉めて已まざるときは、如何なる大事をも、成し得べきをいふ、老子に「合抱之木、生於毫末、九層之臺、起於累土、千里之行、始於足下」

【千里ノ結言】 遠方の友と約せし言なり、後漢書に「范式字ハ巨卿、少クシテ太學に游ブ、汝南ノ張邵ト友ダリ、邵字ハ元伯、二人各鄉里ニ歸ルトキ、式元伯ニ謂ツテ曰ク、後チ二年當ニ過リテ尊親ヲ拜スベシト、期ニ至リテ元伯母ニ白シテ饌ヲ設ケテ之ヲ候ント請フ、母曰ク、二年ノ別ニシテ千里ノ結言ナリ、爾何ゾ相信ズルノ審ナルヤト、對ヘテ曰ク、巨卿ハ信士ナリ、必ズ乖違セズト、日ニ至リテ巨卿果シテ到ル、堂ニ升リ母ヲ拜シ、歡ヲ盡シテ別ル」

【千里ノ江陵一日還】 李白の早發白帝城詩の承句なり、曰く「朝辭白帝彩雲閒、一一一一一一、兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山」江水迅急の狀をいひ得て妙なり、盛廣之の荊州記に「朝發白帝、暮至江陵、其閒千二百里、雖飛雲迅鳥、不能過也」とあり、

【千里ノ駒】 楚辭に「寧ロ昂昂タルコト千里ノ駒ノ若クセン乎」の註に「昂昂ハ志行高キナリ、千里ノ駒トハ、才絕グレテ殊ナルナリ」漢書の楚元王傳に「劉德字ハ路叔、少クシテ黃老ノ術ヲ修メ、智略アリ、少時、數事ヲ言フ、甘泉宮ニ召見セラル、武帝之ヲ千里ノ駒ト謂フ」年少なるが故に駒といふ、また事類全書に「晉ノ苻朗ハ堅ガ從兄ノ子ナリ、堅嘗テ之ヲ目シテ吾ガ家ノ千里駒トイフ」

【潛鱗】 水中に深くひそめる魚、孫逖の句に「還見躍一一伏鱗に同じ、

【善隣】 隣國に交るに善く道を盡すをいふ、左傳隱六年に「親仁善隣國之寶也」

【禪林】 禪林寶訓音義に「禪ハ靜慮ナリ、林ハ叢林ナリ、蓋シ謂フ心ハ、山林ノ士劃海ノ流、招提（てら）ニ雲集シ、堂ヲ同クシ、命ヲ共ニシ結伴參學シ、淨業ヲ修習ス、此ヲ以テ之ヲ言フ 故ニ一一ト曰フ」禪僧の多くあつまれるところをいふ、又その仲閒をもいふ、

【千里命駕】 書言故事に「遠方ノ朋友過訪スルヲ謝シテ、仰辱ニ千里命駕トイフ、晉ノ呂安、嵇康ノ高致ニ服シ、相思フ每ニ、輒チ千里駕ヲ命ジテ之ニ從フ」

【潛龍】 天子の未だ位に即かざる時をいふ、易經乾卦に「一一勿用」また淮南子に「一一勿用者、言時之不可以行也」

【千慮ニ一得アリ】 （愚者）を見よ、

【賤劣】 「イヤシ」漢書の註に「其一一如僮豎」

【謙劣】 謙一に謙に作る、淺也、才智のあさくして劣るなり、淺劣に作る同じ、吳志に「智慧淺劣」

【蟬聯】 言語または事物の連り綴く貌、晉書王濛傳に「王恭曰、與阿大語、一一不得斷」また同書に「王脩緯僧虔等爵位一一文武相繼」また文選の吳都賦に「一一陵邱」

【先王ニ靖獻ス】 （靖獻先王ニ）人其の義の當に盡すべき所ろに安んじて、以て其の志を先王に達する義にて、神明に愧づることなきの意、書の微子に「自靖人自獻于一一」

【責ヲ塞グ】 己の盡すべき務をなし終へたる義、漢書に「高祖遽捕趙王敖、趙相貫高對獄獨白、趙王不反、上赦趙王、貫高曰、今王已出、吾責已塞、死不恨矣」聊カ以テ）を見よ、

【芹】 爾雅に「一ハ楚葵ナリ」の注に「今ノ水中ノ芹菜ナリ」疏に「一一名ハ水英」呂氏春秋に「一ノ美ナル者ハ雲夢ノ一ナリ」詩經に「薄采其一」香一は「ニホヒ」高き芹をいひ、野一は「ノゼリ」をいふ、

【芹ヲ獻ズ】 （芹）を見よ、

ソ

【遡游】（ソイウ）遡は泝に同じ、サカノボル義なれども、單に水に沿ふ義にも用ふ、——は、流に順ひて下るをいふ、詩經秦風蒹葭に「——從之宛在水中央」（ハンドスレバソレヲシタヒテ）宛は坐ながら見ゆる貌、

【蘇易簡】（ソイカン）字は太簡、梓山の人、宋の太宗の時進士に及第し、翰林學士より參知政事に終る、勅を奉じて文苑英華一千卷を參修す、

【祚胤】（ソイン）祚は福祿なり、胤は子孫なり、詩の大雅に「君子萬年、永錫（フヲ）——（ヲ）」

【僧】（ソウ）梵語僧伽の略、家を捨てて佛門に入れる人の稱、比丘・沙門・桑門・出家・法師・緇徒等の異稱あり

【窓牖】（ソウイウ）窓は窓の俗字、鄭玄曰く「窓助戸爲明也」と、釋名に「窓聰也、於內窺外以爲聰也」と、牖は壁を穿ち明を取るなり、櫺子（窓ニ設ケタル格子）窓をいふ、

【宋璟】（ソウケイ）字は廣平、唐の名相（漢ノ丙魏）を見よ、

【曾益】（ソウエキ）「マシアヤス」曾は增なり、孟子の告子篇に「——（ス）其所（ヲ）不（ン）能（ト）」

【宋琬】（ソウエン）字は玉叔、荊嚢と號す、山東萊陽の人、清の順治四年の進士、四川按察使に官す、詩は杜韓を學びて工なり、時に感じ事を傷むの作、淒清激宕の音多し、施愚山と名を齊うし、世に南施北宋と稱す、安雅堂集あり、

【走舸】（ソウカ）「ハヤブネ」三國志の吳志に「豫備——（ヲ）輕舸・單舸など略ゝ同じ、

【曾開】（ソウカイ）字は天游、準の次子、崇寧の進士、官を歷て禮部侍郎に至る、秦檜和議を主とす、開抗疏して力爭し、檜に忤ひ、出されて徽州に知たり、尋いで職を褫はる、後ち祕閣修撰に復せられて卒す、開嘗て游酢を師とし、劉安世を友とす、故に朝に立ち事に遇ひ大節に臨んで奪ふ可からざるものあり

【綜核】（ソウカク）事物をすべ明かにする義、漢書の宣帝紀に「綜核名實（ヲ）」

【宋學淵源記】二卷附記一卷清の江藩撰す、藩字は子屏、江蘇甘泉の人、諸生なり、博聞強記にして群經に通ず、この書は宋學者の傳記にして孫奇逢に始まり、鄧元昌に終る、すべて三十一人、附記は沈國模以下九人を收む、

【宋學士全集】（ソウガクシ）三十六卷明の宋濂撰す、元末の文章、吳萊・柳貫・黃溍を以て一朝の後勁とす、濂、初め萊に學び、後ち貫と溍とに學ぶ、遂に經訓に根柢し、發して文章となる、明一代の冠冕と稱す、和刻あり、また別に宋景濂未一刻集二卷あり、宋濂を參看せよ、

【總角ノ好】（ソウカクノコウ）幼時の親交をいふ、總角とは、幼兒其の髮を總べ聚めて、兩角の形とするをいふ「アゲマキ」詩經齊風甫田篇の「婉兮孌兮（エンケイレンケイ）、總角丱兮（ソウカククワンケイ）」の註に「婉孌ハ少好ノ貌、丱ハ兩角ノ貌」とあり、三國志に「孫策曰、公瑾（周瑜の字）與、孤有總角之好（ニ）」

【宋祁】（ソウキ）宋史に、——字は子京、兄庠と同時に進士に擧げらる、禮部、祁を第一に、庠を第三に奏す、章獻大后弟を以て兄に先んぜしむるを欲せず、乃ち庠を第一に擢き、祁を第十八に寘く、呼びて二宋といひ、大小を以て之を別つ、兄弟皆文學を以て顯る、而して祁尤も能文議論を善くす、然れども清約莊重は庠に及ばず、論者以爲らく、祁の公輔に至らざる亦此を以てなりといふ、新唐書を修する十餘年、出入內外、常に稿を以て自ら隨ふ、列傳百五十卷を爲る、嘉祐六年卒す、年六十四、尚書を贈られ、謚して景文といふ（宋景文公）を參看せよ、

【曾幾】（ソウキ）字は吉父、茶山居士と號す、開の弟、幼にして識度あり、親に事へて孝なり、紹興の閒、浙江提刑に至る、秦檜開を怒る、幾も亦罷めらる、檜死するに及び、起ちて台州に知たり、尋いで祕書少監を授けられ、實訓を修し、書成りて權の禮部侍郎となり、致仕して乾道二年卒す、年八十三、文清と謚す、幾文を爲る純正、詩は尤も工なり、著すところ茶山集あり、

【送窮】（ソウキウ）「ビンバフガミヲオクル」韓愈に——一文あり

【曾鞏】（ソウキョウ）字は子固、致堯の孫、宋の建昌南豐の人、幼にして警敏數千言一覽輒ち記す、嘉祐二年の進士、齊・襄・洪・福・明・亳・滄州に歷知たり、至るところ務めて民の疾苦を去る、入りて中書舍人となる、文章は歐陽修と名を齊うす、世に南豐先生と稱す、元豐六年卒す、年六十五、元豐類稿五十卷あり、

【宋玉】（ソウギョク）字は子淵、周の楚の人、屈原の弟子、楚の大夫となる、その師の放逐せられたるを閔み、乃ち九辨を作りその志を述べ以て之を悲む、又神女高唐二賦を作る、皆寓言興を托し、諷するところあるなり、その風の賦に曰く「楚襄王遊於蘭臺之宮（ニ）、宋玉景差侍（スル）有風颯然而至（ル）、王乃披襟而當之（リテ）曰、快哉此風、寡人所與（ニ）庶人共（ニ）者邪、宋玉對曰、此獨大王之風耳、庶人安得而共（ニ）之云云」蕭轍の黃州快哉亭記に「大王之雄風」とあるは、清涼の風にして、病を愈やし、醒を解くものをいひ、庶人

の雌風とは、溷濁の風にして、病を生じ熱を造すものを云ふ、詳しくは賦の全文を見よ、

【漱玉】 玉を漱ぐをいふ、瀑布などの飛び散るさまに喩ふ、文選に「山溜何洽洽、飛泉漱鳴玉」

【宋玉ガ隣ニ住ミシ女】 十訓抄第十に見ゆ、文選の四、宋玉が登徒子好色の賦の序に「臣東家之子、増一分則太長、減一分則太短、著粉則太白、施朱則太赤、然此女登牆窺臣三年、至今未許也云云」と見ゆ、宋玉は鄧の人屈原の弟子楚の大夫にて美丈夫の稱ありき、史記列傳に見ゆ、

【叢輕軸ヲ折ル】 〈叢輕折軸〉輕き物にても積みて多きに至るときは、車軸を折るに至るをいふ、漢書中山王傳に「一一レ、羽翮飛レ肉」

【宋景文公筆記】 三卷、宋の宋祁撰す、景文はその諡なり、この書は釋俗考古雜說の三門に分ちて隨記す、中に就きて考古は小學に益あり〈宋祁〉を參看せよ、

【宋景文集】 六十二卷補遺二卷附錄一卷、宋の宋祁撰す、祁の文は謹嚴にして典麗なり、但往往奇字を用ふるの癖あり、詩は文に及ばずと雖も、亦誦すべし、この書もと百卷ありしが殘缺して今の卷數となれり、

【宋元學案】 一百卷、清の黃宗羲の原撰にして全祖望の續補せしところなり、この書、每學案の首に學系表あり、次に序あり、次に各人の小傳を擧げ、後にその文集語錄等よりその學說を抄記す、

【宋元通鑑】 一百五十七卷、明の薛應旂撰す、宋の太祖建隆元年より、元の順帝、至正二十八年に至る四百八十二年閒の事蹟を資治通鑑の體例にならひて編せり、應旂字は仲常、嘉靖十四年の進士、官浙江提學副使に至る、文章に工なり、著すところこの書の外に四書人物考あり、

【宋弘】 後漢書に「宋弘字ハ仲子、京兆長安ノ人、光武位ニ即キ、大司空トナル、時ニ光武ノ姉湖陽公主新ニ寡居ス、帝與ニ群臣ヲ論ジテ、以テ其ノ意ヲ視ル、公主曰ク、宋弘ガ威儀ハ群臣及ブ者ナシト、帝曰ク試ニ之ヲ圖ラント、後弘ヲ徵ス、公主屛後ニ坐セリ、帝因ツテ弘ニ謂ツテ曰ク、諺ニ云フ、富ミテハ交ヲ易ヘ貴クシテハ妻ヲ易フト、人情カト、弘曰ク、臣聞ク貧賤ノ交ハ忘ル可カラズ、糟糠ノ妻ハ堂ヨリ下サズト、帝公主ヲ顧ミテ曰ク、事諧ハズト」

【曾國藩】 清朝の名臣、字は伯涵、滌生と號す、湖南湘鄉の人、道光十八年の進士、官武英殿大學士に至る、長髮賊を平定して功あり、同治十一年卒す、年六十二、太傅

を追贈し、謚して文正といふ、著すところの曾文正公全集あり、詳しくは李鴻章の撰びし神道碑を見よ、

【叢脞】 くだくだしき義、煩砕にして大略なきなり、書の益稷に「元首一一哉、股肱惰一哉」

【楢巢】 薪を聚めてつくれる巢居なり、禮記の禮運に「冬則居二營窟一、夏則居二レ一」

【宋史】 四百九十六卷、元の托克托等勅を奉じて撰す、五代の末の周より以來、三百十七年閒の事を記す、大旨道學を表章するに在り、その餘は皆姑く以て數に備ふ、故に疎舛蕪蔓亦多し、陳全之も、宋史は一事を紀して、先後不同、一人にして彼是不同とて、遺恨あることをいへり〈蓬窓日錄ニ見ユ〉嘉靖中に、何維騏、之を刪略して、宋史新編二百卷を撰せり、甚だ簡約とはなりたれども、これは餘り節略に過ぎて、事實の明暢を缺くの遺憾なきにあらず、

【宗子】 嫡子なり「ソウリャウノコ」禮記に「支子不レ祭、祭必告二于一一一」また同姓をいふ、詩の大雅に「一一維城」

【廋辭】 廋は隱なり「ナゾ」をいふ、國語の晉語に「有秦客一一一於朝一」の註に「隱伏譎詭ノ言ヲ以テ朝ニ聞スルヲイフ」廋一音シウ〈廋詞〉を見よ、

【宗周】 はじめは、三代の周の創業地〈今ノ陝西省鳳翔府〉をいひ、その天子となるに及びて、王都の稱に用ふ〈今ノ陝西省西安府〉書經に「王來自レ奄、至二于一一一」また單に三代の周の世の稱、杜牧の句に「四百年炎漢、三十代一一」

【曾子孝養】 說苑に「曾子曰ク、往キテ還ル可カラザル者ハ、親ナリ、牛ヲ椎シテ葬ルハ、雞豚ノ親ノ存ズルニ逮ブニ如カザルナリ、初メ吾、吏タリシトキ、祿、釜ニ及バザレドモ、尙ホ欣欣トシテ喜色アリキ、以テ多シト爲スニアラザルナリ、其ノ親ニ逮ブヲ樂ムナリ、既ニ沒セシ後、吾、南楚ニ遊ビテ、高官ヲ得タリ、堂九尺、傳百乘アリ、然レドモ北面シテ涕泣ス、以テ賤シト爲スニ非ザルナリ、吾ガ親ニ逮バザルヲ悲ムナリト」

【宋史紀事本末】 二十六卷明の陳邦瞻撰す、初め馮琦、宋の事を類次し、以て宋の袁樞の通鑑紀事本末に續がんとし、未だ成らずして沒す、この書は琦の遺稿に因る者、十の三、自ら補葺せし者十の七、凡そ一百九篇あり、諸史中にて宋史を最も蕪穢と爲す、資治通鑑の端緒の尋ね易きに似ず、邦瞻紛絲を排比し、條理に就かしむ、その書は、袁樞に亞ぐと雖も、その難きことは樞に較ぶれば十倍せり、

【宋詩鈔】 九十三卷、清の吳之振撰す、從來宋詩の選本蕪雜多きを以て、この書を選して缺典を補ひたるなり、每人小傳品評あり、この書四庫提要には百六卷とあり、蓋、未刻の分をも合せ數へたるなるべし、

【雙日】 偶數の日をいふ（隻日）を見よ、雙漢音サウ

【宋詩百一鈔】 九卷、清の張景星・姚培謙・王永祺の共に編するところなり、凡て百三十七人、六百四十三首を收む、序文に「鈔名百一、蓋謂（嘗鼎一臠）窺豹一斑亦可見宋詩宗派云爾」とあり、和版あり、

【走集】 邊境の壘壁をいふ、走りて之に集まる義、左傳昭二十三年に「險其一一」李格非書洛陽名園記後に「洛陽處天下之中、挾殽黽之阻、當秦隴之襟喉、而趙魏之一一、蓋四方必爭之地也」

【曾參】 字は子輿、南城の人、點の子、志孝道に存ず、故に孔子之に因つて孝經を作る、齊嘗て聘して以て卿と爲さんと欲すれども、就かず、曰くわが父母老いたり、人の祿を食めば、人の事を憂ふ、故に吾親に遠ざかりて人の役たるに忍びずと、踐履篤實、一貫の旨を悟り、道統の傳を得たり、後世鄒國宗聖公に追封し、孔子の廟庭に配享す、子は元（曾子、孝養）（曾參人）を參看せよ、

【宋人ノ章甫ヲ越ニ賣ル】 駿臺雜話の「心のめしひ」の條に見ゆ、莊子の逍遙遊に「宋人資章甫而適諸越、越人斷髮文身、無所用之」とあり、章甫は殷の冠名なり、禮記の儒行篇に「孔子對曰、丘少居魯、衣逢掖之衣、長居宋冠章甫之冠」と、陳註に「蓋緇布冠、殷世則名章甫、章明也、所以表明丈夫、故謂之章甫耳」

【曾參人ヲ殺ス】 讒言も度重なればつひには人を惑すに至るに喩ふ、戰國策秦策に「甘茂曰ク、昔曾子費ニ處ル、人曾參ト名姓ヲ同ウスル者アリテ人ヲ殺ス、人曾子ノ母ニ告ゲテ曰ク、曾參人ヲ殺セリト、母曰ク、吾ガ子ハ人ヲ殺サズト、織ルコト自若タリ、頃アリテ人又曰ク曾參人ヲ殺セリト、ソノ母尚ホ織ルコト自若タリ、頃シテ一人又之ニ告ゲテ曰ク、曾參人ヲ殺セリト、ソノ母懼レ、杼ヲ投ジ牆ヲ踰エテ走リヌ、夫レ曾子ノ賢ト母ノ信トヲ以テシテモ、三人之ヲ疑ハシムルニハ、慈母モ信ズル能ハザルナリ云云」

【宋之問】 字は延清、唐の西河の人、儀容に偉にして詞章を善くす、武后の尙方監丞に官す、嘗て張說等と三敎珠英を撰す、韋維と一臺二妙と稱せらる、中宗の朝修文館學士となる、

【宗社】 宗廟社稷をいふ、周禮に「小宗伯職、掌建國之神位、右社稷左宗廟」

【宗庠】 字は公序、安陸の人、宋の天聖二年の進士弟祁と倶に翰林に入り、皇祐中、中書門下平章を拜し、鄭國公に封ぜられ、英宗の時致仕し、年七十一にして卒す、太尉を贈らる、著すところ、宋元憲集四十卷、國語補音あり、

【宗匠】 工師をいふ、また師宗たる者を稱す、袁宏三國名臣序贊に「一一陶鈞而群才緝熙」

【宋襄ノ仁】 つまらぬ「アハレミ」春秋戰國の時、宋の襄公茲父といふ者、諸侯に霸たらんと欲し、楚の成王と泓に戰ふ、公子目夷、敵の未だ陣せざるに及びて之を擊たんと請ふ、公曰く、君子は人を阨に困めずと、遂に楚の爲めに敗らる、世笑ひて以て宋襄之仁と爲す、事は左傳僖二十二年に詳かなり、

【宋鵲】 宋のすぐれたる犬の名、博物志に「宋有駿犬曰レ鵲」

【宋儒】 周敦頤・程顥・程頤・邵雍・張載・朱熹等の性理學者をいふ、

【宋書】 一百卷、梁の沈約、齊の武帝の勅を奉じて撰す、帝紀十卷・志三十卷・列傳六十卷に分つ、宋は六朝の宋なり、和版あり、

【宗正寺】 唐の代に、皇室の親族の屬籍を掌る役所、唐書に一一一卿一人、少卿二人」

【漱石枕流】 （石ニ漱ギ）を見よ、

【曾先之】 字は從野、宋の廬陵の人、十八史略を撰す、先之は宋末元初の人なれども、その傳は詳ならず、

【奏疏】 文體明辨に「按ズルニ一一トハ、羣臣論諫ノ總名ナリ、奏御ノ文、其ノ名一ナラズ、故ニ一一ヲ以テ之ヲ括ルナリ、七國以前皆上書ト稱ス、秦初メテ書ヲ改メテ奏トイフ、奏ハ進ナリ、疏ハ布ナリ」

【忽忽】 急遽疾速なり、杜甫の詩に「相逢難衰衰告別莫忽忽」とあり、衰衰は安からずして去らんと欲するの貌、忽忽は草草に同じ「イソガシキ貌、

【淙淙】 水聲なり、高適の漁父の歌に「石泉一一若風雨、桂子松花常滿地」

【曾孫】 「ヒマゴ」爾雅に「孫之子爲一一」郭氏曰く「曾ハ猶ホ重ノ如シ」

【宗澤】 字は汝霖、宋の義烏の人、文武の才畧あり、建炎の初、東京の留守李綱の薦むるところとなる、澤前後二十餘疏、高宗京に還り、汪黃の沮む所ろとなり、未だ一年に及ばずして憤死す、死に臨み杜詩を詠じて曰く「出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟」と、忠簡と諡す、

【甑中塵ヲ生ズ】（甑中生レ塵）極めて貧くして、炊ぐものなきをいふ、後漢書列傳七十一に「范丹字ハ史雲、好ンデ時ニ違ヒ俗ヲ絕チ、激詭ノ行ヲ爲ス、桓帝ノ時、萊蕪ノ長ト爲ル、母ノ憂ニ遭ヒ、官ニ到ラズ、後チニ世ヲ遁レ、鹿車ヲ推シ、妻子ヲ載セ、捃拾シテ自ラ資ス、或ハ客廬ニ寓息シ、或ハ樹陰ニ依宿ス、此ノ如キコト十餘年、乃チ草室ヲ結ビテ居ル、時アリテ粒ヲ絕ツ、窮居自若タリ、閭里之ヲ歌ヒテ曰ク、甑中生レ塵范史雲、釜中生レ魚范萊蕪ト」塵と雲と叶韻、魚と蕪と叶韻、

【宗祧】（ソウテウ）祧は遷廟なり、遷したる神主を藏むる所をいふ、遠祖の廟なり、左傳に「不佞失レ守ヲ」——ニ

【崇朝】（ソウテウ）（——ニ）を見よ、

【宋朝ノ美】（ソウテウノビ）宋朝は、古の美色ありし人（祝鮀）を見よ、

【曾點】（ソウテン）周の南武城の人、孔子の弟子、天資高明なり、嘗て孔子に對して志を言ふ、曰く「暮春者、春服既ニ成リ、冠者五六人、童子六七人、浴ニ乎沂ニ、風ニ乎舞雩ニ、詠而歸」と、孔子喟然として嘆じて曰く、吾は點に與せんと、後世萊蕪侯に追封す、子は參、

【贈證】（ソウショウ）勢を失ふ貌、李白の詩に「——遭讒毀ニ」

【曾南豐】（ソウナンポウ）（曾鞏）を見よ、

【增年】（ソウネン）年を增し加ふる義、歐陽詹の除夜詩に「算甲恨ム

——ニ陸游の詩に「身老怯ム——ニ

【宋ノ四賢】（ソウ）韓琦・范仲淹・富弼・歐陽修をいふ、各〻その條を見よ、

【宋ノ道學五先生】（ソウガク）周濂溪・程明道・程伊川・張橫渠・朱晦菴をいふ、

【宋ノ武帝ノ高祖ノ葛燈籠麻蠅拂ヲ見ル】（ソウアク）駿臺雜話の「矯輕警惰」の條に見ゆ、通鑑卷百二十九宋孝武帝紀に「上始大修ニ宮室ヲ、土木被ニ錦繡ヲ、嬖妾幸臣、賞賜傾ニ府藏ヲ、壞ニ高祖所ニ居陰室ヲ、於ニ其處ニ起ニ玉燭殿ヲ、與ニ群臣ニ觀之ヲ、牀頭有ニ土障ヲ、壁上挂ニ葛燈籠麻蠅拂ヲ、侍中袁顗、因盛稱ニ高祖儉素之德ヲ、上不ニ答ヘ、獨曰、田舍公得ニ此ヲ、已爲ニ過矣ト」と、高祖は晉を亡して宋室を創建せし武帝劉裕なり、

【宗伯】（ソウハク）禮儀神祇の事を掌る官の名、周禮の春官に「——主ニ禮之官ヲ」書經に「——掌ニ邦禮ヲ、治ニ神人ヲ、和ニ上下ヲ」と、

【宋敏求】（ソウビンキウ）字は次道、宋の趙州平棘の人、史館修撰に官し、龍圖閣直學士に至る、元豐二年卒す、年六十一、大唐詔令集百三十卷長安志二十卷を著せり、

【宋文鑑】（ソウブンカン）一百五十卷、宋の呂祖謙勅を奉じて撰す、收むるところ學術治法に關するもの多し、

【曾文正公全集】（ソウブンセイコウ）一百六十八卷、清の曾國藩撰す　光緒二年の刊本にして、首卷に上諭三道、諭賜祭文二首、諭賜入祀京師賢良祠祭文一首　御製碑文一首　國史本傳疏六篇、神道碑、墓誌銘、總目あり、その目は、

奏稿三十卷　十八家詩鈔二十八卷　經史百家雜鈔二十六卷　經史百家簡編二卷　鳴原堂論文二卷　詩集四卷　文集四卷　書札三十三卷　批牘六卷　雜著四卷　求闕齋讀書錄十卷　求闕齋日記類鈔二卷　年譜十二卷　孟子要略五卷

【曾文正公文集】（ソウブンセイコウブンシフ）四卷、清の曾國藩撰す　道光十八年より同治五年までの作を門人の編せしもの、その文平正にして布局亦大なり、

【宗炳】（ソウヘイ）（臥遊）を見よ、

【宗廟】（ソウベウ）宗は本なり、尊なり、祖宗の廟をいふ、廟は貌なり、祖先の形貌を彷彿する所以なり、書經に「社稷——罔ニ不ニ祇肅ニ」

【送別】（ソウベツ）別れて遠く行く人を見送るなり、圓機活法に「大丈夫慷慨意氣を以て相期す、劒に樽酒の閒に仗り、鞭を功名の會に著く、唯安を懷ひ名を敗るを以て戒と爲すことを知る、夫れ豈歔欷して流涕し、戀戀として兒女子の態を作さんや、その行に於てや、則ち餞送の禮あり、然れども人に餞するに物を以てするは、人を送るに言を以てするに若かず、人を送るに酒を以てするは、人を送るに言を以てするに若かず、蓋し物の意は盡るありて文の意は盡るなし、酒の味は窮りなし、仁人君子人を愛するに德を以てするにあらざるよりは若何ぞ以て此に與るに足らん」（祖道ノ）また（離別）を參看せよ、

【聰明睿智】（ソウメイエイチ）聖人の四德なり、聰は聞かざる所なく、明は見ざる所なく、睿は通ぜざる所なく、智は知らざる所ろなきをいふ、易經の繫辭上傳に「古之ニ——神武ニシテ而不ニ殺者ヲ夫」

【聰明聖知之ヲ守ル ニ愚ヲ以テス】（ソウメイセイチ）荀子宥坐に「聰明聖知、守ニ之ヲ以ニ愚ヲ、功被ニ天下ニ、守ニ之ヲ以ニ讓ヲ」

【叢蘭欲茂ラント欲スレバ秋風之ヲ敗ル】（ソウラン）帝範に「叢蘭欲茂秋風敗ニ之ヲ、王者欲明讒人蔽ニ之ヲ」とあり、くさむらの蘭が茂らんと欲すれば秋風吹きすさみて枯れ萎ましむ、それに同じく王者明かに天下を治めんとすれば讒臣出でてその明德をおほひくらますとなり、

【胗理】（ソウリ）「ハダ」の「キメ」膚理に同じ、史記の扁鵲傳に「君有ニ疾在ニ——ニ腠理ニ」素問に「寒則——閉」

【葱靈】（ソウレイ）牕櫺に同じ、衣物を裝載する車にて、前後に蔽あり、兩旁牕を開き、其の中に欄を設け、觀望し得るや

うに造る、左傳定九年に「載ーー寢於其中而逃」註に「輜車ノ名」

【總領】「スベテトリシマル」統領に同じ、詩經烝民篇の注に「外則ーー諸侯、內則輔養君德」領一音リヤウ

【葱嶺ノ教】佛教をいふ、葱嶺は印度の山の名、釋迦この山にて修行せしを以ていふ、漢書西域傳の顏師古の注に「葱嶺ハ其ノ山高大ニシテ、上ニ悉ク葱ヲ生ズ故ニ以テ名ヅク」

【宋濂】字は景濂、その先は金華潛溪の人、濂に至りて浦江に遷る、元の進士、文章を以て海內に名あり、至正十七年大臣薦めて國史編修と爲さんとす、固辭して龍門山に入り書を著す、明太祖の婺州を取るや、召し見て五經の師と爲す、後ち累進して學士承旨となる、先後二十餘年、道德を以て太祖を補佐す、天下心を歸して太祖を愛戴するは、濂の功多きに居る、洪武十四年卒す、年七十二、著す所ろ宋學士全集三十三卷あり（宋學士全集）を參看せよ、

【僧錄】僧官なり、要覽に「僧史略ニ云フ、唐ノ文宗ノ開成中、始メテ左右ノーーヲ立ツ、即チ端甫法師ヲ始ト爲スナリ、法師德宗ノ時ニ入リ、儒道ト論議シ、紫ノ方袍ヲ賜ハル、太子ニ東朝ニ侍セシメ、順宗之ヲ重ンズルコト兄弟ノ若ク、憲宗之ヲ待ツコト賓友ノ若シ內殿ノ法儀ヲ掌リ、左街ノ僧事ヲ錄セシム」我邦にても足利義滿の時始めてーー司を置き法儀を掌り、僧事を錄し、論事を決斷せしむ、

【蘇顒濱】（蘇頲）を見よ、

【疎影橫斜水淸淺、暗香浮動月黃昏】宋の隱士林和靖の山園小梅の詩の前聯なり、左に全文を示す、

衆芳搖落獨暄妍、占盡風情向小園、ーーーーーー、
ーー、ーーーーーー、霜禽欲下先偸眼、粉蝶
如知合斷魂、幸有微吟可相狎、不須檀板共金
樽、

【祖宴】宴一に筵に作る、祖道の「サカモリ」（祖道ノ）を見よ、

【疽ヲ吮フ】（疽ヲ）を見よ、

【素娥】月の異名、故事成語考に「素娥即月號」とあり、事文類聚に「張衡ガ靈憲ニ、羿不死ノ藥ヲ西王母ニ請フ、嫦娥之ヲ竊ンデ以テ月ニ奔ル是ヲ蟾蜍トナス」と、卓氏藻林に「月色白シ、故ニ素トイフ」

【阼階】東の「キザハシ」主人が客を禮するところ、儀禮鄕射禮の注に「ーー東階」

【租界】租は借なり、外國人の租借地をいふ、わが所謂

居留地の義、

【葅醢】葅は菹に同じ、果蔬を生にて酢などに漬けたるもの、醢は乾肉をきざみて、麴と鹽とをまぜ、之を酒に漬けたるもの「シシビシホ」よりて殺戮の義に用ふ、淮南子に「醢ニ鬼侯之女ヲ、葅ニ梅伯之骸ヲ」とあり、鬼侯梅伯は、殷の紂王の時の諸侯なり、梅伯、鬼侯の女の美なることを說き、紂に娶らしむ、女至る、紂以て美ならずとし、怒つて鬼侯の女を醢にし梅伯の體を葅にしたりとなり、

【鼠肝蟲臂】物の至微至賤なるに喩ふ、莊子に「汝ヲ以テ鼠肝ト爲サンカ、汝ヲ以テ蟲臂ト爲サンカ」

【素氣淸泚】秋の氣の淸くすみたるをいふ、宋史夏侯嘉正傳に「秋之爲ル神、ーーーー肅肅脩脩、羣籟四起」泚は淸く鮮かなる義、

【楚狂接輿ノ歌】論語に「楚狂接輿歌而過ニ孔子ノ一ヲ曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可ル諫、來者猶可ル追ニ已而已而、今之從ル政者殆而ト云云」接輿は楚人、佯狂して世を辟く、鳳道あれば見れ、道なければ隱る、接輿以て孔子に比し、その隱るる能はざるを譏りて德の衰へたるとなす、

【疏擧】一一書きたつる義、條記に同じ、漢書賈誼傳に「難ニ偪以ーーニ

【仄韻】平聲に對して去・上・入三聲の韻をいふ（韻）を見よ、

【惻隱ノ心】惻は傷の切なるなり隱は痛の深さなり、即ち所謂人に忍びざる心なり、孟子に「惻隱之心仁之端也羞惡之心義之端也辭讓之心禮之端也是非之心智之端也」

【息焉】「ヤスラフ」貌、禮の學記に「ーー游焉」

【息棄】やすみて「ツカレ」を去るをいふ、考工記の梓人に「則王以ーー」

【塞淵】塞は實なり、滿なり、淵は深なり、誠實にして深淵なるをいふ、詩の衞風に「秉心ーー」

【足音跫然】あし音のひびく貌、莊子の徐無鬼篇に「夫逃虛空者聞ル人足音跫然而喜矣而況乎昆弟親戚之謦欬其側者乎」林西仲の註に「跫然ハ、空中足音ノ響ナリ」

【足下】對等の人を指していふ敬語、閣下よりは卑し、史記秦紀に「閣樂前即ニ二世ニ數曰ーー驕恣誅ニ殺無道ヲ天下共ニ畔ク足下ニ足下其自爲レ計セヨ」

【息交】世人と交接をやめる義、歸去來歸に「歸去來兮請息ン交以絕ン遊ヲ」

【息耗】（ソクカウ）音信をいふ、耗の字を消息に用ふること、秉燭譚に曰く「後漢書皇后紀ニ、數〻呼〻相工ニ、問〻息耗ト（ト）アリ、注ニ耗惡也、息耗猶〻言〻善惡也ト、畢竟息ハ蕃息ノ義、耗ハ耗減ノ義、後世ニ消息トイフガ如シ、又董仲舒傳ニモ、察ニ天下之息耗ヲ、師古曰、息生也、耗虛也ト、コレニテ明カナリ、後代ニハ只耗トイヒテ、音ヅレノ事ニナル、音耗近耗的耗、信耗ナドイフ甚略ナリ、イヅレモ六帖ニアリ」

【屬纊】（ソククワウ）（纊ヲ）を見よ、

【則闕ノ官】（ソクケツノクワン）わが國にて太政大臣の異稱、大寶令に「有德之撰、無ニ其人一則闕ク」とあるに本づく、

【息肩】（ソクケン）勞苦を休むる義、左傳襄二年に「鄭子駟詩ニ一ヲ于齊ニ」とあるは、齊に賴りて休息するを得んとの意、史記律書に「得ル一ヲ於田畝ニ」とあるは、耕耘の勞を休むる意なり、孟子の序に「一レ一弛ニ擔」

【側言】（ソクゲン）かたよりたる一偏の說なり、書經に「詳ニ乃視聽ニ、罔レ以ニ一ヲ改ニ其度ヲ」

【續紘】（ソククワウ）書言故事に「再ビ妻ヲ娶ルヲイフ」とあり、東方朔の十洲記に「鳳麟洲、鳳脩鱗角ヲ以テ膠ヲ作ル、續紘膠ト名ヅク、能ク斷絃ヲ續グ」とあるに本づく、

【仄字】（ソクジ）仄一音ショク漢字の上去入三聲に屬する字をいふ、平聲に對して名つく、沈約曰く「上去入爲ニ仄聲一（ト）（ニ）韻ニ」を參看せよ、

【即時一杯ノ酒ニ如カズ】（ソクジイツパイ）死後の名譽よりは、眼前一杯の酒を飲む方がましぢやとの義（身後ノ名）を見よ、

【束脩】（ソクシウ）入門料なり、論語、述而に「子曰ク、束脩ヲ行フヨリ以上ハ、吾レ未ダ嘗テ誨ウル無クンバアラズ」註に「脩ハ脯ナリ、十脡ヲ束ト爲ス、古ハ、相見ルニ必ズ贄ヲ執リテ以テ禮トナス、一ハ、其ノ至リテ薄キモノ」とあり、皇侃の義疏に「贄ハ至ナリ、己ガ來リ至ルヲ表

【續資治通鑑】（ソクシチ）二百二十卷、清の畢沅撰す、この書は宋遼金元四朝の正史を經とし、宋紀元紀の二に分ち、參するに續資治通鑑長編契丹國志竝に百家の語錄文集等を以てす、考證頗る精し、以て司馬光の資治通鑑の續篇に充つるによろし、

【側室】（ソクシツ）妾をいふ、左傳に「卿ニ置ニ一ヲ一ニ」謝靈運詩に「陸展染ニ白髮一ヲ、欲ニ以媚ニ一ヲ一ニ」漢の文帝紀にも「高皇帝ニ一ヲ之子也」

【俗耳ノ針砭】（ゾクジ）砭は「イシバリ」なり、世說に「戴仲若、春日携ニ雙柑斗酒一、入ニ人間一、何之、答曰、往聽ニ黃鸝聲一、此俗耳針砭、詩腸鼓吹ト」仲若は戴顒の字、黃鸝は「ウグヒス」に似たる鳥なり、その聲は、いやしき耳に針を立てて瘡し、詩を作る腸を鼓吹するの功ありとの意、

【俗儒】（ゾクジュ）見識せまくして心卑しき學者をいふ、儒とは孔子の教學を奉ずる學者をいふ、論衡に「一ハ好ニ長古而短ニ今一、言ニ瑞則渥一ヲ前而薄ニ後一」

【俗儒ニ習ヒテ記誦詞章ヲ學ブ】（ゾクジュナラ）駿臺雜話の「老學自敍」に見ゆ、朱子の大學序に「自ニ是以來一、俗儒記誦詞章之習、其功倍ニ於小學一而無ニ用」とあり、鳩巢の疏に「記誦ハ心ニ記シ口ニ誦スルニ止マル、而シテ道ニ見ル所ロナシ、詞章ハ務メテ詞藻文章ヲヲサム、而シテ道ニ得ル所ロナシ」とあり、禮の學記に「記問之學不レ足ラ以爲ニ人師一」とあるも、記誦に同じ、

【促織】（ソクシヨク）蟲の名、「コホロギ」謝朓の句に「秋夜一ヲ鳴ク」また古諺に「一ハ鳴、蠭婦驚ク」

【涑水紀聞】（ソクスヰ）十六卷、宋の司馬光撰す、宋の太祖より神宗に至るまでの雜事四百二十七條を記す、史家の參考とすべし、

【即世】（ソクセイ）死なり（世ニ一ヲ）を見よ、

【速成】（ソクセイ）急に事を成すをいふ、論語に「非ニ求ニ一ヲ益ニ者一ニ也、欲ニ一ヲ一ニ速ト者也」

【即席】（ソクセキ）席に即くこと、儀禮の士冠禮に「即席坐」即筵に同じ、またその席にて直ちにの義、梁書の蕭介傳に「高祖後進二十餘人ヲ招延シ、置酒シテ詩ヲ賦ス、藏盾詩成ラザルヲ以テ酒一斗ヲ罰ス、盾飮ミ盡シテ顏色變ゼズ、言笑自若タリ、介、翰ヲ染メテ便チ成ル、文、點ヲ加フルナシ、高祖兩ナガラ之ヲ美メテ曰ク、藏盾之飮、蕭介之文、即席之美也」

【即阼】（ソクソ）即位に同じ、史記孝文紀に「皇帝一ヲ一ニ之心」

【側怛】（ソクタツ）いたみかなしむ心、禮記に「一ハ一ハ之心」

【息女】（ソクヂヨ）息は生なり、己の生みし所ろの女をいふ、史記高祖紀に「臣有ニ一ヲ一ニ、願爲ニ季箕箒妾一ニ」季は高祖の字、

【仄慝】（ソクヂヨク）月行の遲きをいふ、漢書五行志に「朔而月見ニ東方一ニ謂之一ヲ一ニ」註に「一ハ一トハ、月ノ行クコト遲クシテ日後ニ在リ當ニ沒スベクシテ更ニ見ハルルナリ」

【俗諺】（ゾクゲン）世俗如實の理をよくあきらめたるをいふ、忠孝等一切の道を悟り得たる義、

【續貂ノ譏】（ゾクテウノキ）つまらぬ物を以て、よき物につぐといふ譏（狗尾）を見よ、

【則天武后】（ソクテンブコウ）姓は武名は曌もとの唐の太宗の才人なりしが、後、高宗の后となり、政權を專にす、高宗崩じて中宗立つに及び、遂に中宗を廢してその弟睿宗を立て、益〻權を擅にし、遂に睿宗を廢して、自ら帝位に即き、

則天皇帝と稱し、國を周と號す、在位十六年、中宗位に復し、后を廢す、薨で卒せり、年八十一、著すところ臣軌二卷あり、

【賊ニ兵ヲ借シ盜ニ糧ヲ齎ス】 史記范雎傳に「コレ所謂借賊兵而齎盜糧者也」とあり(寇ニ)を見よ、

【俗ノ欲スル所ロ、因ツテ之ヲ予フ】 (俗之所欲、因而予之)これは管仲が齊に相として俗と好惡を同くし、論卑くして行はれ易きをいふ語なり、下に「俗之所否、因而去之」とあり、

【束帛】 十端の「キヌ」をひとたばにしたるをいふ、儀禮の公食大夫禮に「一一十端帛也」古は「ツカヒモノ」に用ふ、一一加璧などいふ、

【束縛】 繫囚に同じ「シバラルル」梵辭に「管一一兮、桎梏一管は管仲、

【束髮】 結髮に同じ、始めて冠するをいふと解けども、必ずしも拘せず、すべて事の初頭をいふ、漢書敘傳に「兒生亹亹一一修學」兒生は兒寬饒、

【側媚】 側は「ヨコシマ」媚は諛なり、書の冏命に「無以側媚巧言令色便辟一一」

【側微】 卑賤の義、側陋に同じ、史記自序傳に「尙父一一、卒歸西伯」

【屬文】 屬正音「ショク」輯なり、綴なり(文ヲ屬ス)を見よ、

【卽墨侯】 硯の異名、文房四譜に「石虛中、字居默、南越人、器度方圓中心坦然、拜一一一」

【鏃礪括羽】 學を修め智を研きて有用の器と爲るをいふ、孔子家語に「子路曰、南山有竹、不揉自直、斬而用之、達乎犀甲、如此言之何學之有、孔子曰、括而羽之、鏃而礪之、其入之不亦深乎」とあるに本づく、

【側陋】 微賤の人をいふ、書の堯典に「明明揚一一」と、明明の上の明は之を明顯にする義、下の明は已に顯位に在る者をいふ、

【咀華】 「ハナ」をくらふ義、轉じし書中の「スグレテ」「ウツクシキ」ところを採り味ふ義、韓愈の進學解に「含英咀華一一」

【蘇過】 字は叔黨、東坡の季子なり、善く怪石叢篠を作る、咄咄父に逼り時に新意を出す、山水を作るに遠水紋多く、岩に依りて屋木多し、皆人跡絕ゆる處、竝に焦墨を以て之を爲る、これ奇を出すなり、

【溯洄】 流れに逆ひて上ぼるなり、詩經の秦風に「一一從之道阻且長」

【馳傖】 「ワルガシコキナカガヒ」牙行・經紀・牙保は皆「ナ

【疏廣】 漢の東海蘭陵の人、仕へて太子太傅に至る、兄の子受、官太子少傅に至る、在位五年、廣、受に謂つて曰く、足るを知れば辱しめられず、止るを知れば殆からず、宜成り名立つ、此の如くにして去らずんば懼らくは後悔あらんと、乃ち上疏して骸骨を乞ふ、上之を許す、公卿大夫祖道を設けて東都門外に供張す、送る者車數百輛、道路觀る者皆曰く賢なるかな二大夫と、

【素馨】 花の名、群芳譜に「一一一名ハ那悉茗花、一名ハ野悉蜜花、西域ヨリ來ル、枝幹裊娜茉莉ニ似テ小ナリ」と、また廣州志に「城西九里ヲ花田ト曰フ、彌望皆一一花ナリ、南征錄ニ云フ、南海ノ劉隱ノ時、美人アリ此ニ葬ル、今ニ至リ花香他處ニ異ナリト」

【狙擊】 狙は伺なり、狙の物を伺ふ、必ず伏して之をうかがふ、以て密に伺ひ擊つ義とす、史記留侯世家に「良與客一一秦皇帝博浪沙中」

【蘇源明】 京兆武功の人、少くして孤、文辭に工なり、累官して國子司業となる、安祿山の京師を陷るるや、源明病と稱して僞署を受けず、肅宗の時、知制誥に擢てられ、數〻時政の得失を陳ぶ、祕書少監を以て卒す、

【齟齬】 齒の「クヒチガヒ」て僅らざるをいふ、鋸の齒の出入せるをも亦一一といふ、太玄經に「其志一一」また鉏鋙に作る、楚辭に「圜鑿而方枘兮、吾固知其鉏鋙而難入」

【蘇公堤】 圓機活法に「杭ニ西湖アリ、潁ニモ亦西湖アリ、皆遊賞ノ勝ト爲ス、蘇東坡連リニ二州ニ守タリ、ソノ初メ潁ヲ得タリ、潁人云フ、內翰但湖中ノ遊ヲ消ヒテ便チ郡事ヲ了スベシト、杭ニ守タルニ及ビテ、東坡堤ヲ築キ水ヲ護ス、民甚ダ之ヲ利トス、因ツテ一一ト名ヅク」

【楚材晉用】 他の物を取りて我に利用するをいふ、左傳に「雖有楚材、晉實用之」

【素餐】 素食に同じ、無能にして官祿を食むをいふ(尸位)を見よ、

【鼠窺】 鼠の窺げかくるるが如く、逃亡するをいふ、漢書蒯通傳に「常山王奉頭一一以歸漢王」

【楚辭】 漢の劉向編す、楚の屈平の辭賦と、その門下及び後人の作とを輯む、その後に及びて、後漢の王逸、己の作九思と班固の二敘とを加へて十七卷とし章句を作れり、これこの書の注の最も古きものなり、爾後この書の注を作る者少からず、宋の朱熹に至りて前人

の註解未だ具らずとなし、集註八巻辨證二巻後語六巻を作り、平の作二十五篇を離騒となし、宋玉以下十六篇を續離騒となし、文に隨ひて箋釋し、毎章繫くるに興比賦を以てすること詩經の毛傳の如くせり、林西仲の楚辭燈四巻、參考とすべし、

【蔬食】「ヤサイ」の「クヒモノ」「シャウジンモノ」論語述而篇の集解に「——菜食也」また草の實をいふ、禮記月令の注に「草木之實爲——」また粗食、マヅイモノ」論語鄉黨篇の皇侃の疏に「——粗食也」また「クロマイ」孟子萬章篇の注に「——糲食也」

【蘇子由】（蘇轍）を見よ、

【楚囚】楚の國の「トラハレビト」轉じて他鄉にて自由を奪はれ、思鄉の情切なる者にいふ語、左傳成九年に「晉侯觀二於軍府一見二鍾儀一（楚の伶人）問レ之曰、南冠而縶者誰也、有司對曰、鄭人所レ獻——也」とあるに本つく、文天祥の正氣歌に「——纓二其冠一傳車送二窮北一」

【蘇氏演義】二巻、唐の蘇鶚撰す、鶚字は德祥、武功の人、この書、典制名物を考證せり、文化七年の和版あり、

【疏食ヲ飯ヒ水ヲ飲ミ肱ヲ曲ゲテ之ヲ枕トスルモ、樂亦其ノ中ニ在リ】（飯二疏食一飲レ水、曲レ肱而枕レ之、樂亦在二其中一矣論語述而篇、孔子の語下に「不義而富且貴、於我如二浮雲一」の句あり、飯は「クラヒ」と訓む、食は音シ疏食は麤飯なり、朱子曰く「聖人ノ心ハ渾然タル天理ナリ、困極ニ處ルト雖モ、而カモソノ樂在ラザルナシ、不義ノ富貴ヲ視ルコト浮雲ノ有ルコトナキガ如ク、漠然トシテソノ心ヲ動ストコロ無キナリ」「子曰賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在二陋巷一、人不レ堪二其憂一、回也不レ改二其樂一、賢哉回也」の章と互に發明すべし、

【楚辭九歌】（九歌）を見よ

【蘇子美集】十巻、宋の蘇舜欽撰す、歐陽修の原序に極めてその古文を推せり、その歌行は多く雄放にしてその人となりの如しと稱せらる、蘇舜欽」を見よ、

【蘇秦】字は季子、春秋戰國の時、洛陽の人なり、鬼谷先生を師とす、秦に游説して用ひられず、裘敝れ金盡き憔悴して歸る、妻機を下らず、嫂ために炊がず、父母子とせず、乃ち周書陰符を得て之を讀み、睡らんと欲すれば錐を引きて股を刺す、後ち六國に歷説するに、從親して秦を擯けんことを以てして曰く、寧ろ雞口となるも牛後と爲ること勿れと、是に於て六國合從の約成り、蘇秦六國に兼せ相となり、行いて洛陽を過ぐ、車騎輜重王者に擬す、兄弟妻嫂目を側めて敢て視ず、俯伏して侍して食を取る、蘇秦笑つて曰く、何ぞ前に

倨にして後に恭なるやと、嫂曰く季子の位高く金多きを見ればなりと、秦喟然嘆じて曰く、此れ一人の身なり、富貴なれば親戚之を畏懼し、貧賤なれば之を輕易す、況や衆人をや、我をして洛陽負郭の田あらしめば、豈能く六國の相印を佩びんやと、是に於て千金を散じ以て宗族朋友に賜ふ、

【練裳竹筒】女を嫁するに「シタク」の粗末なるを譏していふ、書言故事に「漢ノ逸民戴良五女アリ、練裳布被竹筒木履ニシテ之ヲ遣ル」東坡の詩に「竹筒與二練裙一、願畢二婚嫁一」練は一音ショ紡ぎたる粗き絲、また綿の屬「クズヌノ」

【咀嚼】よくかみこなして玩味すること、司馬相如の上林賦に出づ、書を讀みて意味を十分に尋ね究むるにも用ふ、

【素車白馬】人を弔するに用ふ、書言故事に「范式字ハ巨卿、張邵字ハ元伯相與ニ友タリ、元伯疾ニ寢シテ卒ス、范式忽チ夢ニ、元伯呼ビテ曰ク、巨卿吾某日ニ死シ某日ニ葬ル、子未ダ我ヲ忘レザレバ、豈能ク相及バンカト、范式更メテ朋友ノ服ヲ服シ、馳セ往イテ之ニ赴ク、式未ダ到ルニ及バズシテ、喪スデニ發引ス、既ニ壙ニ至リ、將ニ棺ヲ下サントスルニ、柩肯テ進マズ、ソノ母之ヲ撫シテ曰ク、元伯豈望ムトコロアルカト、遂ニ柩ヲ停メ時ヲ移ス、乃チ——哭シテ來ル者ヲ見ル、母曰ク是レ必ズ巨卿ナラント、式至リ紼ヲ執リテ柩ヲ引ク、是ニ於テ柩乃チ前ミヌ」また神に禱り罪を請ふ時などに用ふ、史記の殷紀に「湯王齋戒シ爪ヲ剪リ髮ヲ斷チ——身ニ白茅ヲ嬰ヒ、身ヲ以テ犧牲トナリ、桑林ノ野ニ禱ル」

【祖述】遠くその道を宗とし、之をうけつぎて述ぶるをいふ、中庸に「仲尼祖二述堯舜一憲二章文武一」

【蘇洵】字は明允、老泉と號す、祐の曾孫、宋人、蜀の眉州眉山の人、少くして學を好まず、年二十七、始めて發憤して書を讀む、三たび科舉に應じ皆中らず歸りて悉く爲る所ろの文數百篇を焚き、戸を閉ぢ益〻書を讀み、遂に六經百家の說に通じ、筆を下せば頃刻にして數千言を成す、至和中、二子軾轍を携へ京に到る、翰林學士歐陽修、その文を見て之を愛し、以て賈誼も過ぎずと爲す、霸州文安縣主簿となり、陳州城の令姚闢と同じく禮書を修し、太常因革禮一百巻と爲し、書成りて奏上し、未だ報ぜられずして治平三年に歿す、年五十八、光祿寺丞を贈らる、蘇老泉先生全集あり、

【蘇舜欽】字は子美、易簡の孫、宋の開封の人、少くし

て大志あり、好んで古文を爲る、弱冠にして時政を極言す、范仲淹その才を薦め、召試して集賢校理となす、後ち吳中に寓す、詩歌豪放尤も草書を善くす、慶歷八年卒す、年四十一、著すところ蘇子美集十卷あり、兄舜元亦詩歌を善くし尤も草書に工なり、官三司度支判官に至る、

【沮洳】 沮は一音ショ水にひたり濕へるをいふ、またその地、詩經に「彼汾一一」

【組織】 衣を織り成すが如く、事を構へ立つるをいふ、劉峻後絕交論に「一一仁義、琢磨道德」

【蘇軾】 字は子瞻、父洵四方に遊學す、母程氏親ら授くるに書を以てす、弱冠にして博く經史に通じ、文を屬するに日に數千言なり、大理評事簽書に除す、軾爲ること日に數千言なり、大理評事簽書に除す、神宗之る所ろの詩忌諱に觸れ死に處せられんとす、神宗之を憐み、黃州團練副使を以て安置す、室を東坡に築き、自ら東坡居士と號す、紹聖の初、軾作る所の詞辭を以て朝廷を譏るとなし、寧遠軍節度副使に貶し、惠州に安置し、又瓊州別駕に貶し、昌化に居らしむ、建中靖國元年常州に卒す、年六十六、或はいふ六十なりと、後ち大師を贈り、文忠と諡す、著すところ東坡全集一百十五卷あり、蘇軾又畫を善くす、米芾畫史に「子瞻墨竹ヲ作ル、地ヨリ一直起シテ頂ニ至ル、余問フ何ゾ節ヲ逐ヒ分タザルト、曰ク竹生ズルトキ何ゾ嘗テ節ヲ逐ヒ生ゼント、運思清拔、文同與可ヨリ出ヅ（中略）ソノ枯木ヲ作ル、枝幹虯屈、端倪ナク、石皴硬クシテ亦怪怪奇奇、ソノ胸中ノ蟠鬱ノ如キナリ」

【蘇軾榮ヲ種ウ】 劉氏人譜に「蘇子瞻曰ク、吾王參軍ノ地ヲ借リテ榮ヲ種ウ、半畝ニ及バズ、而シテ吾ト子過ト終年榮ニ飽ク、夜半擷シテ之ヲ煮レバ、味土膏ヲ含ミテ氣霜露ニ飽ク、粱肉ト雖モ及ブコト能ハザルナリ、人生底物ヲ須ヒテ、而シテ乃チ更ニ貪ランヤスルカト、因リテ詩ヲ作リテ云フ、秋來霜露滿東園、蘆菔生兒芥有レ孫、我與阿咸同一飽、不レ知何苦食雞豚ト、遂ニ其廬ニ題シテ、安蔬ト曰フ」

【蘇軾硯ヲ購フヲ辭ス】 劉氏人譜に「或人蘇東坡ニ謂フモノアリ曰ク、吾端溪ニ往ク、公ノ爲メニ硯ヲ購フベシト、公曰ク、吾唯兩手ノミ、其ノ一ハ字ヲ寫スコトヲ解ス、而シテ三硯アリ、何ゾ多キヲ以テセント、曰ク以テ損壞ニ備ヘバ可ナリト、東坡曰ク、吾ガ手恐ラクハ硯ニ先チテ壞レント」

【蘇軾ノ憐恕】 宋史に「軾、嘉祐二年ニ、陽羨ノ蔣潁叔ト、名ヲ進士ニ連ヌ、瓊林ニ宴スル日、座モ亦相接ス、遂ニ「有虞氏ハ顓頊ヲ祖トシテ堯ヲ宗トシ、夏后氏ハ顓頊ヲ祖トシテ禹ヲ宗トシ、殷人ハ契ヲ祖トシテ湯ヲ宗トシ、周人ハ文王ヲ祖トシテ、武王ヲ宗トス」

【措大】 書生なり、その能く大事を擧措するをいふ、五雜組に「今人秀才ヲ以テ措大トナス」五代史、東漢世家に「劉旻兵ニ號令シテ先ヅ進マシム、王得中馬ヲ叩ヘテ諫メテ曰ク、南風甚急ナリ、北軍ノ利ニアラズ、宜シク少シク之ヲ待ツベシト、旻怒テ曰ク、老措大妄ニ我ガ軍ヲ沮スル勿レト」

【祖道ノ宴】 送別の宴會なり、書言故事に「祖道ハ送行ノ際、因ツテ饗飲ス、昔、黃帝ノ子纍祖、遠遊ヲ好ンデ道ニ死ス、後人以テ行神トナス」とあり、故に行く者あるときは、之を祭り其の傍に宴を開くなり、風俗通には「祖ハ徂ナリ、今ノ人行ヲ餞スルヲ謂ツテ祖道トイフ」とあり、詩の大雅烝民篇に「仲山甫出祖、四牡業業」の註に「祖ハ行祭ナリ」また漢書疏廣傳に「公卿大夫故人邑子、祖道ヲ設ケ、東門外ニ供張ス」

【蘇張ノ辯】 蘇秦は六國の君に說し、合從して秦に當らしめ、張儀は連橫を唱へ、六國を連ねて秦に事へしむ、二人共に縱橫の策を盡し辯舌を以て志を成せり、よりて策士などの雄辯なるを稱するに用ふ蘇秦、張

儀)を參看せよ

【卒伍】 庶人の編制をいふ、周禮地官小司徒に「乃會萬民之――而用之、五人爲伍、五伍爲兩、四兩爲卒」また史記項羽紀に「願賜骸骨歸――」とあるは、致仕して民籍に復せんとの義、

【率爾】 輕遽の貌「ブシツケ」論語先進に「子路――而對」

【卒乘】 兵士をいふ、歩を卒といひ、車を乘といふ、左傳に「――輯睦」

【卒然】 急遽の貌、孟子に「――問曰、天下惡乎定」

【帥先】 先になりて導くこと、率先に同じ、晉書に「躬稼穡之艱難以――天下」

【率先】 衆を率ゐ先だちて專ら行ふをいふ、史記絳侯世家に「丞相吾所重、其――之」

【祖逖】 字は士雅、晉の范陽の人、博覽にして志節あり、少くして劉琨と善し、被を共にして寢ぬ、元帝の時豫州ノ刺史となる、江を渡り楫を撃ちて誓つて曰く、中原を淸めずして復濟る者あらば、此の江の如きあらんと、遂に兵を部し、石勒と相持す、是に由つて黃河以南盡く晉の士となる、卒するの日、豫州の士女父母を失ふが如し、

【蘇轍】 字は子由、蘇洵の第二子にして軾の弟なり、年十九、父兄に隨ひ京師に至り、兄軾と同じく進士の科に登り、歷進して尙書右丞と爲り、門下侍郎に遷る、徽宗位に即き、出でて永州岳州に知たり、崇寧中致仕し、室を許に築き、潁濱遺老と號し、また欒城と號す、政和二年沒す、年七十四、文定と謚す、著す所ろ、老子解・古史・詩傳・春秋傳・欒城集あり、轍、性安詳高潔、文その人と爲りの如し、而して秀傑の氣、殆ど兄と相迫る、

【俎豆】 祭器の名、牲體を載するを俎といひ、葅醢を薦むるを豆といふ、俎は几の形、木にて造る、豆も亦木にて造る、

【蘇東坡】 (蘇軾)を見よ、

【卒都婆】 卒一に窣に作る、廟と譯し、或は方墳と義譯す、大聚、高顯ともいふ、木石等にて地水火風空の五層の高き塔を作りて佛に供ふる者、印度にては如來親ら迦葉佛の爲めに寶塔を建て、我が朝にては敏達天皇の十四年蘇我馬子大和國高市郡大野の丘に建立せしをその創始とす、涅槃經に「一見――、永離三惡道、何況造立者、決定生安樂」

【備ハルヲ一人ニ求ム】 (求備於一人)すべての才德の兼ね備はらんとを一人に求むるをいふ、論語に「無――――」また書經に「爾無忿疾于頑、無求備于

一夫」

【其ノ雄ヲ知リテ其ノ雌ヲ守ル】 (知其雄守其雌)剛强なるも、柔弱の道を守りて、勝を求めざる義、老子に「其ノ雄ヲ知リ其ノ雌ヲ守リテ、天下ノ谿トナル」とあり「爲天下谿」とは、天下の人に高ぶらずして、低下(ヒクミ)に安んずるをいふ、

【其ノ一ヲ知リテ未ダ其ノ二ヲ知ラズ】 (知其一、未知其二)事理の一端を察知するも、他に理由あるを知らざる義、史記高祖紀に見ゆ、またこの語、莊子天地篇にも見ゆ、詩經に「人知其一、莫知其他」

【其ノ入ルヲ量ツテ之ヲ出ス】 (入ルヲ量ツテ)を見よ、

【其ノ肮ヲ搤シ其ノ背ヲ拊ツ】 (搤其肮拊其背)史記劉敬傳に見ゆ、肮は咽喉なり「ノドブエ」人と鬪ふにそののどを搤し、その背をうたざれば勝を全うする能はず、

【其ノ誼ヲ正シテ、ソノ利ヲ謀ラズ】 君子の事を爲すや、その誼を正して一點の非理をさしはさまず、その誼にかなふや、斷じて之を行ふ、利益の有無を謀る如きことをなさずとの義、董仲舒の賢良策に「夫仁人者、正其誼不謀其利、明其道不計其功、是以仲尼之門、五尺之童羞稱五霸、爲其先詐力而後仁義也」

【其ノ位ニ非ズシテ之ニ居ル、位ヲ貪ルトイフ】 (非其位而居之、曰貪位)史記商君傳に出づ、下に「非其名而有之、曰貪名」とあり、

【其ノ源ヲ厭シ、ソノ瀆ヲ開カバ江河モ竭スベシ】 (厭其源開其瀆、江河可竭)荀子の語、厭は壓に通用す「オシツケル」「フサグ」瀆は溝なり、楊子江や黃河も方法に由りては涸し竭すことを得る義、

【其ノ言ヲ河漢ニス】 (河漢其言)言ふ所ろのとりとめ無き義、ことさらに旨意を深遠茫漠たらしめ、人をして測り知るに難からしむるをいふ、莊子に「吾驚怖其言、猶河漢而無極也」とあるに本づく、

【其ノ子ヲ知ラザレバ其ノ友トスル所ロヲ視ヨ】 (不知其子、視其所友)家語に見ゆ、その子の善惡邪正を知らざればその子の交る所ろの友人の人と爲りを見て、その子の人と爲りを知るべし、何となれば人は同氣相求むるものなればなり、この句の下に「不知其君、視其所使」とあり、この語、荀子にも、史記の田叔傳にも見ゆ、

【其ノ妻子ヲ託ス】 (託其妻子)圓機活法に「漢ノ朱暉、字ハ文季、南陽宛ノ人、同縣ノ張堪ト友トシ善シ、暉ガ臂ヲ把リテ曰ク、妻子ヲ以テ朱生ニ託セント欲スト

堪卒ス、暉其ノ妻子ノ貧困ヲ聞キ、自ラ往キテ候視シ、厚ク之ヲ賑給シテ曰ク、堪嘗テ知己ノ言アリ、吾レ已ニ其ノ心ニ信ズルナリト」

【楚ノ囚人】 太平記巻四に見ゆ、楚、鄭を伐ちし時、伶人鍾儀虜となり囚はれしこと、左傳成九年に詳かなり、趙嘏の詩にも「空戴南冠學楚囚」とあり（楚囚）を見よ、

【其ノ父、人ヲ殺シテ仇ヲ報ゼバ、其ノ子必ズ且ニ劫ヲ行ハントス】（其父殺人報仇、其子必且行劫）蘇軾の荀卿論に見ゆ 荀卿が先賢を歴詆したるを以てその弟子李斯が遂に書を焚き儒を坑にして悔むを知らざるに至りし例に引けり、劫は「オヒハギ」

【其ノ地ニ非レバ之ヲ樹ウルモ生ゼズ】（非其地樹之不生）史記日者列傳の語、下に「非其意敎之不成、夫家之敎子孫、當視其所以好」とあり、說苑にも類語あり、

【其ノ德ヲ恒ニス】（恒其德）易の恒の卦の六五に「一一貞、婦人吉、夫子凶」言乃婦人之道、非夫子之所宜也「婦人は一に從ひて終るものなれば、その德を恒にするを以て吉とす、夫子は居るところの地位によりて行ふところの德を異にす、故に一一を以て凶とはいふなり、

【其ノ文ノ好キ者ハ身必ズ剝ル】（其文好者身必剝）晏子の語、虎豹の如き斑文の好き者はそれが爲めに皮を剝ぎとらるる禍を招くをいふ、下に「其角美者、身見レ殺、甘泉必竭、直木必伐」とあり、

【其ノ本ヲ修ムルヲ事トスルヲ知ラズシテ其ノ末ヲ治ムルヲ務ムルハ、是レ其ノ根ヲ釋テ其ノ枝ニ灌グ者ナリ】（不知事修其本而務治其末是釋其根而灌其枝者也）淮南子に出づ、世人が本を捨てて末に走るの弊を歎じたるなり、

【其ノ本ヲ揣ラズシテソノ末ヲ齊ウセバ、方寸ノ木モ岑樓ヨリ高カラシムベシ】（不揣其本而齊其末方寸之木可使高於岑樓）孟子の語、岑樓は高き「タカドノ」（方寸ノ木）を見よ、

【其ノ兩端ヲ叩キテ竭ス】（叩其兩端而竭）兩端は兩頭の義、終始本末上下精粗を盡して、餘蘊なきをいふ、論語に「我レ——」

【楚ハ章花ノ臺ヲ起シテ黎民散ズ】 漢書に「楚起章花之臺而黎民散、秦興阿房之殿而天下亂」とあり、楚王は章花の臺を築きて萬民疲弊し、散じて他國にのがれたりとなり、章花臺は、東西九町南北十町、高サ四十丈ありきといふ、

【楚ハ白圻ヲ賓トセズシテ賢ヲ賓トス】 駿臺雜話「天下の賓」の條に見ゆ 圻は、佩上の玉飾「オビダマ」なり、國語の楚語に「王孫圉聘於晉、定公饗之、趙簡子鳴玉以相、問於王孫圉曰、楚之白圻猶在乎、對曰、然、簡子曰、其賓也幾何矣、曰、未嘗爲寶、楚之所寶者、曰觀射父、能作訓辭、以行事於諸侯、使無以寡君爲口實、又有左史倚相、能道訓典、以叙百物、以朝夕獻善敗於寡君、使寡君無忘先王之業」中略「若夫白圻、先王之玩也、何寶焉」

【素貧】 「シタヂカラノビンバウ」漢書揚雄傳に「——嗜酒」

【蘇武節ヲ守ル】 蘇武字は子卿杜陵人 漢書に、漢の蘇武中郎將たり、武帝以て匈奴に使せしむ、至れば即ち單于之を降さんと欲す、武從はず、乃ち武を窖中に幽して、飲食を給せず、天雪ふる、武雪と氈毛とを併せ嚙みて、之を咽む、數日を經て死せず、匈奴以て神なりとす、乃ち武を北海上に徙して、羝を牧せしめて曰く、羝乳せば歸らしめんと、武野鼠を掘り、草實を採りて、之を食ふ、漢の節に仗り、起臥操持し、節旄盡く落つ、昭帝位に卽きて、武始めて還ることを得たり、匈奴に留ること十九年、始め往きしとき强壯なりしも、還るに及びて、鬢髮盡く白し、宣帝立ちて麒麟閣内候を賜ひ、年八十餘にして卒す、形を麒麟閣に圖せしむ、

蘇武　李　白

蘇武在匈奴、十年持漢節、白鴈上林飛、空傳一書札、牧羊邊地苦、落日歸心絕、渴飮月窟水、飢餐天上雪、東還沙塞遠、北愴河梁別、泣把李陵衣、相看淚成血、

【素封ノ富】 財に富める人は、封土無きも、利息租稅の入ること、封侯の如きをいふ、史記の貨殖傳に「今秩祿ノ奉「爵邑」ノ入無クシテ、而シテ樂之ト比スル者アリ、命ケテ素封トイフ」註に「素ハ空ナリ、仕ヘザルノ人、自ラ園田收養ノ給ヲ有ス、其ノ利封君ニ抵ル、故ニ素封トイフ」

【酥蜜】 酥と蜜の二品なり、酥は牛乳を精撰せしもの、一に蘇に作る、涅槃經に五味を、乳酪生蘇熟蘇醍醐と次第せり、蜜は蜂蜜なり、二品共に甘きに譬へていふ、神皇正統記の天地開闢の條に「味——の如し」とあり、

【損友】 （益友）を見よ、

【村園門巷多相似】 田舍の家のさまは、おほかた類似せるをいふ、唐の雍陶の城西訪友人別墅と題する詩

に「澧水橋西小路斜、日高猶未」到」君家、——處處春風积穀花」

【村塢】 塢は隖に同じ「チサキドテ」——と熟するときは村落の義、杜甫の詩に「前有」毒蛇」後猛虎、谿行盡日無」——」

【飧ヲ傳フ】 (傳)飧は小飯なり、少しく食ひて一時の飢をしのぐをいふ、史記淮陰侯傳に「令」其裨將」——」曰、今日破」趙會」食」飧はもと夕食なり、俗飧に作る、

【餐霞】 仙人をいふ、呂氏春秋に出づ、顔延年の五君詠に「中散不偶」世、本自」——」人」中散は嵇康をいふ、

【孫康】 晉人、家貧にして油なし、嘗て夜、雪に映じて書を讀む、後ち御史大夫となる、

【尊行】 目上の親類をいふ、齊家寶要に見ゆ、目下のを卑行といふ、

【尊庚】 「アナタノオントシ」青箱記に見ゆ、貴庚に同じ、

【尊客ノ前ニハ狗ヲ叱セズ】 (尊客之前不」叱」狗)曲禮の語、至賤を以て、尊者の聽を駭かさざる義、

【村甲】 「シャウヤ」無寃錄註に「——ハ本國ノ里正ノ類ノ如シ」と、社長・村長・里長・莊頭・村正皆同じ、

【餐菊】 (菊ヲ)を見よ、

【孫奇逢】 字は啓泰、夏峯先生と稱す、直隸保定府の人、明の萬曆二十八年鄉試に擧げられ、左光斗・魏大中・周順昌の三名士と親み善し、魏忠賢のこれ等の諸名士を構陷するや、奇逢身を以て之を救護せり、明の亡後家居して徒に授く、康熙十四年卒す、年九十二、初め陸王を信じ後ち程朱を奉ず、清朝理學の先驅たり、理學宗傳四書近指・讀易大旨等の著あり、

【孫敬】 三國の時、楚の人、字は文寶、戸を閉ぢて書を讀むその睡に堪へざるときは、繩を以て頭を繫ぎ之を梁上に懸く、人呼びて閉戸先生といふ、

【孫景初】 (四休)を見よ、

【孫吳】 孫子・吳子なり、孫子は十三篇、齊人孫武の著、吳子は今に存ずるもの六篇あり、衞人吳起の著、

【孫子】 一卷、齊の孫武著す、分ちて始計・作戰・謀攻・軍形・兵勢・虛實・軍爭・九變・行軍・地形・九地・火攻・用閒の十三篇とす、史記の孫子列傳に、武の書十三篇とあるは是れなり、兵家の書の今日に傳はる者は、此の書を以て最古となす、兵を談ずるの精妙なるのみならず、文も亦簡勁にして古文の法となすべし、注解には、魏武注孫子三卷、物徂徠の孫子國字解十三卷、佐藤坦の孫子副詮一卷等あり、

【巽二】 風の神なり(豚六)を見よ、

【蹲鴟】 芋の異名なり、文選の左思の蜀都賦に「交讓所」植蹲鴟所」伏」の註に「交讓ハ木ノ名ナリ、兩樹對生ス、一樹枯ルトキハ則チ一樹生ズ、是ノ如クニシテ歲ゴトニ更終ス、俱ニ生ジ俱ニ枯レザルナリ、蹲鴟ハ大芋ナリ、其ノ形蹲鴟(うづくまれるふくろふ)ニ類ス」

【孫子ガ千變ノ謀】 太平記卷八に見ゆ、孫子の書には、九變の術を說く、ここに千變といふは、奇正出沒千變萬化の兵謀といふ義なるべし、

【遜志齋集】 二十四卷、明の方孝孺撰す、凡そ雜著八卷文十四卷詩二卷あり、その文縱橫豪放、東坡龍川の閒に出入す、中に周禮を行ひ井田を復するの類の如き迂腐の論なきにあらざるも、大旨は醇正に歸す、

【遜志時敏】 書經說命の語、蔡傳に「ソノ志ヲ遜シテ能ハザル所ロアルガ如ク、學ニ敏シテ及バザル所ロアルガ如シ、虛以テ人ニ受ケ、勤以テ己ヲ勵マス」

【孫思邈】 唐の華原の人、百家に通じ、善く老莊を言ひ、兼て陰陽推步醫藥に通ず、太白山に居る、文帝國子博士を以て召せども拜せず、太宗召して京師に至らしむ、時に年已に老いたり、之を官にせんと欲せしも受けず、疾と稱して山に還れり(膽ハ大)を參看せよ、

【孫晨】 徒然草に「——は冬の月にふすまなくて、わら一束ありけるを夕にはこれにふし、朝には收めけり」とあり、三輔決錄に「——字ハ元公、家貧シク席ヲ織リテ業ト爲ス、詩書ニ明カナリ、京兆功曹トナル、冬月被ナク、藁一束アリ、暮ニ臥シ朝ニ收ム」

【孫綽】 晉の人、楚の孫、字は興公、兄の盛、博學にして善く名理をいふ、綽また博學能文、後ち會稽に居り、山水に游放すること十餘年、遂初賦及び天台賦を作る、詞甚だ工なり、

【尊酒相逢】 韓愈の贈張籍詩に「——十載前、君爲壯夫我少年、——十載後、我爲壯夫君白首」

【孫叔敖】 戰國の時、楚の人、兒たる時、嘗て出遊して兩頭の蛇を見、殺して之を埋め、家に歸り憂へて食はず、母その故を問ふ、叔敖泣て對へて曰く、聞く兩頭の蛇を見る者は死すと、向者吾これを見る恐くは母にそむきて死せんと、母曰く、蛇今安くに在ると、曰く兒後人の又見んことを恐れて、已に殺して之を埋めぬと、母曰く吾聞く有陰德者必有陽報と、汝死せじと、長ずるに及び楚の莊王車を以て之を迎へて令尹となす、

【存恤】 あはれみ救ふ義、金史に「深加——」

【村書】 つまらぬ俗書をいふ、陸餘叢考に「陸游ノ詩ニ、

授ニ詒ー一閉門睡ル自註ニ、謂フ所ロノ雑字百家姓ノ類、之ヲーートイフ」

【孫星衍】字は伯淵、季逑と號す、江蘇陽湖の人、少より奇才あり、清の乾隆五十一年第二人に及第し、編修を授けられ、刑部主事に改めらる、深く經史文字音訓の學を究め、旁ら諸子百家に及ぶ、また金石碑版を精研し、篆隷に工に、古書を校刻すること最も精し、嘉慶二十三年卒す、年六十六、尚書古今文義疏・周易集解・孔子集語・平津館金石萃編等の著あり、

【孫樵】字は可之、韓愈の門人、大中九年の進士著すところ孫可之集十巻あり、

【撙節】裁抑なり「オサヘテ制限スル」禮記の曲禮に「君子恭敬ーー、退讓以明ル禮撙は挫きて趨かしむるなり、節は法度なり、法度におもむかしむるなり、

【孫楚】（石ニ漱ギ）を見よ、

【尊俎】尊は酒を奠く罇をいひ、俎は牲を載する器、後漢書孔融傳に「起ニ謀於ーー之閒」

【尊屬】目上の親類、家禮儀節に「ーー謂ヘ伯叔祖父母伯叔父母之類ヲ」とあり、目下の親類を卑屬といふ、

【蹲蹲】舞ふ貌、詩の小雅に「ーー舞ヒ我」

【尊大】傲りたかぶる、後漢書に「馬援謂ヒ隗囂ニ曰、子陽井底蛙耳、而妄自ーー」子陽は公孫述の字、

【忖度】忖は思なり、度なり、ーーは「ハカリハカル」義、猶ほ推測の如し、詩の小雅に「他人有ル心、予ーー之ニ」

【存亡禍福已ニ在リ】說苑に、孔子の言を引きて「存亡禍福皆在ル己而已、天災地妖亦不ル能ヒ殺也」とあり、

【孫武】周の齊の人、兵法を以て吳王闔廬に見え、將となり、西、强楚を破り、北齊魯を威し、名を諸侯に顯す、兵法十三篇を著す、

【孫武ガ十三篇】（孫子）を見よ、

【孫謀ヲ詒ス】（詒ニ孫謀）後嗣の計を爲して、人才を遺す義、詩の大雅に「詒ニ厥孫謀ヲ以燕ニ翼子ニ」略して詒謀の二字とす、

【蘇迷盧】（須彌）を見よ、

【飧饔】共に熟食なり、夕食を飧といひ、朝食を饔といふ、孟子に「饔飧而治」また柳文の郭橐駝傳にも見ゆ、

【巽與ノ言】巽は柔なり、婉にして導く詞なり、論語子罕に「巽與之言、能無ル說ヒ乎、繹ヌルヲ之ヲ爲ス貴シ」とあり、巽言は乖き忤ふ所ろなき故に、必ず之を說べども、其の緒を尋ねざれば、微意の在る所ろを知るに足らざるを以て、之を尋ぬるを貴ぶとはいふなり、

【村落】落は居なり、人の聚り居る所ろをいふ、屯落・聚落の落は皆同じ、世說に「逆旅婦曰、此東數十里、無ニ一止有ル山陽王家墓ニ耳」

【作麼生】「如何ニ」といふ義、作麼生、什麼、恁麼など、皆支那の俗語なり、傳燈錄に「香嚴衆ニ謂ヘテ曰ク、人ノ千尺ノ懸崖ニ在ヲテ、口樹枝ヲ銜ンデ、脚蹋ム所ロナク、手攀ヅル所ロナキガ如シ、忽チ人アヲテ如何ゾ是レ西來ノ意ト問ハンニ、若シ口ヲ開イテ答ヘバ、即チ喪身失命セン、若シ答ヘズンバ、又他ノ所問ニ違ハン、恁麼ノ時ニ當ヲテ、且ツ作麼生」

【素養】平素德を養ひ畜ふる義、漢書李尋傳に「馬不伏ーー櫪、不ル可ニ以趨ヒ道、士不ル可ニ以重ヒ國ヲ」

【踈慵】慵は懶なり、白居易の詩に「世名檢束爲ニ朝士ニ心性ーー是野夫」

【租庸調】通鑑唐紀に「武德二年初メテ定ム」註に「唐ノ制、田ヲ授クル者ニハ、一歲ニ粟二斛ヲ輸セシム、之ヲ租トイフ、歲ニ絹二匹ヲ輸セシメ、布ハ五ノ一ヲ加フ、綿ハ三兩、麻ハ三斤、或ハ銀十四兩ヲ輸セシム、之ヲ調トイフ、人ノ力ヲ用フルコト、歲ニ二十日、閏ハ二日ヲ加フ、役セザレバ、日ニ絹三尺ト爲ス、之ヲ庸トイフ、加役二十五日ナルトキハ、調ヲ免シ、三十日ナルトキハ、租調皆免ス」

【徂徠集】二十卷、附錄一卷、宋の石介撰す、介の學、孫復に出でて更に加ふるに迂僻を以てす、その文章大抵倔强勁直にして雕繪綺靡の態を一掃す、これその短長ずるところ、客氣太だ深く名心太だ急、これその短とするところなり、附錄には、宋史本傳及び歐陽修の撰びし墓誌銘等を載す（石介）を參看せよ、

【蘇老泉】（蘇洵）を見よ、

【殂落】帝王の死をいふ、殂は魂氣天に歸するをいひ、落は體魄地に歸するをいふ、書經の舜典に「帝乃ーー」孟子の萬章に「放勳乃ーー」殂一に徂に作る、

【麤糲】粗食なり、糲は、しらげざる玄米をいふ、史記刺客傳に「進ニ百金ヲ者、將用爲ニ夫人ーー之資ト」

【素履】己の本分を履むをいふ、質素に安んずる義、易の履卦に「ーー往无咎」

【祖龍】秦の始皇帝の「アダナ」史記の始皇紀に「今年ーー死」

【踈簾】「マバラ」に編みたる「スダレ」杜甫の句に「清簟ーー看ニ奕棊ヲ」細簾（コマカニアミタルスダレ）の反なり、

【素王】王者の德を身にそなへて、その位だけなきもの、莊子の天道に「以ニ此處ニ下元聖ーー之道也」

【楚王細腰ヲ愛シ、宮中餓死多シ】（楚王愛二細腰一、宮中多二餓死一）後漢書馬廖傳に見ゆ、細腰は腰の細き美人なり、宮女腰の細からんとを欲し、食を減じて餓死する者多きなり、上の好むところ、下爭ひてその意を迎ふるをいふ、管子にも「楚王好二小腰一而美人省レ食」とあり、杜牧の桃花夫人の廟の詩に「細腰宮裏露桃新」（劍客）を參看せよ、

【楚王弓ヲ失ヒテ、楚人之ヲ得】（楚王失レ弓、楚人得レ之）孔子家語の好生篇に「楚ノ恭王出デテ遊ビ、烏嶲ノ弓ヲ亡フ、左右之ヲ求メント請フ、王曰ク止メヨ、楚王弓ヲ失ヒテ楚人之ヲ得、又何ゾ之ヲ求メント、孔子之ヲ聞イテ曰ク、惜イカナ其ノ大ナラザルコト、人弓ヲ遺レテ人之ヲ得ルノミトイハザル、何ゾ必ズシモ楚ノミナラン ヤ」とあり、この話は、說苑の至公にも見ゆ、

蘇黃遺文

蘇東坡贊二文與可梅竹石一云、梅寒而秀、竹瘦而壽、石醜而文、是爲二三益之友一、席子擇遺レ喪、黃山谷憐二其貧一、糾二合同志者一助レ之、其辭云、富者不レ仁、理難二共語一、仁者不レ富、勢難二獨成一、百足之蟲、至レ死不レ僵、以二有レ持レ之者一衆也、願與二諸君一同レ力扶レ之、二帖余皆見二其眞蹟一、坂谷集所レ不レ載（鵞林玉露）

夕

【田】說文に「陳ナリ穀ヲ樹ルヲートイフ、四口十阡陌ノ制ニ象ル」正韻に「土已ニ耕スヲートイフ」釋名に「田ハ塡ナリ、五稼ソノ中ニ塡滿スルナリ」易の乾卦に「見龍在レ田」職田は一に職分田ともいふ職分に應じて官給する田をいふ、文獻通考に「隋開皇中始給二職田一」火田は、耕地の草を燒きて其灰を肥料として作る田をいふ、禮記に「昆蟲未レ蟄不レ以二火田一」また田獵の義にも用ふ、詩經に「叔于レ田」

【敦】黍稷を盛りて神に供ふる器、槃の類、禮の明堂位に「有虞氏之兩敦」

【染頤】欲食之貌（頤ヲ染ル）を見よ、

【戴安道】（戴逵）を見よ、

【太阿龍泉】古の名劒の名（龍泉）を見よ、

【大尉】軍事を掌る官名、秦に一一あり丞相あり、漢は丞相・一一（後チ大司馬大將軍ト改ム）是を兩府と爲す、東漢は大傅を上公となし、一一・大司徒・大司空を三公となす、上公を併せて四府と稱す、晉は太傅・太宰・太保是を上公となし、一一、大司馬・大將軍・司徒・司空を上公に併せて八公となす、以下歷朝沿革あり一一錄すべからず隋唐以後位あり官なし、新王藩鎭の加官となす、詳しくは文獻通考を見よ、

【大猷】大道に同じ、詩經に「秩秩一一、君子莫レ之莫は定なり、また書經に「若レ昔一一制二治于未一レ亂保二邦于未一レ危」とあるは、大道の行はれたる世といふ義、

【第一義】聖智の自覺して得たる所ろをいふ、大藏法數に「一一一トハ即チ无上甚深ノ妙理ナリ、ソノ體湛寂ソノ性虛融、名ナク相ナク、議ヲ絕チ思ヲ絕ッ、云云」

【第一流】第一等の義、世說に「劉曰ク、極メテ進メリ、然レドモ故是レ第二流中ノ人ノミ、桓曰ク、一一一ハ復是レ誰ゾ、劉曰ク、正ニ是レ我輩ノミト」劉は劉眞長、桓は桓溫なり、戴叔倫の長門怨に「自憶專房寵、曾居一一」

【太一玉臺】太一は、天帝の在す所、玉を以て臺とす、楚辭に「登二太一一兮玉臺一」

【大威德】五大尊明王の一にして西方に配せり、本地は彌陀如來にして一切の惡毒龍を摧伏す、大は普遍廣博の義、威は威勢、德は功德の義なり、三面六臂劒鉾輪杵を執り、摧伏の印を結び、大白牛に御し忿怒の相

を表せり、光明疏に「——者、德勝群輩」

【退院】（タイヰン）僧の寺を退きて隱居すること、道山清話に「長老遂——而去」

【滯陰】（タイイン）夏時になりて陰氣猶ほ滯伏するをいふ、國語に「氣無——亦無散陽」

【大隱】（タイイン）ハ朝市ニ隱ル】文選の晉の王康琚の反招隱の詩に「小隱隱陵藪、大隱隱朝市、伯夷竄首陽、老聃伏柱史」とあり、柱史とは老子が周の柱下の史（ショモツブギャウ）となりしをいふ、伯夷の德は、老聃に如かず、則ち小隱の大隱に劣ること明けし、高士傳に「毛公薛公、戰國ノ亂ニ遭フ、二人俱ニ處士ヲ以テ邯鄲ノ市ニ隱ル、毛公ハ隱レテ博徒トナリ、薛公ハ賣膠（にかはうり）ニ隱ル」とあるも、能く市にかくれたる者といふべし、朝廷に隱れたるは、東方朔の如き人をいふ、一解朝市にて、市中の義とす、從ふべし、

【大禹ハ聖人ナレドモ寸陰ヲ惜メリ】（タイウ）晉の陶侃の語、曰く「大禹聖人、乃惜寸陰、至於衆人、當惜分陰、豈可逸遊荒醉、生無益於時、死無聞於後、是自棄也」

【大瀛】（タイエイ）大いなる海をいふ、史記孟荀傳に「乃有大瀛海環其外」

【體要】（タイエウ）趣の完く具はるのみなるを體といひ、衆體の會する所ろを要といふ、書の畢命に「政貴有恒、辭尚——」

【大液ノ芙蓉】（タイエキ）大液は漢の武帝の作りし池、芙蓉は蓮なり、長恨歌に「——未央柳」

【玳筵銀燭】（タイエン）盛んなる宴席をいふ、趙德麟の侯鯖錄に「劉原父晩ニ長安ニ守タリ、官妓蔡嬌ヲ眷ス、召還セラルルトキ、詩ヲ作リテ別ル、曰ク——徹宵明、白玉佳人唱渭城、更盡一杯須起舞、關河秋月不勝情」

【大圓鏡智】（タイエン）萬德圓滿し法界の諸法を顯すこと大圓鏡の衆影を現ずるが如きをいふ、即ち佛陀四德の一なり、大藏法數に「如來眞智本性清淨、離諸塵染、洞徹內外、无幽不燭、如大圓鏡洞照萬物、无不明了、是名——」

【大家】（タイカ）學問の大成したる人を稱す、また姑（シウトメ）をもいふ、類書纂要に「婦稱姑爲——」とあり、この時は家の音「コ」

【大哥】（タイカ）俗語「アニキ」廣韻に「哥ハ今呼ンデ兄トナス」韻會に「顯川ノ語ニ小ヲ哥トイフ今人以テ姐字ニ配シテ兄弟ノ稱トス」水滸傳解に「哥ハ兄ナリ、大ヲ加フルハ尊敬ノ語トス」

【待賈】（タイカ）賈は價なり、善き直段を以て買手の來るを待つ義、論語子罕に「子貢曰、有美玉於斯、韞櫝而藏、諸求善賈而沽、諸子曰、沽之哉、沽之哉、我待賈者也」美玉を假りて、士は禮を待つて進む、自ら沽り自ら求むることをせざる意を說く、

【大凱】（タイガイ）史記主父偃傳に「天下既平、天子——」の注に「——ハ周禮、師ヲ還シ振旅スルノ樂」

【蔣芥】（タイカイ）小さき「トゲ」微細の事に比す、蔣薤に同じ、司馬相如子虛賦に「其於胸中、曾不——」

【蔣薤】（タイカイ）蔣は蕙に同じ、小鯁なり、鯁は魚骨なり薤は芥に通ず、——は蔣芥に同じ、刺鯁なり「トゲ」史記賈誼傳に「細故——今何足以疑」微細の事は、我が心に留めて疑ふに足らずとの義、

【體解】（タイカイ）殺して體軀を析つなり、史記秦紀に「——軻以徇」軻は荊軻なり、徇は行示なり、衆に示して後の戒とす、

【臺海使槎錄】（タイカイ）八卷、清の黃叔璥撰す、叔璥字は玉圃、篤齋と號す、安徽歙縣の人、康熙四十八年の進士、官御史に至る、朱子學を宗とし篤行を以て稱せらる、乾隆元年卒す、年七十七、この書は、康熙六十一年命を奉じて臺灣を巡視せしとき著せり、

【大行】（タイカウ）帝王の崩じて未だ葬らざる義、史記李斯傳に「——未發、喪禮未終」通典に「帝初メテ登遐スル、朝臣稱シテ——皇帝トイフ」風俗通に「天命終ルアリ、往テ返ラズ、故ニ——トイフ」

また周に——の官あり、賓客の禮を掌る、史記叔孫通傳に「——設九賓臚句傳」上に語を傳へ下に告ぐるを臚となし、下に語を傳へ上に告ぐるを句となす、

【大輅】（タイカウ）大法をいふ、史記律書に「世儒闇於——不權輕重」また「オホムネ」の義、

【太昊】（タイカウ）春の神（太皞）を見よ、

【太皞】（タイカウ）春の神なり、淮南子に「東方ハ木ナリ、ソノ帝ハ——、ソノ佐ハ句芒、規ヲ執リ春ヲ治ム、ソノ神ヲ歲星トナシ、ソノ獸ハ蒼龍ナリ」漢書に「東方ノ神ハ太昊、震ニ乘ジ、規ヲ執リ春ヲ司ル」皞俗に皡に作る

【推敲】（タイカウ）字句を鍛煉するをいふ、湘素雜記に「劉公嘉話ニイフ、賈島初メ擧ニ京師ニ赴ク、一日驢上ニ於テ句ヲ得タリ、イフ鳥宿池邊樹、僧敲月下門ト、始メ推ノ字ヲ著ケント欲シ、又敲ノ字ヲ著ケント欲ス、之ヲ煉ツテ未ダ定マラズ、遂ニ驢上ニ於テ吟哦ス、時時手ヲ引キテ推敲ノ勢ヲナス 時ニ韓愈吏部、權ノ京尹タリ 島覺エズ衝キテ第三節ニ至ル、左右擁シテ尹ノ前ニ至ル、島具サニ得ル所ロノ詩句ヲ對ヘテ云云ス、韓馬

「——未發、喪禮未終」通典に「帝初メテ登遐スル、朝臣稱シテ——皇帝トイフ」風俗通に「天命終ルアリ、往テ返ラズ、故ニ——トイフ」

また周に——の官あり、賓客の禮を掌る、史記叔孫通傳に「——設九賓臚句傳」上に語を傳へ下に告ぐるを臚となし、下に語を傳へ上に告ぐるを句となす、

【大輅】（タイカウ）大法をいふ、史記律書に「世儒闇於——不權輕重」また「オホムネ」の義、

【太昊】（タイカウ）春の神（太皞）を見よ、

【太皞】（タイカウ）春の神なり、淮南子に「東方ハ木ナリ、ソノ帝ハ——、ソノ佐ハ句芒、規ヲ執リ春ヲ治ム、ソノ神ヲ歲星トナシ、ソノ獸ハ蒼龍ナリ」漢書に「東方ノ神ハ太昊、震ニ乘ジ、規ヲ執リ春ヲ司ル」皞俗に皡に作る

【推敲】（タイカウ）字句を鍛煉するをいふ、湘素雜記に「劉公嘉話ニイフ、賈島初メ擧ニ京師ニ赴ク、一日驢上ニ於テ句ヲ得タリ、イフ鳥宿池邊樹、僧敲月下門ト、始メ推ノ字ヲ著ケント欲シ、又敲ノ字ヲ著ケント欲ス、之ヲ煉ツテ未ダ定マラズ、遂ニ驢上ニ於テ吟哦ス、時時手ヲ引キテ推敲ノ勢ヲナス 時ニ韓愈吏部、權ノ京尹タリ 島覺エズ衝キテ第三節ニ至ル、左右擁シテ尹ノ前ニ至ル、島具サニ得ル所ロノ詩句ヲ對ヘテ云云ス、韓馬

ヲ立テ良ク久クシテ島ニ謂ツテ曰ク、敲ノ字ニ作ル佳ナリト、遂ニ轡ヲ竝ベテ歸ル」

【大行ノ路能ク車ヲ摧ク、若シ君ガ心ニ比スレバ是レ坦途】（大行之路能摧車、若比君心是坦途）白樂天の大行路と題する詩中の句なり、大行は險を以て名ある山なり、下に「巫峽之水能覆舟、若比君心是安流」の句あり、人心の險を以て山川の險に比したるなり、太平記卷九に引用したり、

【大羹ハ和セズ】大羹は肉の汁にて、鹽梅の調和なし、禮記の樂記に「大羹不和有遺味者矣」この語、禮器篇にも見ゆ、さて大羹は、滋味の調和なく、質素の食にして、人の嗜み悦ぶ所ろの味にあらざれども、其の中には不盡の餘味存ずるありとの義、淮南子にも「大羹之和可食而不可嗜也」

【大行ハ細謹ヲ顧ミズ】大事を行はんと欲する者は、少しの謹みなどはかへりみざる義、史記の項羽本紀に「樊噲曰、大行不顧細謹、大禮不辭小讓」とあり、また李斯傳に「大行不小謹、盛德不辭讓」とあり、

【大巧ハ拙ナルガ若シ】眞に巧妙なる者は、却つて粗拙なる者の如くなるをいふ、老子に「大直若屈、大巧若拙、大辯若訥」と荀子には「大巧在所不爲、大智在所不慮」

【大壑】一に巨壑ともいふ、海をいふ、莊子天地篇に「一一之爲物也、注焉而不滿、酌焉而不竭」

【岱嶽】泰山の異稱、文選東京賦に「巡乎一一、〈泰山〉を見よ

【大覺】佛の異稱、また佛果を稱へいふ、翻譯名義集に「悟夢惺而一一常明」

【大學】國都に設くる最高程度の學問所をいふ、漢書董仲舒傳に「一一者賢士之所關也、敎化之本原也」

【大學】一卷、古本と、朱子の改補本との二種あり、古本は古學派陽明學派之を用ふ、大學には三綱領八條目あり、明明德・新民・止於至善之を三綱領とし、格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下之を八條目とす、儒學の原理を說明したれば訓詁の小學に對して一一と名づけたり 中村蘭林の講習餘筆に曰く「中庸・大學ノ二篇ハ、漢儒之ヲ禮記ノ中ニ收メケルニ、晉ノ戴顒中庸ヲトリ出シテ、中庸傳二卷ヲ作ル、梁ノ武帝モ、中庸講疏ヲ撰セリ、宋朝ニ至リテ、范仲淹中庸ヲ以テ張橫渠ニ授ケ、傳道ノ書トシテ揭示セシトナリ、コレ程子ヲ待タザルナリ、唯大學ハ程子ニ至ツテ始メテ表章セリ、然ルニ皇朝ノ清原賴業ハ、高倉帝ノ侍讀トナリテ、官大外記タリ、禮記ノ中、大學・中庸ノ二篇ヲ讀ミテ、聖學ノ至要トナシ、大ニ之ヲ尊信表章シ、之ヲ人ニ敎ヘタリトナリ、大抵朱子ト同時ノ人ニテ、四書集註未ダ渡ラザル以前ナレバ、誠ニ卓識ノ人トコソ云フベケレ云云」參考書は、

大學　一篇、鄭玄注、孔穎達疏、收めて十三經の禮記中に在り、

大學證文　四卷、清儒毛奇齡撰す、大學の書、程朱より以來、改本日に增し、往往私心に騁せ、古義を汨亂す、著者諸本を參校して、この書を著す、考證極めて精確なり、

大學章句　一卷、朱熹撰す、

中庸　一篇、註疏、大學に同じく禮記中に收む、

中庸章句　一卷、朱熹撰す、

四書諱義困勉錄　三十七卷、松陽講義、十二卷、清の陸隴其撰す、

四書輯疏　二十九冊、安部井褧編す、

四書解義　二十六卷、康熙十六年、大學士庫勒納等敕を奉じて撰す、

以上列記する書目は、古來著名のもののみを擧げたるなり、その他參考して博覽に資すべきもの亦多し、

【臺閣】後漢書仲長統傳の注に「一一ハ尚書ノ官ヲ謂フ廣ク內閣の義、またその大臣の稱とす、

【大樂ノ成ルハ一音ニ取ルニアラズ】中論に「大樂之成、非取乎一音、嘉膳之和、非取乎一味、聖人之德、非取乎一道」

【大夏皇帝】宋の仁宗の景祐元年、西夏の趙元昊反し、陝西甘肅等十四州の地に據有し、尋で一一と僭號し、屢邊に寇す、西鄙騷然たり、西夏は即ち漢の西南羌の地なり、

【大廈成リテ燕雀相賀ス】淮南子說林に「大廈成而燕雀相賀、湯沐具而蟣蝨相弔」の註に「廈ハ大屋ナリ、燕雀大屋ノ成リテ、安キヲ得ルヲ喜ビ、蟣蝨ハ、湯沐ノ水具ハリテ、將ニ死セントスルヲ憂フルナリ」

【大廈ノ材ハ一丘ノ木ニアラズ】大なる事功は一人の力にては出來ざるに喻ふ、四子講德論に「大廈之材非一丘之木、太平之功、非一人之力也」

【帶甲】「ヨロヒ」を著けたる兵士をいふ、史記蘇秦傳に「一一數十萬、轉じては廣く兵士を斥していふ、

【大廈將ニ顚レントス、一木ノ支フル所ロニアラズ】國家の覆らんとする危き場合にあひては、獨力にては支へ難きに喻ふ、文中子に「大廈將顚、非一木所支也」

とあり、宋書に「袁粲、劉秉ト、蕭道成ヲ誅セント謀ル、褚淵、之ヲ知リテ以テ道成ニ告グ、遂ニ載僧靜ヲシテ粲ヲ攻メシム、粲其ノ子最ニ謂ッテ曰ク、本ト一木ノ大廈ノ崩ルルヲ支フル能ハザルヲ知ル、但名義ヲ以テ此ニ至ル、國家ノ爲メニ臣タル職分ヲ盡スノミト僧靜城ヲ踰エテ獨リ進ム、最身ヲ以テ粲ヲ衞ル、粲最ニ謂ッテ曰ク、我レ忠臣タルヲ失ハズ、汝孝子タルヲ失ハズト、父子俱ニ死ス、百姓之ヲ哀ミ謠ヒテ曰ク、寧ロ袁粲ト爲リテ死スルモ、褚淵ト作リテ生キズト、秉父子モ亦殺サル」

【大鑑】（慧能）を見よ、

【大寒】ニシテ裘ヲ索ム」「ヌスビト」捕へて繩をなふと同じ、法言に「大寒而後索裘、不亦晩乎」裘は「カハゴロモ」

【大旱ノ雲霓ヲ望ムガ若シ】渴望の切なるをいふ、孟子に「民望之若大旱之望雲霓也」

【大姦ハ忠ニ似タリ】甚だしきよこしまなる惡人は、かへりて表面はまことある人のやうに見ゆるものなりとの義、呂誨の語に「大姦似忠、大詐似信」

【大伽藍】大寺なり（伽藍）を見よ、

【大器】大いなる才器ある人をいふ、管子に「施伯謂魯侯曰、管仲者天下之賢人也、——也」

【戴逵】字は安道、晉の譙郡の人、會稽剡縣に徙る、博學能文善く琴を鼓し書畫に工なり、性高潔にして、禮度を以て自ら處る、太宰武陵王晞その琴を善くするを聞きて、人を遣して之を召す、逵使者に對し琴を破りて曰く、戴安道不能爲王門伶人と、王徽之之を訪はんとし、門にいたり興盡きて返りき、孝武の時累徵せらるれども就かず、子の顒字は仲若亦高潔、文學を以て名あり、

【耐久ノ朋】いつまでも、親交のかはらざる友をいふ、書言故事に三國志を引きて「魏玄同裴炎ト交ヲ締ビ、能ク始終ヲ保ツ、時ノ人呼ンデ耐久ノ朋ト號ス」の註に「交道ヲ保全シテ、始終其ノ心ヲ移サズ」

【大義親ヲ滅ス】（大義滅親）君臣の大義を全うせんために父子の私親を滅するをいふ、左傳隱四年に「君子曰、石碏純臣也、惡州吁而厚與焉、——、其是之謂乎、厚は碏の子なり、厚衞の公子州吁の亂に與みしたるを以て、碏が之を殺したるを嘉みせるなり、

【大器晩成】大才は、速に成就せざるに喩ふ、老子に「大方無隅、——」とあり、後漢書に「馬援ガ兄況、援ニ謂ッテ曰ク、汝ハ大才、當ニ晩成スベシト」論衡には「大器難成、寶貨難售」

【太鈞】造物者をいふ、陶人器を鈞上に作る、造化の人を爲るも、亦猶ほ陶の瓦を造るが如きのみ、漢書賈誼傳に「——播物」鈞とは、陶人の模の下に用ふる輪器、

【大噱】噱は笑聲なり、——は大に笑ふをいふ、漢書敘傳に「談笑——」

【大去】去りて復た反らざるをいふ、左傳に「紀侯——其國ニ」

【大魚】淮南子に「——蕩而失水、螻蟻皆得志大魚も水に離るれば螻蟻の爲めに啖はるるを免れず、

【戴顒】字は仲若、逵の子、丹青を善くす、父仕へざりしを以て、復その業を修め、亦琴を善くし新聲を作す、號して清曠と爲す、逵善く佛像を鑄る、顒その法を參す、喜んで名山に遊び、累徵せらるれども就かず、晉の太元戊寅に生れ、元嘉辛巳に卒す、年六十四、莊周の大旨を述べ逍遙篇論を著し、禮記中庸に注す（戴逵）を參看せよ、

【太極】天地未だ分れざる以前をいふ、易の繫辭に「易有——、是生兩儀」

【太極圖說】一卷、宋の周惇頤撰す、太極とは天地に先ちて存ずる無形の條理にして萬物の本源たるものをいふ、この太極には動靜二種の活動力あり、之によりて陰陽二氣を生じ、更に分れて木火土金水の五行となり、五行の精凝りて人を生ず、人はこの五行に由りて仁義禮智信の五性を得るが故に萬物の靈たるなり、されどもこの五性を動かして外物と接する時は、その行事に善惡の別を生ずるを以て、聖人中正仁義の道を立てて靜を主とし、以て正に復歸せしむと、天人合一の原理を說明す、これこの書の大意なり、參考書には、朱熹の太極圖解一卷あり、また清の毛奇齡の——遺議一卷、伊藤長胤の——管窺一卷等はこの書を排して儒家の言にあらずして道家の說たることを指陳せしもの、亦幷せ見るべし、

【大區】天をいふ、淮南子に「縱志舒節以馳——」

【太和】中和の氣をいふ、班固の答賓戲に「沐浴玄德、禀仰——」

【大過】大に過ぐること、易の——の釋文に「——ハ超越ナリ」また大いなる「アヤマチ」論語に「可以無——」

【題畫】山水人物等の畫に贊又は詩文を書きつくるをいふ、

顧愷之秋江晴幹圖　元　黃公望

三絶如レ君少、斯圖更擅レ長、設施無レ斧鑿、點染自微茫、山碧林光淨、江清秋氣凉、憐余瞻對久、疑レ入二白雲鄉一、

題畫　明　唐寅

楊柳陰濃夏日遲、村邊高館漫二平地一、隣翁挈レ榼乘二清早一、來決二輸贏一昨日棊、

【大塊】　天地をいふ、莊子に「一一噫氣其名爲レ風」また造物者の義、同書大宗師に「一一載レ我以レ形、勞レ我以レ生、佚レ我以レ老、息レ我以レ死」李白の春夜宴桃李園序に「一一假レ我以二文章一」一解に地球をいふ、

【台槐】　三公なり、三公は天の三台に比す、また周の世三槐を朝庭に植ゑ、之に面して三公の座位を定めたるにより、三公の義とす、晉書に「史臣曰、晉氏中興、衣冠斯盛、英彥如レ林、或以二雅望一處二一一一或以二高名一居二保傅一、自レ非二一時之秀一、亦曷能至二於斯一」

【怠荒】　怠りすさむ義、禮記の曲禮に「勿二一一一」

【大經】　通鑑の唐紀に「唐、士ヲ取ル、禮記・春秋・左氏傳ヲ以テ一一ト爲シ、詩儀禮・周禮ヲ以テ中經トナシ、易書・春秋公羊・穀梁傳ヲ以テ小經トナス」

【胎敎】　子のいまだ胎内に在るうちに敎を施すをいふ、即ち孕婦が心を正し、行をつつしみて自づから胎中の兒に善き感化を及ぼすをいふ、列女傳に「文王生而明聖、君子曰太任能二一一一」

【大紘急ナレバ小紘絕ユ】　後漢書に「爲レ政猶レ張二琴瑟一、大紘急者小紘絕、故子貢非二臧孫之猛法一、而美二鄭尙之仁政一」とあり、一の紘は太ければ強くかけ、四の紘は細ければ弱くかくるなり、若し一の紘の如くに、四の紘をも、さびしくかくるときは、たちきるるに至るものなり、以て民を治むるには寬をたふとぶに喩ふ、

【太玄經】　十卷、漢の揚雄著す、玄とは猶ほ太極といふが如く天地萬物の本根をいふ、この書は易に擬して作りたるものにて、諸儒のこの書を評する褒貶一ならず、司馬光は大にこの書を尊びて「玄ヲ讀ミテ後易ヲ讀マバ、易ハ刃ヲ迎ヘテ解セン、眞ニ天地ノ祕ヲ闚クモノ、以テ孔子ニ次グベキナリ」といひ、太玄集註を作れり、

【大故】　大喪をいふ、孟子に「不幸至二於一一一」また惡逆をいふ、論語に「故舊無二一一則不レ棄也」

【醍醐】　五味の一、熟酥より製出す、味甘美なるもの、以て佛法の妙趣に喩へて一一味といふ（一一ノ）を見よ、

【太公】　祖父をいふ、轂耕錄に「今人曾祖父ヲ謂ツテ一一トイフハ謬レリ、當ニ祖父ヲ稱スルヲ是ト爲スベシ、後漢ノ李固ノ父郃、司空タリ、固ガ女、固ノ誄ニ伏スル日ニ當リテ曰ク一一以來云云、註ニ一一ハ祖父郃ヲ謂フナリト」

【大功】　大いなる「デガラ」重實を參看せよ、また喪服の名、布を治むるに精麤の分あり、故に大小の別あり、一一は五月、小功は三月の服なり、

【廼公】　乃公に同じ、尊大にして自ら稱する語、漢書高祖紀に「漢王輟レ飯吐レ哺曰、豎儒幾敗二一一之事一」

【大功ヲ天下ニ建ツル者ハ必ズ先ヅ閨門ノ内ニ修ム】　陸賈の新語に「建二大功于天下一者、必先修二于閨門之内一、垂二大名于萬世一者、必先行二之于纖微之事一」

【大功ヲ論ズル者ハ、小過ヲ錄セス】　大功を論じて之を賞するときは、其の小過は措いて問はざるをいふ、漢書陳湯傳に「論二大功者一、不レ錄二小過一、舉二大美一者、不レ疵二細瑕一」

【太公望】　（呂尙）を見よ、

【大功ハ世世ニ絕タズ】　大賚令の田令に「大功世世不レ絕、上功傳二三世一、中功傳二二世一、下功傳レ子」大功田を賜はりしものは永く世襲せしむるをいふ、

【大國ヲ治ムルハ小鮮ヲ烹ルガ如クス】　（治二大國一若レ烹二小鮮一）老子の語、小鮮とは小魚なり、小魚を烹るには腸や鱗を去らず、そのまま烹るなり、國を治むるにも政を煩にせず、自然に任ずべしとの義、

【國經野】　（國ヲ體シ）を見よ、

【醍醐ノ法味】　最上の美味をいふ、以て佛法の妙なる旨に喩ふ、涅槃經の聖行品に「善男子譬ヘバ牛從リ乳ヲ出シ、乳ヨリ酪ヲ出シ、酪ヨリ生酥ヲ出シ、生酥ヨリ熟酥ヲ出シ、熟酥ヨリ醍醐ヲ出スガ如シ、醍醐ハ最上ナリ、若シ服スルアレバ、衆病皆除カル」とあり、卓氏藻林に「佛經ニ言フ、正法ヲ聞クコト、醍醐ヲ食フガ如ク然リトハ、其ノ能ク性ヲ養フヲ謂フナリ、此レ直チニ佛ノ正法ニ喩フルナリ」

【太歲】　（十干）（十二支）を見よ、

【大造】　造は作なり、爲なり、就なり、大に功を爲す義、左傳に「是我有二一一于西一也」

【太早計】　速了（ハヤガッテン）に過ぐる義、莊子の齊物論に「汝モ亦太早計、見レ卵而求二時夜一、見レ彈而求二鴞炙一」とあり、鷄の卵を見て、すぐに時をうたはんことを求め、彈（ハジキユミ）を見て、鴞（フクロ）の炙（アブリモノ）を求むといふ意、

【太倉ノ粟陳陳相因ル】　官の倉の中に藏むる米、多くして用ひ盡すを得ず、陳腐に歸する者、相累積するをいふ、

いふ、史記平準書に「——之ー、ーーーー、充溢露積於外ニ」

【大倉ノ稊米】 猶ほ滄海の一滴と云ふが如し、莊子秋水に「計中國之在海内、不似稊米之在太倉乎」稊は小米なり、稗の類、

【對策】 政事經義の問を出して、之に對へしめ、其の文辭を觀て高下を定むるをいふ、晉書郤詵傳に「臣舉賢良、ーー爲天下第一ニ」

【岱山】 次の(泰山)を見よ、

【泰山】 山東省の青州の西方に在り、初學記に「ーーハ五嶽ノ東嶽ナリ、五經通義ニ、一名ハ岱宗、王者命ヲ受ケ姓ヲ易ヘ、功ヲ報イ、成ルヲ告グル、必ズ岱宗ニ於テス、東方ハ萬物始メテ交代スルノ處ナレバナリ」風俗通山澤に「ーーハ山ノ貴キ者」(岱宗)を參看せよ、

望嶽　杜甫

岱宗夫如何、齊魯青未了、造化鍾神秀、陰陽割昏曉、盪胸生曾雲、決眥入歸鳥、會當凌絕頂、一覽衆山小、

【太山ニ登リテ天下ヲ小ナリトス】 その居るところ高ければその下を見ることますます小に、見るところ大なれば、小なるものは觀るに足らずとの義、孟子に「孟子曰、孔子登東山而小魯、登太山而小天下ニ云云」太山は泰山なり、

【泰山ノ雷ハ石ヲ穿ツ】 微少なる力も積みてやまざるときは大功を成すに喩ふ、枚乘の諫吳王書に「泰山之雷穿石、殫極之綆斷軲、水非石之鑽、索非木之鋸、漸摩使之然也」雷は溜に通ず、シタタリ、綆は「ツルベナハ」軲は「キゲタ」

【泰山ハ土壤ヲ讓ラズ、故ニ能ク其ノ大ヲ成ス】 度量を廣くして多く物を容るるに喩ふ、李斯の逐客上書に「泰山不讓土壤、故能成其大、河海不擇細流、故能就其深、王者不却衆庶、故能明其德」とあり、泰一に太に作る、同じ(山ハチヒサキ)を見よ、

【泰山北斗ノ如シ】 泰山北斗を仰ぐが如く、之を尊崇するをいふ、排韻に「韓愈字ハ退之、唐ノ文宗ナリ、宋景文ガ公ノ贊ニイフ、愈六經ノ文ヲ以テ、諸儒ノ首タリ、學者之ヲ仰グコト泰山北斗ノ如シ」と、唐書韓愈傳の贊に見ゆ、北斗は北辰なり、略しては泰斗ともいふ、

【泰山前ニ崩ルトモ色變ゼズ】 心をおちつけて恐れざるをいふ、蘇老泉の文に「爲將之道、當先治心、泰山崩於前而色不變、麋鹿興於左而目不瞬、然後可以制利害、可以待敵」

【泰山梁木】 泰山は山の最も尊きもの、梁木は「ウツバリ」にて大木なり、それよりすべて頼りたのむべき尊きものに喩ふ、禮記檀弓に「孔子蚤作(中晏歌曰、泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎」とあるに本づく、

【太子】 東宮に同じ、明款英綠雪亭雜言に「古者天子ノ嫡子モ亦世子ト稱シ、諸侯ノ子モ亦ーート稱ス、西漢ハ天子ノ嫡子ヲ皇太子ト稱シ、諸王ノ子ヲーート稱ス 皇太子殺梁王ーーノ類是レナリ、金元ハ庶子モ皆ーート稱ス、四太子兀朮ノ類是レナリ、本朝(明朝)ハ東宮ニ皇太子ト稱シ、親王ノ嫡子ヲ世子ト稱シ、郡王ノ嫡子ヲ長子ト稱ス」伊藤長胤曰く「春秋ノ時、天子諸侯ノ嗣子、通ジテ世子ト稱シ、太子トモ稱ス漢ノ時ニ及ビテ侯國モ亦太子ト稱ス、而シテ天子ノ元子ハ皇太子ト稱ス、吳ーー侍皇ーー飲博コレナリ、後世ハ唯天子ニ皇ーートノ稱スルヲ得、而シテ諸侯ハ即チ世子ト稱ス」

【太師】 文官の最も高きもの、三公の第一、天子の師法たる義、詩經に「尹氏ーー、惟周之氏」また大師は朝廷より高僧に賜はる稱、唐の太宗の朝に始まる、

【大士】 菩薩をーーといふ、また開士ともいふ、大とは大心を發するをいふ、開は發の義、瑜伽論に「自利利他名ーー大乘教によりて、大信心を發し、大行を修め行ひ、大果を成すが故にいふ、

【大姊】 善信女の稱なり、佛、諸天女を諸姉と稱せしに本づく、

【内子】 卿大夫の嫡妻(ホンサイ)なり、左傳僖二十四年に「以叔隗爲ーー而己下之」また國語に「欲以其妾爲ーーまたひろく嫡妻をいふ類書纂要に「嫡妻ヲーートイフ、閨門ノ内ニ在リテ以テ家ヲ治ムルヲ以テナリ」

【大醜】 元惡に同じ、易に「獲其ーーニ」

【大慈悲】 能く他に樂を與ふるを慈といひ、他の苦を拔くを悲といふ、法華經に「大慈大悲常无懈倦ニ」

【大人】 大德の人なり、また聖人の義とす、易經に「飛龍在天、利見ーーニまた「ーー者與天地合其德」孟子に「ーー者不失其赤子之心者也」また後漢書蘇章傳には「ーーハ長老ノ稱」とあり、また父母の稱とす、漢書淮陽王傳に「王遇ーー益懈」とあるは、淮陽王の、外舅張博が、我が母を稱せしなり、また范滂傳に「滂將就詰與母訣曰、大人割不忍之愛」とあるも、母を稱す、されど多くは父を稱するとす、類書纂要に「子稱父爲ーーニ大人」を參看せよ、

【大侵】 甚だしき饑饉をいふ、穀梁傳襄二十四年に「五穀不登、謂之ーー」韓詩外傳に「一穀不升曰歉、二穀不升曰饑、三穀不升曰饉、四穀不升曰荒、五穀不升曰ーー」ーーは一に大饑ともいふ。

【大秦】 後漢書に見ゆるーーは、蓋し今の亞細亞土耳其の地方を指す、當時は東羅馬帝國の領土たりしなり、同書に「大秦一名黎軒、後漢時始通焉、其國在西海之西、亦云海西國、其王治安都城、宮室皆以水精爲柱、條支西渡海曲萬里、去長安蓋四萬里、其國平正人居星布(中略)其王無常人、皆循立賢者、有災異及風雨不時、輙廢而更立、受放者無怨、其人長大平正有類中國、故謂之ーー」或曰、本中國人也」

【戴震】 字は愼修、一の字は東原、淸の休寧の人、乾隆二十七年の擧人、許氏の說文解字を得て大に之を好み、遂に盡く十三經注疏に通じ、能く全く其の辭を擧ぐ、嘗て曰く、經は以て道を載す、道を明かにする所以の者は辭なり、辭を成す所以の者は字なり、學者は當に字に由りて以てその辭に通じ、辭に由りて以てその道に通ずべし、某十七歲の時より道を聞くに志あり、謂へらく之を六經孔孟に求むるに非れば得べからず、字義制度名物に從事するに非ざれば、由りて以てその語言に通ずるなしと、之を爲すと數十年、灼然として古今治亂の源是に在るを知る、宋儒が訓詁の學を譏りて語言文字を輕んずるは、これ猶ほ江河を度らんとして舟楫を棄つるが如きなりと撰述する所ろ、毛鄭詩考正・考工圖記・孟子字義疏證・方言疏證・聲韻考・爾雅文字考東原文集等數十種あり、段玉裁王念孫等皆その門に出づ、乾隆四十三年卒す年五十五、

【大臣】 論語先進篇に「所謂ーー者、以道事君、不可則止」漢書朱雲傳に「ーー無益于民、皆尸位而素飡」

【大人虎變】 大人は王者を指す、王者が天下の事を變革するは條理炳然として、著しるく虎の皮毛の變更して文采あるが如きをいふ、易經に「ーーーー、未占有孚」

【大人ニ說クニハ則チ之ヲ藐ンズ】 (說大人則藐之)孟子盡心篇の下に「ーーーーー、勿視其巍巍然」大人は、尊貴の者をいふ、藐は輕視するをいふ、巍巍は富貴高顯の貌、藐焉として之を畏れざるときは則ち志意舒展して、言語盡すことを得るなり、

【大秦ノ珠】 魏畧に「大秦國出明月夜光珠眞白珠」と、辛延年の詩に「頭上藍田玉、耳後ーーー」

【代謝】 四時の「ウツリカハル」をいふ、淮南子に「道ハ

輪轉シテ窮リナシ日月ノ運行ニ象リ、春秋ノイーアル若ク・日月ノ晝夜アルガ若シ」(荏苒)を見よ

【臺榭】 臺は土をつきあげて四方を望むやうにつくる、屋根なきを露臺といふ、漢孝文帝欲作露臺とあるは是れなり、左傳の靈臺の注に「服虔曰ク天子曰靈臺、諸侯曰觀臺」とあり、榭は儀禮の注に「凡屋無室曰榭」と、ーーと連稱す、爾雅に「有木者謂之榭」とあり、木とは土ばかりでなく、材木を構へて築きたるをいふ、故に劉勰の新論に「凌雲之榭非一木所構」史記劉敬叔孫通列傳にも「ーー之榱、非一木之枝也、三代之際、非一士之智也」とあり、書經泰誓の「宮室ーー」の注にも「土高曰臺、有木曰榭」とあり、管子の七臣七主に「ーー相望者亡國之廡、馳車充國者追寇之馬」

【大將】 軍の總指揮官なり、抱朴子に「ーー民之司命、社稷存亡、於是乎在」また「ーー者凜凜若負重而履薄氷、戰戰若登朽木以臨萬仞」

【大匠】 すぐれたる「タクミ」老子に「代ーー斵、希有不傷其手」呂氏春秋に「ーー不斵、大庖不豆、大勇不鬪、大兵不寇」孟子に「ーー不爲拙工改廢繩墨、羿不爲拙射變其彀率」

【太祥】 三周忌をいふ(小祥)を見よ、また大祥は大吉なり、左傳昭十八年に見ゆ、

【太上】 極めてすぐれたる德、大戴禮曾子立事篇に「ーー樂善」注に「ーーハ德ノ最上ナル者」また天子の稱、荀子の君子篇に「莫敢犯ーー之禁」の注に「ーーハ至尊ノ號」

【退讓】 自ら「ヘリクダリ」て人に讓るをいふ、禮記の曲禮に「ーー以明禮」

【太上皇】 位を讓られたる天子を尊稱していふ、略しては「ダジヤウクワウ」といふ「セントウゴシヨ」漢書に「上尊太公曰ーーー」と、註に「師古曰ク、太上ハ極尊ノ稱、皇ハ君ナリ、天子ノ父、故ニ號シテ皇トイフ、國ヲ治ムルニ預ラズ、故ニ帝ト言ハザルナリ」と、按ずるに此より前、秦の始皇莊襄王を追尊してーーーとなす、これその始なるべし、後世略して上皇と稱す

【太常寺】 唐の代、禮樂郊廟社稷の事を掌る役所の名、唐書に「ーー寺卿一人、少卿二人」

【大上ハ德ヲ立ツ】 人の最上の行は、德を立て以て世を理め、人を濟ふをいふ、左傳襄二十四年に「豹聞之大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽」豹は叔孫豹なり、註に「立德ハ黃帝・堯・舜、立功ハ、禹・稷、立言ハ、史佚・周任・臧文仲」

【太聖（タイシヤウ）不動】 佛敎の五大明王の一、青龍疏に「一一一者、降二一切鬼魅諸障惱一者」

【大蛇（ダイジヤ）ヲ見ルトモ女人ヲ見ル可カラス】 女人は愛欲の根本にして大蛇よりも怖るべしとの義、寶積經に「一一見レ於女人一能失二眼功德一、雖レ見二大蛇一不レ可レ見二女人一」

【帝釋（タイシヤク）】 具には釋提桓因といふ、釋を能、提を天、桓因を主と譯す、能く天主たるなり、一に六欲天主三十三天主、忉利天帝釋三十三天尊等の名あり、眷屬の天三十二あり、所居の忉利天を合せて三十三天なればいふ、その居城を喜見と名づく、帝釋は別に千眼といふ、了義燈に「猶一一如二名爲一千眼一、非レ有二千眼一、以能一時見二千法一」

【大嚼（ダイシヤク）】 嚼は「カミクラフ」——は大いに食ふ義、曹子建の與二吳季重一書に「過二屠門一——豈不レ快レ意」東坡の綠筠軒の詩に「若對二此君一仍——」唐書に「長嗅——」

【太守（タイシュ）】 秦に郡守といふ、漢の景帝改めて——といふ、漢書に「郡守ハ秦ノ官、ソノ郡ヲ治ムルコトヲ掌ル、秩二千石一、景帝名ヲ——ト更ム」

【大儒（ダイジュ）】 すぐれたる儒者、荀子に「彼——者、雖レ在二於窮閭漏屋一無二置錐之地一而王公不レ能二與之爭一名」

【大樹（ダイジュ）】 わが國にて將軍の異名に用ふ、後漢書の馮異傳に「馮異字ハ公孫、人トナリ謙退ニシテ伐ラズ、諸將功ヲ論ズルニ、異常ニ獨リ樹下ニ屛ク、軍中號シテ大樹將軍ト爲ス、邯鄲ヲ破ルニ及ビ、乃チ更ニ諸將ヲ部分ス、各、配隷アリ、軍士皆言フ願クハ大樹將軍ニ屬セント」

【戴叔倫（タイシユクリン）】 字は幼公、唐の金壇の人、詩賦を能くす、撫州の刺史となり、均水法をつくる、俗之を便利とす、詔書褒美し譙縣男に封じ金紫服を加ふ、後ち容管經畧使に遷り、威名流聞す、德宗爲めに詩を賦して之を寵せり（況湘）を見よ、

【大樹ノ下ニハ美草ナシ】 賢路の蔽塞せる所ろには、才能の士出でざるに喩ふ、說苑の說叢篇に「高山之巓無二美木一傷二於多陽一也、大樹之下無二美草一傷二於多陰一也」

【太初（タイショ）】 萬物の由りて生ずる一番のもとをいふ、宋儒の太極といふに同じ、列子に「一者氣之始也、太一に泰に作る、莊子天地篇の注に「泰初ハ氣ノ初ナリ」

【大乘（ダイジヨウ）】 名義集の、宗釋論主篇に「夫レ大乘敎トハ、至眞ノ理ナリ、諸佛ノ讚スル所ロ、衆聖ノ宗トスル攸ロ」大は普遍廣博なり、乘は運載なり、衆生を運載して生死を出離せしむる意、

【戴勝（タイシヨウ）】 鳥の名なり、鳩鳩の一名、禮記の月令に「季春之月、——降二于桑一」とあり、農耕を勸むる鳥なりといふ、一に戴紝また戴鵀ともいふ、

【退食（タイショク）】 朝より家に歸り、休息して食ふをいふ、詩經の羔羊に「一一自レ公、委二蛇委一レ蛇」

【戴嵩（タイスウ）】 王氏書畫苑に、韓晉公之鎭二浙右一、署二爲巡官一師晉公之畫不レ善二他物一、唯善二水牛一而已」とあり、韓晉公は、唐の韓滉（字ハ太沖）なり、佩文韻府に「幹馬嵩牛」とあり、韓幹の馬、戴嵩の牛をいふ、東坡の書——畫牛」の文に、

蜀中有二杜處士一好二書畫一、所レ蓄以レ百數、有二戴嵩牛一軸一、尤所レ愛、錦囊玉軸、常以自隨、一日曝二書畫一、有二一牧童一見レ之、拊レ掌大笑曰、此鬬牛也、牛鬬力在レ角、尾搐入二兩股一間、今乃掉二尾而鬬一謬矣、處士笑而然レ之、古語有レ云、耕當二問レ奴、織當二問レ婢一、不レ可レ改也、

【太清（タイセイ）】 天をいふ、鶡冠に「聖人之德、上及二——一下及二太寧一、中及二萬靈一」太寧は地をいふ、後漢書蔡邕傳の注に「——ハ天ヲ謂フ」

【太聖（タイセイ）】 すぐれたる聖人、堯舜禹湯文武周公孔子などを斥していふ（——不動）を參看せよ、

【胎生（タイセイ）】 母の胎中より生まるるをいふ、獸の類なり、史記の樂書に「——者不レ殰」殰は音「トク」說文に胎敗なり、未だ生るるに及ばずして胎敗するをいふ、流產すること、牘に作るも同じ、

【戴星（タイセイ）】 （星ヲ戴キ）を見よ、

【戴聖（タイセイ）】 （戴德）を見よ、

【大聲ハ里耳ニ入ラズ】 正しき音樂は、里俗の人の耳には分からぬをいふ、莊子の天地篇に「大聲不レ入二於里耳一」とあり、以て高尙なる言は俗人に解し得られざるに喩ふ、

【大雪（タイセツ）】 左傳隱八年に「平地尺ニ盈ツルヲ、——ト爲ス」また二十四候の一、孝經緯に「小雪ノ後、斗、壬ヲ指スヲ——トイフ、十一月ノ節ナリ、積陰ノ雪トナル、此ニ至リ栗烈ニシテ大ナルヲイフ」

【大雪山（タイセツザン）】 佛經にて印度の「ヒマラヤ」山をいふ、梵語の「ヒマ」は雪の義、「ラヤ」は藏の義、千古の雪を藏するの意なり、

【大節身ニアル時ハ、小過アリト雖モ、不孝トセズ（タイセツミ）】 十訓抄第一に見ゆ、孝經の孔安國の註に「故ニ君トナリテ惠、父トナリテ慈、臣トナリテ忠、子トナリテ順、コノ四者ハ人ノ大節ナリ、大節身ニ在レバ、小過アリト雖モ、不孝トナサズ」

【大漸（タイゼン）】 大に進むなり、書經に「疾——惟幾（ニミヲレシ）」とあるに

よりて、後世多くは、病勢の甚しく進みし義に用ふ、幾は危なり、

【退然】謙卑怯弱の貌、禮記の檀弓に「其中——如不勝衣」に和柔の貌とも解く、

【泰然】心のしつかりとして動かざる貌、元史許衡傳に「家貧躬耕中暑處之——」

【頽然】柔順なる貌、易の繫辭傳に「——示人簡矣」禮記の曲禮の注に「——ハ順ナリ」頽は隤また穨に通ず、

【大全集】十八卷、明の高啓撰す、啓の詩、初め五集あり、凡そ二千餘首、後ち自ら定めて缶鳴集となす、凡そ九百餘首、諸集遂に亡ぶ、景泰中、徐庸、逸篇を掇拾し、輯めてこの本となす、啓天才高逸、明一代詩人の冠たり、凡そ古調を摹擬するも、眞に逼らざるなし、惟世に行はるる太だ早く、頽折太た速かにして、未だ鎔鑄變化して自ら一家の體を爲す能はず、惜むべし(高啓)を參看せよ、

【大川滔灌タレバ虬螭游ブ】人の德性は涵養するによりて道義備るに喩ふ、抱朴子に「大川滔灌則虬螭游、日就月將、則德立道備」滔灌は水の廣き貌、

【太素】天地未だ分れざる時をいふ、列子に「——者質之始也」また質朴なる性をいふ、淮南子に「偃其聰明、而抱其——」に、

【太簇】禮記に「孟春(はつはる)ノ月、律——ニ中リ、東風凍ヲ解ク」史記の律書に「——トハ萬物簇生スルナリ、ソノ十二支ニ於テ寅トナス」

【岱宗】泰山の別名、應劭の風俗通に「東方泰山尊曰——岱者長也、萬物之始、陰陽交代、雲觸石而出、膚寸而合、不崇朝而徧雨天下、其唯泰山乎、故爲五嶽之長、また博物志には「泰山一曰天孫、言爲天帝孫也」泰山を參看せよ、

【太宗皇帝】唐の第二世なり、姓は李、諱は世民、高祖の次子なり、聰明勇決にして識量人に絕す、隋末の亂に乘じ、高祖を勸めて義兵を擧げしめ、遂に天下を奄有せしむ、位に即くに及び大に文敎を興し、精を勵し治を圖る、後世稱して貞觀の治といふ、貞觀二十三年崩ず年五十三、著すところ帝範四卷あり、

【太宗ハ蝗ヲ呑ム】太平記卷二十五に見ゆ、貞觀政要第八農務篇に「貞觀二年京師旱ス、蝗蟲大ニ起ル、太宗苑ニ入リ禾ヲ視、蝗蟲ヲ見、數枚ヲ掇リテ咒シテイフ、人ハ穀ヲ以テ命トナス、而ルニ汝之ヲ食フ、是レ百姓ニ害アリ、百姓過アレバ、予一人ニ在リ、爾其レ靈アラバ但當ニ我心ヲ蝕ムベシ、百姓ヲ害スル無カレト、

將ニ之ヲ呑マントス、左右遽ニ諫メテ曰ク、恐クハ疾ヲ成サン、不可ナリト、太宗曰ク、糞ヲ所ロハ災ヲ脫ガ躬ニ移サン、何ゾ疾ヲ之レ避ケント、遂ニ之ヲ呑ム、是ヨリ蝗マタ災ヲナサズ」

【大息】「タメイキヲツク」史記蘇秦傳ニ「仰天——」註ニ「——ハ、久シク氣ヲ蓄ヘテ大呼(おほひにはく)スルナリ」

【內則】家の中に在りて守るべき法則をいふ、禮記の篇名、また後漢書に「述宣陰化、修成——」

【大儺】「オニヤラヒ」をいふ、後漢禮儀志に「季冬ノ月、大ニ享臘ス、臘ニ先ダツ一日——ス、之ヲ逐疫トイフ」

【棣棣】閑習する貌、威儀にならひ、なるる義、詩の邶風に「威儀——不可選也」

【大怒】怒は惡なり、——は、大惡の義、書經の康誥に「元惡——、矧惟不孝不友」また柳宗元の獻平淮夷雅表に「天造神斷、克清——」これは吳元濟を平ぐるをいふ、

【雓巇子】代醉篇に「雓巇ハ涼笠ナリ、竹ヲ以テ胎トシ、蒙ラスニ帛ヲ以テス、此ヲ戴キテ日ヲ遮ルナリ」と、子とはその人を指す、すべて笠を戴く人をいふ、轉じて酷暑、人の高臥を樂む時に、盛服して見えんことを請ふは事を曉らざる者なり、そを稱して——といふ、

魏ノ程曉の伏日の詩に「今世——、觸熱到人家、主人聞客來、還嗔奈此何云云」

【大戴禮】(———)を見よ、

【大道】すべて宇宙間を支配する一定の道、周書の周祝の注に「——ハ天道ナリ」また大いなる道路、列子に「——以多岐亡羊、學者以多方喪生」

【貽蕩】曠遠の貌、春の景色の「ノドカ」なる貌、謝朓の詩に「朋情以罍陶、春物方——」宋祁の詩に「風光——百花春」

【頽唐】「クヅレオチル」文選の洞簫賦に「——遂往」

【太唐西域記】十二卷、唐の僧玄奘譯し、僧辯機撰す、この書は玄奘が印度に遊び、經るところの百四十一國の風俗衣服地理物產等の梗概を記せしものなり、

【大刀頭】故郷に還るといふ隱語、刀頭に環あり、環還音通ず、故にいふ、古詩に「何日——」

【大道廢シテ仁義アリ】(大道廢而有仁義)老子の語なり、無爲の大道、世に行はれし太古は、人の風儀厚く、人氣和ぎ、仁もていつくしむべき窮民もなく、義もて正すべき惡人もなければ、仁義もいらざりき、然るに時代降りて、無爲の大道、世にすたれ、人の風儀も漸く薄く、人氣も漸く暴くなりゆくままに、窮民惡人多くな

り、始めて、仁義の道を立てて教ふることとはなれるなりとの意(六親和)を參看せよ、

【大智ハ愚ノ如シ】 蘇軾、歐陽少師の致仕を賀する啓に「大勇若ㇾ怯、大智如ㇾ愚、至貴無ㇾ軒冕、而榮、至仁不ㇾ導引ㇾ而壽」

【大椿ノ壽】 長壽をいふ、莊子の逍遙遊篇に「上古有ㇾ大椿者、以ㇾ八千歲ㇾ爲ㇾ春、八千歲爲ㇾ秋」

【大丈夫ノ世ニ處スル當ニ天下ヲ掃除スベシ】 (大丈夫處ㇾ世當ㇾ掃ㇾ除天下ニ)圓機活法に「陳蕃、一室ニ閑居ス、庭宇蕪穢ナリ、室ニ糞アルモ除カズ、同郡ノ薛勤、往キテ之レヲ候ヒテ曰ク、孺子何ゾ掃除シ以テ賓客ヲ待タザルト、蕃曰ク、大丈夫ノ世ニ處スル當ニ天下ヲ掃除スベシ、安ンゾ一室ヲ事トセンヤト」詳しくは、後漢書陳蕃傳を見よ(丈夫)を參看せよ、

【大丈夫ハ當ニ雄飛スベシ】 (雄飛)を見よ、

【大氐】【台鼎】 三公に喩へていふ、天に三台星あり、鼎に三足あり、三公は人臣の最高位にして國家の要職なり、故に象を三台星と、鼎の三足とに取りていふ、後漢書に「位登ㇾ三公」

【大篆】 說文に「一一ハ、周ノ宣王ノ時、史籀ノ作ル所ロナリ(科斗の文を變じて大篆となす)小篆ハ、始皇ノ時、李斯ガ作ル所ロナリ」小篆は大篆の文を省きて作る、新井白石の同文通考に詳說あり、

【泰斗】 人を仰ぎ尊ぶ義(泰山北斗)を見よ、

【大東】 東の「ハテ」詩經の閟宮の「遂荒大東」一一ニの註に「一一ハ極東ナリ」

【大統】 天子の繼嗣をいふ、後漢書に「皇后之子、宜ㇾ承ㇾ大統」

【大同】 混同して細分せざるをいふ、莊子の天地篇に「不同同之之謂ㇾ大」の註に「萬物萬形、各其ノ分ニ止マリ、彼ヲ引キテ、以テ我ニ同ジクセズ、乃チ大ヲ成スノミ」また地名、山西省大同府に在り、秦に雲中といひ、漢に平城といふ、

【大同小異】 大體同じくしてすこしく異るをいふ、莊子に「萬事畢ク同ジク畢ク異リ、此レ之ヲ一一一一ト謂フ」

【戴東原】 (戴震)を見よ、

【大德】 高僧を稱す「ダイトコ」と訓む、僧輝記に「行滿チ德高キヲ一一トイフ」

【戴德】 漢人、字は延君、兄の子戴聖字は次君と、同じく禮を后蒼に受く、德禮說を輯めて八十五篇となす、大戴禮といふ、聖の輯むるところ四十九篇、之を小戴禮といふ、今の禮記これなり、漢書儒林傳を參看せよ、

【大德ハ小怨ヲ滅ス】 (大德滅ㇾ小怨)大なる恩德は小なる怨恨を滅するをいふ、左傳定五年に見ゆ、

【大內】 天子の府藏をいふ、史記景帝紀に「以一一爲二千石置ㇾ左右內官ㇾ屬一一」註に「一一ハ京師ノ府藏ナリ」

【大ナル者ハ棟樑トナシ、小ナル者ハ榱桷トナス】 宋史に「宋太宗嘗謂ㇾ樞密使張宏曰、朕自御極以來、親擇ㇾ羣材、大者爲ㇾ棟樑、小者爲ㇾ榱桷、官吏を擇ぶに、才能の大小によりて相應の職に任ずるに喩ふ、榱桷は共に「タルキ」なり、

【題ニ雕リ齒ヲ黑クス】 (雕ㇾ題黑ㇾ齒)題は額なり、額に雕り刻み、丹青を以て之に涅す、黑齒は齒を黑く染む皆蠻夷の習俗なり、楚辭に「一一一一一得ㇾ人肉ㇾ而祀」

【大日如來】 佛經に如來法身に名づく、即ち日輪なり、梵語に毘盧遮耶といふ、最高また顯廣と譯す

【耐忍】【大人】 耐へ忍ぶ義、荀子の仲尼篇に「能一一一之」轉輪王を稱す、轉じて廣く佛菩薩また大有力人の稱とす 長阿含經に「初民主王號一一ニまた佛祖統記に「如來之先、起自一一ニ(大人)を參看せよ、

【大寧】 地をいふ(大清)を見よ、

【大旆】 大いなる「ハタ」日月と、のぼり龍と、さがり龍とをふがく、太常に同じ、儀禮に「天子乘ㇾ龍載一一ニ

【鮐背】 年老いたる人を稱す、人老年に至れば鮐といふ魚のやうな「シミ」が背に生ずるによりていふ、釋名の釋長幼に「九十曰一一、背有ㇾ鮐文ㇾ也」鮐は「サメ」の類、鮐一に台に作る、同じ、詩經の閟宮に「黃髮台背」

【大梅常和尙】 五燈會元三卷に「明州大梅山法常禪師者、襄陽人也、姓鄭氏幼歲從ㇾ師於荊州玉泉寺、初參ㇾ大寂問ㇾ如何是佛、寂曰、即心是佛、卽大悟遂之ㇾ四明梅子眞舊隱ㇾ縛ㇾ茆燕處ㇾ剛被ㇾ世人知ㇾ住處、又移ㇾ茅舍ㇾ入ㇾ深居云云」

【大方】 猶ほ大道といふ如し、また世の中の賢き人をいふ、莊子に「吾長見ㇾ笑於一一之家」

【大寶】 天子の位をいふ、易の繫辭に「聖人之一一曰ㇾ位」

【體貌】 禮容を加へて敬ふをいふ、戰國策に「今人一一而迎ㇾ之」また漢書賈誼傳に「一一大臣而厲ㇾ其節」

【太白】 罰杯なり(白ヲ)を見よ、また星の名、明星をいふ、あしたに東方にあらはるるを啓明といひ、日くれて西方にあらはるるを一一といふ、徐九皐の句に「軍

占——星天官星占に「——ハ金ノ精ニシテ白帝ノ子、大將ノ象ナリ」

【戴白】（タイハク）老人の頭髪の白きをいふ、轉じて老人の義とす、垂髫と連用す、垂髫は小兒をいふ、漢書に「——之老、不見兵革」

【太白月ヲ捉フ】（タイハクヲツカム）五侯鯖錄に「李白過采石、酒狂入水捉月而死」

【題跋】（ダイバツ）文體明辨に「按ズルニ題跋ハ、簡編ノ後語ナリ、凡ソ經・傳・子・史・詩文・圖書ノ類、前ニ序引アリ、後ニ後引アリ、盡セリト謂フベシ、其ノ後覽ル者或ハ人ノ請求ニ因リ、或ハ感ニ因リテ、而シテ得ルアレバ、則チ復タ詞ヲ撰ビテ、以テ末簡ニ綴ル、而シテ總ベテ之ヲ題跋トイフ、其ノ實ヲ綜ルニ至リテハ、則チ四有リ、一ニ曰ク題、二ニ曰ク跋、三ニ曰ク、書某、四ニ曰ク、讀某夫レ題ハ諦ナリ、其ノ義ヲ審諦スルナリ、跋ハ本ナリ、文ニ因リテ而シテ本ヲ見ハスナリ、書ハ其ノ語ヲ書ス、讀ハ讀ムニ因ルナリ、題・讀ハ、唐ニ始マリ、跋・書ハ宋ニ起ル、今之ヲ特ニ題跋トイフハ、類ヲ擧ゲテ以テ之ヲ該ヌルナリ、其ノ詞ハ、古ヲ考ヘ今ヲ證シ、疑ヲ釋キ、謬ヲ訂シテ、善ヲ褒シ、惡ヲ貶シ、法ヲ立テテ誡ヲ垂ル各〻爲メニスル所ロアリテ、而シテ專ラ簡勁ヲ以テ主ト爲ス　故ニ序引ト同ジカラズ、又題辭アリ、其ノ書ノ本末ヲ題號スル所以ニシテ、指義文辭ノ表ナリ、漢ノ趙岐ガ孟子ノ題辭ヲ作ルガ若キ、其ノ文稍煩ハシ、而シテ宋ノ朱子之ニ倣ヒテ、小學題辭ヲ作リテ更ニ韻語ヲナス、是レ題跋ノ一種トス、然レドモ題跋ハ後ニ書シテ、題辭ハ前ニ冠ス、コレ又其ノ辨ナリ」

【大凡】（タイハン）大概の義「オホヨソ」荀子に「禮之——、事生飾ル死ヲ送ル死ヲ、哀ノ也、軍旅飾ル威ヲ也」また韓愈送孟東野序に「——物不得其平則鳴」

【大半】（タイハン）半分より大いに過ぎたる義、史記項羽紀の註に「凡ソ數、三分シテ二ヲ有スルヲ——ト爲ス」

【大般若】（ダイハンニヤ）六百卷、玄奘三藏の翻譯なり、般若は梵語知慧と譯す、

【大美】（タイビ）大いなる美なり、莊子の知北遊に「天地有——而不言」

【退筆】（タイヒツ）「フルフデ」「チビフデ」東坡の詩に「——如山未足珍、讀書萬卷始通神、廢筆に同じ、徐氏筆精に「隋ノ智永禪師、筆頭ヲ取リテ之ヲ瘞メ、——塚ト號ス」

【太父】（タイフ）祖父なり、漢書鄭當時傳に「鄭當時知友皆——行、天下有名之士也行とは年輩なり、當時、才德あり、故に祖父と同年輩の人と友たりしなり、また張良傳にも「——開地」とあり、註に「——ハ、祖父ナリ」

【大夫】（タイフ）卿の次なり、家老をいふ、また松の異名（五大夫）を見よ、

【大布】（タイフ）粗き布なり、莊子の山木に「莊子衣——」

【太傅】（タイフ）官の名、三公の一、書經に「立太師——太保」傳は輔佐の義、天子の德義を傳相するなり

【大風】（タイフウ）「カッタイ」惡疾なり、柳宗元の捕蛇者說に見ゆ、素問に「病大風、骨節重、鬚眉落、名曰大風」

【大風ノ歌】（タイフウノウタ）漢の高祖十二年に、帝黥布を破りて、還り沛に過り置酒し、宗室故人を召して飲す、酒酣にして帝自ら歌ひて曰く「大風起兮雲飛揚、威加海內兮歸故鄉、安得猛士兮守四方」と、沛中の子弟をして之を習ひ歌はしむ、風は帝自ら喩へ、雲は亂に喩ふ、

【船文】（タイブン）「サメ」の如き「シミ」をいふ（船背）を參看せよ、

【太平御覽】（タイヘイギョラン）一千卷、宋の太平興國二年、李昉等勅を奉じて撰し同八年に成る、凡そ五十五門、採る所ろの書、一千六百九十種、蒐羅浩博、今に至りて考據の淵藪と爲す、他の類書は能く先んずる莫し、山槐記の治承三年十二月二十日の條にこの書の事見えたれば、當時わが國に舶載し來りしを知るべし、

【太平象ナシ】（タイヘイシャウナシ）太平の世とて、別にこれといふ形象の見るべきものなきをいふ、唐の文宗帝精を勵し治を求め中外翕然として太平冀ふべしとなす、然れども宦官の爲めに制せられて竟に爲すこと能はず、嘗て宰相に問ふ、何時か太平ならむと、蓋し宰相の尸位素餐にして治を佐け化を興す心なきを責めたるなり、その時牛僧孺答ふるに太平無象、今雖未及至治、亦足以爲治矣と、いへり、その意は當時を誣いて太平と爲さんと欲し、今日が即ち太平にしてこの外に、別に太平の形象として名づくべきものはなしとなり、詳しくは唐書牛僧孺傳を見よ、廣瀨淡窓が筑前城下作に「昇平有象君看取、處處垂楊繫賈船」としたるは、蓋しこの語を翻案したるなるべし、

【太平ノ功ハ一人ノ力ニアラズ】（タイヘイノコウハイチニンノチカラニアラズ）（大廈ノ材）を見よ、

【太平ノ人、德ヲ樂ミテ刑ヲ惡ム】（タイヘイノヒト、トクヲタノシミテケイヲニクム）唐書の陳子昂傳に「太平之人、樂德而惡刑、刑之所加、人必慘怛、故聖人貴措刑也」子昂八科を奏す、刑を措くはその一、

【大廟ニ入リテ、事毎ニ問フ】（タイビョウニイリテ、コトゴトニトフ）十訓抄第一に引けり、論語八佾に「子入大廟、每事問、或曰、孰謂鄹人之子知禮乎、入大廟、每事問、子聞之曰、是禮也」と、大廟は魯の周公の廟、これ蓋し孔子始めて仕ふるの時、入りて祭を助けたるならん、鄹は魯の邑の名、孔子の父叔梁紇

嘗てその邑の大夫たり、孔子禮を知るを以て聞ゆ、故に或人此に因つて之を譏る、孔子の是禮也といひしは、警謹の至、乃ち禮たる所以なり

【大廟ノ犧】（ダイビョウ・ギ）「リッパ」に飾られてもやがて殺さるるものなり、されば莊子の郭注にも「樂生者畏ㇾ犧而辭ㇾ聘」とあり、韓愈の詩に「孤豚服ㇾ糞壤ニ不ㇾ慕ㇾ——ニ」と（犧ヲ畏レテ）を見よ、

【大辟】（ダイヘキ）大罪なり、辟は刑なり、死刑をいふ、書經に「——之罰、其屬ニ百」

【題壁】（ダイヘキ）壁上に詩文をかきつくること、南史に「題ㇾ其贊于壁ニ」

【大辯ハ訥ノ如シ】（ダイベン）老子に「大巧如ㇾ拙、大辯若ㇾ訥」とあり、莊子には「大道不ㇾ稱、大辯不ㇾ言」

【太母】（タイボ）漢書文三王傳の註に師古曰く「——ハ祖母ナリ」

【太保】（タイホ）古の三公の一、初學記に「武王殷ニ克チ、周官ヲ作リ、太師太傅——ヲ立テテ三公ト爲ス」——は天子の德義を保安する義、

【逮捕】（タイホ）其の人在りて直ちに之を追ひ取るを逮といひ、其の人亡げて之をたづね捕ふるを捕といふ、漢書王莽傳に「召ニ會吏民ヲ——ニ證左ニ」

【大鵬ノ九霄ノ雲ニ搏ツ】（タイホウ・キュウショウ）太平記卷三十七に見ゆ、莊子の逍遙遊に「北冥有ㇾ魚、其名爲ㇾ鯤、鯤之大、不ㇾ知ㇾ其幾千里ㇾ也、化而爲ㇾ鳥、其名爲ㇾ鵬、鵬之背、不ㇾ知ㇾ其幾千里ㇾ也、怒而飛、其翼若ㇾ垂ㇾ天之雲ニ中略ㇾ搏ニ扶搖ヲ羊角而上者九萬里、絕ニ雲氣ヲ、負ニ青天ニ云々」九霄とは九天といふに同じ、大空をいふ、

【太僕寺】（タイボク）唐の代、廐牧輿輦の政を掌る役所の名、寺とは政を執る省廳の義、唐書に「——卿一人、少卿二人」

【大梵天】（ダイボンテン）色界天の初禪天を三層に分つ、上なるを——といひ、中なるを梵輔天といひ、下なるを梵衆天といふ、——は君主、梵輔天は臣佐、梵衆天は人民なり（梵天）を參看せよ、

【瑇瑁】（タイマイ）瑇音「バイ」「マイ」は吳音、龜の屬、熱帶の海に產す、形「ウミガメ」に似て音は鸚鵡の如く、背尖り前肢長く後肢短し、甲十三片、鱗次してつらなり、甲の邊は缺けて鋸齒の如し、色黃褐にして黑き斑文あり、煮て柔皮の如くし、櫛笄の屬を製す、俗に鼈甲といふ、異物志に「雄曰ニ——一、雌曰ニ瑇瑁一」史記司馬相如傳の「——鼈黿」の註に瑇瑁ニ似テ甲ニ文アリ、南海ニ出ヅ、以テ器物ヲ飾ルベシ」と、玳は瑇の俗字、續漢書に「皇后太后ノ簪ハ玳瑁ヲ以テス、長サ一尺、端ニ花勝ヲ爲ㇾ左右各ニ一、橫ニ之ヲ簪ス」

【大味ハ必ズ淡】（ダイミ・カナラ）濃厚の味は、一時口に適するも、飽き易し、是れ至味と爲すべからず、至味は必ず淡泊なるものに存す、揚雄の解難に「——大音必希」

【大明一統志】（ダイミン）九十卷、明の李賢等勅を奉じて選す、卷首に英宗の御序、賢等の序、進書表、地圖あり、すべて京師・南京・中都・興都の四大門に分ち、都毎に先づその地理を叙し、次にその都に屬する府に就きて建置沿革風土人物等を詳叙す この書支那にては亡佚したりしが、我が國には足利氏の末傳來せしものありて、元祿年閒に紀藩の儒官蔭山元質これを翻刻す、

【大明律】（ダイミンリツ）三十卷、明の刑部尚書劉惟謙敕を奉じて撰す、體例は唐律に擬して明の律令を記せり、荻生徂徠の明律國字解十六卷あり、

【大明】（ダイミン）日の異名、禮記に「——生ニ於東ニ」

【大名ノ下、以テ久シク居リ難シ】（ダイミョウ）史記の越世家に「范蠡、越王勾踐ニ事ヘ、既ニ身ヲ苦メ力ヲ戮セ、勾踐ト深謀スルコト二十餘年、竟ニ吳ヲ滅シ、會稽ノ恥ヲ報イ、北、兵ヲ淮ニ渡シ、以テ齊晉ニ臨ミ、中國ニ號令シ、以テ周室ヲ尊ビ、勾踐以テ霸タリ、而シテ范蠡上將軍ト稱ス、范蠡以爲ラク大名之下、難ニ以久居ニ下ト（中畧）乃チソノ輕寶珠玉ヲ裝ヒ、舟ニ乘リ海ニ浮ビテ行リ、終ニ反ラズ云云」大名とは大なる名譽なり、

【太陽】（タイヨウ）日をいふ、張衡靈憲序に「日者——之精、積ニ而成ニ烏象ニ」また晉書王導傳に「——下、同ニ萬物ニ蒼生何由仰照ニ」

【大勇】（タイユウ）大なる勇氣、血氣の勇に對して義理より出づる勇をいふ、孟子に「子好ㇾ勇乎、吾嘗聞ニ——於夫子ニ矣」（大智ハ）を參看せよ、

【大庾嶺】（タイユレイ）江西省南安府城の南に在り、漢武帝南粤を擊つとき、楊僕、部將庾勝を遣し、兵を此に屯せしむ、因りて大庾と名づく、その初險峻にして行く者之を苦む、張九齡開鑿してより始めて車馬すべし、その上多く梅を植う、又梅嶺と名づく、或は傳ふ、梅福嘗て此に隱ると、錦字箋に見ゆ、東坡いふ「嶺上梅花、南枝已落、北枝始開」

【體用】（タイヨウ）陳淳の性理字義に「心體アリ用アリ、衆理ヲ具スル者ハソノ體、萬事ニ應ズル者ハソノ用、寂然不動ノ者ハソノ體、感ジテ遂通スル者ハソノ用、體ハ即チ所謂性、ソノ靜ヲ以テ言フナリ、用ハ即チ所謂情、ソノ動ヲ以テ言フナリ」

【逮夜】（タイヤ）逮は及なり、一に宿忌といふ、亡人忌日の前夜なり、

【大老】常人にすぐれたる老者をいふ、孟子に「二老者天下之ーー也」

【太牢ノ滋味】牛羊豕を合せ具ふるをいふ、小牢は羊豕なり、滋味は「ウマミ」なり、禮記に「君子太牢而祭、謂之禮」文選の王褒の聖主得賢臣頌に「羹藜含糗者、不足與論太牢之滋味」の註に「藜ハ野菜、含ハ食フナリ、糗ハ麥飯ナリ、太牢ハ牛ナリ」とあり(牛ノミヲ太牢トイヒ、羊ノミヲ小牢トイフハ後世ノ謬リナルコト野客叢書ニ辨ゼリ)

【大理】檢非違使別當の唐名に用ふ、初學記に「ーーハ古官ナリ、唐虞皐陶ヲ以テ士(理官)トス、初メ秦、廷尉ヲ置キ、漢之ニ因ル、景帝改メテーートヨフ」

【大略】大凡に同じ、孟子に「此其ーー也」

【台嶺】台嶽・北嶺ともいふ、支那の天台山の異稱、轉じて我が比叡山の稱とす、

【頽齡】老年をいふ、陶潛の詩に「酒能祛百慮、菊解制ーー」

【帶厲ノ誓】かたき誓をいふ、漢書功臣表に「封爵之誓、曰使黄河如帶、泰山若厲、國以永存」帶は衣帶なり、厲は砥石なり、たとひ黄河をして衣帶の如く、泰山をして砥石の如くならしむることありとも、長く國を存ぜしめんとの意、

【大論】高大なる議論なり、申鑒に「不聞ーー則志不弘、不聽至言則心不固」

【大王豳ヲ去ル】太平記巻二に見ゆ、大王は古公亶父の尊稱なり、古公德義あり、人皆之を戴く、戎狄之を侵す、民怒りて戰はんとす、古公は人の父子を殺して君たるに忍びずと、遂に豳を去りて岐山の下に移る、豳人老を扶け弱を攜へ、古公に從ひ移住す、後子孫繁昌して周の世となる、孟子に「昔者大王居豳、狄人侵之、去之岐山之下居焉」とあるは是れなり、

【陶猗】陶朱・猗頓とて支那古代の富豪の名、抱朴子に「夫結綠・懸黎非ーー不能市也」

【唐寅】明の人、字は白虎、一の字は子畏、六如と號す、呉縣の人寧王宸濠幣を厚くして之を聘す、寅その異志あるを察し、酒を使ひてその醜穢を露す、宸濠堪ふる能はず、放還す、晩に佛氏を好む、室を桃花塢に築き日にその中に飲む、嘉靖癸未卒す、年五十四、詩文を能くし、又畫に工なり、黄奐言提錄に「唐子畏ノ畫ハ周臣ヲ師トス、而ルニ雅俗迥カニ別ナリ、或ヒト問フ、臣ノ畫ハ何ヲ以テ俗ナルカト、曰ク祗唐生數千巻ノ書ヲ少クノミト」寅は胸に數千巻の書あり、故に畫品も高

雅なれども臣はこの讀書を少けり、故にその畫俗を免れずとの意、著すところ六如居士全集あり、

【道引】道は導なり、氣を導きて體に引き、和柔ならしむる義、莊子に「ーー之士、養形之人」素問に「其治宜ーー」道一に導に作る、

【倒景】人天上に在りて、下に向つて日月を視れば、影倒まに射るをいふ、司馬相如の賦に「貫ーー之列缺」蘇軾韓文公廟碑に「滅沒ーー不可望」藻林には「日月下ニ在リ、反ッテ上ヨリ照スヲイフ」また夕日の地平より下に在りて「カゲ」の倒まなるをいふ、溫庭筠の句に「人過橋邊ーー來」

【桃夭】嫁期にあたるをいふ、詩經の桃夭篇に「桃之夭夭灼灼其華、之子于歸宜其室家」の註に「夭夭ハ少好ノ貌、灼灼ハ華ノ盛ナルナリ、木少ケレバ華盛ンナリ、之子ハ嫁スル者ヲ指シテイフ、婦人嫁ヲ謂ッテ歸トイフ、周禮ニ仲春ニ令シテ男女ヲ會スト、然ラバ則チ桃ノ華有ル、正ニ婚姻ノ時ナリ」

【桃園】「モモゾノ」また蜀の劉備がその臣關羽張飛と三人義を結びしところ、

【陶淵明】宋に在つては名を潛といふ、字は元亮、晉の潯陽の人侃の曾孫少くして高尚を好み、博學にして文を善くす、嘗て五柳先生の傳を作り、自ら況ふ、世に靖節先生と號す、性菊を愛し、「採菊東籬下、悠然見南山」の句あり、宋、禪を受くるに及び、劉裕屢徴せども就かず、詩酒を樂みて元嘉四年卒す、年六十三、

歸田園居　陶　潛

少無適俗韻、　性本愛丘山、　誤落塵網中、　一去三十年、　羇鳥戀舊林、　池魚思故淵、　開荒南野際、　守拙歸園田、　方宅十餘畝、　草屋八九閒、　楡柳蔭後園、　桃李羅堂前、　曖曖遠人村、　依依墟里煙、　狗吠深巷中、　鷄鳴桑樹巓、　戸庭無塵雜、　虚室有餘閒、　久在樊籠裏、　復得返自然、

【陶淵明集】八巻(四言詩一巻・五言詩三巻・記辭一巻・傳述一巻・賦一巻・疏祭文一巻)その詩、淵深樸茂、詩品、人品と竝に高し、唐の王維・孟浩然・韋應物・柳宗元の一派の源をなせり

【陶泓】硯の異名、韓愈の毛穎傳に「絳人陳玄、弘農ノーー、及ビ會稽ノ楮先生ト友トシ善シ、其ノ出處相推致ス」と、陳玄は墨、楮先生は紙、

【刀ヲ鼓ス】(鼓刀)屠者の爲す所ろをいふ、史記刺客傳に「聶政乃市井之人、ーー以屠」また淮南子に「呂望ーー而入周」

【陶家】「ヤキモノシ」陶人・燒窰家・窰戸に同じ、書敍指南に「燒窰家ヲ——トイフ」

【道家】黄帝老子の說ける虛無恬淡を主とする學派を稱す、漢書の藝文志を見よ、

【唐庚】字は子西、眉山と號す、宋の丹陵の人善く文を屬す 進士に擧げられ、承議郎となり卒す 年五十一、文をつくるに精密、學者之を稱す、唐眉山集二十四卷あり、兄の伯虎易春秋を治め、皆家法あり、

【倒行逆施】道理を倒逆して施行するの義、一に顚倒疾行して理にさかひ、事を施すをいふと、史記伍子胥傳に「吾日暮塗遠、吾故——而——之」また主父偃傳には「吾日暮途遠、故倒行暴施之」に作る、義同じ、

【道學】程朱の學を斥す、道學の稱は程子に始まり、朱子に至りて、盛なり、大學の序に「子思子憂道學之失其傳」とあり、宋史には道學傳と儒林傳とを別に立てたり、

【堂下ノ陰ヲ審ニシテ日月ノ行クヲ知ル】一小部分を察して大部分の理を推知するに喩ふ、呂氏春秋に「審堂下之陰、而知日月之行、見瓶水之冰、而知天下之寒」

【陶侃】字は士衡、晉の鄱陽の人、家を潯陽に徙す、縱陽武岡の令を歷て能名あり、後ち功を以て東鄕侯に封ぜられ、江夏太守に遷る、元帝の時廣州刺史となる、州に在りて朝に百甓を齋外に運び、暮に百甓を齋內に運ぶ、曰く吾方に力を中原に致さんとす、故に勞を習ふのみと、後ち王敦・蘇峻を平げ皆功あり、太尉に拜し、長沙公に封ぜらる、二子瞻輿俱に節に死す、晉書に「陶侃恭ニシテ禮ニ近ヅキ、人倫ヲ愛好ス、職事ノ暇、終日膝ヲ斂メテ危坐ス、嘗テ子弟ヲ戒メテ曰ク、老莊ハ浮華、先王ノ法言ニ非ズ、行フ可カラザルナリ、君子ハ、當ニ其ノ衣冠ヲ正シクシ、其ノ威儀ヲ攝ムベシ、何ゾ亂頭箕踞シテ 以テ宏達ト爲スコト有ランヤト」

【唐鑑】二十四卷、宋の范祖禹撰す、唐の高祖より昭宣に及ぶまでの史事の大綱を採りて繫くるに論斷を以てせり、初め十二卷なりしが呂祖謙分ちて二十四卷となし、之が音註を作れり 和版あり、また人名、字は鏡海、淸の湖南善化の人、嘉慶十四年の進士、官太常卿に至る、宋儒の學に精し、咸豐七年卒す、著すところ國朝學案小識十四卷あり、

【陶侃ノ母】晉書に「陶侃家甚ダ貧ナリ、母湛氏、毎ニ紡績シテ之ニ給ス、侃ヲシテ交ヲ己ニ勝レル者ニ結バシム、鄱陽ノ孝廉范逵來リテ侃カ家ニ寓ス、適〻大ニ

雪フル、湛氏自ラ臥ス所ロノ新薦ヲ撤シ、剉シテ以テ其ノ馬ニ給シ、又其ノ髮ヲ截チ隣人ニ賣リ、肴饌ヲ買ヒテ以テ供ス、逵聞キテ歎ジテ曰ク、此ノ母ニ非ズンバ此ノ兒ヲ生ムコト能ハズト、侃遂ニ功名ヲ以テ高ク顯ハル」

【陶鈞】鈞は陶人の用ふる模型の下に備へて圓轉する輪器なり「ロクロ」これによりて能く大小の器を製す、よりて天下を治むるに喩ふ、鄒陽書に「聖王制世御俗、獨化於——之上、而不牽乎卑辭之語、不奪乎衆多之口」運鈞・陶車・旋盤皆同じ、

【道殣相望ム】殣は「ユキダフレ」なり、————は、行路に死する者多きをいふ、左傳昭二年に「宮室滋侈、————」註に「餓死ヲ殣トナス」

【刀鋸】刑具なり、漢書刑法志の「中刑用——」の註に「刀ハ割刑ニ用ヒ、鋸ハ刖刑ニ用フ」と、國語に「今吾司寇之刀鋸日弊、而斧鉞不行」とあり、小人の刑に用ふる刀鋸は、屢〻用ふる故に弊ぶるれども、大臣の刑に用ふる斧鉞は用ひられざるをいふ、

【當局者】局は博局（スゴロクノバン）なり、局に當りて棊を下すをいふ、要路に當りて、事を行ふにたとふ、唐書の元澹傳に「當局者迷、傍觀者審」

【戇愚】正直にして才智鈍きなり「バカシヤウヂキ」周禮に見ゆ、唐書韓愈傳に「愈至潮洲、以表哀謝曰、臣以狂妄——、不識禮度、陳佛骨事、言涉不敬」

【惷愚】オロカ（惷愚）を見よ、

【唐虞三代】唐は堯なり、堯初め唐侯と爲り、後ち天子と爲り、陶に都す、故に陶唐氏と號す、虞は舜なり、その先虞に國す、故に有虞氏と曰ふ、三代は夏殷周をいふ、

【韜晦】わが才德を包みかくしてあらはさざる義、南史に「霖霞——」

【唐會要】一百卷、宋の王溥撰す、唐代政事の綱要を輯む、この書竄入闕佚多かりしが、淸の乾隆帝儒臣に命じて補訂せしめしより、體例略備はる、王溥別に五代會要三十卷の著あり、

【湯鑊ノ罪】「カマイリ」の罪なり、史記の范雎傳に「須賈頓首言死罪曰、賈有湯鑊之罪、請自屛於胡貉之地、唯君死生之」鑊は、足なき大鼎なり、

【湯火避ケズ】尹文子に「越王句踐、呉ニ報ゼント謀リ、人ノ勇ヲ欲ス、路ニ怒蛙ニ逢ヒテ之ニ軾ス、數年ニ及ブ比、民長幼トナク、敵ニ臨ミテ雖湯火不避」

【桃花酒】圓機活法に「酒ニ桃花ヲ漬シテ之ヲ飲ム、能

ク百病ヲ除キ、顔色ヲ好クス」

【桃花水】（タウクワスイ） 桃花の開く頃のあたたかき水をいふ、花一に華に作る、河防一覧に「二月三月桃花始開、氷泮雨積川流猥集、波瀾盛漲、謂之一ー」と、宋史河渠志にも見ゆ、藤井竹外の花朝下瀫江に「ー」暖送輕舟」

【桃花粉】（タウクワフン） 「ベニ」をいふ、雲麓漫鈔に「燕脂ハ紅藍汁ヲ以テ凝シテ之レヲ爲ル、宮人之ヲ塗リ、ーート號ス」燕は一に胭に作る、

【刀圭家】（タウケイカ） 醫者をいふ、刀圭は藥匙（クスリノサジ）にて分量をはかるをいふ、一刀圭とは、桐の子一粒ほどのことなり、本草綱目に「刀圭十分方寸匕之一也、淮如梧桐子大也、庾信の詩に「量藥用刀圭」

【唐荊川】（タウケイセン） （唐順之）を見よ、

【棠谿ノ劍】（タウケイノ） 名高き劍、棠谿は地名、劉勰新論に「棠谿之劍、天下之銛也、用之穫稻、曾不如鉤鎌之功也」銛は利なり、

【唐堯ノ宮ニ、土ノ階ヲ用ヒ、茅ノ軒ヲキラザリケル例ナリ】（タウゲウ） 十訓抄第一に見ゆ、堯は天子となり、陶に都し、陶唐氏と號す、故に唐堯といふ（茅茨剪ラズ）を見よ、

【桃源】（タウゲン） 陶淵明の桃花源記に、

晉太元中、武陵人捕魚緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、夾岸數百步、中無雜樹、芳華鮮美、落英繽紛、漁人甚異之、復前行欲窮其林、林盡水源、便得一山、山有小口、髣髴若有光、便捨船從口入、初極狹纔通人、復行數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然、有良田美地桑竹之屬、阡陌交通、雞犬相聞、其中往來種作、男女衣著、悉如外人、黃髮垂髫、怡然自樂、見漁人乃大驚、問所從來、具答之、便邀還家、爲設酒殺雞作食、村中聞來問訊、自云先世避秦亂、率妻子邑人來此絕境、不復出、遂與外人間隔、問今是何世、乃不知有漢、無論魏晉、此人爲具言、聞皆歎惋、餘人各復延至其家、皆出酒食、停數日、辭去、既出得其船、便據向路、處處誌之、及郡下詣太守、說、太守即遣人隨往、尋向所誌、遂迷不復得路、南陽劉子驥、高尚士也、聞之欣然欲往、未果、尋病終、後遂無問津者、

湖南省常德府に武陵縣桃源縣あり、桃源山は縣南十里に在り、本集の註に「漁人姓ハ黃、名ハ道眞、太守ハ劉歆ナリ」一說この記は淵明假託の辭なりと、

【陶甄】（タウケン） 甄もまた陶なり、陶器をやきつくる義、轉じて人民を善に化し治むる義とす、晉書に「ー」（萬民ニ甄陶）を見よ、

【倒懸】（タウケン） 身體を、倒につるさるる如き、甚しき困苦をいふ、孟子に「今ノ時ニ當リ、萬乘ノ國仁政ヲ行ハバ、民ノ之ヲ悅ブコト、猶ホ倒懸ヲ解クガゴトシ」とあり、潘岳の句に「纍卵之危、ーー之急」

【讜言】（タウゲン） 孟子趙注に、尙書の益稷を引きて曰く「禹拜ー（ヲ）ー（ニ）釋文に「ーー善言也」

【韜鈐家】（タウケンカ） 兵法家といふが如し、武臣をもいふ、韜は弓衣なり、鈐は揚子方言に「矛其柄謂之鈐（ト）」とあり、張說の詩に「禮樂逢（ニ）明主（ニ）、ーー用（ニ）老臣（ヲ）」

【陶犬瓦雞】（タウケンクワイ） 「ヤク」に立たぬ喩、成語考に「空シク存ジテ用ナキハ、何ゾ陶犬瓦雞ニ殊ナラン」とあり、また金樓子に「陶犬ハ、夜ヲ守ルノ警無ク、瓦雞ハ、晨ヲ司ルノ益無シ」

【唐彥謙】（タウゲンケン） 字は茂業、鹿門先生と號す、唐の幷州晉陽の人、中和中、晉絳二州の刺史を歷、晝を善くし、流輩を拔く、才高く氣を負ひ屈降するところなし、博學多藝、文詞雄麗、尤も詩文に工なり、書を善くし亦音律博欵の技を善くす、集三卷あり、

【桃弧】（タウコ） 桃の木の弓、鬼は桃を畏る、故に棘矢をつがへて射る、左傳昭四年の傳に「ー棘矢以除（ノ）其災（ヲ）」注に「桃ハ凶ヲ逃ゲシムル所以ナリ」周禮戎右の注に「桃ハ鬼ノ畏ルル所ロナリ」

【倒語】（タウゴ） 文章の法に倒語といふことあり、義理の違あるにあらず、ただ文勢によることなり、古文にこの法尤も多し、たとへば「巧言令色鮮矣仁」とかくは「仁鮮矣」とかきても同じことなり「賢哉回也」「久矣吾不復夢見周公」「逃而何（ノ）哉爾所謂達者」「若是乎賢者之無益於國也」「告子下」の類、みな上に辨ずると同じことわりなり、文勢の緩急を考ふべし、倒語の上の段には必、矣哉乎等の字あり、上の例を見るべし、

【堂構ヲ紹グ】（タウコウ） （紹（グ）堂構（チ））父祖の德業をうけ繼ぐをいふ、王莽の詰に「考作室（チチリテ）、厥子堂而構之（チ）」陳琳の言に「聞魏周榮、虞仲翔各ーー（ギ）ー（ク）、能負（フト）析薪（チ）」

【陶弘景】（タウコウケイ） 字は通明、秣陵の人、丹陽に居る、六歲の時、荻を以て筆と爲し、灰中に畫して書を學ぶ、長ずるに及び、書を讀むこと萬卷、畫品超邁筆法精眞なり、又琴棋を善くし、草隷に工なり、齊の高帝引きて諸王の侍讀となす、永明中冠を神武門に掛けて去り、句曲山に居り自ら華陽隱居と號す、梁の武帝早く之と遊ぶ、位に即きて之を徵すれども出でず、大事あれば咨詢せざるなし、時人之を山中の宰相といふ、大同丙辰年八十五、病なくして逝く、貞白先生と謚す（山中ノ宰相）

を見よ、

【檮杌】（タウゴツ）古の兇人なり、頑凶にして匹儔なきの貌、四凶の一なり、左傳文十八年に「顓頊氏有二不才子一、不レ可レ教誨一、不レ知二話言一、告レ之則頑、舍レ之則嚚、傲很明德、以亂二天常一、天下之民、謂二之一一一、こまた楚の史書の名、孟子に「晉之乘、楚之一一、魯之春秋一也」とあり、一一は惡木の名、よりて凶人の號とす、史に名つけたるは、惡を記し戒を垂るるの義に取ると、朱熹は、一一を以て惡獸の名とす、神異經に「一一狀似レ虎、毫長二尺一、人面虎足豬牙尾長丈八尺」

【唐語林】（タウゴリン）八卷、宋の王讜撰す、唐代の小說を取り、世說の體例にならひて彙輯す、記錄するところ正史と相發明するもの多し、この書原本久しく佚す、現行の本は清初武英殿に藏せし殘本（一卷ヨリ四卷マデ）に增補せしものなり、

【唐才子傳】（タウサイシデン）十卷、元の辛文房（字ハ良史、西域ノ人）撰す、この書收むるところ三百九十七人、その新舊唐書に見ゆる者僅に百人その他は皆傳記隨筆等より採錄せり、この書支那には一部分闕佚せしが幸に我が國に完本傳りて林述齋が佚存叢書に之を收めたるよりその後支那にても翻刻するを得たり、

【唐肆】（タウシ）唐は堂途なり、肆は市なり、莊子田子方に「是レ求二馬於一一一也」

【道士】（タウシ）道人に同じ、大雲良書經に「人行二大道一、號曰二一一こまた老莊の學を修むる者をも一一といふ、

【導師】（タウシ）釋氏要覽に「十住斷結經云、號二一一一者、令二衆生類一示二其正道一、故華首經云、能爲二人說一二无生死道一、故名一一二云云」

【唐子西】（タウシセイ）（唐庚を見よ、

【唐詩正聲】（タウシセイセイ）二十二卷、明の高棅（字ハ彥恢、長樂ノ人）撰す、棅嘗て唐詩品彙百卷の撰あり、されども卷帙浩瀚なるを以て、その中より聲律の純正なるものを抄して初學に便せしもの即ちこの書なり、明の郭濬の增定評註一一一十二卷あり、

【唐詩選】（タウシセン）七卷、明の李攀龍編と題すれども、僞書たること疑ひなし、されども明末より盛んに鄉塾の間に行はれ、わが國にても服部元喬之を刊して童蒙の課本とせしより今に至るまで大に世に行はる、

【唐詩品彙】（タウシヒンヰ）九十卷、拾遺十卷、明の高棅撰す、卷首に、歷代名公敘論、凡例、引用諸書總目、敘目、詩人爵里、詳節あり（唐詩正聲）を參看せよ、

【陶人】（タウジン）「ヤキモノシ」陶工、陶人、陶家に同じ、荀子性惡篇に「一一埏埴而爲レ器」の註に「一一ハ瓦工ナリ」

【道心】（ダウシン）義理より發する心をいふ、書の大禹謨に「人心惟危、一一惟微、惟精惟一、允執二厥中一」佛經にては菩提心をいふ、

【道人】（ダウジン）佛者又は道家の說を修めて得道したる人、智度論に「得道者名曰二一一一、餘出家者、未レ得レ道者、亦名二一一一」

【瞠若】（ダウジャク）直視の貌、熟視緘默して呆然（アキレル）たる意、莊子田子方に「夫子奔逸絕レ塵、而回一一乎其後一、夫子は、孔子、回は顏回、

【陶者ハ缺盆ヲ用フ】（ダウシヤ）（屠者ハ𠰁ヲ見よ

【陶鑄】（ダウジユ）陶冶に同じ、物を造り成す義、莊子に「是其塵垢粃糠、將猶二一一一一一堯舜一者也」

【道術】（ダウジユツ）佛老又は仙人の術なり、後漢書の靈思何皇后紀の注に「道人トハ一一ノ人ヲ謂フ」

【陶朱ノ富】（ダウシユノトミ）大金持をいふ、史記の越世家に「范蠡、陶ニ止リ、以爲ラク、陶ハ天下ノ中、四モニ通ジ、貨物ノ交易スル所ロナリト、產ヲ治メテ、千金ヲ致シ、自ラ稱シテ陶朱公ト爲ス」また貨殖傳に「范蠡陶ニ之キ、朱公ト爲リ、產ヲ治メ積居シ、三タビ千金ヲ致シ、子孫業ヲ修メテ之ヲ息シ、遂ニ巨萬ニ至ル、故ニ富ヲイフ者、皆陶朱公ヲ稱ス」（猗頓）を參看せよ、

【道心惟危】（ダウシンレタダ）——惟微、惟精惟一、允執二厥中一」佛經にては菩提心をいふ、

【道人】（ダウジン）佛者又は道家の說を修めて得道したる人、智度論に「得道者名曰二一一一、餘出家者、未レ得レ道者、亦名二一一一」

【瞠若】（ダウジャク）直視の貌、熟視緘默して呆然（アキレル）たる意、莊子田子方に「夫子奔逸絕レ塵、而回一一乎其後一、夫子は、孔子、回は顏回、

【陶者ハ缺盆ヲ用フ】（ダウシヤ）（屠者ハ𠰁ヲ見よ

【陶鑄】（ダウジユ）陶冶に同じ、物を造り成す義、莊子に「是其塵垢粃糠、將猶二一一一一一堯舜一者也」

【道術】（ダウジユツ）佛老又は仙人の術なり、後漢書の靈思何皇后紀の注に「道人トハ一一ノ人ヲ謂フ」

【陶朱ノ富】（ダウシユノトミ）大金持をいふ、史記の越世家に「范蠡、陶ニ止リ、以爲ラク、陶ハ天下ノ中、四モニ通ジ、貨物ノ交易スル所ロナリト、產ヲ治メテ、千金ヲ致シ、自ラ稱シテ陶朱公ト爲ス」また貨殖傳に「范蠡陶ニ之キ、朱公ト爲リ、產ヲ治メ積居シ、三タビ千金ヲ致シ、子孫業ヲ修メテ之ヲ息シ、遂ニ巨萬ニ至ル、故ニ富ヲイフ者、皆陶朱公ヲ稱ス」（猗頓）を參看せよ、

【唐順之】（タウジュンシ）字は應德、荊川と號す、明の武進の人、嘉靖己丑の進士、翰林院編修を授けられ、累遷して淮陽巡撫、右僉都御史に至り、嘉靖三十九年卒す、年五十四、順之博學にして古今に通じ、經濟に練達し、世の名儒たり、士林その德行文章を高しとし、欽仰せざるなし、時に王愼中（遵巖）の文を作る、法を歐曾に取り尤も力を曾鞏に得たり、順之亦その說に從ひ益〻力を古文に肆にし卓然として一家を成すに至る、時に之を王唐と稱す、李王の徒力めて之を排せしも、竟に掩ふこと能はざりき、著す所ろ荊川文集、史纂左編右編文編雜編、左氏始末等あり、世に行はる、

【島嶼】（ダウショ）「シマ」「コジマ」嶼は水中の小洲なり、文選吳都賦に「一一一綿邈」

【唐書】（ダウジョ）（新一一）並に（舊一一）を見よ、

【逃暑ノ飮】（タウショノイン）暑を避くるための酒宴をいふ、唐明皇詩序に「廚人ハ、散熱ノ饌酒ヲ嘗メ、正ニ逃暑ノ飮ヲ行フ」と、また陸游の詩に「安用更爲一一一、虛堂三伏自蕭然」

【道邃和尙】（ダウスヰカウシヤウ）天台大師七世の法孫にして、荊溪尊者の上足なり、宋高僧傳二十九にその傳あり、和尙は天

台にて「クワシヤウ」法相にて「ワジヤウ」禪宗にて「ヲシヤウ」と讀む、律宗にては和上と書く、

【倒生】 倒さまに生ずる義、草木の稱、淮南子原道訓に「一一挫傷」の注に「草木ハ地ニ首シテ生ズ、故ニ一一トイフ」

【當世ノ儒宗】 晉書に「賀循朝廷ノ凝滯皆之ニ諮フ、輙チ經禮ニ依リテ對フ、當世ノ儒宗トナス」と、漢書劉向傳に「董仲舒爲世儒宗」

【啁噍】 啁哳と同義、小鳥の羣り鳴く聲、禮の三年問に「小者至于燕雀猶有一一之頃焉」

【蕩析】 さすらひ別るる義、書の盤庚に「今我民用一一離居、罔有定極」

【陶潛】 (陶淵明)を見よ、

【瞠然】 驚いて目を「ミハル」貌、管子に「一一視」瞠若に同じ、

【盜泉ヲ飲マズ】 尸子に「孔子盜泉ヲ過ギ、渴スレドモ而カモ飲マズ」(渴スレドモ)を見よ、

【道宣律師】 唐の丹徒の人、釋智首に從ひて律學を受け、四分律宗を立つ、乾封二年寂す、年七十二、佛祖統記第三十に「道宣京兆錢氏、母夢梵僧語之曰、仁者所懷梁僧祐律師也、處胎彌十二月而生、九歲徧覽群書、十二善習文墨、十五師日嚴顥公、十六誦法華、兩旬而徹、十七落髮云云」著すところ釋迦方誌あり、

【唐宋八家文讀本】 三十六卷(韓愈文卷、柳宗元文三卷、歐陽修文五卷、蘇洵文三卷、蘇軾文七卷、蘇轍文二卷、曾鞏文二卷、王安石文二卷)清の沈德潛撰す、是より先、明の茅坤、唐宋八大家文を編す、清の儲同人その疎漏を病みて八大家類選を編す、德潛二氏の選本及び八家の全集に就き精選してこの書を成し初學の讀本となせり、每篇評點段落を施し、前人竝に自己の評語を加へ、文を學ぶ者の資とせし等、用意親切なれば、今に至るまで世に盛行せり、賴襄の增評唐宋八家文讀本善し、

【道俗】 道は出家(僧)、俗は在家、南史の梁紀に「設四部無遮大會、一一五萬餘人」緇素に同じ、

【淘汰】 洗濯する義、後漢書に「淘汰學者之累惑」とあり、沙汰と同じ、

【丁丁】 木を伐る聲の相應ずるなり、詩の小雅に「伐木一一」また碁を打つ聲にもいふ、

【忉忉】 憂ふる貌、詩の甫田に「勞心一一」

【滔滔】 流れて反らざるの意、また世の中一般なること、論語微子に「一一者天下皆是也」また流る貌、詩經

の齊風に「汶水一一」また行く貌、楚辭に「年一一而日遠矣」また大水の貌、詩經の四月に「江漢一一」また漢書叙傳の註に「一一ハ亂ルル貌」

【陶陶】 驅逐の貌、詩の鄭風に「淸人在軸、駟介一一」(陶)を參看せよ、

【蕩蕩】 廣大の貌、論語に「一一乎民無能名焉」また法度のやぶれたる貌、詩の大雅に「一一上帝」また廣平の貌(漢書王莽傳ノ注)平易の貌(詩經ノ南山ノ註)寬大の貌(左傳襄二十九年ノ疏)等種種の義に用ふ、

【盪盪】 蕩蕩と通用す、爾雅釋訓の注に「一一ハ法度廢壞ノ貌」また漢書郊祀志の注には「一一ハ空曠ノ貌」とありて、何物もなく「ヒロヤカ」なる義に用ふ、すべて廣大なる貌とす、

【堂堂】 盛なる貌、史記滑稽傳に「以楚國一一之大、何求不得」また論語子張に「一一乎張也、難與竝爲仁矣」張は子張、これは容貌の盛なるを稱す、

【呶呶乎】 かまびすしき聲なり、多言の貌、集韻に「呶或ハ譊ニ作ル」と、韓愈の句に「呶呶以害其生」

【陶唐氏】 帝王世紀に「帝堯一一一伊祁姓ナリ、母ヲ慶都トイフ、孕ムコト十四月ニシテ堯ヲ丹陵ニ生ム、名ヅケテ放勛トイフ」書傳に「堯初メ唐侯タリ、後チ天子トナリ陶ニ都ス、故ニ一一一ト號ス」堯は帝嚳の子なり、その仁天の如く、その知神の如く、之に就く日の如く、之を望む雲の如し、在位一百年、壽一百十七歲(輯覽ニ據ル)堯崩じて舜代りて位に即く、詳しくは史記を見よ、

【堂堂ノ陣】 (正正ノ旗)を見よ、

【忉怛】 憂愁の義、李陵の書に「祇令人悲、增一一耳」

【啁哳】 鳥の聲、また鳥の繁く囀る聲、楚辭に「鵾雞一一而悲鳴」啁噍に同じ、

【陶答子ノ妻】 劉氏人譜ニ「戰國ノ陶答子、大夫トナリ、陶ヲ治ムルコト三年、名譽興ラズシテ、家ノ富、三倍セリ、其ノ妻諫メテ曰ク、妾聞ク、南山ノ玄豹、霧雨七日ニシテ、而シテ食、咽ヲ下ダラズ、其ノ毛ヲ澤シテ、文章ヲ成サント欲スレバナリ、家ハ食ヲ擇バス、故ニ肥エテ而シテ死スト、今夫子ハ、富ヲ貪リテ、後患ヲ顧ミザルカト」詳しくは列女傳を見よ、

【湯池】 (金城一一)を見よ、

【道場】 僧の佛道を修する所、釋氏要覽に「閑宴修道之處、謂之一一」「隋煬帝敕遍改僧居名一一」一に蓮社ともいふ、轉じては武技を習ふ所の名とす、

【道聽塗說】 塗は途なり、道上にて聽き、直ちに道上にて說くは、輕薄なる人のすることなり、一一一一は、善

言を聞くと雖も、心に留めて己の有となさざるをいふ、論語陽貨に「——而——德之棄也」また漢書藝文志に「小說家者流蓋出於稗官、街談巷說、——者之所造也」

【蕩滌】（ダウデキ）「サツパリ」と洗ひ清むる義、史記の樂書に「蕩滌邪穢、擯酌飽滿、以飾厥性」また漢書の律歷志に「所以作樂者、諧八音、——人之邪意、全其正性、移風易俗也」

【饕餮】（ダウテツ）左傳の文十八年に「縉雲氏ニ不才子アリ、飲食ヲ貪リ、貨賄ヲ冒ル、天下ノ人、以テ三凶ニ比シテ、之ヲ——トイフ」の註に「財ヲ貪ルヲ饕トイヒ、食ヲ貪ルヲ餮トイフ」一解に——は惡獸、以て凶人に比す、

【滔天ノ惡】（ダウテンノ）滔は漫なり、天にはびこる程の大惡をいふ、一解に、滔は漫なり、天をあなどり畏れざるをいふと、漢書敘傳に「咨爾賊臣、簒漢滔天」

【當塗】（ダウト）塗は途なり、世に合ふの意、揚雄の解嘲に「——者入青雲失路者委溝渠」また要路に居て事を用ふる人をいふ、韓非子に「當途之人」

【丁東】（ダウトウ）玉佩鐵馬の聲なり、康熙字典に「凡玉佩鐵馬聲、皆曰丁當當東二音古通」とあり、唐の韓偓の詩に「坐久忽聞鈴索動、玉堂西畔響丁東」

【道德ノ符】（ダウトクノフ）道德を行ふの効をいふ、史記禁澤傳に「豈非道德之符而聖人所謂吉祥善事者與」

【唐突】（ダウトツ）「ダシヌケ」後漢書の桓帝紀の注に「——ハ卒遽ナリ」とあり、また類書纂要に「唐突ハ不遜ナリ、觸犯スルヲ唐突トイフ」とあり、書言故事に「觸犯好人曰唐突西施、晉周顗字伯仁、少有重名、庾亮嘗謂曰、諸君咸以君方樂廣、顗曰、何乃刻畫無鹽唐突西施、註に「咸ハ皆ナリ、方ハ比ナリ、言フココロハ、諸人皆君ヲ以テ樂廣ニ比ス、樂廣ノ賢者ナルガ如キナリ、刻畫ハ雕琢ナリ、無鹽ハ齊ノ醜婦、西施ハ越ノ美女、周顗自ラ謙シテ言フ、若シ我ヲ以テ樂廣ニ比セバ即チ無鹽ヲ雕刻シテ、西施ニ對スルガ如キナリト」

【堂ニ升リ室ニ入ル】（ダウニノボリシツニイル）（升堂入室）道に進む次第に喩ふ、論語先進に「由也升レ堂矣、未レ入二於室一也」由は仲由なり、其の學已に正大高明の域に至れるも、未だ精微の奥に入らざるをいふ、

【堂ニ怡ブ燕雀ハ後災ヲ知ラス】（ダウニヨロコブエンジヤクハコウサイヲシラス）（怡）堂燕雀不レ知二後災一苟安して後日の災を知らざるに喩ふ、孔叢子の陳士義篇に「秦ノ兵趙ヲ攻ム、魏ノ大夫以爲ラク、魏ニ於テ便ナリト、子順曰ク、然ラズ、秦ハ貪暴ノ國ナリ、趙ニ勝タバ必ズ復タ他ニ求メン、吾レ恐ル、時ニ於テ其ノ師（いくさ）ヲ受ケンコトヲ、先人言アリ、燕雀屋ニ處リ、子母相哺シ、煦煦然トシテ其ノ相樂シムヤ、自ラ以テ安シト爲ス、竈突炎上シテ棟宇將ニ焚ケントス、燕雀顏變ゼズ禍ノ己ニ及ブヲ知ラズ、今子趙ノ破レテ、患將ニ己ニ及バントスルヲ悟ラズ、人ヲ以テシテ燕雀ニ同ジカルベケンヤト」

【唐ノ姚宋】（タウノエウソウ）（漢ノ丙魏）（カンノヘイギ）を見よ、

【唐ノ官制】（タウノクワンセイ）中書・尚書・門下の三省に分つ、尚書省は、百官を總領し、端揆を儀刑する事を掌る、長官を令といひ、位二品に叙せらるるを例とす、中書省は、侍從獻替及び制勅冊命の事を掌る、長官をまた令といひ、位正三品たり、門下省は、帝命を出納し、禮儀の事を掌る、長官を侍中といふ、位また正三品たり、尚書省の下に、吏部・禮部・兵部・刑部・工部の六部あり、吏部は官吏の選叙勳封考課の事を掌り、戶部は、戶口班田の事を掌り、禮部は禮儀・祀祭・燕饗・貢擧の事を掌り、兵部は軍衞及び武選の事を掌り、刑部は、律令刑法及び徒隷關禁の事を掌り、工部は、百工・屯田・山澤の事を掌る、以上の六官はいづれも其の長官を尚書と稱して、位は正三品たり、これを六部尚書といふ、八省の如きなり、尚書令の副に左右僕射あり、左僕射は、吏戶禮の三部を統べ、右僕射は兵刑工の三部を統ぶ、また尚書・中書・門下の三省の外にまた三省あり、祕書省・殿中省・內侍省といふ、合せてこれを六省といふ、祕書省は、經籍圖書の事を掌る、長官を監といひ、位從三品たり（我カ留學生タリシ阿部仲麿呂ハ、唐ニ仕ヘテコノ官ニ拜セラル）殿中省は、衣食車乘の事を掌る、長官を監といふ、位從三品たり、內侍省は宮中に供奉し、制令を宣傳することを掌る、長官を內侍といひ、位從四品たり、六省の外に一臺九寺五監等あれども、こゝには略す、左に三省六部を表示すれば、

【道傍ノ苦李】（ダウバウノクリ）誰も取るものなし、以て人に棄てらるるに喩ふ、事類全書に、晉書の王戎傳を引きて「王戎年七歲、嘗テ諸ノ小兒ト遊ブ、道邊ノ李樹ニ子アリ、枝ヲ

折ラルルヲ睹ル、小兒競ヒ走リテ之ヲ取ルニ、惟ダ戎動カズ、人之ヲ問フ、答ヘテ曰ク、樹道邊ニ在リテ而シテ子多シ、此レ必ズ苦李(にがすもも)ナラント、之ヲ取ルニ信ニ然リ」

【唐伯虎】(タウハクコ)　(唐寅(タウイン))を見よ、

【湯婆子】(タウバシ)　「ユタンポ」陔餘叢考に「今人銅錫器ヲ用ヒテ、湯ヲ盛リ、衾中ニ置キ、脚ヲ煖ム、之ヲ——トイフ、或ハ以テ竹夫人ニ對ス、按ズルニ、東坡楊君素ニ致スル札ニイフ、煖脚銅缶一枚ヲ送ル、毎夜熱湯注滿シ、其ノ口ヲ塞ギ、仍ホ布單ヲ以テ之ヲ裹ム、以テ旦ニ達シ冷ナラザルベシ、又范石湖ニ脚婆ノ詩アレバ、則チ是レ幷ニ脚婆ノ稱アルナリ」

【刀癜】(タウヘン)　「カタナキズ」唐の盧弼の詩に「朔風吹ク雪透ス一二ノ瘢ヲ」

【唐彪】(タウヒヤウ)　字は、翼修、清の金華の人、讀書作文譜十二卷を著す、

【刀筆ノ吏】(タウヒツ)　小吏をいふ、史記の蕭相國世家に「太史公曰ク、蕭相國何、秦ノ時ニ於テ刀筆ノ吏トナリ、錄錄トシテ未ダ奇節アラズ」註に「按ズルニ、刀ハ書ヲ削ル所以、古ハ簡牘ヲ用フ、故ニ吏皆刀筆ヲ以テ隨フ」とあり、即ち筆を用て字を竹木の上に書き、刀を以て削り去りて、又書くなり、それよりただ字を書くのみの小吏をいふ、

【湯斌】(タウヒン)　字は孔伯、荊峴と號し、又潛菴と號す、清の河南睢州の人、順治九年の進士、累官して工部尚書に至り、康熙二十六年卒す、年六十一、文正と謚し、道光三年孔廟に從祀せらる、著すところ湯子遺書、洛學編等あり、

【刀布】(タウフ)　刀も布も皆錢なり、刀はその形刀の如くに作り、人に利あるに取る、布はその廣く流布するに取りて名つく、管子に「珠玉爲上幣、黃金爲中幣、刀布爲下幣」史記平準書に「龜貝金錢——之幣興焉」

【桃符】(タウフ)　荊楚歲時記に「正月一日ニ畫雞ヲ戸上ニ貼シ、葦索ヲ其ノ上ニ懸ケ、——ヲ其ノ旁ニ插ム百鬼之ヲ畏ル」

【湯武ノ放伐】(タウブ)　湯は殷の成湯、武は周の武王をいふ、成湯は夏の桀王の虐政を見るに忍びず諸侯より起りて仁政を施し、民心を收め遂に桀を南巢に放ちて、帝位に即き、武王は殷の紂王の凶暴にして民を苦むるを惡み、伐ちてこれに代れり、

【唐文皇ノ神藻ヲ奪フ】(タウブンワウ)　太平記卷十七に見ゆ、太宗は御製聖教序をあらはし、武后は華嚴經の序を製し、中

宗も叡宗も代宗も何れも文筆を以て經論の極理を述べたまへるを廣く文皇とはいふ、神藻とはすぐれたる文藻の義なりと抄に說けり、

【唐文粹】(タウブンスイ)　一百卷、宋の姚鉉撰す、古賦、詩頌、贊、表奏書疏、文論議、古文、碑銘記、箴誡銘、書序、傳銘紀事の十六類に分つ、選擇嚴精文粹の名に稱へり、

【湯餅】(タウヘイ)　歸內錄に「——ハ唐人之ヲ不托トイフ　今世俗之ヲ餺飥トイフ」と、また靑箱雜記に「——ハ、溫麵ナリ、凡ソ麵ヲ以テ食ト爲シ、之ヲ煮ル、皆之ヲ——トイフ」「ウンドン」

【刀墨】(タウボク)　黥刑(イレズミ)なり、刀を以てその額を刻み、之に墨を涅するをいふ、國語に「有蠻夷之國、有斧鉞刀墨之民」

【湯網】(タウマウ)　寬大の處置をいふ、史記の殷本紀に「湯出見野張網四面祝曰自天地四方皆入吾網、湯曰、嘻盡之矣、乃去其三面祝曰、欲左左、欲右右、不用命、乃入吾網、諸侯聞之曰、湯德至矣、及禽獸」とあるに本づく、成語考に「人ニ宥罪ヲ求ムルニ幸ニ——ヲ開ケトイフ」

【朶雲】(ダウン)　人の書翰を稱していふ、事類全書に「唐韋陟、常以五采牋爲書記、使侍妾主之、其牋答受意而已、皆有階法、陟唯署名、自謂所書陟字、若五朶雲、時人慕之號郤公五雲體」とあり、韋陟は郤國公に封ぜらるゝ、故にいふ、

【唐文粹】(タウブンスイ)　朝宿の邑に同じ、諸侯京師に入る時、暫く此に留り、齋潔して往く、故にいふ、禮記に「方伯爲朝天子、皆有——之——」戰國策に「効萬家之都、以爲——之一」とあるは、萬家の都を獻じ、其の邑入を以て、湯沐の資に供するをいふ、また史記高祖紀に「朕自沛公以誅暴逆、遂有天下、其以沛爲朕——」とあるも、戰國策の義と同じ、漢舊儀に「皇后、太后ハ各三十縣ヲ食ム、——トイフ」

【湯沐具ハリテ蟻蝨相弔ス】(タウモクグナ)　國政善く治まりて、小人相悲む意、淮南子說林に「湯沐具而蟻蝨相弔、大廈成而燕雀相賀」

【盜モ亦道アリ】(タウマタミチ)　(盜亦有道)莊子の胠篋篇に「跖ノ徒、跖ニ問ヒテ曰ク　盜モ亦道アルカト、跖曰ク、何ニ適トシテ道アル無カランヤ、夫レ妄リニ室中ノ藏ヲ意フハ、聖ナリ、入ツテ先ンズルハ、勇ナリ、出ヅルニ後ルハ、義ナリ、可否ヲ知ルハ、智ナリ、分ツコト均シキハ仁ナリ、五者備ハラズシテ、能ク大盜ヲナス者ハ、天下未ダ之レアラザルナリ」とあり、跖は古の大盜の名

なり、

【陶冶】 陶の器を造り「カヌチ」の金を鑄る如く、人才を育成するを云ふ、漢書の董仲舒傳に「臣聞ク、命ハ天ノ令ナリ、性ハ生ノ質ナリ、情ハ人ノ欲ナリ、或ハ天、或ハ壽、或ハ仁、或ハ鄙、陶冶シテ之ヲ成スモ、粹美ナル能ハズ云云」

【道腴】 腴は腹下の肥えてやはらかなる肉なり、轉じて美なること、豐なることに用ふ、班固の答賓戲に「味二道之腴一、身窮道則腴、年高氣彌レ壯」

【螳螂蟬ヲウカガフ】 己をうかがふ者の後に在るを知らざるに喩ふ、莊子山木篇に「莊周遊二乎雕陵之樊一、覩二一異鵲自一南方一來者、翼廣七尺、目大運寸、感二周之顙一而集二於栗林一、莊周曰、此何鳥哉、翼殷不レ逝、目大不レ視、蹇裳躩歩、執レ彈而留レ之、覩二一蟬一方得二美蔭一而忘二其身一、螳螂執レ翳而搏レ之、見レ得而忘二其形一、異鵲從而利レ之、見レ利而忘二其眞一、莊周怵然曰、噫物固相累、二類相召也、捐レ彈而反走云云」說苑正諫篇にも「園ニ榆アリ、上ニ蟬アリ、蟬高居悲鳴シ、露ヲ飲ンデ螳螂ノ其ノ後ニ在ルヲ知ラズ、螳螂ノ蟬ヲ捕フル、而カモ黃雀ノソノ後ニ在ルヲ知ラズ、臣彈丸ヲ執ツテ黃雀ヲ取ラントシテ欲シテ露ノ衣ヲ沾スヲ覺エズ」螳螂は「カマキリ」

【螳螂ノ衝】 兵備の微弱なるに喩ふ、魏都賦に「弱卒鎭甲、無レ異二螳螂之衝一」陳琳書に「欲レ以二螳螂之斧一、禦二隆車之轍一」則必不レ勝レ任矣」とあり、淮南子の人閒訓にも、亦類語あり、文選に「欲レ以二螳螂之斧一、禦二隆車之隧一」の註に「前ニ兩足アリ、之ヲ舉グレバ斧ヲ執ルノ象ノ如シ」駱賓王の文にも「振二螳螂之力一、拒二轍當一レ車」韓愈の詩に「螳臂怒當レ轍」

【螳螂臂ヲ怒ラシテ車轍ニ當ル】 己が分を知らずして、妄進するに喩ふ、莊子の天地篇に「猶二螳螂之怒レ臂以當二車轍一」則必不レ勝レ任矣」とあり、淮南子の人閒訓にも、亦類語あり、文選に「欲レ以二螳螂之斧一、禦二隆車之隧一」の註に「前ニ兩足アリ、之ヲ舉グレバ斧ヲ執ルノ象ノ如シ」駱賓王の文にも「振二螳螂之力一、拒二轍當一レ車」韓愈の詩に「螳臂怒當レ轍」

【桃李】 試驗官取るところの門下生に喩ふ、唐の劉禹錫の詩に「一日聲名徧二天下一、滿城盡屬二春官一」春官は禮部の官なり、下の（——門ニ）を參看せよ、

【桃李言ハザレドモ、下自ラ蹊ヲナス】 蹊とは「コミチ」なり、桃李は其の華實あるの故を以て、自ら衒はざるも、人爭ひて歸趣し、來往すること絶えず、其の下自然に蹊をなす、以て德ある人は、默して潛み居るも、人自ら歸服するに喩ふ、史記の李廣傳に「太史公曰ク、傳ニ曰ク其ノ身正シケレバ、令セズシテ行ハル、其ノ身正シカラザレバ、令スト雖モ從ハズト、其レ李將軍ノ謂ナリ、余李將軍ヲ睹ルニ、悾悾トシテ鄙人ノ如シ、口道辭スル能ハズ、死スルノ日ニ及ンデ、天下知ルト知ラザルト、皆爲メニ哀ヲ盡ス、彼レ其ノ忠實ノ心、誠ニ士大夫ニ信ゼラレタレバナリ、諺ニ曰ク、桃李不レ言下自成二蹊一ト、此ノ言小ト雖モ以テ大ニ喩フベシ」

【唐六典ノ如シ】 （唐寅）を見よ、

【唐六典】 三十卷、唐の玄宗帝撰し、李林甫敕を奉じて註す、六典とは三師・三公・三省・九寺・五監・十二衞をいふ、この書唐代の官制を詳叙せり、享保九年の和版あり、

【唐律疏義】 三十卷、唐の長孫無忌等勅を奉じて撰す、名例・衞禁・職制・戶婚・廐庫・擅興・盜賊・鬪訟・詐僞・雜律・捕亡・斷獄の十二篇に分ち、每篇更に數十條に分ちて細說す、わが大寶令は主として之に擬して制定せりといふ、

【忉利天】 三十三天と譯す、欲界六天中の第二なり、帝釋の居るところ、その城を喜見といふ、

【桃林虎士】 牛の異名、史記の周本紀に「武王已克レ殷、縱二馬於華山之陽一、放二牛於桃林之虛一、偃二干戈一、振二兵釋一レ旅、示二天下一不レ復用一也」書經武成にも見ゆ、また事類全書に「寗因、大僚莊南山ノ下ニ假宿ス、月夜ニ關ヲ叩ク人アリ、桃林班特處士因訪ト稱ス、繼デ南山ノ班寅將軍來謁ス、因爲メニ置酒ス、明ニ及ンデ視レバ、門外唯ダ牛蹄虎跡ノミ」

【桃李門ニ在リ】 事文類聚前集卷の二十九に「唐武后、問二狄仁傑一、朕欲レ得二一佳士一用レ之、誰可レ者、仁傑曰、必欲二卓犖奇才一、則有二荊州長史張柬之一、其人雖レ老宰相才也、太后擢二柬之一爲二洛州司馬一、數日又問二仁傑一、曰、臣所レ薦者、可レ爲二宰相一、非二司馬一也、乃遷二秋官侍郎一、又曰云云、卒用爲レ相、又嘗薦二夏官侍郎姚崇一、監察御史宣彥範、太平州刺史敬暉數人一、率爲二名臣一、或謂二仁傑一曰、天下桃李盡在二公門一、仁傑曰、薦賢爲レ國、非爲二私也一」

【韜略】 兵書をいふ、轉じて兵謀にも用ふ、崔日用の詩に「一一又縱橫（六韜三略）を見よ、

【當路ノ人】 要路に當る重臣をいふ、孟子公孫丑上に「公孫丑問曰、夫子當レ路於レ齊、管仲晏子之功、可二復レ許一乎」の註に「當路トハ、要地ニ居ルナリ」當路者とも用ふ、許はなほ期の如し、

【討論】 討は尋究なり、論は講議なり、利害を論究する義、論語憲問に「世叔ニ討レ之」

【道路目ヲ以テス】 公言することを憚り、互に怨恨の情を目にて通ずる義、國語に「國人莫二敢言一、道路以

目」

【絶エザルコト綫ノ如シ】（不レ絶如レ綫）微細にして殆ど絶えんとするの義、公羊傳に「中國不レ絶若レ綫」綫は綫に同じ、漢書袁盎傳に「劉氏不レ絶如レ髮」とあるも、皆同義なり、

【絶エテ無クシテ僅ニアリ】（絶無而僅有）全くなくして「タマ」にありしと、蘇軾の上ニ神宗ニ書に「改レ過不レ吝、從善如レ流、此堯舜禹湯之所ニ勉強而力行一、秦漢以來之所ニ一一一一一」

【鷹】爾雅に「鷹ハ鵻鳩ナリ」月令に「仲春ニ鷹化シテ鳩ト爲リ、七月ニ鳩化シテ鷹トナル」格物論に「鷹ハ鷲鳥、金眼鉤背爪、劒翮、善ク攫搏ス」鶻は鷹の一種、クマタカ「ハヤブサ」

【鷹ヲ養フガ如シ】（如レ養レ鷹レ飽くまで食はしむるときは、背き去る、以て奸人を御する術に譬ふ、綱鑑の漢獻帝紀に「陳登呂布ニ謂ツテ曰ク、登、曹公ニ見エテイフ、將軍ヲ養フハ、虎ヲ養フガ如シ、當ニ其ノ肉ニ飽カシムベシ、飽カザレバ即チ人ヲ噬マント、公曰ク、然ラズ、譬ヘバ鷹ヲ養フガ如シ、飢ウレバ則チ用ヲ爲シ飽ケバ則チ颺リ去ルト」また晉書嘉容垂載記にも類語あり、

【高ニ登ルハ卑ヨリス】事の進行には、次第あるをいふ、中庸に「君子之道辟レ如ニ行レ遠必自レ邇、辟如ニ登レ高必自レ卑」とあり、辟は譬に同じ、書經の太甲篇にも「高キニ升ルニハ、必ズ下ヨリスルガ若ク、遐キニ陟ルニハ、必ズ邇ヨリスルガ若シ」

【寶ノ山ニ入リテ手ヲ空シクシテ歸ル】正法念經に「閻羅王爲ル人說レ偈云、汝得ニ人身一不、修レ道、如レ入ニ寶山一空手歸ト云云」

【貨悖リテ入ル者ハ亦悖リテ出ヅ】「惡錢身ニツカズ」といふ義に同じ、大學に「言悖而出者亦悖而入、貨悖而入者亦悖而出」の註に「悖ハ逆ナリ、此レ言ノ出入ヲ以テ、貨ノ出入ヲ明カスナリ」

【蛇虺】（蛇虺）を見よ、

【打毬】荊楚歲時記に「寒食一一」の注に「蹴鞠ハ黃帝ノ造ル所ロ、兵勢ニ本ヅク、或ハ云フ、戰國ニ起ル、按ズルニ鞠ト毬ト同ジ、古人蹋蹴シテ以テ戲ト爲スナリ」

【薪ヲ抱キテ火ヲ救フ】（抱レ薪救レ火害を除かんと欲して、却つて益〻その害を長ぜしむるに喩ふ、史記の魏の世家に「魏氏ノ地盡キザレバ、則チ已ムコトヲ知ラズ、且ツ夫レ地ヲ以テ秦ニ事フルハ、譬ヘバ猶ホ薪ヲ抱イテ火ヲ救フガ如シ、薪盡キザレバ火滅エズ」また

文子にも「其ノ本ヲ治メズシテ、其ノ末ヲ救フハ、渠ヲ鑿リテ水ヲ止メ、薪ヲ抱イテ火ヲ救フニ異ナルナシ」漢書董仲舒傳にも「以レ湯止レ沸、一レ一レ」

【薪ヲ負ヒ行ク歌フ】（負レ薪行歌）前漢書に「朱買臣、薪ヲ賣リ以テ食ヲ給シ、行ク且ツ書ヲ誦ス、妻モ亦負戴シ、相隨フ、數〻買臣ヲ止メ歌フコト毋ラシム、買臣愈〻疾ク歌フ、妻之ヲ羞デ去ランコトヲ求ム、買臣曰ク、我レ年五十ナラバ、當ニ富貴ナルベシ、今已ニ四十ナリ、妻曰ク、公等ノ如キハ、終ニ當ニ溝壑ノ中ニ餓死スベシ、何ゾ富貴ナラント、後チ會稽ノ守ト爲ルニ及ビ 妻自ラ縊レテ死ス」

【多岐亡羊】（亡レ羊）を見よ、

【他鄉故知ニ遇フ】遠き他國にて、故郷の友に「フト出あひたるは、最も喜ばしきことの一なり（久旱甘雨）を見よ、

【打魚】「アミヲウツ」歸田錄に「網レ魚曰二一一ト」

【宅ヲ徙シテ其ノ妻ヲ忘ル】（徙レ宅而忘二其妻一）資治通鑑に、「唐太宗謂二侍臣一曰、吾聞西域賈胡得二美珠一、剖レ身以藏レ之、有レ諸、侍臣曰、有レ之、上曰、人皆知二彼之愛一レ珠而不レ知レ愛二其身一也、吏受レ賕抵レ法、與二帝王狥一レ奢欲一而亡一國者一何以異二於彼胡一之可一笑邪、魏徵曰、昔魯哀公、謂二孔子一曰人有好忘者、徙レ宅而忘二其妻一、孔子曰、又有二甚者一、桀紂乃忘二其身一、亦猶是也、上曰然、朕與二公輩一、宜レ竭二力相輔一、庶免二爲一レ人所一レ笑也」この事もと孔子家語に出づ、

【逶行】遠行に同じ、史記霍去病傳に「一一殊遠而糧不レ絕」

【卓詭】卓は特立なり、詭は異なり、言行などの高遠にして衆に異るをいふ、後漢書劉輔傳に「其言必有二一一一」

【琢玉】玉をみがくをいふ、詩經に「他山之石可二以爲一レ錯」の傳に「錯石也、可二以一一一」とあり、周禮天官太宰職の疏に「珠ニ切トイヒ、象ニ磋トイヒ、玉ニ琢トイフ」

【澤虞】（澤レ虞）古、水澤を司る官の名、周禮に「有二山虞一一以掌二山澤一」とあり、虞は度なり、山澤の大小及びその生ずるところを度り知る義、文選の西京賦に「一一是濫」また戴勝といふ鳥の一名、

【磔刑】「クルマザキ」の刑、荀子正論篇の注に「磔ハ車裂ナリ」また「ヤツザキニスル」刑、史記李斯傳の索隱に「磔ハソノ肢體ヲ裂キテ之ヲ殺スヲイフ」轘磔車磔などみな同じ、わが國にては「ハリツケ」の刑に用ふ、

【槀吾】「ソハブキ」顏師古の急就篇の注に「一一ハ款冬（ふき）ニ似テ腹中ニ絲アリ、陸地ニ生ズ、花ハ黃色、

一名ハ獣須」とあり、本草の注には「款冬亦一ト名ッ

【託孤寄命（タクコキメイ）】 遺孤を託し、國政を委ぬるをいふ、論語泰伯篇に「可ノ以託ニ六尺之孤ヲ一可ノ以寄ニ百里之命ヲ一臨ニ大節ニ一而不ノ可ノ奪也、君子人歟、君子人也」朱子曰く「ソノ才以テ幼君ヲ輔ケ國政ヲ攝スベク、ソノ節死生ノ際ニ至リテ奪フベカラズ、君子ト謂フベシ、與ハ疑辭、也ハ決辭、問答ヲ設ケ爲スハ、深クソノ必然ヲ著ス所以ナリ」程子曰く「節操是ノ如キハ、君子ト謂ツベシ」

【托克托（タクコクタク）】 一に脫脫に作る、字は大用、蒙古の人、生れて岐嶷、元の順宗の時、叔父伯顏に代り右丞相となり悉く伯顏の舊政を改む、詔勅を奉じて宋、遼、金の三史を修す、後ち讒によりて斥けられ、至正十四年丞相哈麻のために鴆殺せらる、年四十二

【卓爾（タクジ）】 すぐれて秀でたる貌、論語子罕に「如ニ有ノ所ニ立ツ一卓爾ガ一ニ」

【濯枝ノ雨（タクシ）】 周處の風土記に「六月大雨アルヲ、濯枝ノ雨ト名ヅク」

【跅弛（タクシ）ノ士】 跅は跅落にして檢局（シメククリ）なきなり、弛は放廢して禮法にしたがはざるなり、漢書武帝紀に「泛駕之馬、跅弛之士、亦在ニ御ニスルニ之而已」

【濁酒一杯（ダクシュ）】 事文類聚前集卷の三十二に、絕交書を引きて「嵇康曰、但願守ニ陋巷一敎ニ子孫一、時時與ニ親舊一敘ニ契闊（ナ）一、陳ニ說平生一ヲ一、彈琴一曲、志願畢矣」

【掉舌（タクセツ）】 掉一音「テウ」「フルヒウゴカス」ヲ一ヲは辯舌を弄するをいふ、三寸（サンズン）ノ舌を見よ

【卓然（タクゼン）】 すぐれて秀でたる貌、卓爾に同じ、漢書成帝紀に「使ニ一ヲ可ニ觀一」

【橐駝（タクダ）】 駝は馬の類、背の肉、橐に似たり、駱駝に同じ、また植木屋の別稱、柳宗元の種樹郭橐駝傳に「郭ヲ一、不ニ知ニ始何名一、病僂隆然伏行有ニ類ニ橐駝一者ニ故鄉人號ニ之駝一、駝聞レ之曰、甚善、名ニ我固當ニ因ニ其名一、亦自謂ニ橐駝二云云」とあるに本づく（橐峯炙）を參看せよ、

【拓提（タクダイ）】 寺をいふ、後人誤りて、拓を招につくる、唐の武宗ヲ一ヲ蘭若四十萬區を毀つ、また杜詩に「更宿ス一ヲ境、蘭若秋風晚」

【濯濯（タクタク）】 肥えて「ツヤ」ある貌、一解に娛み遊ぶなりと、詩經の大雅に「麀鹿ヲ一ヲ、また山に草木なき貌、孟子の告子に「是以若ニ彼ノ一ヲ一ニ也」またしなやかにして「ツヤ」ある貌、晉書に王恭の美容を稱して「ヲ一ヲ如ニ春月柳一」

【度地（タクチ）】 地を「ハカル」禮記王制に「ヲ一ヲ居民」

【宅兆（タクチョウ）】 「ハカバ」墳域、塋域に同じ、後漢書趙咨傳の注

に見ゆ、

【坼副（タクフク）】 ヲ一ヲ二字皆裂くるなり、難產の義、詩の大雅に「先生（センジョウ）如ニ達（タク）ノ一ヲ不ニ一ヲ」とあるに本づく、達は小羊なり、羊の子は生れ易くして留まり難むことなし、ここは姜嫄が、后稷を生むの易かりしをいふ、坼拆同じ、

【卓文君（タクブンクン）】 前漢書司馬相如傳に「卓文君ハ、蜀郡臨邛ノ富人卓王孫ノ女ナリ、新ニ寡シテ音ヲ好ム、司馬相如客ト其ノ家ニ至ル、酒酣ニシテ琴ヲ鼓シ、琴心ヲ以テ之ヲ挑ム、文君心ニ悅ンデ之ヲ好ミシ、夜亡ゲテ相如ニ奔ル、相如與ニ馳セテ成都ニ歸ル、家徒ニ四壁立ツノミ、王孫大ニ怒ル、後チ臨邛ニ之キ、盡ク車騎ヲ賣リテ酒舍ヲ買ヒ、文君ヲシテ壚ニ當ラシメ 相如自ラ犢鼻褌ヲ著ケ、庸保ト雜作シ、器ヲ市中ニ滌グ、王孫之ヲ恥ヂ 文君ニ僮百人、錢百萬ヲ分與ス、成都ニ歸リ田宅ヲ買ヒ、富人ト爲ル、武帝子虛ノ賦ヲ讀ミテ之ヲ善トシ、相如ヲ召シテ郎ト爲シ、後チ拜シテ孝文園ノ令ト爲ス云云」

【拓本（タクホン）】 字をひろげて大きくしたるなり「イシズリ」楊升菴集に「愼、石鼓ノ文ノヲ一ヲ先師李文正公ニ得タリ」

【琢磨（タクマ）】 玉石を「トギミガク」轉じて學德を修養するに用ふ（切磋ヲ一ヲ）を見よ、

【橐籥（タクヤク）】 「フイゴ」老子に「天地之間、其猶ヲ一ヲノ乎」の口義に「籥ハ橐ノ管ナリ」と、翼に「ヲ一ヲハ冶鐵ノ用フルトコロ、風ヲ致スノ器ナリ、橐トハ外ノ槽、籥ヲ受クル所以ナリ、籥トハ內ノ管橐ヲ鼓スル所以ナリ」と、橐は皮橐、風を入る、籥は囊口の管なり、蒲風箱皆同じ、

【拓落（タクラク）】 猶ほ蹭蹬といふが如し、不遇の義、官の達せざるをいふ「フシアハセ」揚雄の解嘲に「何爲（ジョウ）官之ヲ一ヲ也」また廣大の貌、文選の魏都賦に見ゆ、

【卓犖（タクラク）】 超絕なり「モヌケテスグレル」卓は高なり、犖は力あるなり、一解に才辯あるなりと、晉書郗超傳に「ヲ一ヲ不羈、有ニ曠世之度一」また文選に「ヲ一ヲ觀ニ群書一」

【卓躒（タクリツ）】 卓犖に同じ、孔融の文に「英才ヲ一ヲ」

【劉輪（タクリン）】 心に自得することあるも、言に發して人に傳ふること能はざるに喩ふ、莊子の天道篇に「齊ノ桓公書ヲ殿上ニ讀ミ、輪扁輪ヲ堂下ニ剉レリ、椎鑿ヲ釋イテ上リ、桓公ニ問ヒテ曰ク、敢テ問フ公ノ讀ム所ハ何ノ言トナスカト、公曰ク、聖人ノ言ナリ、曰ク聖人在ルカ、公曰ク已ニ死セリ、曰ク然ラバ則チ君ノ讀ム所ロハノモノハ、古人ノ糟魄ノミ、桓公曰ク、寡人書ヲ讀ム、輪人安ンゾ議スルコトヲ得ン、說アラバ則チ可ナ

リ、說ナケレバ則チ死サント、輪扁曰ク、臣ヤ、臣ノ事ヲ以テ之レヲ觀ルニ、輪ヲ斲ヅルコト、徐クスレバ甘クシテ固カラズ、疾スレバ苦シミテ入ラズ、徐ナラズ疾ナラズ、之ヲ手ニ得テ心ニ應ズ、口言フコト能ハザルモ、數ノ其ノ閒ニ存スルアリ、臣以テ臣ノ子ニ喩スコト能ハズ、臣ノ子モ、亦之レヲ臣ニ受クルコト能ハズ、是ヲ以テ行年七十ニシテ老イテ、尙ホ輪ヲ斲レリ、古ノ人ヤ、其ノ傳フベカラザルヤ死セリ云云」

【踔厲風發】 韓文の柳子厚墓誌銘の語、踔は卓と同じ、踔厲は、卓絶嚴厲なり、風發は敏疾にして當るべからざるをいふ、

【竹】 史記に「渭川千畝竹、其人與千戶侯等」山海經に「衞丘ノ山ノ南ニ帝俊ノ竹林在リ、大ニシテ舟ヲ爲ルベシ」と、俊は舜の借字、竹の一節、則ち以て舟につくるべしとなり、羅浮山記に「邛竹ハ本邛山ヨリ出ヅ、張騫、西ノ方大夏ニ至リテ見ル所ロナリ、而シテ此ノ山ノ左右、時ニ之レアリ、鄉老多ク以テ杖トナス」爾雅に「東南之美者、有會稽之竹箭焉」白樂天の養竹記に「竹本固、固以樹德、竹性直、直以立身、竹心空、空以體道、竹節貞、貞以立志、故君子樹之」檀几叢書に載する、竹連珠に「其節勁、故卒成凌雲之材、其心虛、故卒成耐寒之器」また「斷之峿谷、爰成鸞鳳之音」揭作楮生、忽走龍蛇之影」また笛譜に「竹ハ八月ヲ俗ニ之ヲ小春トイフ、熱去ラント欲シ、寒來ラント欲シ、氣至リテ凉シ故ニ小春トイフ」渭川（此君）（竹中兒）を參看せよ、

【竹ナケレバ人ヲシテ俗ナラシム】 蘇軾の綠筠軒の詩に、

可使食無肉、不可居無竹、無肉令人瘦、無竹令人俗、人瘦尙可肥、俗士不可醫、傍人笑此言、似高還似癡、若對此君仍大嚼、世閒那有揚州鶴、

【笕】 爾雅に「一ハ竹萌ナリ」說文に「一ハ竹胎ナリ」箏譜に「箏一名ハ萌、一名ハ初篁、俗ニ呼ビ稚子トナシ、又稚龍ト爲ス」箏は笕に同じ、「箏ヲ呼ビ稚子トナシ、又稚龍ト爲ス」箏譜に一名ハ苗、一名ハ初篁、俗ニ呼ビテ龍孫ト爲ス」竹譜に

【竹ノ箏ニ願ノ絲ヲ懸ク】 （願絲）を見よ、

【竹ノ平安ヲ報ズ】 酉陽雜俎に「李衞公守北平、唯童子寺有竹一窠、纔長數尺、相傳其寺綱維每日報竹平安」

【竹ノ實ヲ食ム鳥】 （鳳凰）を見よ、

【多言】 多辯の義、詩經に「人之一一、亦可畏也」金人の銘に「無一一一多敗老子に「一一數窮、不如守中」

【多言ノ戒】 劉氏人譜に「蔡清人ニ語テ曰ク、道德アル

者ハ、必ズ多言ナラズ、信義アル者ハ、必ズ多言ナラズ、才識アル者ハ、必ズ多言ナラズ、唯夫ノ細人狂人、妄人ハ、乃チ多言スルノミト」

【多故】 故は事なり、多難の義、國語に「王室一一、余惧、及焉」

【章擧】 圖書南產志に「一一一名ハ紅鼻、烏賊ニ似テ差大ナリ、味更ニ珍好」浙江縣志に「望潮魚ハ頭圓クシテ足多シ亦海和尙ト名ヅク」

【唾壺】 「ツバキ」の「ツボ」、晉書王敦傳に「王敦酒後ニ、輒チ魏武ノ樂府、老驥伏櫪、志在千里、烈士暮年、壯心不已ヲ咏ジ、如意ヲ以テ一一ヲ擊チ節トナス、壺邊盡ク缺ク」と、これより慷慨の狀を一一擊碎といふ、唾壺ともいふ、東坡の詩に「醉後哀歌擊唾壺」

【鼉鼓】 詩經靈臺に「一一逢逢」の傳に「鼉ハ蜥蜴ニ似テ長ケ丈餘、皮ハ鼓ニ冒フベシ鼉一に鱓に作る、晉安海物記に「鼉ハ宵鳴ク、梓鼓ノ如シ、今江淮ノ閒鼉鳴ヲ謂ヒテ鼓トナス、亦或ハ之ヲ鼉更トイフ、ソノ聲逢逢然トシテ鼓ニ似テ而シテ又善ク夜鳴キ、ソノ數モ更ニ應ズ、初更ノ如キハ一鳴ニシテ止ミ、二更ハ即チ再鳴スルヲ以テナリ」

【柁工】 「カヂトリ」陸深溪山餘話に「篙師（サヲサシ）一一」とあり、柁師・舵工・梢工皆同じ、

【他山ノ石以テ玉ヲ攻クベシ】 （他山之石可以攻玉）小人を石に比し、君子を玉に比し、君子が小人に侵されて、善く省修研磨して、德器を成すに喩ふ、詩經の鶴鳴篇に「一一一一、一一一一」攻は磨なり、また他山之石可以爲錯ともあり、錯は礪石なり、程子曰く「玉ハ天下ノ至美ナリ、石ハ天下ノ至惡ナリ、然レドモ玉ハ石ヲ以テ之ヲ磨キ、器ヲ成ス、猶ホ君子ト小人ト處ルガ如シ、心ヲ動カシ性ヲ忍ベバ、義理生ジ道德成ル」

【他志】 「ワタクシ」の心「アダシゴコロ」禮記の檀弓に「或敢有一一」

【太上皇】 （太上皇）を見よ、

【蛇首ヲ見テ長短ヲ知ル】 （見蛇首知長短）一斑を見て、全豹を推知すると同義、淮南子に「蛇舉首尺而脩短可知也、象見其牙而大小可知也」

【吒食】 吒は陀に同じ、一一は口舌中に於て聲をなすをいふ、禮記の曲禮に「毋一一」

【多錢翁】 「カネモチヂヒ」貴耳集に「有一一一、每自誇侈」

【多錢善ク賈フ】 （長袖善ク）を見よ、

【蛇足】 無益の事に喩ふ、戰國策に「楚ニ祠ル者アリ、其

ノ舎人ニ巵酒ヲ賜フ、舎人相謂ヒテ曰ク、數人ニテ之ヲ飲メバ足ラズ、一人ニテ之ヲ飲メバ餘アリ、請フ地ニ畫キ蛇ヲ爲リ先ヅ成ル者ハ酒ヲ飲マント、一人蛇先ヅ成ル、酒ヲ引キマサニ飲マントス、乃チ左手ニ巵ヲ持チ、右手ニ蛇ヲ畫ク、曰ク、吾能ク之ガ足ヲ爲ラント、未ダ成ラズシテ一人ノ蛇成ル、其ノ巵ヲ奪ヒテ曰ク、蛇ハ固足ナシ、子安ンゾ能ク爲ラント、遂ニ酒ヲ飲ム、蛇足ヲ爲ル者、終ニ其ノ酒ヲ亡フ」

【佗佗】 うつくしき貌爾雅釋訓に「——美也」德のうつくしき貌にもいふ、詩經の君子偕老の釋文に「——德之美也」

【大戴禮】 漢の戴德(字ハ延君、戴聖ノ叔父ニシテ漢ノ宣帝ニ仕フ)の輯むるところ、戴聖の傳へたる禮記を小戴禮といふに對して名づく、この書殘闕多く且つ編次冗雜なるを以て、禮記の如く盛行せず、その中四十七篇の夏小正(夏ノ月令)四十九篇曾子立事以下曾子の言行を記したる十篇は、最も讀むべき文字にして、單行本もあり、畢沅の夏小正考注一卷阮元の曾子注釋四卷參考すべし、

【但好事ヲ行フヲ知リ、前程ヲ問フヲ要スルナカレ】(但知行好事莫要問前程)馮道の詩なり、人はただ日日よき事を行ずるを知るべし、徒に前途の事を問ふを要せずとの義、

【唯好鬚ト稱ス】 ただよき口ひげであると稱せしは、他にとりどころなく、その職にかなはざる義なり、唐書に「太宗翠微宮ニ在リ、李緯ヲ以テ民部尚書トナス、京師ヨリ來リシ者アリ、帝曰ク、房玄齡、緯ノ尚書トナリシヲ聞キテ、何ト謂ヒシゾト、曰ク唯好鬚ト稱セシノミト、帝遽ニ之ヲ改ム」

【戰勝テ肥ユ】(臞)を見よ、

【戰勝チテ將驕リ卒惰ル者ハ敗ル】(戰勝而將驕卒惰者敗)漢書項籍傳に出づ、

【戰勝ツハ易ク、勝ヲ守ルハ難シ】(戰勝易、守勝難)吳子の語、

【戰ヘバ必ズ勝チ、攻ムレバ必ズ取ル】(戰必勝攻必取)善く兵を用ふるをいふ、史記高祖紀に「連百萬之軍——吾不如韓信」

【但愚者ノ悅ヲ欲シテ賢者ノ嗤ヲ思ハズ】(但欲愚者ノ悅不思賢者嗤)白居易の立碑の詩の句なり、人の虛名を欲するをそしる、

【惟酒ヲシテ憂ヲ忘ルベシ】 晉書顧榮傳に「惟酒可以忘憂、但無如作病何耳」

【徒四壁ノミ】 家貧しく一物もなきをいふ、漢書に「司馬相如、成都ニ家ス、徒四壁ノミ」(卓文君)を參看せよ、

【惟善人能ク盡言ヲ受ク】 韓愈の爭臣論に「傳曰、惟善人能受盡言、謂其其而能改之也」とあり、國語の周語に「單襄公見國武子其言盡、襄公曰、立于淫亂之閒而好盡言、以招人過怨之本也、惟善人能受盡言」とあるを引きたるなり、

【止ダ風月ヲ談ズ可シ】(止可談風月)名利の話をせずして、風流の話のみをすべしといふ義、梁書の徐勉傳に「徐勉吏部尚書ニ遷リ、選官ニ居ル、嘗テ門人ト夜集ス、客ニ虞曇トイフアリ、詹事ノ官ヲ求ム、勉色ヲ正シテ答ヘテ云フ、今夕ハ止ダ風月ヲ談ズベシ、宜シク公事ニ及ブベカラズト、故ニ時ノ人咸其ノ私ナキニ服ス」

【多多益善シ】 (多多益善)兵數多ければ、多き程、益〻善く之を用ふるをいふ、史記淮陰侯傳に「上問曰、如我能將幾何、信曰、陛下不過能將十萬、上曰、於君何如曰臣多多而益善耳」漢書の韓信傳には善を辨に作る、

【他端】 史記信陵君傳に「今有難無——而欲赴秦軍、譬如以肉投餓虎、何效之有哉」註に「——ナシトハ他ノ奇策ノ以テ端ヲ發スルコトナキヲイフ」別の考また

は策などをいふ、

【橘化シテ枳トナル】 (橘化爲枳)周禮に「橘淮ヲ踰エ而シテ北スレバ、化シテ枳トナル、此レ地氣然ルナリ」また晏子春秋に「晏子曰、嬰聞之、橘生淮南則爲橘、生淮北則爲枳、葉徒相似、其實味不同、所以然者何、水土異也、」また淮南子にも類語あり、

【他腸ナシ】 (無他腸)心腸の内に他の邪惡の念なきをいふ、史記衞綰傳に「上以爲廉忠實無他腸」

【鬪ヲ排ス】 (排鬪)勢よく戸をひらきて入る義、漢書に「樊噲ハ、沛ノ人ナリ、屠沽ヲ以テ業トナス、後チ高祖ニ從ヒ征伐ノ功アリ、高祖既ニ天下ヲ定ム、嘗テ疾ニ禁中ニ臥シ、人ヲ見ルヲ欲セズ、閽者ニ詔シ、群臣ヲ放チテ入ラシメズ、噲乃チ鬪ヲ排シ直チニ入リテ高祖ヲ見、流涕シテ曰ク、陛下臣等ト豐沛ニ起ル、其レ何ゾ壯ナルヤ、今天下已ニ定レリ、又何ゾ憊レタルト、帝乃チ笑ツテ起ツ」

【獼多ケレバ魚擾ル】 抱朴子に「獼多則魚擾、鷹多則鳥亂、有司設則百姓困」

【達孝】 達は通なり、天下の人通じて之を孝といふ者をいふ、中庸に「武王周公其——矣乎、達尊の達と同義、

【脫監】「ラウヤブリ」大明律に「凡犯罪ーー越獄加二等」便讀に「門ヨリ出ヅルヲーートイヒ、墻ヲ踰エテ出ヅルヲ越獄トイフ」

【妲己】（殷ノ紂王）を見よ、

【達觀】偏く見て殘す所ろなきをいふ、書經召誥に「ーー于新邑營」

【達言】道理に通達する言なり、曹植書に「歎此ーー、以爲美談」

【獺祭魚】多く書冊を檢するをいふ、談苑に「李商隱爲文、多檢閱書冊、左右鱗次、號獺祭魚」多くの參考書を閲して、左右に散亂したるさまは、恰も獺の魚を祭るが如きなり、禮記の月令に「孟春之月獺祭魚」

【達辭】意のよく通達せる詞（辭達スル）を見よ、

【脫屣ノ如シ】（如脫屣）脫は「ヌグ」なり屣は小履なり、位を棄つるの易きに喩ふ、孟子盡心上に「舜視棄天下、猶棄敝蹝也」また漢書郊祀志に「妻子如脫屣耳」

【脫躧ノ如シ】（如脫躧）躧は小さきわら履なり、之を脫ぎ棄つるも、惜むに足らざるなり、史記孝武紀に「嗟乎吾誠得如黃帝、吾視去妻子、如ーー耳」と躧一に屣また蹝に作る同じ、

【達人】ひろく道理に通達する人をいふ、嵇康絕交書に「柳下惠・東方朔、ーー也」

【達人ハ大觀ス】道理に通達する人は、能く公平の觀察を爲すを以て、事物の情理を得ざるとなきをいふ、賈誼の鵩鳥賦に「小智自私、賤彼貴我、達人大觀兮、物亡不可」鶡冠子に「ーーーー乃見其符」

【脫粟飯】脫粟は、纔に殼を脫するのみにて、精げざる玄米をいふ、史記公孫弘傳に「食一肉脫粟之飯」また晏子春秋にも「晏嬰齊ノ相トナリ、常ニ脫粟米ヲ食シ、味ヲ重ネズ」とあり、粟は「モミ」

【達尊】達は通なり、天下を通じて尊むべき者なり、孟子に「天下有ーー三、爵一、齒一、德一」

【奪胎】（換骨ーー）を見よ、

【達道】天下古今共に由る所ろの路にて、書經の五典、孟子の所謂父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信是れなり、中庸に「天下之ーー五（中略）曰君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友也、五者天下之ーー也」

【怛怛】心のかなしみ勞るる義、忉忉怛皆同じ、詩經の甫田に「勞心ーー」

【韃靼】支那の北狄の名「ダルダリイ」韃狄・韃兒・韃人などは、その國人をいやしめて稱す、

【達德】天下古今同じく得る所ろの理をいふ、中庸に「知仁勇三者、天下之ーー也」

【脫兎ノ如シ】勢の急速なるに喩ふ、孫子九地篇に「始ハ處女ノ如クニシテ敵人戸ヲ開ク、後ニハ脫兎ノ如クニシテ敵拒グニ及バズ」

【龍ニ乘ルラム山人】莊子の逍遙遊に「藐姑射之山、有神人（中略）乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外」とあるに本づく、

【龍ノ御顏】（龍顏）を見よ、

【侘傺】志を失ふ貌、侘は立つ貌、傺は住なり、立ちとどまりて悵然たる意、屈原の離騷に「忳鬱邑余ーー兮」忳は自ら思ふなり、

【妥帖】妥は安、帖は定なり、詩文を作るに、字句の穩に「シツカリ」と落ちつきたるをいふ、文選の文賦に「ーー而易施」王逸の楚辭の序に「義多乖異、不ーー」妥當に同じ、

【掌ヲ抵チテ談ズ】（掌ヲ抵チテ）を見よ、

【掌ヲ反ス】（掌ヲ反ス）を見よ、

【掌ヲ反スヨリモ易シ】（掌ヲ反ス）を見よ、

【多能】藝能多きをいふ（鄙事ニ）を見よ、

【樂極レバ必ズ哀生ズ】樂の永くつづかざるをいふ、劉向の列女傳に「陶答子妻曰、樂極必哀生」また史記の滑稽列傳に「酒極レハ則チ亂レ、樂極レバ則悲ム」また漢の武帝の秋風辭に「歡樂極兮哀情多」

【樂ハ極ム可カラズ】（傲ハ長ズ）を見よ、

【樂ンデ淫セズ】（樂而不淫）論語八佾に「子曰關雎樂而不淫」朱註に「淫ハ樂ノ過ギテ其ノ正ヲ失フ者ナリ」

【多方】萬方といふが如し、左傳に「ーー以誤之」

【打包】行脚僧の「フロシキ」包を負ひたるをいふ（富士見西行ノ像ノ如シ）「チヤウハウ」と讀む、陸游の詩に「挈榼人沽村市酒、打包僧趁寺樓鐘」また僧の一處に滯留せるを挂包といひ、飛錫と對用す、また三衣を納むる行囊をいふ、

【茶毘】梵語、闍鼻多の略、焚燒の義、火葬をいふ、禪林寶訓音義に「此云火化」

【懦夫】心のおぢけたる者、孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、ーー有立志」

【蹈歌】古の歌垣と似たれども、これは支那の風俗を我に傳へしなり、伊呂波字類抄に、本朝事始を引いて「天武天皇三年正月朔、朝大極殿、詔男女無別、闇夜ーー」と見え、日本紀に、持統天皇の七年八年とも正月の十六日に「漢人奏ーー」とあり、淵鑑類函十七に、朝野

僉載を引きて「唐ノ明皇先天二年正月十五十六十七夜、安福門外ニ於テ高燈ヲ作リ、少女ソノ下ニ——ース」とあり、この事、舊唐書睿宗紀に見ゆ、

【踏襲(タフシフ)】 前の人の言論、若くは行事をその儘にうけつぐをいふ、金史に「不レ——前人(ヲ)」

【闢茸(タフシヨウ)】 駑頓なり、いやしく劣る義、一解に闢は下茸は細毛なり、よりて下材細微の義とす、漢書賈誼傳に「——尊顯兮、讒諛得レ志(チ)」また司馬遷報任安書に「爲レ(リ)掃除之隷(ト)在二——一之中一」また鹽鐵論に「賢知之士、——之所惡也(ムル)」、

【踏靑(タフセイ)】 蘇轍詩序に「眉ノ東門外ニ墓頤山アリ、上ニ亭榭アリ、松竹ノ下、大江ニ臨ム、正月八日ゴトニ、士女相與ニ遊嬉シ、其ノ上ニ飲酒ス、之ヲ——トイフ」また歲華紀麗譜に「二月二日ハ踏靑節ナリ、張公詠是ノ日ヲ以テ、萬里橋ニ出デ、綵舫數十艘ヲ爲リ(ツク)、賓僚ト分ッテ之ニ乘リ、歌吹前導ス(中略)士女群集シ、親ル者堵ノ如シ、公詩ヲ爲リテ曰ク、春遊千萬家、美人顏如レ花ト」黃山谷の詩に「白白紅紅相閒開、三三五五踏靑來」舊唐書代宗紀に「大歷二年二月壬午幸二昆明池一——一」逐思邈の千金月令には「二月三日——鞋履ヲ上ル」とあり、

【揲本(タフホン)】 揲は「シキウッシ」する、——はしきうつしせし帖子、また「イシズリ」の類をもいふ、宣和畫譜に「亦有二御府(タフフ)——一」

【多聞(タフブン)】 多く物事を聞き知るなり、荀子に「——曰レ博(テヒト)、少聞曰レ淺(エキセン)」益友(モタ)また(——)を參看せよ、

【打扮(ダフバン)】 扮は一音「ヘン」「ヨソホフ」——は俗語「イデタチ」中原雅音に「今俗以二裝飾一爲(ト)——一打は助語にして意味なし、

【斃(タフ)テ後ニ已ム】 死するまで勉むるをいふ、禮記の表記に「倭焉日有二孳孳(トシテニリ)一斃(スルレアニムル)而後已(ノミ)」の註に「倭焉ハ、他ヲ願ルコトナキノ意、孳孳ハ勤勉ノ貌、孜孜に同じ、

【駝峯炙(ダホウシヤ)】 錦字箋に「將軍曲良翰、——ヲ爲ル、駝駝(らくだ)ノ背肉起チテ峯ノ如キトコロ、味極メテ美ナリ、杜詩ニ、紫駝之峯出二翠釜一(ヨリ)」炙はあぶりたる肉なり、

【玉(タマ)】 圓機活法に「財貨源ニ、玉ハ天地ノ精ナリ、山ノ玄文ノ者アリ、水ノ蒼文ノ者アリ、白クシテ截肪ノ如ク、赤クシテ雞冠ノ如ク、黑クシテ純漆ノ如ク、黃ニシテ蒸粟ノ如クナル者アリ、山ニ生ジテ木潤ヒ、水ニ產シテ流芳シク、璞ニ藏レテ文采外ニ露ハル、于闐ハ玉ヲ產ス、河源ノ出ルトコロ云云、禮記に「玉在レ山而木潤」また文選陸機の文賦に「石韞レ玉而山輝(ノ)」また鹽鐵論に「崑山之下、以レ玉抵二烏鵲一」とあるは、その多きをいふな

り劉攽新論に「玉可レ碎(クダ)而不レ可レ改(アラタム)二其白一(ヲ)」楊子法言寡見に「玉不レ雕(エラ)與璠不レ作(ラ)レ器(ヲ)、言不レ文(ヲ)典謨不レ作(ラ)レ經(ヲ)與璠は美玉なり、典謨は書經の舜典堯典、大禹謨皐陶謨なり、尸子に「買レ玉不レ論(ゼ)美惡一、以二大小一爲(スル)レ(チ)議(ヲ)、必無二良賈一矣」元倉子に「玉之所二以難一辨者、謂二其有一恠石一也、金之所二以難一辨者、謂二其鎰石一也」恠石は玉に似たり、鎰石は金に似たり、

【珠(タマ)】 財貨源に「珠ハ大海ノ中ニ生ズ、乃チ蛙蛤胎ナリ、云云」文選の陸機の文賦に「水懷レ珠(イヌヲ)而川媚」新論に「璧不レ可レ以禦二寒一、珠不レ可レ以充(ツ)レ(ニ)飢(ヲ)、雖レ有二奪(ヤイギ)一日之鑑一、代(ダカワ)月之光一、歸二于無用一也」(齊魏賓ヲ參看せよ、

【玉ヲ改(アラタ)ムレバ行ヲ改ム】 (改玉改レ行)玉は佩玉なり、行は行步なり、佩玉は行步を節する者にて、尊卑に由り遲速の度を異にす、故に佩玉を易ふれば、步調も亦改めざるべからず、以て法を變ずれば、事も亦革まるに喩ふ、國語に「先民有レ言、——レ——レ——」

【璧(タマ)ヲ懷(イダ)キテ罪アリ】 (懷レ璧有レ罪)(匹夫罪ナシ)を見よ、

【璧(タマ)ヲ反(カヘ)ス】 (反レ璧書言故事に「人ノ餽ヲ受ケザルヲ、謹ミテ璧ヲ反ストイフ」左傳の僖二十三年に「晉ノ公子重耳、曹ニ及ブ、僖負羈、盤飧ヲ饋(オク)リ璧ヲ寘ク(註に、臣竟外の交無し、故に盤を用ひて、璧を飧中に藏む、人をして見しむることを欲せず)公子飧ヲ受ケテ、璧ヲ反ス」

【玉ヲ漱(ソソ)グ】 (漱玉)泉水のそそぎ流るるを形容す、陸士衡の招隱の詩に「山溜何泠泠(タル)、飛泉漱(ソソ)二鳴玉一」

【玉ヲ藍田(ランデン)ニ種(ウ)エテ美婦(ヒフ)ヲ得タリ】 (種レ玉于藍田一而得二美婦一)搜神記に「楊公雍伯、篤孝父母ヲ無終山ニ葬ル、山ハ高クシテ水ナシ、義漿ヲ作リテ行人ニ給スルコト三年、一人アリ、飲ミ訖リテ懷中ヨリ石子一升ヲ取リ之ニ與ヘテ曰ク、此ヲ種レバ美玉ヲ生ジ、幷ニ好婦ヲ得ント、公之ヲ種ウ、數歲、北平ノ徐氏女アリ極メテ美ナリ、公之ヲ求ム、徐氏云フ、白璧一雙ヲ得バ、當ニ婚ヲナスベシト、公種エシ所ニ至リテ、白璧五雙ヲ得タリ、以テ聘ス、遂ニ妻スニ女ヲ以テス、其ノ地ヲ名ツケテ玉田トイフ」

【卵ヲ盜(ヌス)メドモ干城ノ將ヲステズ】 駿臺雜話「天下の寶」の條に見ゆ(二卵ヲ以テ(ニラン)(モッ))を見よ、

【卵(タマゴ)ヲ以テ石ニ投(モッ)ズ】 (卵ヲ以テ(フンモッ))を見よ、

【玉(タマ)ト碎(クダ)ケテモ瓦ノ全(キズ)キニハナラハジ】 上田秋成の文に見ゆ、北齊書元景安傳に「寧可二玉碎一不(ナル)能二瓦全一」とあるに本づく、

【玉(タマ)ノ杯(サカヅキ)ノ底ナキガ如シ】 (玉巵當(ギヨクシダウ)ナシ)を見よ、

【玉琢カザレバ器ヲナサズ】（玉不琢不成器）玉の質は、もと美なり、然れども雕琢を加へざれば、器と爲りて用に應ずる能はずとの意、禮記の學記に「——人不學不知道、是故古之王者、建國君民、教學爲先」

【民ヲ視ルコト傷ツクガ如シ】（視民如傷）民すでに安けれども、之を視ること、猶ほ傷つく所ろあるが如きなり、孟子に「文王——」左傳に「國之興也、——是其福也、及其衰也、以民爲土芥、是其禍也」

【民ヲ視ルコト子ノ如クス】（視民如子）賈誼の新書に「鄒穆公、親賢以定國、視民如子」

【民ノ彝ヲ秉ル、是ノ懿德ヲ好ム】（民之秉彝、好是懿德）詩經大雅烝民篇に出づ、上に「天生烝民、有物有則」の句あり、朱傳によるに、烝は衆なり、則は法なり、秉は執なり、彝は常なり、懿は美なり、言ふ心は、天の衆民を生ずる、此の物あれば必ずこの則あり、蓋し百骸九竅五臟よりして之を君臣父子夫婦長幼朋友に達して、物に非るはなきなり、而して法あらざるなし、視の明、聽の聰、貌の恭、言の順、君臣の義あり、父子の親あるの類の如きは是れなり、是れ乃ち民の執るところの常の性なり、故にその情この美德を好まざる者なきなり、

【民ノ口ヲ防グコト水ヲ防グヨリ甚シ】（防民之口、甚於防水）史記に見ゆ、下に「水壅潰傷人必多、民亦如之、是故爲水者決之使導、爲民者宣之使言、民之有口也、猶土之有山川」とあり、民の口を防ぎとむれば、民の怨鬱つもりて、君の禍となること、水を塞ぎて氾濫せしめ人を傷むるよりも、その害甚しとなり、國語に「防民之口、甚於防川、川大決所犯傷人必多」子產の言なり、

【民ノ樂ヲ樂ム者ハ、民モ亦ソノ樂ヲ樂ム】 孟子の梁惠王に「樂民之樂者、民亦樂其樂、憂民之憂者、民亦憂其憂、樂與衆樂共樂、憂與衆憂共憂」

【民ハ之ニ由ラシムベシ、之ヲ知ラシムベカラズ】 論語泰伯篇に「子曰、民可使由之、不可使知之」とあり、兩の之は斯の理を斥す、民は斯の理の當然に由り循ひて身を行はしむることは爲し得べきも、その本原の理は、學者さへも知り得ること難ければ、まして民をして知らしむるは尚ほ更難しとなり、可使とは能使の義、不可使とは不能使の義として見るべし、

【民ハ二三ニ生ズ】 國語の晉語に「武公伐翼殺哀公止七子、曰、苟無死、吾以子見天子、命子爲上卿、制晉國之政、辭曰、成聞之民生於三事之如一、父生之、

師敎之、君食之非父不生非食不長、非敎不知、生之族也、故壹事之唯其所在、則致死焉」欒共子は晉の哀公の大夫共叔成なり、

【端衣】 禮服なり、孔子家語の五儀に「——元裳（端委）に通ず、

【褝衣】 「ヒトヘ」釋名の釋衣服に「——ハ裏ナキヲ言フナリ」

【端委】 朝廷に於ける禮服なり、左傳昭元年に「劉子謂趙孟曰、吾與子弁冕——、以治民臨諸侯」また「晏平仲——立于虎門之外」

【端闈】 正門なり、後漢書班彪傳の注に見ゆ、

【丹鉛總錄】 二十七卷、明の楊愼（字ハ用修、升庵ト號ス）撰す、門人梁佐編して刊行す、天文・地理・時序・花木・鳥獸・宮室・冠服・珍寶・音律・物用・人事・人品・史籍・訂訛・字學・官爵・博物・禮樂・卦名・飲食・干支・數目・怪異・身體・詩話・璅語の二十六類に分つ、

【炭ヲ抱キテ涼ヲ希フ】（抱炭希涼）行ふ所ろと望む所ろと相反するをいふ、魏志高柔傳註に「孫盛曰、信不足焉、而祈物之必附、猶生於我而望彼之必懷、何異挾氷求溫——哉」

【男ヲ生ム狼ノ如キモ猶ホ其ノ庶ヲ恐ル】 班昭の女誡に「鄙語として引けり、曰く、生男如狼猶恐其尪、生女如鼠猶恐其虎」

【男ヲ生ムハ惡シク、女ヲ生ムハ好シ】 杜甫の兵車行に「信知生男惡、反是生女好、生女猶得嫁比隣、生男埋沒隨百草」

【短ヲ護ス】（護短）短所をおほひ護るをいふ、嵇康の與山巨源に絕交書に「仲尼不假借於子夏、護其短也」この事もと孔子家語に出づ、

【鍛ヲ好ム】 鍛冶の業を好む（柳下ニ）を見よ、

【短ヲ舍テテ長ヲ取ル】（舍短取長）是非を取捨して宜しきを得る義、漢書藝文志に「觀此九家之言——、則可以通萬方之略矣」

【檀越】 檀家の義（ダンナ）名義集に「稱——者、檀即施也、此人行施、越貧窮海」とあり、祖庭事苑に「——檀那、此云施者、越謂度越彼岸」書言故事に「僧道稱施主曰檀那——云云」——は舊譯なり、

【彈ヲ見テ鴞炙ヲ求ム】（卵ヲ見テ）を見よ、

【膽ヲ破ル】（破膽）驚き懼るるをいふ、漢書賈誼傳に「大諸侯之有異心者、——而不敢謀」また後漢書班超傳に「不入虎穴、不得虎子、當今之計、因夜火攻、彼必震怖可殄盡也、滅此虜則鄯善——、功成事立矣」

【彈劾】 人の罪惡を咎めて、上に告ぐるなり、劾は罪人を推窮する義、事類全書に「呂誨字ハ獻可、召サレテ殿中侍御史トナル、彈劾シテ避ク所ロナシ」北史魏收傳にも見ゆ、

【淡交】 「サーツバリ」としたる交をいふ、莊子山木篇に「君子之交淡如水、小人之交甘若醴、君子淡以親、小人甘以絕」醴は音「レイ」「アマザケ」その語禮記の表記にも出づ「君子ノ交ハ淡キ」を見よ、

【暖香】 あたたかき氣の薫香なり、馮贄の雲仙雜記に「賓雲溪有僧舍、盛冬若客至、則然薪火一一一炷、滿室如春」

【斷梗】 飄轉して定らざる貌、佩文韻府に「元好問出京詩ニ、半生無根著、飄轉如一一」

【短綆】 ハ深井ヲ汲ムベカラズ】 識見淺短なる者は、深遠の道理を會得すること能はざるに喩ふ、管子に「短綆不可以汲深井、知鮮不可以與聖人之言」荀子に「短綆不可以汲深井之泉、知不幾者、不可與及聖人之言」また淮南子說林訓に「短綆不可以汲深器、小不可以盛大、非其任也」

【短歌行】 詩の一體魏武帝曹操の作、二首あり、その一、對酒當歌、人生幾何、譬如朝露、去日苦多、慨當以慷、幽思難忘、何以解憂、惟有杜康、青青子衿、悠悠我心、但爲君故、沉吟至今、呦呦鹿鳴、食野之苹、我有嘉賓、鼓瑟吹笙、明明如月、何時可掇、憂從中來、不可斷絕、越陌度阡、枉用相存、契闊談讌、心念舊恩、月明星希、烏鵲南飛、繞樹三匝、無枝可依、山不厭高、水不厭深、周公吐哺、天下歸心、

【端慤】 心や行の正しく誠ある義、淮南子の主術訓に「其民樸直一一」

【段干木】 呂氏春秋に「段干木晉國之駔」說文に「駔ハ會ナリ、兩家ノ買賣ヲ合スルヲイフ」かかる賤業に從事せしも、行を高くし、道を守りて仕へず、魏の文侯見んと欲しその門に至るに、干木牆を踰えて之を避けぬ、史記魏世家註に、皇甫謐高士傳、淮南子、呂氏春秋を引きて、詳しく載せたり、

【短晷】 短日をいふ、潘岳秋興賦に「何微陽之一一、覺涼夜之方永」と、說文に「晷ハ日景ナリ」

【赧愧】 はぢて顏をあかくする、世說に「鬼一一而退」

【談議】 佛經の語、對話商議する義、西域記に「未逸一一晝夜いつも明かなりといふ「ヲカ」楚辭遠遊の

【丹邱】

注に「一一ハ晝夜常ニ明カナリ」

【檀几叢書】 清の王晫、張潮の同編なり、初集二集餘集に分ち、清朝諸家の雜著百五十七種を輯む、凡例に「古、七寶靈檀几アリ、凡上ニ文字アリ、意ノ及ブ所ロニ隨ヒテ文字輒チ現ハル、今書中經タリ史タリ子集タリ禮節ノ大端タリ、家門ノ訓戒タリ、土物瑣屑タリ、種種畢ク具ハル、披覽ニ意アレハ卷ヲ展シテ即チ得ベシ、名ヅケテ檀几トイフ」

【斷機ノ戒】 學を廢することの戒なり（學ヲ廢スル）を見よ、

【斷金ノ交】 至つて親密なる交をいふ（金蘭ノ契）を見よ、

【斷金伐木ノ契】 十訓抄第五に見ゆ、極めて親しき朋友の交りをいふ、斷金の解は（金蘭ノ）を見よ、伐木は、詩經小雅に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷于喬木、嚶其鳴矣、求其友聲、相彼鳥矣、猶求友聲、矧伊人矣、不求友生、神之聽之、終和且平」とあり、朱子の說に、この詩は朋友故舊を宴する時の樂歌なりと、

【暖噓】 暖き息の義、正韻に「脣ヲ蹙メテ氣ヲ吐クヲ吹トイヒ、口ヲ虛ニシテ氣ヲ出スヲ噓トイフ、吹氣ハ肺ヨリ出デ、陰ニ屬ス、故ニ寒シ、噓氣ハ丹田ヨリ出ヅ、陽ニ屬ス、故ニ溫ナリ」

【段玉裁】 字は若膺、茂堂と號す、金壇の人、乾隆庚辰の擧人、戴東原の門に遊び、經史に淇深にして、尤も六書に精し、說文解字注、六書音均表、周禮漢讀考、儀禮漢讀考等の書あり、

【殫極ノ綆ハ斡ヲ斷ツ】 （泰山ノ）を見よ、

【彈冠】 結綬と同義に用ふ（冠ヲ彈ズ）を見よ、

【彈丸黑子】 微小の地をいふ、庾信賦に「地惟黑子、城猶彈丸」（彈丸ノ）黑子ノ）を見よ、

【彈丸ノ地】 極めて狹小の地なり、彈丸は「ハジキダマ」を見よ、

【斷金ノ交】 至つて親密なる交をいふ（金蘭ノ契）を見よ、

【斷金伐木ノ契】 十訓抄第五に見ゆ、極めて親しき朋友の交りをいふ、斷金の解は（金蘭ノ）を見よ、伐木は、詩經小雅に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷于喬木、嚶其鳴矣、求其友聲、相彼鳥矣、猶求友聲、矧伊人矣、不求友生、神之聽之、終和且平」とあり、朱子の說に、この詩は朋友故舊を宴する時の樂歌なりと、

【暖噓】 暖き息の義、正韻に「脣ヲ蹙メテ氣ヲ吐クヲ吹トイヒ、口ヲ虛ニシテ氣ヲ出スヲ噓トイフ、吹氣ハ肺ヨリ出デ、陰ニ屬ス、故ニ寒シ、噓氣ハ丹田ヨリ出ヅ、陽ニ屬ス、故ニ溫ナリ」

【段玉裁】 字は若膺、茂堂と號す、金壇の人、乾隆庚辰の擧人、戴東原の門に遊び、經史に淇深にして、尤も六書に精し、說文解字注、六書音均表、周禮漢讀考、儀禮漢讀考等の書あり、

【殫極ノ綆ハ斡ヲ斷ツ】 （泰山ノ）を見よ、

【彈冠】 結綬と同義に用ふ（冠ヲ彈ズ）を見よ、

【彈丸黑子】 微小の地をいふ、庾信賦に「地惟黑子、城猶彈丸」（彈丸ノ）黑子ノ）を見よ、

【彈丸ノ地】 極めて狹小の地なり、彈丸は「ハジキダマ」を見よ、戰國策に「此彈丸之地、猶不予也」

【端倪】 端は山巓なり、倪は水涯なり、端倪を知らずとは、本末始終を知るを得ざる義、莊子の大宗師篇に「反覆終始、端倪ヲ知ラズ」とあり、また韓文に「旭之書、變動猶鬼神不可端倪」とあり、旭は、張旭なり、またその南海廟碑には乾端坤倪、軒豁呈露」とあり、

【端月】 正月をいふ、史記の索隱に「二世三年正月也、秦避正字諱、故曰端月」端は始なり、秦の始皇の名は政なり、正と同音、故に之を避くるなり、

【彈劾】 （長鋏歸來）を見よ、

【談言微中】 明白に言はずして人の急所をつく義、史

記滑稽列傳に見ゆ下に「亦可以解紛」とあり、

【擔鼓】 牽牛星の一名、爾雅釋天の注に「今荊楚ノ人、牽牛星ヲ呼ンデー——爲ス」

【短後】 後ろの短き服、蘇軾の句に「麻鞋——隨獵夫」

【端五】 五月五日の節句をいふ、端午に同じ、蒲節また端陽ともいふ、

【端午】 五月の節句をいふ、端は始めなり、古は始めの午の日を用ひしが、後に五日に定めたるも、なほ古名を存ず、類書纂要に「五月初五ヲ、端午トナス、マタ端陽トイヒ、マタ端五トモイフ」續齊諧記に「屈原五月五日ニ汨羅ニ投ジテ死ス、楚人之ヲアハレミ、此日ニ至ル毎ニ竹筒中ニ米ヲタクハヘ、水ニ投ジテ之ヲ祭ル」

【團坐】 「マトヰ」「クルマザ」圓坐に同じ、團欒坐ともいふ、文獻經籍考に「——飲酒以爲樂」

【啖咋】 「カミクラフ」蚊などの人をかむにも用ふ、韓愈の雜詩に「與汝恣——」

【郯子】 左傳昭十七年に「——來朝ス、公之ト宴ス、昭子問ヒテ曰ク、少皞氏、鳥ヲ以テ官ニ名ツクルハ、何ノ故ゾト、——曰ク、吾ガ祖ナリ、吾之ヲ知ルト、仲尼之ヲ聞キテ、——ニ見エテ之ヲ學ブ、乃チ人ニ告ゲテ曰ク、吾レ之ヲ聞ク、天子官ヲ失スレバ學四夷ニ在リト、猶ホ信ナリト」

【覃思】 深く思ひ考ふる義、書經の孔安國の序に「研精——」

【端士】 行の端正なる士をいふ、大戴禮に「昔、周ノ成王幼ニシテ襁褓ノ中ニ在リ、天下ノ孝悌博聞道術アル者ヲ選ミ、以テ之ヲ輔翼シ、太子ト與ニ居處出入セシム、故ニ太子日ニ正事ヲ見、耳ニ正言ヲ聞キ、左右前後皆——正人ナリ」

【段秀實朱泚ヲ罵ル】 秀實字は成公、唐の汧陽の人、幼にして孝童と號せらる、長じて涇原の節度使となり、司農卿に至る、唐書に「朱泚叛スルトキ、段秀實ヲ召シテ帝號ヲ僭セント欲ス、秀實、泚ノ面ニ唾シ罵リテ曰ク、狂賊、吾汝ヲ斬リテ萬段ニセザルヲ恨ム、豈汝ニ從ヒテ反センヤト、笏ヲ以テ之ヲ擊テ、其ノ額ニ中ツ、血流レテ地ニ滿ツ、朱泚ガ黨、遂ニ之ヲ殺ス」後に太尉を贈られ、忠烈と謚せらる、

【簞食壺漿】 簞は竹器なり、食は飯なり、飯を竹器に盛り、漿を壺に容れたるをいふ、行旅の携ふる所ろなり、孟子梁惠王下に「——以迎王師」

【單絲線ト成ラズ】 片われにては、ものにならざるに喩ふ、水滸傳に「單絲不成線、孤掌豈能鳴」

【男子ハ婦人ノ手ニ死セズ】 禮記の喪大記に「男子不レ死二於婦人之手一、婦人不レ死二於男子之手一」の註に「其襲（なる）ナルヲ惡ミテナリ」

【簞食瓢飲】 漢書貨殖傳に出づ、少しばかりの飲食物をいふ、(一簞ノ食)を見よ、

【丹心】 赤心に同じ、忠誠にして僞なきなり、謝朓の詩に「既秉二丹石心一、寧流二素絲涕一」

【端人】 「タダシキヒト」端正なる人、孟子に「尹公之他ハ——ナリ」

【誕辰】 「タンジャウビ」開中今古錄に「世人生辰ヲ稱シテ——トイヒ、華誕トイフ、コノ誕ノ字、詩經ノ誕生二后稷一ニ因リテイフ、然レドモ殊ニ知ラズ誕ハ發語ノ詞ナルコトヲ」

【殫盡】 二字共に「ツクス」なり、全く無くなる義、淮南子の覽冥訓に「——大半」

【丹心ヲ留取シテ汗青ヲ照ス】 (留二取丹心一照二汗青一)宋の文天祥が過二零丁洋一詩の末句なり、詩に曰く、辛苦遭逢起二一經一、干戈落落四周星、山河破碎水漂レ萍、身世浮沈風打レ萍、皇恐灘邊說二皇恐一、零丁洋裏歎二零丁一、人生自古誰無レ知、——丹心は、赤心に同じ、至誠にして僞なきをいふ、汗青は竹帛といふに同じ、

【丹心萬古ヲ照ス】 忠誠の心が萬古までも照りかがやく義、楊繼盛の椒山集に「浩氣還二太虛一、丹心照二萬古一、生前未了事、留二與後人補一」とあり、因に同上臨刑詩に「天王自聖明、制度高二千古一、平生未レ報恩、留作二忠魂一補」

【誕章】 誕は大なり、章は憲法なり、國の憲章の大なる者をいふ、漢書班固敘傳に「贊二國之——一」

【探春ノ宴】 天寶遺事に「長安ノ士女、春時花ヲ鬬ハスニ、千金ヲ以テ名花ヲ市フ、正月ノ半ニ車ニ乘リ、馬ニ跨リ郊野ニ遍ウス、探春ノ宴トナス」

【澹如】 澹は淡に通ず、淡泊にして水の如きをいふ、北史に「後周柳虯性愛二閑素一、其于二名利一、澹如也」

【淡水ノ交】 (淡交)を見よ、

【丹靑】 「サイシキエ」をいふ、漢書の蘇武傳に「雖二古竹帛所一レ載、丹靑所一レ畫、何以過二子卿一」子卿は蘇武の字なり、晉書の顧愷之傳に「尤善二丹靑一、圖寫特妙、劉後村題跋に「李伯時羅漢、前世名畫如二顧陸一、吳道子輩一、皆不レ能レ不レ著レ色、故例以——二字一目二畫家一、至二龍眠一、李伯時の號、始掃去粉黛、淡毫輕墨、高雅超詣、譬如二幽人勝士褐衣草履居然簡遠一、固不レ假二衮繡蟬冕一爲レ重也、於乎亦可レ謂二天下之絕藝一矣」

【斷齏畫粥】 齏は「ナヅナ」粥は「カユ」貧しくして力學

するをいふ、書言故事に「范希文修學最モ貧シ、長白山ノ僧舍ニ在リ、粟二升ヲ煮、粥一器ヲ作ル、宿ヲ經テ遂ニ凝ル、刀ヲ以テ畫シテ四塊トナシ、早晩二塊ヲ取リ、齏數十莖ヲ斷ジテ之ヲ咯フ」

【檀褐】（ダンセキ）　袒褐に同じ、肉袒なり、臂をあらはすをいふ「カタヲヌグ」詩經鄭風に「——暴」虎獻于公所」

【儋石ノ儲】（タンセキノチョ）　儋は擔に通ず、石は一石、儋は二石なり、人之を擔ふをいふ、儲蓄の少きをいふ、漢書揚雄傳に「產不過二十金、乏無——之——妄如也」また魏志に「華歆素清貧、祿賜以賑二親戚一、家無——之——」

【貪泉ヲ飲ム】（タンセン）　事文類聚に「晉吳隱之、性廉操、廣州ノ刺史トナル、界上ノ一水、之ヲ貪泉トイフ、古老イフ、此ノ水ヲ飲ム者ハ、廉士モ皆貪トナル、隱之至リ酌ンデ之ヲ飲ミ、詩ヲ賦シテイフ、古人言二此水一、一歃懷二千金一、試使二夷齊飲一、終當二不レ易レ心ト、清操愈厲シ」

【談藪】（ダンソウ）　談論多くして、盡きざるをいふ、晉書に「裴頠字ハ逸民、司空秀ノ子、弘雅ニシテ遠識アリ、博學稽古、少クシテ名ヲ知ラル、樂廣嘗テ頠ト清言シ、理ヲ以テ之ヲ服セント欲ス、而シテ頠カ辭語豐博ナリ、廣笑ツテ言ハズ、時ノ人頠ヲ謂ツテ言談ノ林藪トナス」

【丹臺】（タンダイ）　仙宮をいふ（苟シクモ金骨ノ）を見よ、

【段太尉】（ダンタイヰ）　（段秀實）を見よ、

【膽大心小】（タンダイシンセウ）　膽力は大ならんことを要し、心を用ふるは細小ならんことを要す、孫思邈曰く「智欲レ圓、而行欲レ方、膽欲レ大、而心欲レ小」

【澹臺滅明】（タンタイメツメイ）　孔子の弟子、史記の仲尼弟子傳に「武城ノ人、字ハ子羽、孔子ヨリ少キコト三十九歲、狀貌甚ダ惡シ、孔子ニ事ヘント欲ス、孔子以テ材薄シト爲ス、スデニ業ヲ受ケ退テ行ヲ修ム、行クニ徑ニ由ラズ、公事ニ非レバ卿大夫ニ見エズ、南游シテ江ニ至ル、弟子三百人ヲ從フ、名、諸侯ニ施ス、孔子之ヲ聞テ曰ク、吾以二言取一レ人、失二之宰予一、以二貌取一レ人、失二之子羽一」

【探湯】（タンタウ）　沸湯を探るは恐れ戒めて濫に手を入れざるなり、論語季氏篇に「孔子曰、見二善如一レ不レ及、見二不善如一レ探レ湯、吾見二其人一矣、吾聞二其語一」

【坦坦】（タンタン）　路などの極めて平かなる貌、易の履卦に「履道——」

【湛湛】（タンタン）　重厚の貌、楚辭九章に「忠——而願レ進兮」また水の深くたたへたる貌、楚辭招魂に「——江水兮」また露けき貌、詩經の湛露篇に見ゆ、

【耽耽】（タンタン）　下を見おろす貌、また威あつて視る貌、易の頤卦に虎視——」轉じて強國が弱國を幷呑せんとて「ニラミ」居る義にも用ふ、

【慷慨】（タンガイ）　憂勞の貌、詩の檜風に「勞心——兮」

【團團】（ダンダン）　まろき貌、班婕妤の怨歌行に「裁爲二合歡扇一、——似二明月一」また露などの盛んなる貌、謝惠連の詩に「——滿葉露」

【斷斷】（ダンダン）　誠一の貌、書の泰誓に「——猗無二他技一」猗は助辭、疏に「——ハ善ヲ守ルノ貌」公羊傳文十二年の注に「——ハ專一ノ貌」要するに誠心を以て專一に守る貌、

【赧赧然】（タンダンゼン）　慙ぢて面赤き貌、孟子滕文公下に「觀二其色一——」

【丹堊】（タンアク）　丹漆にてぬりこめたる庭にて、朝廷に限りて設く、赤堊に同じ、西京賦に「青瑣——」注に「丹漆二地故曰二——一」堊は殿階の下の庭なり、〈青瑣〉を參看せよ、

【短長】（タンチヤウ）　人の短所と長所と、また善惡の義にも用ふ、夷堅志に「大家飛上梧桐樹、自有二旁人說一——」都統明椿自ら生涯を關王廟の側に立つ、時人之を嘲るの詩なり、

【斷腸】（ダンチヤウ）　悲の甚だ切なるをいふ、搜神後記に「臨川ノ東興ニ人アリ、山ニ入リ猿子ヲ得テ歸ル、猿母後ヨリ其ノ家ニ至ル、此ノ人猿子ヲ庭樹ニ縛ス、ソノ母頻ヲ搏チ、人ニ向ヒテ哀ミ乞ハント欲ス、コノ人竟ニ之ヲ殺ス、猿母悲ミ喚ビ、自ラ擲チテ死ス、コノ人腹ヲ破リ之ヲ視ルニ、腸皆斷裂セリ」また佩文韻府に「巴峽ノ諺ニ曰ク、巴東三峽巫峽長、哀猿三聲斷二人腸一」杜牧の詩に「芳草復芳草、斷腸復斷腸」

【斷腸花】（ダンチヤウクワ）　秋海棠の異名、錦字箋に「舊傳昔有二女子一、懷二人不一至、淚洒二地、遂生一此花一、色如二美婦一、而甚媚、名——」

【短長ノ命ヲ制ス】（タンチヤウノメイヲセイス）　猶ほ生殺の權を握るといふが如し、書經に「矧予制二乃短長之命一」

【男女功ヲ貿フ】（ダンヂヨコウヲカフ）　男女各〻その仕事を易へて相助くるをいふ、亢倉子に「男子不レ織而衣、婦人不レ耕而食、男女貿レ功、相資爲レ業」

【男女姓ヲ同クスレバ、其ノ姓蕃セズ】（ダンヂヨセイヲドウスレバソノセイハンセズ）　（男女同姓、其姓不レ蕃）左傳に見ゆ、

【短亭長亭】（タンテイチヤウテイ）　六帖に「五里ニ一短亭、十里ニ一長亭」風俗通に「亭ハ留ナリ、行旅ノ館スル所ロナリ」

【丹鳥】（タンテウ）　螢の異名、古今註に「螢火一名ハ景天、一名ハ燐、一名ハ——、一名ハ夜光、一名ハ宵燭」（螢）を參看せよ、

【斷頭將軍】（ダントウシヤウグン）　蜀志に「劉璋ガ將嚴顏、江州ヲ守ル、蜀ノ將張飛攻メテ之ヲ破リ、遂ニ顏ヲ獲タリ、飛、喝シテ曰ク、何ゾ早ク降ラザルト、顏ガ曰ク、卿無狀、我ガ州ヲ侵奪